

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

人類は壁の向こうに衰退しましたが、人魚はよく釣れます。(完結)

### 【作者名】

ダブルパン

### 【あらすじ】

進撃の巨人と波打際のむろみさんのクロスオーバーです。

ある日突然壁の向こうが海になってしまっただけになった兵団。釣られる人魚。そこから始まるハートフルストーリー。

進撃舞台でノリはむろみさんベース。人類は衰退しました。の要素も入ってます。

博多弁はふわっとしてるのでその辺の突っ込みは勘弁してもらえると嬉しいですよ。

進撃の巨人、波打際のむろみさんはネタバレ要素が非常に強いので原作既読を推奨します。

なお人類は衰退しました。はアニメの視聴を推奨します。

pixiv・arcadiaにも同内容の話を投稿しておりますが、細部の表現変更がいくつかあります。

マークはハーメルンにのみ投稿されたお話です。

## 104期生とむろみさん

ある日突然ウォールローゼの外が海になっていた。

朝日が昇り見張りの駐屯兵団の者が壁の下を見下ろすと巨人の姿はどこにもなく、あたりは一面大海原になっていたらしい。

突如として壁外が海になってしまったことに軍の上層部は大わらわ。壁内にはすぐに箝口令が敷かれたが、それも『無限の塩』という宝の山を前にしては無いも同然であった。

二日と経たぬ間に海が存在は壁内中に知れ渡り、神聖なはずの壁の上には海水の汲み上げ機が設置され、塩の生産、販売を画策する商人とここらで便乗して儲けようとする駐屯兵団の兵士が何事かを囁き交わす姿が茶飯事となっていた。

むろん壁外が海になったことはエレンたち104期生の耳にも届くこととなり、彼らも他の兵士と同様暇を見つけては何かと口実をつけて壁の上に登っていた。

「これが海……」

「まさか、壁の中に居ながら海が見られるなんて……」

「エレン、あんまり前に出ると危ない」

壁のギリギリから身を乗り出したエレンの服をミカサが引っ張って戻す。

「なんだよ。簡単に落ちねえから大丈夫だよ」

むうと不機嫌を露わにして見せるも、ミカサは表情をまるで変えない。

「危ないことをするエレンが悪い」

見たことも無い白い鳥が、みゃあみやあと猫のような鳴き声を上げてアルミンたちの頭上を駆け抜ける。

目の前にはどこまでも続く大海原。空は突き抜けるような青い空。「何か、変な感じだね」

人類は相変わらず壁の中だが、敵であった巨人が見えないこの状況

はどつ表現して良い物か。それは、誰にも解らなかった。

とりあえず壁外が海になってしまったのはもう覆しようがない。

ならば人類は何をすべきかというところ、このまま壁の中に引きこもっているか、壁から出て海の調査をするかであった。

『巨人が居ないのならば何も臆することはない。早急に船を造り辺りを探査すべきでしょう』

という意見があれば

『いやいや、まだどんな状況なのかわからん。あの巨人たちの事だから水底でじっとこちらを窺っているかもしれん』

という意見もあり、その他資金の問題や海上活動のノウハウの欠落等の問題も山積みで上層部の意見はしばらく纏まりそうにないだろう。

上層部の難しい問題はここではさておき、エレンたち訓練兵104期生は何をしているかというところ、

「おいエレン、これは何つー魚なんだ？」

「し、しらねえよ。俺に聞くな。そうだ、アルミンなら知ってるんじゃないか？」

「え!? 僕だって何でも知ってるってわけじゃ……」

「とりあえず、普通の魚じゃないのは確か」

食糧確保の名目で釣りをしていたエレン達が釣り上げたのは、下半身が魚の少女だった。

「ひだるかったけん美味しそうなミミズが目の前に垂らされて。つい食らいてもうたっちゃ」

釣り針を口から引っこ抜くと、尾びれで器用に立ち上がった少女は可愛くポーズを決めてみせる。

「アタシむろみ。よろしゅうね！ あんたたちの名前は？ あ、ウロ

「いる？」

満面の笑顔でフレンドリーに挨拶されては敵意も湧きようがない。ジャン、エレン、ミカサ、アルミンの四人は軽く目くばせすると、相手の真意はさておきこの奇妙な魚少女と交流することにした。

「ふうん。つまり朝起きたら突然壁の外が海になったと？」

「そうなんだよ。ちょっと前まではこの辺りは巨人がウヨウヨ居たつてのに、いつの間にか消えてたんだよな。むろみさん何かこうなった原因とか知らないか？」

「うーん、アタシもこの辺りはあんまり来んしな。んでもここにこんな壁は無かった気いもするし、確かに最近人間さんが居なくなってるなあ〜とは思ってた」と

むしゃむしゃと釣り餌のミミズを勝手に食べながらむろみさんはぼやく。

「なんね、皆でどっかに引越したんかなーとは思ってたけど、まさか人間さんにもガチ天敵が出来るとは思ってもやらなかったい」

「ってことは、巨人の事は知らなかったってこと？」

「まあ、変なのは一杯おるけど、そんな危ないのが海におつたらまずりヴァイアさんが黙つとらなかるしね」

「おい、あんまりミミズ食うなよ。釣り餌が無くなるだろ」

「いいやんジャンー。あんまこすいこと言わんと」

「そうだぞ。ミミズくらい良いだろうが。それよりジャンは壁外が海になった原因よりそんなミミズの方が大事なのか？」

「や、別にそういうわけじゃねえけどよ」

「ああん、エレン君太っ腹ー」

むろみさんがエレンにしなだれかかった瞬間、ひゅっ、とミカサの周囲の空気が重たくなった。隣に居たアルミンはすぐに空気を察して話題を変える。

「ええと、それってつまりこの先にあるウォールマリアより向こうか

ら来たってことだよね!?」「ここより先にでっかい壁があったでしょ？ あれをウォールマリアって僕たちは呼んでるんだけど……」

世界の壁は外側からウォールマリア、ウォールローゼ、ウォールシーナの三層構造だ。五年ほど前に人類は巨人の侵攻によりマリアからローゼに後退したのだが、巨大な壁の跡はまだ残っているにはずだった。

ところが。

「壁え〜？ そんなん見んかったよ」

アルミンがすべてを言い切る前に、頭にクエスチョンマークを浮かべるむろみさん。それを聞いた四人は再度顔を突き合わせた。

「おい、どういふことだ？ 壁が無いってんなことあるのか？」

「俺に聞くなよ。なあ、アルミンなら解るか？」

「そんな、僕に聞かれても……」

「ウォールマリアが完全に破壊された？」

「いや、それは無いはずだよ。いくら巨人でもあの壁を完全に破壊するのはどう考えても無理だと思う」

「つまり、この壁とその内側だけ海にテレポーションしたってことっちゃんね」

四人の隙間にむろみさんが無理やり入ってしたり顔をする。

「はあ!? なんだそりゃ!?!」

「つまり、ここは壁の内側でありながら壁の外側ってこと!?!」

「おおおい、アルミン、何か話がややこしくついて行けねえぞ」

「そついうことってあるの？」

焦る男二人を尻目に、ミカサがむろみさんに尋ねた。

「まあ世界は不思議が満ちてるけん。あたしは解らんけど巨人もおるし、そついうことがあっても不思議じゃなかとね」

軽く言つむろみさんに、最初に立ち上がったのはエレンだった。冒険心冷めやらぬ様子でむろみさんを期待に満ちたまなざしで見る。

「な、なんかすげえなそついうの!! なあむろみさん、俺を海の方こうに連れてってくれよ!!」

「エレン、危険な事をするのはいけない」

「ミカサはちょっと黙ってるよ！ なあ良いだろうっ！ 俺は壁の向こうが見たいんだ！」

「ううん。連れてってやりたいのはヤマヤマやけどね」

「なんだよ、何か問題があるのか？」

言葉を濁すむろみさんに、エレンが更に詰め寄る。

「ちょいまち」

むろみさんは不意に壁の上に捨てられて天日干しとなったヒトデを拾い上げるとエレンの体に擦りつけた。

ゴシゴシゴシと念入りに匂いを擦りつけ、ぽーいと波間に捨てた瞬間。

ぞばああああああん

十五メートル級の人面魚が深海から現れ、真下からヒトデを飲み込んだ。

「さっきからあんなのが人間さんば狙っとるみたいやけん。目えは悪いみたいやけど、嗅覚がヤバいとね。なんぼ海が弱肉強食とはいえ知り合いが食われるのはアタシとしても心が痛いというか……」

暢気なむろみさんを尻目に、四人は視線を合わせて軽く頷き合う。

「おい、見たか？」

「ああ、見た」

「というか、見たままだよな」

そして、人類は再び恐怖を思い出した。

「あれは魚型の巨人」

## 兵長とイルカさん

兵長とイルカさん

人類が海に囲まれてしまっただけで一週間。

「いやはや、まさか壁外が魚型の巨人に囲まれているとは思わなかったよ」

壁の端際を歩きながら調査兵団、分隊長ハンジ・ゾエは後ろを振り返る。後からは二歩ほど遅れて不機嫌な顔をしたリヴァイがついてきていた。

「おまけに見える範囲に陸は無く、かといって周囲の水圧で壁が潰れることも無くおまけに川からの逆流も無いなんてホントに理由がさっぱりわからねー!!」

「おい、そんな端を歩くな。落ちるぞクソメガネ」

「大丈夫だいじょうぶ。そんなへまはしないよ」

壁外の陸地が海になってしまったことにより、調査兵団はどうしようもなく暇を持て余していた。

調査しようにも海が存在そのものを知る人物が殆どおらず、文献の類も殆どが異端としてどこかに収容もしくは焚書されてしまっている。なので調べようがない。

海の中には巨人にとって代わって魚型の巨人……いわゆる巨人面魚がウヨウヨと泳ぎ回っているうえに、おまけに海中では馬も立体起動も殆ど役に立たないありさまだ。

巨人以上に解らないことが多すぎる上、余りにも危険すぎるという理由で壁外の調査は無期延期。ひとまず待機命令を下された調査兵団の行動は地道に訓練をするか、壁まで海を見に来ているかの行動が大半を占めていた。

リヴァイとハンジは後者の方だ。

「チッ、せめて奴らが海面に出てきやがればどうにかなるんだがな」



リヴァイが海を見下ろすと、底の見えない薄暗い青がどこまでも続いている。波間には小さな魚影がところどころに写っているが、肝心の巨大人面魚の姿は見えなかった。

「でもまあ魚だからね。壁の中にはほぼ入ってこれない。例え入ってきても陸上活動が出来ないのが救いと言えば救いなのかもしれないね」

調査兵団としてはしばらく動けそうにない事はエルヴィンからも聞いている。それ自体は仕方がない。ただ、酷く物足りなかった。仲間を殺した巨人をこの手で殺せない事も胸糞悪いが、なによりこの海に囲まれた世界がまるで籠か生簀の中に押し込められているようで息苦しい。

「俺達はこんなところでブラブラしてる暇はねえように思うんだが……」

「そんなこと言ったって仕方ないだろ。まずは陸上からでも出来ることをするのが先決。それに見たことも無い形の巨人が居るんだよ。何だかわくわくするじゃないか！」

ハンジに向かって愚痴を言ったり舌打ちしたりしながら歩いていると、海面でキュイキュイと聞きなれない音が聞こえた。

見れば、知った顔が壁から身を乗り出して楽しそうにキャツキャツはしゃいでいる姿がある。

「なんだあれは」

「さあ？ 海の生き物なんて巨人以上にさっぱり解らないよ」

「奴らはバンドウイルカ。もしくはハンドウイルカ。いけすかねえハクジラ亜目マイルカ科ったい」

後ろに現れた人外の気配にいち早く対応したりリヴァイが振り向くと同時にほぼ反射的に間合いを取って腰の刃を抜き放つ。

「ちよちよちよ、やめったい話せばわかるとよ!!」

「リヴァイ、彼女は敵じゃないよ。報告にあった人魚さんじゃないか」  
「……紛らわしい」

ハンジからたしなめられ、舌打ちをしながら刃を収めるリヴァイにむろみさんは額の汗をぬぐう。

「もつちつとで生け造りにされるところやった」

「あ、兵長ー!! ハンジ分隊長ー! 見てくださいこの子たちすつごく可愛いんですよ!!」

三人がちよつとした邂逅とトラブルを繰り広げていると、こちらに気づいたペトラが手を振って二人を呼んだ。その間にイルカと呼ばれた生き物は笑うような声を上げてその場で大きくジャンプして見せると、おお、と衆目からの感嘆の声が上がった。同時にその場ではしゃいでいた誰かがイワシの切り身を投げ入れると、イルカは上手に口でキャッチする。

「おお、凄いねえ。飼いならされても居ないのに」

「三日くらい前に魚釣りしてたらこの子たちが来たんです! 釣ったお魚の頭とか切り身を分けてあげてたらすっかり懐いちゃったみたいで……」

ハンジもリヴァイもイルカの行動に関心を示す中、一人だけむろみさんが大きく舌打ちした。

「奴ら、エサが貰えりゃ誰にでも媚びると。これだから水棲哺乳類風情は好かん。あんたら野生のプライドってもんが無いんかい!」

海に向かってむろみさんが罵倒すると、イルカはあからさまにそっぽを向いた。

「くおらー!! 無視すんな!!」

「ちょ、むろみさんこの子たちと仲悪いんですか?」

「出来ることなら顔も見たくないっ!」

ぶんすか頬を膨らませるむろみさん。隣でじー……っという力を見つめていたリヴァイが、おもむろにむろみさんの肩を叩いた。

「おい」

「なに?」

「あいつら泳ぎは早いのか?」

「うん? まあ、アタシよりは遅いけど海中の人面魚よりかは早かたね」

「そうか……」

海面のイルカどもを見つめてぼやくリヴァイの横顔を見て、ハンジは「あ、これは何か変な事考えてるな」と思った。

翌日。

海中からせり上がる巨大な魚影。

人の顔を持つ巨大な化け魚が人間の臭いを嗅ぎつけた。深海の奥深くから大量の水を飲み込みながら海面に牙を剥いたその瞬間、獲物はひらりと身を躲して海を走る。

「チッ、上に引きずり出しても海面からの攻撃は難しいか」

攻撃に失敗した巨人面魚はすぐに海の中に身を隠した。

「おい、次が来るぞ。食われなくなきゃ死ぬ気で避ける」

「キュ……キュイー！」

「兵長すっいっ!!」

「リヴァイ、それすっごい最高だよ!!」

「兵長ー！ 危ないですからそろそろ帰ってきてくださいよ!!」

イルカに乗ったリヴァイは襲い来る巨人面魚の猛攻をかくぐりながらニシンの切り身を放り投げる。器用に空中でキャッチしたイルカは、乗り手の要望に応えるように高みを目指し、大きく弧を描くように海上をジャンプした。

「悪くない」

ゲラゲラ笑うハンジと純粋に応援するペトラ。足の筋力だけでイルカの背にしがみついているリヴァイは口の端で小さく笑った。

「ぐんぐんぐんぐん、どいつもこいつも、あんな水棲哺乳類のどこがええったい!!」

新たな可能性を見出した調査兵団は目を輝かせ、そしてむろみさんは岩陰で頭を抱えていた。

人類は未だ壁の中。

## 捕食者とむろみさん

サシャ・ブラウスは知ってしまった。

釣れたての魚の美味しさを。

七輪で網焼きをしてさらっと塩を振った焼きサバの香ばしさを。

「サバ焼けとー。これも食い」

「うう、ありがとっございますう！ あとさっきは噛みついてホントすみませんでした」

「気にせんとよ。生き物みんなひだるう時は必死になるもんたい」

「すみませんすみません。とても美味しそうな下半身だったものでっ  
い」

サシャがむろみさんに会ったのはつい先ほどだ。

腹を空かせたサシャが食べ物求めて壁の上までたどり着いたとき、そこには七輪でサバを焼いている最中のむろみさんがいた。

ちなみにサシャとむろみさんは初対面である。普通なら驚くところだが、余りにお腹が空きすぎていたサシャは「お魚ああ!!」の奇声と共にむろみさんの尾びれに噛みついた。

しかしそこは普段から鳥や猫に襲われ慣れているむろみさん。一進一退の攻防の末、辛勝を得たのはむろみさんの方だった。

「しっかしサシャちゃんってば身のこなしがホントの獣みたいやね。流石のアタシもとうとう食われるかと思っただと」

「一応狩猟民族ですからね。身のこなしには自信があるんですけど、でもゴハンは軍の配給だけじゃとてもおっつかないんですよ。だから女神に貰った分のパンをとっいたり、夜中に食糧庫にこっそり忍び込んだりしてしのいでたんですけど、最近食糧庫の鍵が新しくなっちゃって簡単に食糧にありつけなくなっちゃったんですよ!」

「それで捕食者みたいな目になってたよね」

焼きサバをフォークでつつきながら涙ながらに語るサシャの言葉を、むろみさんは隣で頷きながら聞いている。

「だから毎日毎日お腹が空いて……ところで、むろみさんは普段何を食べてるんですか？」

「アタシ？ アタシはまあ普通やないかなあ？ 小魚とか？ でもゴカイとかミミズとかの虫も結構うまかとよ……ってなんねその顔は」「ミミズってそんなにおいしいんですか？」

サシャは「うわあ、という顔を露骨にしながらも聞くと、むろみさんは唸った。

「んー……まあ人それぞれなんちゃうん？ 仲間内じゃコンブは主食にしてる子もおるし、アタシら基本何でも食べるし。あ、でも昔の人間さんもイナゴとかバッタとかハチノコとか食べてたけん。頑張れば虫もイケるんとちゃうん？」

「ふーむ。そんなもんですかねえ」

笑つむろみさんに、最後に残ったサバの皮を口に放りながらサシャは考え込んだ。

「兵舎の周辺なら工場も無いし、土壌も健全で天然の虫さんも美味しいとちゃう？ 前にジャンがくれたミミズはちかつぱ美味かったけん」

またくれんかなーと涎を垂らし、ホクホク顔をしているむろみさんを見てサシャは思わず喉を鳴らした。

翌日、訓練中。

「教官!! 大変です!!」

「どうした！ コニー・スプリンガー！」

「サシャ・ブラウスが突然倒れました!!」

「どうしたサシャ・ブラウス訓練兵!! 誰か解るものは居るか!？」

「はっ!! 先ほど兵舎の裏でミミズを食べていたのを見かけました!!」

おそろくそのせいかと判断します!!」

「何故そんなものを食べようとした!? ……まあいい誰か、医務室に運んでやれ! 残りの者は訓練に戻るよつ!!」

「とじし訳で、酷い目にありましたよ」

焼いたニシンを食べながらサシヤが昨今あった出来事の顛末をむろみさんに話すと、彼女は苦笑いをした。

「あー、そりゃあ、生で食べたらいかんとよ。人間さん胃腸が弱いけん火いば通さんと」

「そういうもんですかねえ」

「ほやくサシヤに、むろみさんは腕を組んで何度も頷く。」

「そうたい。アタシら魚類と違って人間さんは調理せな食えんもんも多いつちやる？ フグとか」

「フグってのは知りませんが、まあ、確かにむろみさんと比べたらそうかもしれないね。……でも私はやっぱりお肉とかパンとかお魚の方がいいです。あんな体の構造がはつきりしてない生き物は美味しくないありません」

「んじゃ、この体の構造がよー解らんかニとウニは要らんね？」

「ああー。ダメですそれは食べてみたいです！ 美味しい雰囲気があります!!」

すつと差し出された棘だらけの生き物はグロテスクだがサシヤの美食リーダーに大きく反応した。

「ほんじゃ、焼くとー」

火にくべられたウニとカニはすぐに美味しそうな匂いを放ち始め、近くで釣った魚で酒盛りをしていた駐屯兵団も招きよせてしまう。

「おお、むろみさんたち、何か美味そうなもん食ってんじゃねえか。俺たちにも少し分けてくれよ」

既に赤ら顔の兵士が七輪に手を伸ばすと、その手の甲をむろみさんが軽く叩いた。

「まだ焼けとらんけん。ええけど、代わりにアタシらにもお酒ちょうだいー！」

「お前、訓練兵だろう？　なんだむろみさんに人生相談か？」

「えへへ、まあ、そんな所です」

「俺も相談に乗ってくれよむろみさん」

「酒くっさ!!　ハンネスさんこんな昼間っから飲んでてええの？」

「今日は非番だからいーんだよ!!」

「おい、これ焼けてるよな。よっしゃ食っぞ！　訓練兵も食え！」

「うほおっ！　何これ超うまい!!」

「おお訓練兵、良い食いつぶりだな!!　酒もいくか!？」

「良いんですか!？」

「いいのいいの!!　今日は無礼講だぞ!!　遠慮すんな!!」

言いながら駐屯兵の一人はサシヤに押し付けたコップにドバドバと酒が注ぎこむ。

むろみさんから海産物を食べさせてもらい、既にへべれけになりかけた駐屯兵団から貰った酒を飲んでいっているうち、段々気持ち良くなってきたサシヤは段々何が何だか分からなくなってきた。

貰った魚介類は肉と比べても負けないくらい美味しいし、程よい塩分は酒の肴によく合うし、コップは空になる前に次から次へと酒が注ぎこまれる。

気が付けば周囲はちょっとした宴会になっていた。

おそろくその場で眠ってしまったのだろう。

翌日、二日酔いの頭を抱えて目覚めると、周囲に飛散する酒瓶と魚の骨とカニやらウニやらの殻の山。それから……自分の体を抱いてぶるぶる震えてるむろみさん。よく見ると、鱗がところどころ禿げているのは気のせいか。

はっ、とサシヤが口元に手を当てると鱗のような感触が。

「め」

「サシヤちゃんのカダモノー!!!」

「えええええ!!?」

叫びと共に海に飛び込んだむろみさんはバタフライで遙か彼方へ猛スピードで泳いでいく。

その姿はまるで、捕食者から逃げる魚そのものであった。



## 未知の技術とむろみさん

人類が壁の外を海に囲まれてしまっ少し前から、壁内では不思議なことが起こり始めていた。

曰く、首も羽も雫り取られた鶏肉が歩いているのを見かけた。

曰く、台所に置いていたカブを切ると中から砂糖があふれ出した。

曰く、戸棚の中に出所不明の缶詰がいつの間にか置いてあった。

曰く、夜中にトイレに行く途中、家の隅で鼠のような生き物が数匹で集まって流暢な言葉で談笑していた。

曰く、戸棚にいれて置いたなけなしの砂糖菓子が無くなっていった。

しかし、幸か不幸かその出来事はどれも噂の域を出ず、物証も無く、そしてあまりにも荒唐無稽な出来事だったせいか人々の話題に上ることがあつたとしてもすぐに誰かの見間違いだらうと忘れ去られてしまっ、そんな出来事。

「何だろっ？」「ね」

ある日、訓練兵団104期生クリスタ・レンズは兵舎の廊下にカラフルな球が一つ落ちているのに気が付いた。

「何やってんだよ。早くいかねえとサシャに飯全部食われちまっぜ」

「ねえユミル、これなんだと思っ？」

隣を歩いていたユミルに拾ったパステルカラーの球を見せると彼女は怪訝そうに眉根を寄せた。

「何だそりゃ。飴玉でもねえし、誰かがオモチャでも持ってきて落としたんじゃねえの？ それより早く行こっぜ」

すぐに興味をなくしたのかユミルは球から視線を外すと足早に歩きたした。

「あ、まっつよユミルー」

クリスタは落とし主を見つけたら返してあげようと、とりあえずポケットに球を入れるとユミルの後を追いかけた。

「この壁の外が海になった原因が解ったと」

いつも通りに釣り上げられたむろみさんの唐突な発言に、エレン・イエーガーを初めとする壁上の常連三人組は目が点になった。

「私らの知り合いにワイズマンっちゅー異星人がおるんやけどね、人魚仲間に聞いてみたら多分そいつの仕業っばい？ らしいんね」

「ちよっと待ってくれよ。誰それ？」

当たり前のように話を勧めようとするむろみさんをアルミンが遮るよつに尋ねる、が。

「ワイズマンはワイズマンたい。アタシらにケータイとか色々機械ば作ってくれる変な奴っちな。まあ、まだ問い詰めてないけん詳しいことは解らんけど、奴の超科学が原因の可能性は無限大やね」

「それって、どんな奴なんだ？」

「見る？」

聞きたいことはいっぱいあるが、とりあえずエレンが真っ先に聞く。と、むろみさんは髪留めに使っていたホタテ貝を一つ外して中からアルバムを取り出した。

「あ、でもアイツ人間さんと関わるの禁止されとるんやっただけ。

「まー、でももう既に関わっとするから別にええか」

「早く見せてくれよー」

「まあそっがつつかんと。ほい」

アイツの自己責任たい等と独り言を言いながら写真を向けると、そこには触角の生えた三つ目の異星人と親しげにしているむろみさんが写っていた。

「化け物じゃねえか!!」

「ちやうちやう！ 地球人じゃないけどちゃんとした異星の人間なんよー」

「つまりやっぱり化け物じゃねえか！」

「ともあれ、そいつが壁外を海にした張本人ってこと？」

突っ込むエレンを尻目にミカサが冷静に尋ねるとむろみさんは頷

いた。

「まあ、そういつこっちゃね。こっとなったらいつペン皆で押しかけてぼてくりこかして問い詰めんとこっちの気いも済まんかね」

「でも、そのワイズマンってどこにいるの？」

ぼつきぼつきと指を鳴らすむろみさんに、不安そうなアルミンが問いかける。と、むろみさんはウムウと唸った。

「そいやあ、あいつが不時着したのは別大陸やったかね。皆で行くにも巨人面魚が邪魔やし、そんならこっちから呼び出すしか無かねー」

「呼び出す……どうやってっ？」

「それは考えがあるたい」

アルミンを横目で見ながら、むろみさんはにやあと笑った。

「アルミン、よく似合ってる。凄くかわいい(棒)」

「なんちゅーあざとい男の娘ったい！ こんなところで腐らせておくにはもったいなかね!!」

「お、俺たちだけで見るのは勿体ねーよな。誰か、上手くプロデュースして壁内で流行らせてくんねーかな(棒)」

以前倉庫で見つけた余興用のウサギ衣装。それを着こんだアルミンことつさミンを囲んだ三人は、代わる代わるに可愛い可愛い勿体ないを連発する。死んだ目のアルミンは既にどうでも良いらしく遠い目をしていたが、その心の内では『帰りたいたい』と切実に願っていた。

「アルミンは、私の数万倍はかわいらしい。寝るときに抱き枕にした。沢山、グッズが欲しい。そのためには流行らないといけない(棒)」

「ついでに歌とか歌って世界に羽ばたかせたいっちゃん!! 絶対売れるったい！」

「そつだ。ああマジで流行らせてくれる奴いねえかな！(棒)」

「わっしょいわっしょい!!」

「わっしょいわっしょい(棒)」

「わっしょいわっしょい(棒)」

「(早く帰りたい早く帰りたい早く帰りたい……)」

「お呼びねすか?」

「捕まえたああああ!!!」

地中からボコツと現れたつるつるのメタルボディがむろみさんに  
わし掴まれる。

「うほっ、良い男の娘。こいつあ確かにスーパーエクセレントだぜ」

「コイツがワイズマン? 写真と比べて随分小さいけど……」

「そうたい。ただ、今は自己改造してすっかりメカニカルになつとる  
けん。頭はええけどちよつとアレな奴なんよ」

「失礼な。私は変態では無く、変態と言つ名の紳士なのだよ。さ、プロ  
デュースされたいあざと可愛い男の娘というのはキミかな? 私に  
任せておけばアイドルデビューからスケジュール管理にプライベ  
ート監視まで何でもこなしまっせ」

むろみさんの手の中でもそもそと動くカニのような金属が覗き込  
む四人に向かってハサミのような手をぶらぶらと振れば、怖気を感じ  
たアルミンがエレンの後ろにそつと隠れた。見慣れない機械に興味  
はあれども、歪み無い変態紳士には言い表せない身の危険を感じるの  
だ。

「壁の外を海にしたのは貴方なの?」

ずい、と前に出たミカサがワイズマンに問いかける。返答次第に  
よっては削ぐ。そんな尋問官じみた覇気を滲ませているにも関わら  
ず、ワイズマンは飄々とした態度を崩さない。

「はー? 何の話かね?」

「じまかすつちやなかと。アンタの超科学でこの辺の海に土地ごと人  
間さんは持ってきたのはわかつとると。下手に言い訳すつとぼてく  
りこかすけん」

「おーっそのことですか。いやいや、私も流石にこれだけ広大な土地  
を空間転移させるなんて技術をゼロから生み出すことは出来ません

な。というかそんな発明が出来たらとつくの昔に自分の星に帰って  
ますがな」

のたくるワイズマンはメタルボディに付属するハサミをカチカチ  
と鳴らして弁明する。

「んんんっ。つまりこの超科学的事件はアンタのせいじゃなかと？」

両手でワイズマンを握りながらむろみさんが首をかしげると、ワイ  
ズマンは両手を上げてシャキーンと肯定のような音を出した。

「私の昨今の観測から察しますると、ここいら一体に起こったという  
不思議現象というのは世界的イレギュラーによる時空干渉がそのそ  
もの原因と思われれますな」

「どういふこと？」

「何かよくわかんねーよ。もっと解りやすく」

話についていけないエレンとミカサが首をかしげるとワイズマン  
は考え込むように顎を顎のような部分にあてる。

「つまり、早い話が未知の世界から来たよく解らんもんのせいという  
奴でんな。物理法則なんて無視するスゲー奴。異星人でも異生物で  
もましてやUMAでもない、真正銘異世界からの来訪者がもたらし  
た超科学を超えた未知の技術としか言えまへん」

「何かわかんねーけど変な奴が来たせいってことだな？」

「然り」

「その来訪者はどこにいるの？」

「不思議なことはこのメタルなボディじゃ感知できんのですわ。し  
かあし私の観測結果とゴーストが来訪者はきつと居るとさ・さ・さ・や  
い・て・い・る!!」

ズビシッと天を指さすワイズマン。

何だかよく解らないが、とにかくこの事象はこのメタリックガニの  
仕業ではないらしいことは解った。

「つまりアンタのせいではないとね。疑って悪かと」

「ああ、俺たちも疑って悪かったよ」

口々に謝るエレン達にワイズマンは首を振る。

「いやいやいや、気にしてないよ。どういふことは誰にでもあるから

ね

「ワイズマン……」

「僕、ワイズマンさんのこと誤解してたのかも……」

寛容なワイズマンの口調にちよっぴり感動しかけた四人組。

「まあ、その来訪者の作り出した時空転移システムをちょーっと応用して異星間ワープ装置を作ろうとしてたらうっかり暴走してここら一带の土地がこんなところに飛んだけど、それはただの事故だからね」

「やっぱりアンタのせいじゃないかい!!」

「ノンノンノン。私の技術では無いからセーフセーフあれは解析に骨が折れそうだ。だがあ、それより今、私は後ろに居る男の娘に興味があるなあ」

ギリギリと締め付けていた手からぬるんと逃れたワイズマンはスチャットと着地すると、ハアハアしながら八本の足でアルミンににじり寄る。

「はあ、はあ、お兄さんに任せておけば手取り足取り耳取りで歴史上最高のナンバアワンアイドルにしてあげるよあ。グラビアもすっごい美人に撮ってあげるよあ。悪いようにはなんにもしないからねえ」

「こ、怖い!! 何か巨人と違う意味でこの人怖い!!」

アルミンが後ずさりした瞬間、ワイズマンが真っ二つに裂けた。

超硬質ブレードを軽い音を立てて仕舞ったミカサはエレンとアルミンを振り返る。

「とりあえず、今日はもう帰りましょ」

「来訪者ってどんな奴なんだろうな」

「とりあえず、巨人より小さいのは確か」

「来訪者は気になるけど、もう僕はあの人とは関わりたくないよ……」

「大丈夫。もう破壊しておいたから」

「いんや、あれはコピーやけん。後で本体ボテクリこかしちゃあ」

そんなことを言い会いながら四人はそれぞれの帰るべき場所に  
戻って行った。

しかしその時には誰も知らなかった。

破壊されたワイズマンの眼球には超光学カメラが搭載されていた。  
それで盗撮された百数十枚にも及ぶうさミンのデータは瞬時に本体  
ワイズマンのスペシャルサーバーに転送され、そこから更に何百と居  
るワイズマンコピーへと再転送されたことを。

壁内で流行らせるべく、紙媒体へ複写された大量のうさミン写真が  
地下街に出回るまであと数日。

## キース教官と三匹のお魚さん

キース・シャーデイス教官は今、ほとほと困り果てていた。

彼は一教官として、今まで数々の訓練兵を育て上げてきた。もちろん途中で脱落する者もいた。死んでしまう者もいた。それでも彼は命がけの訓練を無事に乗り越えられるよう、来たるべき巨人との実践が来ても死なずに帰ってこられるよう、教官として訓練兵を決して見放さなかった。

しかし、今回はかりはほとほと参ってしまった。彼が現在受け持つ訓練兵団104期生も相当アクの強いメンバーだが、こいつらに比べればはるかにマシなんじゃないかと思った。

『……………(びるっ)』

『仕事が無い……………仕事が無い……………』

『怖い……………怖い……………地上が怖い……………』

壁の上。彼の目の前に居るのは、三匹の魚であった。名をガラパゴスバットフィッシュ、リュウグウノツカイ、シーラカンスと言っらしい。

もう一度言うが、どこからどう見ても魚である。何故陸上でも平気なのか解らないが、彼は考えることを放棄した。ついでにむろみさんから貰った『魚の音が解る機械』という物が耳に入っていることも忘れることにした。

「あ……………本日かぎり、むろみ嬢から貴様らの特別訓練を承ったキース・シャーデイスである。一日限りの訓練だからと言って容赦はせん。総員、心臓を捧げよ!!」

『……………怖い、怖い……………光が怖い……………』

シーラカンスを除いた二匹の魚が右の胸ビレを持ち上げた。おそろしく、心臓を捧げる敬礼……………だと思っ。多分……………。

魚の心臓がどこにあるのかキースは全く知らないが、最低限の事はあらかじめむろみさんが教えておいてくれたらしい。



キースは唯一敬礼をしなかったシーラカンスに詰め寄ると、鬼のような形相でシーラカンスを睨みつける。

「訓練兵、敬礼の仕方は教わっているな!? 何故しない!？」

「怖い……怖い……団体行動が怖い……」

キースに問い詰められたシーラカンスは白目をむいてぶるぶる震えると、その場にぺチャッと音を立てて倒れた。

「どうした!? シーラカンス訓練兵!？」

「……死んでいるんじゃない?」

ピクリとも動かないシーラカンスを見下ろしながらリュウグウノツカイが隣でもそつと言う。だが、そんなはずは無い。死んでいるなら、もう少し前に酸欠で死んでいるはずだからだ。

キースは教官として目いっぱい海水を入れた樽の水槽にそつとシーラカンスを入れてやる。そして上からふわつと黒い布を被せた。

「怖い……怖い……」

耳を澄ませば樽の奥から響く細い声。暗い所に入ったのおかげで多少安心したのか、シーラカンスが目覚めたようだった。

「あー……場が削がれたが、続けるぞ。まずは貴様は何者だ!!」

気を取り直して三角形で顔だけがおっさんみたいな魚。ガラパゴスバットフィッシュの前に立ち、いつかの訓練初日のように怒鳴りつけた。

「……………(びるっ)」

「どうした、口が無いのか!? 名を名乗れと言っただだ!!」

「……………(びるっ)」

黙りつづけるガラパゴスバットフィッシュに痺れを切らしかけた時、バットフィッシュはキースに背を向けた。そのまま無言でのたのたと壁上を歩き、ポチャッと音を立てて海へ帰ってしまった。

「……………」

「……………。まあ良い。では次、貴様は何者だ!!」

気を取り直してやたらとひよる長い魚に向き直る。魚の癖に絶えず汗をかいているように見えるのは気のせいか。

「リュウグウノツカイと申しますうー!」

「貴様は何故ここに来た!？」

『先日回遊魚の交通整理をクビになりました、職探しをするうちにむろみさんからここを紹介されました』

「よし、貴様は一生就職出来んまま過ごせ!!」

『ひどい!! やる気は、やる気はあるんです!! だから仕事を下さい  
』

「うるさいつととおしい纏わりつくな!!」

やたらとひよる長い体に巻きつかれると、生臭くて仕方がない。人間との対応の違いにペースを崩されながら振り解くと、やがてポツポツと雨が降ってきた。先ほどまではあんなに晴れていたのに。

『出来ることはあるんです! 陸地に上がると雨が降るんです!! なので地上に仕事を下さい!! 特性を生かせる仕事を下さい!!』

段々、目頭が熱くなってきた。

初日に兵としてまっさらな状態にするとかしないとか、落ち込むとか落ち込ませるとか、目の前の魚類はそんなレベルじゃないことにようやく教官は気が付いた。

「こんなことなら安請け合いするんじゃないかとキース・シャーデイスは激しく後悔した。

最近兵士たちと妙に仲が良いむろみさんに「どーしてもどーしてもお願いやけん!! キーヤんが一番合ってると思うたい。お礼ばするし、一日で良いから奴らにエレン君たちみたいな訓練つけてほしいと!!」と頼まれた。

本当は断っても良かったのだが、壁外を自由に移動できる貴重な存在の頼みを無下にするわけにもいかないと思ったのだ。

その時は。

「きちんと胴を上げんか!!」

『これ以上は無理ですよ』

「そんなんで地上に就職先が見つかると思つのか!？」

『ああ、怖い……スパルタ怖い……』

「貴様は黙つとれ!!」

雨が降りしきる中で雨具を羽織ったキースは教官としてリュウグウノツカイを訓練していた。具体的には尾びれを掴んで腹筋の真似事のようなことをさせている。ちなみにシーラカンスはまだ樽の中だ。

びったんびったんと横向きに腹筋(?)するリュウグウノツカイ。

雨を呼ぶ能力があると本人(本魚?)は言っていたが、この程度ならばまだまだ許容範囲内だ。

「よし、これが終わったら次はここから五十メートルは走ってもらおうぞ」

『あの、私は足が無いんですけれど』

「全身を使って跳ねて走れ!! 良いな!! 腹筋あと五十回!」

『はiiiiiiii!!』

ぞあああああ。

「(段々雨が強くなってきたな)」

ヒュオオオオオオオ。

「(風も出てきたな)」

ビュオオオオオオオ!!!!!!      ゴオオオオオ!!!!

『教官!! 私、鯉のぼりに就職出来そうな気がします!!』

「バカもの!! 妙な事言ってる場合か!!」

横殴りの大雨に足がもたつくほどの強風。所により雷まで光っている。

尾を掴まれたリュウグウノツカイは強風により空に舞い上がり、もはや腹筋どころでは無くなった。キースはやっとの思いで空にたな

びくりユウグウノツカイ訓練兵を掴んでいたが、とうとう水に濡れたウロコがつるりと滑る。

「あっ……」

ポチャッとリュウグウノツカイが海に戻ると、途端に雨風が止んで雲の間から天空より暖かな太陽の光が差し込んだ。

海から顔を出したリュウグウノツカイと、壁の上のキース教官の目が合った。

「……………」

『……………』

「破門だ!!」

『ひどい!!』

夕陽が沈む壁の上にて、最後に残ったのは樽の中に納まったシーラカンス訓練兵ただ一匹だった。

地平線のよく見えるその場所で、キース・シャーデイスは樽の隣にそっと座った。

『ああ、怖い……世界が怖い……………』

「そんなに世界が恐いかね」

そっとシーラカンスに話しかけると、中に居る魚は『未来が怖い』と言った。

「私が思うに、君たちに必要なのは『訓練』では無く『カウンセリング』だと思っただが……………」

『怖い……………何か解らんけどとにかく怖い……………』

「まあ、お前の言っ事も解らんでもないがな。世の中は怖い事が沢山ある。だが、それに屈しては前には進めんだろ。人間も、おそろく魚もだ。……………これも何かの縁。今日一日はお前さんに付き合っ  
てやるわ」

そっしてキースはそっと上にかぶせた黒い布を捲った。

そこには太古の昔、中生代からのトラウマを遺伝子に刻み込まれた

深海魚の得体のしれない目がキースをじっと見上げていた。

「何か今日の晩飯メチャクチャ豪華じゃね？」

その晩、訓練兵たちの食卓には豪華な刺身や煮魚、焼き魚や焼き貝等の魚介類が大量に並べられていた。

「ああ、何かむろみさんに貰ったんだって。お礼とお詫びだと言ってたそうだけど……」

「お礼……？ 誰にだろっ？」

「でもこうして食卓に並んでるってことは食べても良いって事ですよ  
ね!? ね!？」

真っ先にサシャがガツガツ食べ始めると、周囲も久しぶりのごちそうをサシャに食い尽くされる前に食べ始めた。日々の訓練でいつもハラペコな訓練兵が腹を満たしていたその時。

ドアが開いて、奥から座学を担当している教官が顔を覗かせた。

「連絡だ。キース教官の体調がすぐれないため明日の訓練は自主訓練とする。以上!!」

「あの、教官は何か病気なんですか!？」

あの教官が？ と驚く訓練兵が居る一方で、見えないように喜ぶ訓練兵も居た。様々な反応をする訓令兵をする中で誰かが尋ねると、座学の教官は困った顔で頭を掻いた。

「あー。私も解らんのだが、深海魚の遺伝子に刻み込まれた恐怖が伝染したと聞いた。が、病ではないので心配しないように」

「先日は酷い目にあった……」

キースは、実はシーラカンスと喋っていた時より先の事を覚えていなかった。

昨日ベッドの上で気が付いたとき、むろみさんからシーラカンスの

トラウマがうつったのではないかと教えられたがいまいちピンとこ  
なかつた。

「魚の訓練兵を持つのはもうやめた方が良さそうだな……」

次の立体起動訓練のため、大樹の森の下見をしながらキースはぼや  
く。壁外を海に囲まれたとはいえ、今後の動向が定まらない限り立体  
起動の訓練は一応しなければならぬことになっているのだ。

「今後、むろみ嬢から頼まれても断ることにしよう……」

そびえたつ大樹に異変が無いかを確認し、帰ろうとした時だ。小さ  
な子供のようだが、得体の知れない何かが目の前を通り過ぎた。

「貴様は何者だ!？」

思わず呼び止めると、得体の知れない翼の生えた少女のようなもの  
は、あどけない顔をキースに向けた。

「ハーピー?」

## とある幕間とむろみさん

深海から巨大な魚影が浮かび上がる。

人の顔をした巨大な魚は獲物を飲み込もうと大口を開けて犠牲者の背後から迫るその時。

「トビウオジャアアアンブ!!」

巨人面魚の攻撃を海上への華麗なジャンプで躲したむろみさんは着水と同時に猛スピードで海面を泳ぎまくる。

後からは沢山の巨人面魚が追いかけてくるが、どれもむろみさんを飲み込むほど速く泳げるものは居なかった。

「アタシに追いつこうなんて六億年早かよ!!」

高らかに笑いながら沖へ泳いでいくむろみさんを、ハンジはペンと手帳を片手に壁の上からじっと観察していた。

「おいハンジ、何してんだ?」

「リヴァイかい。むろみさんにアルバイトをお願いして巨人面魚の行動調査してるんだ。凄いな。協力者が居るだけで採れる情報量が全然違うや」

横に立ったリヴァイが尋ねると、ハンジは手帳から目を離さずに答えた。

「何か解ったのか?」

普段は巨人の事などまるで聞こうとしないはずのリヴァイが会話に踏み込むと、ハンジは波間で巨人面魚に追われるむろみさんを見ながら答えた。

「うん。色々だね。まず、むろみさんの言うとおり奴らは視力が極端に悪い。むろみさんに私の服を着て海に入ってもらったんだけど、普段はむろみさんを襲わない巨人面魚が一斉に襲ってきた。初手の攻撃は一匹だけだったけど、時間が経つにつれて少しずつ増えて最大数は十匹くらいかな。あと、力尽きると動きが鈍るんだ。ちなみに大きさは三メートル級から十五メートル級までが確認できたよ」

「俺たちの知る巨人の情報とあんまり変わらねえな」

「そつだね。あとは体温が人型巨人よりかなり低い以外は回復能力も同じだね。巨人面魚の個性的な顔立ちも私たちの知る物とそこまで変わらない。もしかしたら弱点も同じだと思う。でも、変わらないということが解っただけでも収穫だと思わないかい？」

何せ、奴らは普段は暗い水の中に潜んでるんだから。

そつ続けると、リヴァイは忌々しげに舌打ちした。

「それよりリヴァイ。君こそこんな時間に珍しいね。今はイルカの騎乗訓練をしてるんじゃないか？」

「ああ。今はペトラ達がやってる。それよか、よくあんなクソでけえ貯水池を作れたもんだ。イルカどものエサ代もバカにならねえだろ。上の連中はガタガタ言わなかったのか？」

「うん。もちろん色々あったみたいだよ」

現時点、壁内の世論は保守派が優勢だった。

壁外が海に囲まれたことにより壁内にかかる脅威が減少したこと。加えて土地が無くなった事による壁外探索のメリット低下と巨人面魚による危険度の上昇。これだけで調査兵团には大打撃だった。壁内からでも塩や魚の海産物が取れるようになった今、誰が好き好んで危険な大海原に乗り出すと言っのらう。

そんな中で、調査兵団長エルヴィン・スミスは壁の傍に巨大な海水用貯水池を建設し、そこに兵団用のイルカを十頭も導入するという荒業に及んだ。建設費には当然税金も当てられているが、それだけで建設資金が足りたとは誰も思っていない。

「調査兵団解体派がうるせえ中で予算もねえ人もいねえ海へ出る技術もねえ。エルヴィンはどんな魔法を使って上を黙らせたんだ？」

「なんだい？ 本人に聞けばいいじゃないか」

「聞いても何も言わねえからダメエに聞いている」

「えー。エルヴィンが言わないなら私からも言い辛いなあ……」

「うるせえ。あいつの決定は信用している。ただ、納得がいかねえだけだ」

リヴァイが舌打ちするとハンジは「仕方ないなあ」「とぼやきながら上着のポケットから一枚の写真をリヴァイに差し出した。



「何だこりゃ。写真か？……にしちゃ随分綺麗に取れてるな」

ハンジから渡された写真は白黒では無い、どつやって撮ったのかも分からないような、ぼやけも滲みも無い総天然色の色鮮やかな写真だ。

「それは現在地下街で絶賛大流行中の謎のアイドル。うさミン」

その写真の中にはバニーの服に身を包んだ可愛らしい少年が恥ずかしげに写っていた。

「長らく不明だったその正体は、訓練兵団104期生アルミン・アルレルト。ちなみに調査兵団希望」

ハンジの説明に、リヴァイの顔が物凄い勢いで曇った。普段の三割増しに悪い目つきで写真に写る可愛らしい少年を凝視する。

「……おい」

「ついぞに言つとその子の幼馴染二人もいれて、調査兵団アイドル部隊『シガン しな』結成予定中だったり」

聞いた途端、リヴァイは頭が痛くなってきた。そして段々、謎だった今回の資金の出所が掴めてきた。

「最悪だな……」

「だから君には秘密にしときたかったんじゃない？ まあ歌はまだまただけど、プロマイドの売り上げが物凄いよ。今までの資金不足が解消な上に中央の豪商やら貴族やらに熱狂的なファンがついてるから間接的に調査兵団の発言力増しまくりなのが大きいね。俺たちのうさミンさんの為ならなんとやらの。それからもう一つあるんだけど……」

「もついい。これ以上俺の頭痛の種を増やすんじゃない」

「まあ聞きなよ。確かに資金不足は解消したよ？ でもぶっちゃけアイドル業だけじゃ今の所、貯水池の設置費とイルカの維持費ぐらいにしかならないんだ。魚はまだまだ高級食だよ？」

確かにそうだった。イルカを飼育するにあたって釣りだけでは魚の数が足りないのだ。必然的に購入するしかないが、流通量の少ない魚を大量にエサとして与える場合、草食の馬と違って食費は目の玉が飛び出そうな値段になる。

リヴァイもそれは知っていたが、イルカに与える魚代がどこから来ているかはあまり考えたことが無かった。

「資金不足はまだまだ続行中。そこでだ。私たちは近いうちにまた壁外調査をする予定だって。知ってた？」

「それは知ってる。だが、巨人人魚に対抗する策も武器もねえのに本当にやるのかってのは疑問だった」

リヴァイのもっともな話に、ハンジは一つ大きく頷いた。

「まあ、壁外調査って言うてもあくまで周辺調査だけだね。それでその時、人魚さん達に外へ出る私たちの護衛をお願いしたんだ」

人魚「達」ということは、むろみさん以外にも人魚が居るといことだろう。

「……正気か？」

信用できるのか？ という疑問を含んだ視線に、ハンジは問題無いと答えるように笑う。

「現状、彼女たちより心強い味方はいないと思うよ。で、私たちから人魚さん達に与えられる報酬なんだけどね」

そこでハンジは一端言葉を切る。

「今回護衛を頼んだのはハンターを職業にする人魚さん達なんだ。魚や海の資源を狩猟採集し、それを売って生計を立てている皆さんだね。それで、彼女たちには報酬としてトロスト区に限り自由な交易権が渡されたって訳さ」

「つまり……？」

怪訝そうな顔をするリヴァイに、ハンジはニヤリと笑う。

「まだピンと来ない？ ヒント。海にはお宝がたっぷり。兵士は人魚さんと仲良し。海に出る調査兵団は多分もっと仲良し。商会は最初に誰と仲良しになりたい？」

よつやく合点がいく。

「商人と結託して中央のケツの毛まで筆ろって魂胆か……どうりで最近トロスト区が活気づいてる訳だ」

「大正解！ 海の資源は中央も欲しがってるから、良い口実として許可は割と早かったよ。外からの食糧流入は民間の人々にも大歓迎。

商会、及び輸入品の一部利益が約束された調査兵団は潤いまくりで大笑いして訳さ」

「……エルヴィンの奴、兵士じゃなけりや相当な詐欺師だな」

「まあ、いずれ規制が出来ちゃう可能性も高いけどね。今のうちが稼ぎ時って訳さ」

リヴァイが息をつきハンジが笑うと、海からむろみさんがぴよんと飛び上がった壁の上に着地した。

「ハンちゃん。良いデータ取れた？ あれ、リヴァイもおるん？

何なに？ 何か面白い話してたの？」

「あ、むろみさん。色々ありがとっ！ おかげで調査がはかどったよ！！ これ約束のバイト代」

「おおっ！ こんなにええの？ 約束より多かど？」

ハンジが鋼貨の入った袋を渡すと、むろみさんが大仰に喜ぶ。

「良いの良いの。むろみさんのおかげで色々助かってるし、奮発しちゃっよ」

「よっしゃー！！ そんならハンちゃん後で飲みに行こ！ アタシこの前ええとこ見つけたっちゃん！」

「良いね！！ 海中での生活とか、巨人面魚の話とかもって聞きたいなー！！」

「ハンちゃんその話好きとね〜！ オーケーオーケー！！ 朝まで付き合っつよ！！」

ハイタッチをしながら楽しげに喋る二人をよそに、リヴァイは眼下に広がる海を見た。

両手いっぱいに広げても足りないほどの、そのあまりの広さに目がくらみそうになった時、自分を呼ぶ声が聞こえた。

「おーい。リヴァイも一緒に飲みにいかない？」

振り返ると、むろみさんとハンジがこちらに向かって手を振っている。

まるで『自由』を体現するかのような二人に、海から視線を外したリヴァイはゆっくりと歩き始めた。

「あ、今リヴァイ笑った？」

「笑ってねえ」

「嘘やん。笑つとたよー！」

「笑ってねえ」

人類は未だ壁の中。

## 宗教とむろみさん

「この世が平穩に保たれていたのは全て壁様のおかげなのです。壁様が我々を外敵から守ってくれたからこそ、今まで平穩でいられたのです」

ウォールローゼ南部。

神聖なる壁のすぐ傍で、ウォール教のニック司祭は十数人の信者たちに説教をしている真つ最中だ。

「壁は今現在、海という驚異に晒されています。確かに海からは塩が採れます。魚も採れます。我々に様々な恵みを与えてくれます。しかし忘れてはなりません。海とは壁の向こうの存在なのです」

首からネックレスをぶら下げた信者たちはニック司祭の言葉に耳を傾けている。

「海とは恐ろしい巨人どもと同じ壁の向こうの存在なのです。ですから壁の向こうから来た人魚もまた我々の脅威なのです。忘れてはいけません。あの優しい顔の人魚も巨人と同じ外の存在であることを……なので」

そこでニック司祭は言葉を切り、ちらりと信者たちの間を見た。

「その人魚。何故ここに居るのですか!？」

「え、あたし!？」

「ビシィ!! と指を指され、驚くむろみさんにニック司祭は舌打ちした。

「この邪教の徒よ! 今すぐここから出て行きなさい!」

「なんでアタシが出て行かないきゃならんとね! 善良な宗教ついたら普通来るもの拒ます去る者追わずっちゃろが! 断固人種差別はんたーい!!」

涙目でぴぴぴーと笛を吹きながら拳を上げるむろみさんを、周囲に居た信者たちはまあまあと宥めた。

「むろみちゃん安心して。私たち、貴方たちとあつたばかりで存在的にまだ容認されてないだけよ」

「そつだよむろみさん。大丈夫だよ。皆にはこれから少しずつ解つてもらえば良いんだよ」

「あの、司祭様……むろみさんは良い子なんですよ？ 我々が飢えている時に食べ物を与えてくれた壁様からの使者じゃないのですか？」  
まさかの信者たちの擁護に、ニック司祭はぐぬぬという顔をしながらも深呼吸をして心を落ち着けると咳払いをする。

「皆さん、惑わされてはいけません。あどけない顔をしながらも、その人魚は邪教の徒です」

「なんで!? アタシ別に壁に悪いことしとらんっちゃん!!」  
むろみさんと共にそつだそつだと信者たちが意義を申し立てると、ニック司祭はくいと親指を壁に向ける。

壁の下には、兵士たちが壁の上で釣った魚の食べカスやら酒盛り後の空の酒瓶やら、焼いた後の燃えカスや壊れた釣針、釣り糸等のゴミが大量に落ちていた。

「壁様を汚す者の、どこが邪教徒じゃないと言つのですか？」  
見下したように鼻で笑うニック司祭に、むろみさんはぐぬぬぬと歯ぎしりをする。

「ちくしょー!! 覚えてろよー!!」  
そして、むろみさんはその場からダッシュで去って行った。

後日

「はいはい!!」  
「ゴミは持ち帰ってゴミ箱へ捨てること!! ジャン!」  
「ゴミ捨てない!!」

壁の上では、ゴミ袋と火バサミを携えたむろみさんが大声で兵士たちに向かって叫んでいた。

「なんだ？ むろみさん。突然美化に目覚めたのか？」  
「何か、ウォール教の司祭を見返してやるって言ってるらしいよ?」

「コソコソ話をする駐屯兵団。その近くではポイ捨てをした兵士がむろみさんに尻を叩かれている。」

「あいたあ!! 火バサミで叩くなよ!」

「ポイ捨て禁止ー!! さっさと拾っ!!」

アグレッツシブにゴミ拾いをするむろみさんに、兵士たちは肩を震わせた。むろみさんは結構力が強いのだ。

「怖いな」

「ああ。俺達も今後は気を付けよう……」

その後、壁の周囲にゴミのポイ捨ては少なくなったそう。

人類は今日も壁の中

## 山奥組とむろみさん

ライナー・ブラウンとベルトルト・フーバーは壁の上から海を見ていた。

体育座りで。

「……………」

「…………… ねえライナー」

「何だベルトルト」

「僕たちの故郷って、どっち側だと思う…………？」

「さあ…………… どっちだろうなあ……………」

本日も清々しい程の晴天だ。遠くに見張りの駐屯兵団が竿を片手に海に向かって糸を垂らしている姿をちらほら見かける。おそらく非番なのだろうが、中には大っぴらに昼寝をしている奴もいた。海のすぐ下には大量の巨人面魚が待ち構えているのだが、海に落ちなければどうということは無いらしい。何せ相手は陸での活動が出来ないのだから。

最近是人々と人魚たちとの交流が多くなったことも相まって、海から漁業資源の流入が多くなり食糧も増えた。かつては貴重品だった塩もようやく庶民の手に届くまでに至り、ここにきて人類の緊張感は百年の安寧を過ごしていた頃よりも確実に緩みまくっていた。

「…………… ねえライナー」

「何だベルトルト」

「…………… もし超大型巨人だったらこの海を泳いで行けると思う？」

「…………… 多分、無理じゃねえかな……………」

見渡す限りに陸地は無い。人魚たちの話のよればイルカを駆って頑張れば二日くらいで小島が見えてくるそうだが、そこにたどり着く前に海へ出た人類は巨人面魚に飲まれているに違いない。

「…………… もしも今、超大型巨人が出てきて壁を破壊したらどうなるかな」



「あー、そしたら俺達は超大型巨人もろとも海の藻屑と消えるだろうな。ついでに鎧の巨人も」

ぼそつとベルトルトが呟くと、ライナーは気にした風も無く返す。  
しばしの沈黙。

さざなみの音を聞きながら太陽の陽射しに炙られること数分。

「ねえライナー……」

「何だベルトルト」

「暇だね」

「ああ。クソみたいに暇だ。釣竿でも持ってきてくしゃ良かったな」

「何してんのよ。アンタら」

「ゴロンと寝転がったライナーの真上にアニが現れた。」

「あ、アニ。どうしたの？」

振り返ったベルトルトが聞くと、釣竿とバケツを担いだアニはあからさまにため息をついた。

「どうしたもこうしたも無いよ。あんまり暇すぎて魚でも釣ろうと思つてね」

「そうなのか？ 俺はてっきり調査兵团アイドル部隊の面接に行ったもんだと思つてたぞ」

「冗談よしてよ。私は憲兵团しか行く気はないよ」

「あはは。そういえば結局、憲兵团に行くのってアニとマルコしか行かないんだっけ？」

ベルトルトの問いかけが気に入らないのか、アニは不機嫌そうにふんと息をつく。それを見て、ライナーは笑った。

「そりゃそうだろうな。駐屯兵团は海水と塩の採集権利で、調査兵团はアイドル部隊新設と人魚との交易、漁業開拓でかなり潤っている。壁外調査は前みたいに全体出立が物理的に出来ねえから、新兵はまず外に出されん。調査兵团イコール即死にならなくなった現状、わざわざエリート意識ばかり高い内地に行くメリットは少ないからな」

「そういえば、ジャンもやっぱり調査兵团行くなって言ってたね。ミカサ目当てで。プロデューズや広報に一枚噛んで壁内で大成してるって意気込んでたよ」

「ミカサといえはさ、あいつがみかりんなんてよく言えたもんだよ。あんな凶悪な目つきでアイドルなんて普通ありえないね」

「でも、内地では凄い人気みたいだね。この前写真を見たけど、僕としてはエレンがよく一緒にやったなあって思ったよ。この前食堂でえれえれって呼んだら物凄く睨まれたけど」

「まあ、でもやっぱり一番可愛いのはうさミンだろうな。俺がプロデューサーならクリスタと組ませてユニット『天界組』を作る所だ。天使のアルミンと女神クリスタなら相性抜群だろうな。間に挟まれてえ……」

『ライナー気持ち悪い』

鼻の下を伸ばしてニヤニヤするライナーを見て、二人が同時に突っ込んだ。

アニが釣針にエサを付けて海に放った。糸は放物線を描き、ぽちゃりと着水する。

「……でも現状、本当にみんな緩みまくりだよね」

ベルトルトがぼやいた。

「うん。私もそう思う。……そういえば私、この前キース教官が空を飛んでるのを見たよ」

「何で?」

「俺はこの前教官が目じり下げてすっげえ猫なで声出してるの見た」

「マジで?」

「僕も教官が小さい女の子をたまに連れてるのは知ってたけど……」

「知ってる。あれ、孫だって話だけど、そもそも教官って結婚してたっけ? っていうか、あれ人間なのか? 何か鳥っぽくなかったか?」「ちよっとまって、魚がかかった」

キース教官が連れていた謎の鳥幼女の話に盛り上がりかけたところで、アニの竿が海中に引っ張られた。物凄い大物でもかかっているのか、今にも折れそうなほど竿がしなるのをアニが両手で掴んで耐え

る。

「すげえ大物じゃねえ!? 俺に貸して見ろ！」

「やだね！」

「ア二。僕が後ろから支えるから頑張って!!」

「イソメうまかつちゃん!!」

ベルトルトに支えられたア二が全力で引っ張り上げると、ザバアッと海面から飛び出てきたのは下半身魚の少女ことむろみさんだった。

「あれ? エレン君たちじゃなかと?」

壁の上に着地したむろみさんが見慣れない三人組を見回すと、ア二はあからさまにがっかりした表情を浮かべた。

「なんだ。ただのむろみさんか」

「ガアン!! 何かア二ちゃん冷たなかと?」

「まあまあ。むろみさん、エレン達に用だったの?」

涙目のむろみさんにベルトルトが慰めるように聞くと、むろみさんは首を振る。

「いんや。いつもの場所だったけん。てっきりエレン君達かと思っただけたい」

「エレン達なら最近ずっと歌の練習してるみたいだぞ」

「そうなん? 最近エレン君たちモテモテみたいっちゃねえ。この前も兵士さん達が話したと」

「ちよっと。用が無いならどっか行ってよね」

再び釣竿にエサを取り付けているア二が少しキツイ口調で言うついで、むろみさんは眉根を寄せてライナーとベルトルトにこそこそ聞く。

「何かア二ちゃん今日機嫌悪かと?」

「まあ、ちよっとね。ア二ってあれでも乙女だからミカサ達がちよっとだけ羨ましいんだよ」

「ああ。憲兵団にもアイドル部隊が出来ればいいのってこの前ばやいてたくらいだしな」

「聞こえてるよ!! 誰が誰を羨ましいって!!」

怒鳴りつけるア二に、むろみさんは楽しそうに寄りかかる。猛禽類のような目で思いきりア二に睨みつけられるが、そんなことを気にす

るよつなむろみさんでは無かった。

「なんねアニちゃん。そげなアイドルなりたかったら今日のアイドル部隊の面接行けば良かったんに」

むろみさんはマイクを持ったみかりんが真ん中に写ったポスターをどこから取り出した。目が合った瞬間殺されそうな力強い眼差しに、がっしりとした筋肉に包まれた肉体。しかし纏った衣装はピンクのひらひらスカート。ダンスのキレもすさまじく、歌唱力も三人中で断然トップ。そんなアンバランスさがウケている原因らしい。

そんなみかりんの下に書かれているのはこんな募集要項だった。

君もアイドル部隊に入らないか!! 歌って踊って戦える。究極の実戦アイドル兵士大募集。未経験者歓迎。待遇応相談。

面接は 月×日。調査兵団宿舎

「ほれほれえ、アニちゃんならみかりんば超える腹筋系アイドルになれるんとちゃ」

ポスターをフリフリと振った瞬間、むろみさんの体が空中を舞った。

「どげぶ!!」

アニお得意の足技を食らったむろみさんは、円を描くように見事にひっくり返った。

「アニ!! ダメじゃないか」

「うるさいね。私は最初から憲兵団に行く予定だったんだよ!! アイドル部隊なんて私には関係無いね!!」

「そんなこと言ってお前二日くらいずっとポスター見て悩んでたじゃねえドゲフツ!!」

ライナーの巨体が中に舞った。

「あんまりふざけた事抜かしていると三人ともただじゃ済まないよ!!」

大体ね、この状況下でよくアイドルだのプロデュースだの頭の緩んだこと言ってるられると思ってるあ痛っ!!」

肩を怒らせて怒鳴るアニの頭に何か物が凄いい勢いでぶつけられた。振り返るといつの間にか復活したむろみさんが、海から拾ってきた大量のイトマキヒトデを両手に振り上げていた。

「必殺、海星<sup>ヒトデ</sup>手裏剣!!」

ビスビスビスビス!!

「イタイイタイ!! 何すんのよ!!」

「クラゲストライク  
水母大激突!!」

「くっ、ベルトルトガード!!」

ぺっっちゃあ!!

「な、何すんのアニって痛い痛い痛い!!」

顔面に水クラゲをモロにぶつけられたベルトルトが悶絶する中で、二人の怒れる女は対峙した。

「ふっ、己の為なら仲間すら犠牲にする、なんつー恐ろしい女っっちゃ。まるで鳥のよう。そう、流石ワシ鼻だけあると!!」

「なっ、ワシ鼻は関係ないでしょ!？」

ビシィっ<sup>と</sup>むろみさんが指さすと、ぱっ、とアニが鼻を両手で押さえた。顔を真っ赤にしている辺り、どっやら気にしているらしい。

「関係ないと言っつならば、アタシを倒して己の正当性を力で証明するがよかよ!!」

「言ったな。あまり人間をナメない方が良いよ。この魚類!!」

荒ぶる鷹のポーズを決めたむろみさんに、アニは正面から挑んでいった。エレンやベルトルトやライナーを軽くすっ転ばせる華麗な足技が今、むろみさんに襲いかかる。

しかし、むろみさんとて黙ってはいない。川端君やヒグマを倒したその野生の実力でもって俊足のアニを迎え撃つ覚悟だ。

今、二人の背後に見えるのは二頭の獣だった。

怒れる猫と怒れるアロワナの対決が今始まるうっとしている。

「おいおいお前らいい加減に止めるよ。アニも海に落ちたららびっするんだ?」

「そつだよ一人とも。女の子が喧嘩するモンじゃないよ」  
ようやく復活したベルトルトとライナーが喧嘩をする二人を止めよう間に割り込むと、取っ組み合いの最中だった二人は同時に怒鳴りつける。

『邪魔!!』

ライナーとベルトルトが同時に宙を舞った。

真っ赤な夕焼けが空を覆う頃、駐屯兵団の見張りが昼勤務から夜勤の当番へと変わり始めていた。

遠くからおつかれさんとか、お先になどの挨拶が聞こえる中で、ひとしきり喧嘩をして傷だらけになったアニとむろみさんは大の字になって壁の上に倒れこんでいた。

「ふっ、なかなかやるっちゃね。こんなに傷だらけになったのはカモメの集団に啄まれた時以来だ」

「あんたこそやるね。こんなに全力出したの、ミカサとの対人格闘以来だよ」

いい笑顔を浮かべた二人はそのりと起き上ると、お互いの拳を突き合わせた。

まるで良きライバルに出会ったかのような二人から少し視線をそらせば、ライナーとベルトルトが仲良く尻を天に向けて転がっている。

「ねえ、ライナー」

「何だベルトルト」

ベルトルトが、一番星の輝き始めた空を見つめながらライナーに問う。

「僕たち、いつ故郷に帰れるんだろう」  
「……さあな」

人類は今日も壁の中。

## お菓子の女神と妖精さん

ポケットにしまったままのカラフルな球は結局持ち主が見つからず、今もクリスタが持ち歩いていていた。

本当は捨ててしまっても良かったのだが、他人の物を勝手に捨てるのはどうしても気が引けた。しかし上官室へ届けることも出来ず、かといって本来の持ち主も見つからず、そうして幾日も持ち主が見つからぬままずると持ち続けているのだった。

「ほんと、誰の物なんだろう？」

パステルカラーの小さな球を天井にかざしてみるも、球は球のまま何の変化も無い。

そんなカラフルな球を拾ってからしばらく経った頃のある晩、クリスタは不思議な夢を見た。

寝ていたクリスタの枕元に小さな帽子を被った、手のひらに乗せられる程小さな人のような生き物がちょこんと立っていたのだ。

「にんげんさん、にんげんさん。おかしくくれますか？」

クリスタはすぐにこれは夢だと思った。この世には巨人や人魚が居ても、存在そのものがこんなにファンシーな小人は今まで見たことが無かったからだ。

変な夢を見るなあと思っていると、小人は横に首をかしげて見せる。

「ぼくら、おかしたべたし？」

「んー……クッキーくらいなら作れるかなあ」

半分眠りの中。夢うつつの状態で答えると、小人はパアツと表情を輝かせた。しかし。。

「でも、今は無理かな……」

クリスタの言葉に、小人の顔はすぐに残念そうに曇った。しかし、諦めきれないように小人は尋ねる。

「どうしてですか？」

「だって、材料が無いもん。塩と魚は増えたけど、お砂糖はまだまだ貴



重品なの。小麦もバターもミルクも、壁内じゃ限られてるから……」  
「ぞいりょうあれば、できるですか？」

寝ぼけ眼に答えると、小人はまた首をかしげた。

「うん。出来るよ」

「そですかー」

最後に聞こえたのは、小人の楽しそうな声だった。そのあたりでクリスタは眠りの本流に飲まれ、小人の夢は途切れてしまった。

しかし朝、クリスタが目覚めると枕元に小人の姿はどこにもなく、かわりに卵、紙に包まれたバター、ミルクの瓶、それから小麦と砂糖の入った袋がまとめて置かれていた。

「クッキーの材料だよね……？ 多分」

半信半疑ながら調理場の使用許可を取ったクリスタは台所に並べた材料を見回して、まず唸った。

昨日の夢が本当にあった事かは未だに解らないが、それでもこうして材料が目の前に並べられているのだからまるっきりの夢というわけでも無いのだろう。

「うーん、問題は出所だよね」

とりあえず今の所は兵舎の食材が盗まれたという話を聞かないので、それ以外の場所から持ってこられたのだろう。あの小人が実在したとして、果たしてどこからこんな豪華な食材を持ってきたのか。

もし、盗まれた物なら大変だと思っ反面、重要な事がもう一つある。でも、放っておいても腐っちゃうんだよね……」

クリスタはしばしの間食材の前で逡巡していたが、やがて覚悟を決めた。

「多分、良いんだよね……？」

食材の出所は気になるが、このままではバターが溶け出してしまうし牛乳も放っておけば痛んでしまう。それはとても勿体ない。このまま腐らせるくらいなら、後からお咎めを受けたとしてもクッキーに

化かしたそれを返したほうがまだマシだ。それに、お菓子をやること自体が久しぶりでちよっぴり楽しみだったりする。

「昔作ったレシピ、まだ覚えてるかな……」

ずっとずっと前の事。まだ生家に居た頃の事を思い出しかけたクリスタはすぐに首を振った。あまり良い思い出では無いから、脳裏に浮上した過去の記憶をすぐに心の奥深くに沈める。

「うっん、昔の事はどうでもいいよね。ええと、まずはバターを潰して……」

何度洗っても染みの取れない、使い込んだエプロンを着たクリスタは道具入れの中からボウルやめん棒、木べら等を引っ張り出す。そして頭の中でクッキーのレシピを組み立てていると、ドアの方から誰かが入って来た。

「お前、何してんの？」

「あ、ユミル」

振り返るとそこにはユミルの姿。

「朝からなーんかコソコソしてると思ったら、そういうことかよ」

台所の上の食材をざっと見回したユミルは口の端を吊り上げてニヤニヤ笑っている。何が言いたいのかよく解らないクリスタが首をかしげると、ユミルは勢いよくクリスタの肩に腕を回した。

「兵舎全体の緊張が緩んでるうちに食材盗んで菓子作りたあ、流石は女神様。やることが人と違うぜ」

「え、違うよ」

「何が違うんだよ。塩だの魚類だのは最近手に入りやすくなってるが、砂糖やらバターやらどうやって手に入れたんだ？」

「さあどうなんだ？ さっさと吐いちまえよと問い詰めてくるユミル。」

ああ、と思ったクリスタはほんの少し話すかどうか迷ったが、結局話すことにした。

「うん。信じてくれるか解らないけど、実はね……」

ユミルを相手にした場合、黙っていた方が後々めんどくさいような気がしたからだ。

「ふうん。つまり、夢でみた小人が枕元に材料を置いて行ったってか？」

「じゃないかなあと思うんだけど……」

クリスタがクッキー生地を作っている間、ユミルは後ろのテーブルに備え付けられた椅子に座っていた。手伝う気はサラサラ無いようだが、クリスタはさして気にしていない。手際よく小麦をふるいにかけて生地を混ぜる。

「そんなバカな話、信じると思うか？」

「うん。だから信じてなんて言わないよ。だって私だって信じられないもの」

あっさりと言ったクリスタに、ユミルは声を詰まらせた。本当はもっと、「だからユミルに言いたくなかったのよバカバカ！」くらいの反応を期待していたのだが、上手くいかなかったようだ。

「よし、後は生地を寝かせて型抜きをするだけね。あ、竈を温めておかないと」

丸めたクッキー生地をボウルに戻したクリスタが台所の中を楽しそうにパタパタと動き回っている。ちょこちょこ小動物みたいに台所を動き回るクリスタをしばらく黙って眺めていたユミルは、やがて突然席を立った。

「あれ、ユミル行っちゃったの？」

「ああ、居てもやることねえしな」

「もう少ししたらクッキーの型抜きをするけどやらない？」

「そういうのはパス。まあ、完成したら味見ぐらいはしてやらんでもないから」

「じゃあ、完成したら呼ぶね。サシャと一緒にお茶にしましょう」

「アイツがいたら全部食われるじゃねえか」

そうして台所に背を向けて出て行くとした時、ユミルは一度中を振り返る。

「そついえば、アタシは信じてても良いよ」

竈で火の調節をしていたクリスタが頭を上げてユミルを見た。

「何を？」

「さっきのバカな話さ。人魚が居るんだから、小人だって居てもおかしくねえだろ。じゃあな」

意地悪な猫みたいにユミルが笑って、パタンと台所の扉が閉じられた。

手ごろなコップで丸く型抜きしたクッキー生地を予熱した竈に入れてから、クリスタは椅子に座って一息ついた。

もう少し小麦粉があったのなら一緒にパンでも焼こうかと思ったのだが残念ながら材料は全てクッキーに消えてしまった。

「でも、サシャならきつと喜ぶだろうなあ」

何せ甘味が少ないご時世なので、ウォールシーナの一部の富豪を除いたら一匙の蜂蜜さえもご馳走なのだ。

「上手く焼けてると良いなあ」

自分で淹れたお茶を飲みながら竈の方を見る。まだ香ばしい匂いは漂ってこないが、ふとサシャがクッキーを頬張る姿を想像すると、自分も自然と頬がほころんでくる。いくら世の中が食糧難だって、食べ物をあそこまで美味しそうに食べる人間もあまり居ない。

「ごんげんさん、ごんげんさん」

サシャ、喜んでくれるかなあ等と考えていると、どこかで聞いたことのある声が聞こえてきた。それは紛れも無く夢で見たあの声。

あたりを見回してみると、台の上に『彼』は居た。

青い三角帽に、一つだけボタンのついた外套。小さな手袋とブーツ。愛らしい外見は、多分巨人とは正反対の存在だ。

一度会っているせいかもしれないが、そのファンシーで人畜無害な姿とも相まって不思議と恐怖感は湧かなかった。

「おかしできましたか？」

夢の中と同じく、小人が首をかしげた。やっぱりこのクッキー材料を持ってきたのはこの小人のようだ。

「うん。まだ焼いてる途中だけど、もうすぐ出来るよ。ねえ、材料はどこから持ってきたの?」

「やー」

「やーって……もしかして、盗んで来たの?」

「つくりましたので」「げんしてきなもので?」「がんばてくみたてましたです」

「増えた……」

台の上の彼の他に、困惑するクリスタの足元と窓辺に一人ずつ。合計二人の小人がクリスタを見ていた。どれも似たような顔つきで、無邪気な笑顔を浮かべている。

「貴方たちって何者なの?」

「ぼくたち、だれだっけ?」「わすれましたなー」「ゆめとげんじつのおわいてきな?」

口々に首をかしげる小人たち。どうやら、あんまり考えるのは上手い方では無いようだ。何だかよく解らないけれど、折角の意思の疎通をするチャンスだ。深呼吸をしたクリスタは質問を変えることにした。

「じゃあ、どこから来ましたか?」

「そとうちゅう?」「じゅうにげんさきむこつてきな」「あなをほりほりしました」

やっぱりよく解らなかった。

「うーん、じゃあ何をしににににに来たのかな?」

小さな子供に尋ねるように、勤めて優しい声を出すと小人たちも頑張って伝えようと身振り手振りで教えてくれる。

「ぼくらのほう、おかしななたです」「にんげんさん、なくなたです?」「でもおかしたべたし」「まきもどしすぎておこられましたゆえ」「ちかいとこさがしました?」「あつちこつちほりました」「おかしこいっせー」

「うーん、困ったなあ」

小人たちの熱意は伝わってくるのだが、さらによく解らずに首をかしげる。しかし、とにかく彼らが「お菓子を食べたい!!」ということだけは解った。何故、ウォールシーナのようない別の場所ではなくクリスタの所に来たのかは解らないが。

「うん、まんなかよりのしいですのっ」

とにかく、そういうことらしい。

小人たちが口々に語る断片的なものを繋ぎ合わせようとしても、彼らがこことは違う場所から来て、お菓子が食べたいしか解らない。

「アルミン辺りに聞いてみたほうが良いのかな」

それともユミルの方が良いのか。そもそも誰かに話しても大丈夫なのか。色々考えていたその時、クリスタのことを小人が呼んだ。

「にんげんさん。そろそろやめました」

そういえば竈の方から少し焦げたような臭いが漂ってくる。

「あ、クッキー!!」

慌てて竈の蓋を開けるとクッキーは端の方が少し焦げているものもあるが、大体が程よい具合に焼けていた。

「良かった。まだ焦げてない」

クッキーの乗った鉄板をミトンの手袋で取り出して台の上上げると、辺りにふわりと甘くて香ばしい匂いが漂い始める。小人たちが顔を輝かせて台の上のクッキーに寄ってきた瞬間、叩きつけるように扉が開く音があたりを包み込んだ。

「女神いいいい!! クッキー焼いてるってマジですかああ!!」

そしてどこで嗅ぎつけてきたのか、サシヤが勢いよく転がり込んできた。

「あ、サシヤ」

「ふおおおお!! お願いします何でもしますからどうか私にもお恵み下さいいいいい!!」

「うん。サシヤにもちゃんとあげるから。もう少し冷えたら皆で食べよう」

「ありがとうございます女神いいいい!!」

泣いて縋りついてくるサシヤをヨシヨシと撫でながら、クリスタは

小人を目で探す。

すると、先ほどまで居たクッキーのすぐそばに小人の姿は無く、代わりに鉄板の周りには三つのカラフルな球が落ちていた。

## 司令と少年とむろみさん

ある麗らかな昼下がり。

貴族の相手にも飽き、暇を持て余したピクシス司令は其の者も連れずに視察がてら釣竿を引っ提げて壁にやってきた。

壁の見張りがてらに欠伸をしながら縁に座り、のんびり釣竿を垂らしていた兵士たちはもちろん驚いた。司令の姿を見るや否やすぐさま立ち上がり、心臓を捧げる敬礼姿勢を取る。

「いや、構わん。釣りを続けてなさい」

にこやかに片手を上げ、釣竿を肩に当ててのらりくらりと壁の上を歩むピクシス司令。しかし、兵士の前を通り過ぎた直後にふと振り返る。

「そっじゃ、巨人面魚どもの様子はどうかね？」

「はっ、今日も奴らは海の中を泳いでいて、こちらに向かってくる様子は全くありません」

「そりゃそっじゃろっな。結構結構。海に落ちんよう気を付けてな」

はっはっはと笑いながら、ぽかんとしている兵士から視線をそらし、ピクシス司令は壁の上をのんびり歩いて行った。

「むね、」の辺りから」

見張りの兵士も少ないこの壁の上で、司令はどっかりと腰を下ろすとベルトにぶら下げたスキットルを手に取りぐいっと中身を煽る。

強い酒の香りが喉の奥へと滑り込み、高い度数のアルコールが粘膜を焼く独特の熱間が通り過ぎる。と、頭がぼうつと熱くなり、視界がいつしゅんぐにやりと歪んだ。司令としては、壁の上で飲むこいつが堪らない。側近の部下からは危ないから壁の上ではあまり飲むなと窘められるが、ダテや酔狂で駐屯兵団の南部司令官をやっているわけ



ではない。この程度で壁から落ちる訳が無いのだ。

今日は大小の雲がのんびりと流れていく良い天気。

人類の天敵たる巨人はどこかに消え失せ、代わりに出現した巨人面魚も調査兵団との共同調査の結果、陸上では生活出来ない事が判明している。本日も今日とて天下泰平。駐屯兵団は絶賛暇を持て余していた。

「よっし、今日は大物を狙うとするかの」

スキットルの中身を飲み干し、良い具合に体が暖かくなってきた所で持ってきた収納式の釣竿をやるすると伸ばす。先端に糸と釣針を付け、そして先ほど壁の下で買ってきた釣り餌のイソメを針に取り付けようとすると。

「あー。その大きさは、針に対して虫エサが小さすぎますよ」

ピクシス指令が顔を上げると、そこにはまだ年の若い少年が壁の上に座り、釣竿を片手に釣りをしていた。

ツンツン頭にラフなパーカー姿。見ない顔だが、新兵だろうか。しかしそれにしても兵団服を着ていないのはどうにもおかしい。一般市民だろうか。ならば、兵士しか登れぬこの壁を一体どうやって登って来たのだろう。見張りが賄賂でも貰ったのだろうか。だが、金持ちそうには全く見えない。

司令はアルコールに茹った頭で考えるが、どの理由もおかしい気がする。

「あの……どうしました？」

しばらく考えてみて、ふと気づいた。少年からは悪意や敵意のようなものは感じない。

それならば、まあ良いか。

アバウトな決断をしたピクシス司令は軽く頭を搔くと、釣りをしているその少年の横へ移動する。

「ふむ、実は釣りは最近初めたばかりだな。虫を付けるのもあまりやったことがないのだ。少年、お主ならばどうやる？」

ぶはーっと司令が酒臭い息を吐くと、少年はあからさまに嫌そうな顔をした。

「お爺さん、酒臭いですよ。釣りをする前にこっぴつ海でお酒を飲むとマジで落ちますよっ。」

「良いんじゃない良いんじゃない。壁の上は慣れてるからの」

「そういうふうに、慣れてるって言う人が一番危ないんですよ」

「むむ、なかなか手厳しいのう」

はっはっは、と笑う司令に少年は呆れたように息をつくと立ち上がった。そしてピクシス司令の持ってきた釣竿を手に取ると、大ぶりのイソメを釣針に取り付けていく。

「随分慣れた手つきじゃのう」

「まあ、ガキの頃からやってますしね。こっぴつって、虫で針を隠す様に刺すんです。はい完成」

「お、有難い」

イソメのついた釣竿を渡された司令はヒュンと海の中に糸を垂らす。と、隣に居た少年もまた壁に座り込み、再び釣り糸を海に垂らした。

「お、きたきた」

少年の方の釣竿に当たりが来たようだ。少年は竿につけられた糸巻器のようなものをグルグルと回し、海からザバァッと音を立ててあげられたのは中々に大振りのカツオだ。

「おお!! 大物だの!!」

「いやいや、このあたりならまだまだ大きいのが狙えますよ!!」

「大物と言つと、例えば人魚とかかな？」

「ニヤリ、と司令が笑つと、少年はギクリとする。

「やはりお前さん、むろみ嬢の知り合いか？」

ピクシス司令が問い詰めれば、少年は解りやすくも困った顔で頬を掻く。

「いや……まあ……うーん、やっぱり解っちゃいます？」

「解るも何も、お主みたいな少年は普通この壁の上には来れんよ」

はっはっはと笑う司令に、少年は「敵わないなあ……」とぼやいた。

「あの、むろみさんってこっぴつちの人と仲良くやってます？」

「んむ。毎日どっかの竿に引っかけたはどっぞその兵士と每晚飲み歩

「いじめる」

「あー……やっぱりまだ飲んでるんすね。しかもそっちの人に迷惑かけてるっぽくて、何か済みません……」

「良いんじゃない。この壁の中が今こんなにも明るいのは、彼女たち人魚が居てくれるおかげじゃ。特にむろみ嬢はな。一緒に酒を飲むくらい、うちらからお願いしたいくらいじゃよ」

笑つ司令に、困った顔の少年は苦笑いをする。

「でもまあ、むろみさんが元気そつで安心しましたよ」

そして、少年はその場を立ち上がる。

「なんじゃ、もう行くのか？」

「ええ。時間が来たんでそろそろ行きますよ。そういえばお爺さんの竿、先ほどから魚がかかってますよ」

少年が指を示すと、確かに司令の竿がピクピクと動き当たりを示していた。

「おお!! これは中々に!!」

その場に立ち上がったピクシス司令が巨大な魚に負けまいと竿を引つ張ると、ザバアっと海からむろみさんが釣れた。

「イソメうまかつちゃん!!」

「おお、噂をすればむろみ嬢ではないか!!」

「何なに? アタシの噂話? いやーんアタシってば超モテモテやん

!?! 誰と?」

「それは、その少年とだな……おや?」

壁の上に立ったむろみさんに、隣に居た少年を指差そつとしてピクシス司令は不思議そつな顔をした。

「どこにもおらんやん」

その通り、先ほどまで居たはずの少年は、どこにも居なかった。

「おかしいのう。さつきはちゃんと居たんだが……」

「んな事言つてー、酔っぱらって幻でも見たんちゃうの?」

「そつかのー?」

「そつそつ!! ねえピクシス。酔っぱらいついでにこれからどっか飲みに行かん? アタシまた芋のお酒飲みたい!」

「んーむ……ワシは釣りに来たばかりなんじゃが……。まあ良いか。よし！ それでは飲みに行くとするか！ 今日にはワシがおどるぞ！」  
「よっしやー!! 流石司令太っ腹ー!!」  
海から糸を引き上げた竿を仕舞うピクシス司令に、どこかで少年が「行くんかい!」と突っ込みを入れた気がした。が、それはそよりと吹いた風の中に溶けて消える。  
後に残されたのは、楽しそうにはしゃぐむろみさんと、久しぶりに人魚と飲みに行ける南方司令官の笑い声。

今日も今日とて、人類は壁の中。

## 調査兵団とひいちゃん

海に囲まれてしまった壁内。

外に出ようにも海上活動は今まで全く経験が無く、おまけに海中には巨人面魚が人間を狙ってうようよと泳ぎ回っている昨今。

各種兵団が暇をもて余す中で、調査兵団は今日もイルカの騎乗訓練にあけてくれた。

といってもイルカの数や貯水池の広さやメンテナンス、飼育費の関係で十二頭しかおらず、とても三百名が居る兵士全員に回る状態ではない。

この海に囲まれ孤立した現状が全く変わらないのであれば、いずれは貯水池や頭数を増やして馬と同じくイルカも一人一頭としたいところだが、当面は少数精鋭として特別に組まれたリヴァイ班が優先的にイルカの騎乗訓練に参加していた。

ピイイイイとグンタとエルドが同時に指笛を鳴らすと、二頭のイルカが滑らかに泳いで来て二人の居る貯水池の縁に静止した。背中に取り付けた鞍を水面に浮かせる姿勢を取ったとき、イルカの口にイワシの切り身が放り込まれる。

「コーンコーン、だいぶ上達したな」

海面から飛び出るツルンとした頭を撫でてやると、喜んでいるのかイルカはきゅいきゅいーと鳴く。貯水池の中ではペトラとオルオがイルカに乗ったまま水面を駆ける訓練をしているが、その表情は真剣ながらもどこか楽しそうだ。ペトラなんかは時々本当に笑い声を上げている。

そんな中で、水しぶきを上げて水中からひとときわ高く飛び上がる黒い影。

水面下からダイナミックに飛び出して来たのはイルカに乗ったりヴァイだ。その表情は相変わらず仏頂面。だが、荒い指示ながらも乗られているイルカの方はまんざらでもないようにリヴァイの指示をよくきいている。

「やっぱり水に濡れると動きが鈍くなるな」

「まあ、言っても仕方ないじゃないですか。兵長」

水で肌が透けないように工夫された厚手の水着は普段の調査兵団の服と比べて重たいが、そもそもイルカから振り落とされたら服が軽かるうが重かるうがアウトなのでこの際目を瞑る。もう少し余裕が出来たらもっと動きやすいものの制作も考えてはいるらしいのだが。

「それでも、最初よりはどうにか様になってきましたね。あとは実戦までどれくらい精度を高められるか……」

「ペトラ、それこそ言った所でどうにもならねえだろ。俺達は自分が出来ることを精一杯やるだけえっ!!」

格好つけた所でオルオが舌を噛み、ペトラは冷ややかな目で見下した。

「あの一、兵長……?」

それはある日のイルカ騎乗訓練の事だった。

「何だペトラ」

「あの子、また来てるんですけど……」

イルカに乗ったペトラが気まずそうに視線を向けた先には、頬を膨らませて怒った顔の人魚が貯水池の縁からジロツとこちらを睨んでいた。

ちなみにむろみさんではない。

イルカ等の水棲哺乳類を毛嫌いしているむろみさんは、普段からあまりこの貯水池に近づこうとはしない。

ため息をついたエルドは仕方なくその怒った顔の人魚を呼んだ。

「ひいちゃん。そんな所に居ないでこっちにおいでよ」

「おい魚。言いたいことがあるならはっきり言え。じゃないと解んねえだろ」

「言いたいことは一杯あると!! でもイルカさんが良いって言いよるけん。だから人間さんがイルカさんば虐めんよう、ひいちゃんが睨み

きかしとーだけたい！」

そして怒った顔のまま再び黙ってしまったひいちゃんに、リヴァイ班のメンバーはため息をついた。

「ひいちゃん、まだ私たちがイルカを使うの嫌なのかなあ」

「まあ、ひいちゃんにとってイルカは家族みたいなもんらしいしな。そりゃ危険な事はさせたくないだろうさ」

現在、調査兵団に所属するイルカは全て淡路さんら人魚のハンターたちに連れてきてもらった個体ばかりだった。ちなみに連れてこられたイルカは衣食住を提供する代わりに兵団に所属して人を乗せてくれるよう人魚を挟んだ交渉をしているので、捕獲というより雇用に近い形でここにいる。それがイルカたちの異様な物覚えの良さや従順さに起因するのだが、問題がここに一つ。

調査兵団がイルカを飼育し始めた事を聞いたむろみさんの妹分であるひいちゃんが、軍用イルカという言葉にすっかり過剰反応してしまったことだった。

「イルカさーん!! イルカさんたちは騙されとるだけたい! 都合の良い事はっかり言われて「キ使われとるだけとよ!! 騙されたらいかんと!!」

ひいちゃんが訓練に参加していないイルカたちに声を上げると、聞いていたイルカはキュイキュイと鳴いて返事をする。

「そんなこと無いよー。大体僕ら雇われてここに居るわけだし」

「敵がいなくて毎日ちゃんとご飯食べられるなんてここは楽園だよー!」

「そうだよひいちゃん。それと、皆やさしいよー」

「でもでも、絶対騙されとるけん!! 巨人面魚って人間に襲い掛かるんちゃる? 人間なんか乗せてて、一緒に飲まれたら危なか!!」

するとひいちゃんの言葉を聞いたイルカたちは一斉に笑い出した。リヴァイ班を乗せた訓練中のイルカまで笑い出す始末である。

「巨人面魚なんてデカいだけで全然ノロマじゃーん!! ひいちゃん僕らナメてんの?」

「そうだよ失礼しちゃうな。あと訓練の邪魔。僕らだつてこれがお仕

事なんだから』

『失礼なひいちゃんなんかとはもう遊ばないよ!! 悪いけど帰って』

「そんな……ひいちゃんは……ひいちゃんは皆を心配しとるとよ!!  
皆、お願いだから危ない事せんとー…」

そして、とつとつひいちゃんは泣き出してしまった。

「何をやってるんだ。あの魚は?」

「さあ……イルカとお喋りしてるんじゃないですかね?」

「ふっ、ここは俺の出番だな。魚の一匹や二匹すぐに黙らせてやぐっ」

また舌を噛んだオルオの事は無視して、泣いているひいちゃんが何  
だか可哀そうになってきたペトラがイルカに乗ったまま貯水池の縁  
まで近づいた。

「ねえひいちゃん。私たちはどうしてもイルカ達が必要なのよ。  
お願いだから解って?」

務めて優しく、小さな子供を慰めるように声をかけるのだが、ひい  
ちゃんは泣き止まなかった。

「おい、訓練の邪魔になる。テメエらの知り合いだろ。何とかしろ」

「キュー……」

泣き声に苛立ったリヴァイがドスを利かせた声で自分が跨ってい  
るイルカを見下ろすが、イルカは困ったような声を発しただけだっ  
た。

「どうだ、リヴァイ。イルカの調整は上手くいっているか?」

全然泣き止む気配を見せないひいちゃんにリヴァイ班の面々が  
困った顔をしていると、丁度その時、調査兵団団長エルヴィン・スミ  
スが顔を覗かせた。

「団長。訓練そのものには問題ないのですが……。済みません助けて  
下さい」

ペトラが団長に助けを求めると、エルヴィンは困り顔を浮かべてい  
る周囲を見回した。

「これは……何が起きたんだい?」

「どつしたもこうしたもねえよ。魚がイルカを使うなってびゃー  
びゃー泣きやがる。これじゃ煩くて訓練になりやしねえ」



リヴァイが指をさした先にはひいちゃんがまだベソをかいていた。「ひいちゃん、イルカが巨人面魚に食われないか心配だって泣くんですよね。まあ解らんでもないですが、流石にこればっかりはどうにも……」

エルドが困った顔で事情説明をすると、エルヴィンは「なるほど」と言っただけ。それきり他には一言も発さないまま、貯水池の縁をのんびり歩いてグズグズと目を擦っているひいちゃんに近づいた。

「団長、何をやる気なんだ？」

皆が固唾をのんで見守っていると、屈みこんだエルヴィンは両手でひいちゃんの小さな手を優しく握り込む。

「ひいちゃん。私の話を聞いてほしい」

そしてまっすぐに涙に濡れた人魚の瞳を見据えると、大声で言った。

「私はイルカが大好きだ!! むしろ愛していると言っても過言ではない!!」

その場に居た全員が、何を言ってるんだコイツはみたいな表情をした。

「ふえ？」

「ああ、私はイルカが大好きだ。一目会った瞬間から大好きになったと言っても決して大げさではない。彼らは賢くて優しい。そして何よりこの外に広がる海よりもずっと心が広い。遊び心も持っているから、一緒に遊んだらきっと楽しいだろう? 私は、そんな愛らしいイルカが大好きだ。いつも一緒に居たいと思うくらいにはね。君も、イルカが好きという気持ちは同じだろう?」

そこで普通のご婦人ならばコロリと行ってしまおうような爽やかな笑みを浮かべてみせると、ナイスミドルの笑顔に気圧されたひいちゃんが面食らった表情でこくんと頷いた。

「イルカの他にも海には沢山の水棲哺乳類が居ると聞く。そのどれもが愛らしい姿でとても賢い生き物だと言うのも聞いているよ。海の賢人……そんなふうだね。私は、その子たちとも是非『お友達』になりたいんだよ」

「……ほんなのっ？」

ひいちゃんがじつとエルヴィンを見つめると、王子様然とした態度でエルヴィンは頷いた。しかし、すぐに悲しそうに憂いを帯びた表情を浮かべてみせる。

「ところがだ。私たちは下等な人間。彼らのような立派なヒレも無く、海ではまったくの無力なんだ。しかも海中では恐ろしい巨人面魚どもが今か今かと我々を狙っている。海の間こうに居る彼らと出会い、そして『お友達』になるにはどうしてもイルカたちの手伝いが必要なんだ。彼らを危険な目にあわせるのはとても申し訳ないと思っ  
ているけれど……」

まるで世界中の悲劇を見てきたかのような悲しみを帯びた声で嘆くエルヴィンに、心根が優しいひいちゃんは一生懸命考える。

「そ、そんならひいちゃんが壁の傍に皆を連れてきてあげたい!!

そしたらわざわざイルカさんに乗らなくて済むと!!」

「それではダメなんだ」

「何で!?!」

そこで、エルヴィンは一度呼吸を置いて、わざとらしく首を振った。

「だってそれじゃあ、君やイルカや他の友達と一緒に仲良く泳ぐことが出来ないだろう?」

おそらく、人間のご婦人ならば一発で恋に落ちたに違いない。

全力のヴァリトンボイスで甘く、優しく、美しい声で囁かれると、それまで泣きそうな顔だったひいちゃんの表情がぱあっと輝いた。

「こんなにイルカさんのこと解ってくれる人間さん、初めて見たと……」

「ああ、だからひいちゃんも良かったら私たちを手伝ってくれると嬉しい。そうしたらきつとイルカも私たちも傷つかずに沢山の海の仲間たちとお友達になれるに違いない」

そしてもう一度、優しい笑顔でひいちゃんの手をぎゅっと握りしめると、嬉しそうな顔のひいちゃんが勢いよく頷いた。

「わかった。ひいちゃんも、人間さんがイルカさんやクジラさんと友

達になれるよう頑張りたい！」

下半身が魚とはいえ、幼女と中年が仲良く両手を握り合っている様子を呆然と見ていたギャラリーはその時、全員が同じことを思った。

この絵面は犯罪だ。

イルカの使用を反対していた人魚を懐柔し、しかも協力者にまでなってくれたことに調査兵団団長、エルヴィン・スミスは大層ご満悦であった。

ひいちゃんという通訳が居ることでイルカの訓練が爆発的に進歩を遂げているという報告もある。

今日も様々な書類にサインを書き、次の壁外調査の作戦を練っていると後ろに佇んでいたミケ・ザカリアスがぽつりと呟いた。

「エルヴィン。子供を誑かす真似はあまり感心できませんぞ」

「何がだい？」

本気で解らない顔をするエルヴィンに、ミケは黙り込んだ。

兵団内でエルヴィンにロリコン疑惑が浮上しているのだが、今の表情と匂いから察するにどうやら間違いだっただようた。

本当によかった。

某所海の中

「おねいたん。人間さんにも良い人がいるとね」

「何ね。突然」

「イルカさんは愛してるって言うてくれたとね。ひいちゃんといっしょたい」

「アンタ騙されとるっちゃない？」

## ベストサイズとむろみさん

良い天気の昼下がり。

壁の上で釣った魚を焼いて酒盛りをしていたハンネスさん含む四人の駐屯兵団の前に、むろみさんと隅田さんと富士さんの三人の人魚がひょこつと現れた。

「やっほーハンネス達！ 元氣ー!?」

「おう。むろみさん達じゃねえか!! 元氣だぜー！ 見慣れない人魚さんも居るな。どうしたんだ?」

「おう隅田さんも居るじゃねえか！ 久しぶりだな！ そっちのおっぱい大きい姉ちゃんは見ない顔だな？ むろみさんのダチか?」

数人の酔っぱらいがおっぱい大きい姉ちゃんという言葉にガハハと笑つと、富士さんはぶんむくれた顔でそっぱを向いた。

「なによこの酔っぱらいども……。だから私は来なくなかったのに……」

「まあまあ。これもむろみさんの為だから」

ニヤニヤ笑いながらも富士さんを諭す隅田さん。そんな二人を尻目に、むろみさんは酔っぱらいの駐屯兵団四人組に向かって「注目ちゅうもーく!!」と視線を集めている。

そして人魚の三人は横に並ぶと胸を突き出し。  
。 。  
「どの胸のサイズが一番理想的でしょうか?」

むろみさんの言葉に、赤ら顔をした酔っぱらいどもは笑いながら一斉に答えた。

「……そりゃーデカい方が良いに決まってるあ!!」

死人が出なかったのが奇跡であった。

「チクショー！ やっぱり男って奴は古今東西揃いもそろって乳がデカイ方が好みなん!? ねえ隅田さん!」

「いやいや、まだまだ解らないわよ。たまたまって事もあるかもしれないから、今度は若い男の子に聞いてみましょ!」

「えー……まだやるの? 尾ビレが傷ついちゃうからあまり陸には上がりたくないんだけど……ていつかむろみさんも隅田さんもあんまり陸に居ると尾ビレ傷つくわよ!」

「えーやん細かいこと気にせんでも!! それとも何!? 富士さん一人勝ちで帰るつもりなん!」

「そ、そういつつもりじゃないけれど……」

「確かに尾びれは傷つくけどー。私は今日一日くらいなら問題ないと思ってるわよ?」

地上を歩く三人の人魚達は今、壁内の男の考える胸の好みの調査をしているのであった。

なんでこんな事になったかと言うと、とある人魚の集まりでむろみさんがいつもの様に嫉妬心で富士さんの大きな乳を叩き、それを隅田さんが茶化したのがそもそもの発端である。そこから幾度となく繰り返された胸の大小の話題となり、そして今まで見てきた世界の野郎どもと、壁内の男に違いはあるのか? 胸の大きさの好みに大きな差はあるのか? という疑問が浮かび上がった。

そんなわけで、むろみさん(微乳)、隅田さん(普通)、富士さん(巨乳)の人魚三人娘は疑問を解消すべく、壁内の男を訪ねて歩いていたのだった。

「お、あそこに見えるのはライナー達!」

訓練兵団の兵舎が近くなりはじめた森の入口。むろみさんが指で示す先にはライナー、ベルトルト、アニの三人組が何かを話しているのが見えた。むろみさんが「やつほー!」と呼びかけると、近づいてくる人魚達に気が付いた三人が顔を上げる。

「あれ? むろみさん達珍しいね! キース教官に用でもあるの?」

「いんや、今日はキーやんじゃなくて、ライナーとベルトルトに用があるんよ」

「俺達にか？ 何だ？」

「て言うか、そちらさんは誰？」

「ああ、アニちゃん達は会った事無かったっけ？ 隅田さんと富士さんたい。アタシの人魚仲間やけん」

初めまして。と全員が一通り挨拶した所で、ベルトルトが「で、用って何？」とむろみさんに尋ねると、三人娘は彼らの前に並び立つ。

「少年二人に尋ねる！ この中で誰の胸のサイズが一番お好みかしら？」

うつふんとポーズを作って隅田さんが尋ねると、ライナーとベルトルトはぽかんと口を開け、アニは呆れたような顔をした。

「真剣な顔で聞きたいことがあるって、何かと思えば」

「ほんと、突然で少しびびっくりしちゃったよ ってライナー？」

アニとベルトルトが呆れ笑いを作る中、ライナーだけが腕を組み、真剣な表情で黙考しているのだった。

「やっぱり思春期の少年は富士さんみたいなのがお好みかしら？」

「わ、私は人間なんかの好みでも嬉しくないし……」

「んなことないもん!! デカいばかりの乳よか形が大事っちゃもん!!

ねえライナー!？」

「確かに、デカけりゃ良いってモンじゃねえ。だが、小さすぎるのも男の夢が無さすぎると思わんか？ ベルトルト!？」

「僕に振らないでよ!？」

「俺の好みとしては着やせ……しかし脱ぐと意外と、こっつ、お椀くらいあるのが良いというかな……」

己の胸の前で両手を使って膨らみを表現するライナーにむろみさんが苛立った風に聞く。

「何？ じゃあ隅田さんタイプなん？」

「近い！ だが、それだけ露出していると逆に萌えん。俺のタイプとしてはキッチリ服を着ていてだな、胸だけ見ればアニぐらいが中々げおぶぶおあ!!」

アニの胸を指差したライナーが華麗なる少女の蹴りにより空中を舞って一回転した。

天空に尻を向けたライナーが回答不能になってしまったので三人の人魚達は一斉にベルトルトに詰め寄る。

「ベルトルトは？ アタシのぐらいの胸の大きさはいかん？」

「え、ぼ、ぼく……？」

「そつよ！ 煮え切らないわね。さつさと言っちゃいなさいよー！」

「私はどっちでも良いけど、「こ」まで来たら回答が欲しいわね」

「さあ、さあ、さあ！！ と詰め寄せられたベルトルトは回答に窮し、そして

「逃げた!？」

ベルトルトは脱兎のごとく逃げ出した。

すべてに背を向け、何事にも耳を貸さず全速力で走るベルトルトの背中にはまるで猛禽類から逃げる小動物のようであった。

「ねえ、もう良いんじゃない？ 帰りましょつよ」

「いんちゃ！ まだまだたい！ もうちょいまともな回答聞けるまでいかんとよー！」

「うーん。むろみつてば火がついちゃったみたいね。でもそろそろ疲れたから、あと一組だけ聞いたら帰りましょつ」

何が何でも回答を得たいむろみさん。楽しそうな隅田さんはさておき、富士さんは少し困り顔だ。

「私は……別に人間なんかの好みにされなくたって、むろみさんの胸が一番良いと思うんだけど……あっきゃう!!」

「せからしか！ フグ乳のアンタに万年微乳の気持ち解ってたまるか!!」

むろみさんに胸を叩かれて恍惚とした笑みを浮かべる富士さん。

「ちよっとちよっとーこんな所でまた扉を開かないでちよつだいよ。ほら、最後の場所についたー」

三人が最後にやってきたのは調査兵団兵舎だ。

聞いてみる相手は丁度歌の練習が終わったばかりのようで、むろみさん達はすぐに会う事が出来た。

「胸のサイズ？ そんなの聞いて何になるんだよ？」

「エレン、女性にとって胸の大きさは大事な問題……らしいよ？」

「エレン、答えて。答え次第によっては、私も頑張る」

先ほどと同じように誰のサイズが好みか尋ねてみると、エレンは不思議そうな顔をしている。

ちなみにアルミンはアルミンという性別であることに加え、全てのうさミンファンのジャスティスの為に回答を禁止されてしまった。

「えー……何でそんなの気にするんだよ？」

「思春期なら少しは好みくらいあるでしょー!? 誰でも良いのよ？」

「エレン君！ アタシの為に答えて!!」

睨むようなミカサの視線と大中小の乳。鬼気迫る女性たちをもともせず、エレンは面倒くさそうな顔で答えた。

「胸なんてあるだけで立体機動装置の邪魔だろ。そんな無駄な脂肪つけるくらいなら鍛えて筋肉にした方が」

「エレンの顔面に怒れる二つの尾ビレが飛んだ。

「もうええ！ エレンに聞いたアタシがバカだったと！」

「ホントもうデリカシーの無い男!!」

「信じられない！」

「あーもう、最悪!! 二人とも、折角やし一杯やって帰らん？」

「あ、良いわねえ！ 富士さんも行くでしょ？」

「わ、私はむろみさんがいるならどこでも行くわ!!」

壁まで吹き飛んだ駆逐系男子エレンに背を向けて、三人の人魚の乙女たちは嵐のように去って行った。

「な……何故だ？ 正直に答えたのに……」

「今のは、エレンが悪いと思う」

「同じく」



今日も人類は壁の中。

## 悩める偶像とむろみさん

調査兵団本部の一室で、それは行われていた。

「みかりんでーす」

「えれえれです」

「うっさミーん」

『三人合わせて、シガン しなでーす』

「シガンしなでーす」

簡易ステージの上でミカサ、エレン、アルミンの三人が声を合わせてそれぞれの決めポーズを取る。

観客の代わりに見ていたのはこれから活躍するアイドル部隊の為に、全くの分野外である歌を作り衣装を作りダンスとポーズを考えてくれた調査兵団の面々だ。決して少なくない数の団員たちが簡易ステージを取り囲む中、丁度舞台の真正面に置かれた椅子には難しい顔をした団長のエルヴィン・スミスと兵士長のリヴァイが並んで坐っていた。

「おいエレン、テメエもうちよっとなちゃんとやれよ!!」

賓客席後方からジャンがすっ飛んできて激を飛ばすと、ステージでマイクを掴んだままのエレンがジャンを睨む。

「はあ!? ちゃんとやってるだろ!? 何でジャンになんこと言われなきゃならねーんだよ!!」

「マネージャーの俺が!! 仕方なくお前らの動作のチェックしてるからだろ!! 指示通りにやれよ!!」

「だからやっつてんだろ!?!」

「それでやっつてるつもりなら今頃はその辺の野良犬でも大人気アイドルだアホ!!」

「エレン、だめ。落ち着いて」

「そうだよエレン。今はステージのつもりなんだよ? お客さんと喧嘩したらダメだよー!」

ミカサとアルミンに制止されても二人の睨みあいには終わらない。

売り言葉に買い言葉。訓練兵団に居た頃のように喧嘩に発展しかけたその時、それまで沈黙を貫いていたリヴァイが動いた。

「おい、エレンよ」

声をかけられた瞬間にエレンの体が硬直し、直立不動になる。アイドル部隊への就任初日に態度の悪さから（言葉と体の暴力による）躰をされて以降、エレンはリヴァイ兵長を恐れているのだった。

「何でしょうか!? リヴァイ兵長!？」

「テメエには足りないモンがある。アッカーマン、アルレルトにあつてテメエには無いもんだ。解るか？」

「……解りません」

静かなリヴァイの口調に問われ、エレンは悔しそうに俯いた。

「やっぱりな。良く聞け。テメエに足りないものはな……」

不機嫌そうなりヴァイに、その場にいた全員の注目が集まった。まさかあの娯楽とは無縁そうな兵士長がこんな芸事に詳しいことがあるのだろうか？

「きゃるん　だ」

（きゃるん!?!）

「いや、リヴァイ。私はきゅぴるーん　が足りないと思うのだが」

（きゅぴるーん!?!）

「違つぞエルヴィン。奴に足りないのはきゃるん　だ」

壁外調査に挑む時のような真剣な表情で交わされるような会話ではない気がするが、周囲には頷く者が少なからずいた。

「まあ、確かにつみなミンと比べると可愛げ?　って奴は足りないかもな」

「うーん、可愛さとはにかく、覇気というか、オーラもみかりんと比べちゃつとどつにもね。薄いつていうのかな?　存在感がちょっと

ねー」

「存在感かあ……どうしよう。もうちょっとキツい色で衣装作つてみようか？」

「いや、あまり派手な衣装にしても、キャラクターが服に負けたら意味がねえよ」

「えれえれだけダンスにもう少し動きの激しい動作を加えるとかどうだ？」

「それだとかえってバランスが悪くなりそうだな」

調査兵団の分隊長クラスを含めたメンバーが集まり、口々にエレンの足りない物を補うため解決案を話し合い出した。様々な意見が出るも、これという決定打が中々出ないその時、エルヴィンが数度手を叩く。すると、それまでの喧騒がすーっと収まり全員がエルヴィンの方に向き直る。

「我々調査兵団がアイドル部隊が設立されたすぐ後、確か各兵団もそれぞれに広報部隊を立ち上げたと聞いた。チーフプロデューサーはゲルガーだったな。何か情報はあるか？」

「はっ。手元に入った情報によりますと駐屯兵団はリコ・プレッエンスを筆頭とした女性兵士を中心に駐屯兵団広報隊を立ち上げた模様。ダンスよりも歌唱に特化させ、大人を対象として各町の酒場で講演しているという報告があります。憲兵団は女性士官そのものが少ないためか、歌やダンスではなく『壁内戦隊ケンペイダン』という仮想ヒーロー部隊を立ち上げ、主に子供を対象にした小劇を定期的に各主要都市で開いている模様。いずれも立ち上げたばかりで現状のシガン　しな人気に比べればまだまだお粗末な物ですが、着実にファン層は増えてます。今のところは上手く棲み分けられておりますが場合によっては、我がアイドル部隊の脅威となる可能性が高いかと」

ゲルガーの報告を聞いたエルヴィンは静かに頷くと周囲を見回した。

「うむ。皆、よく聞いてくれ。敵勢力が着実に増えているがまだまだ恐れることは無いだろう。しかし、その現状で甘んじていけばそれこそ転落の一途を辿ることになるのは確実だ。そこで、さらなる差をつけるべく我が調査兵団アイドル部隊、シガン　しなの記念すべき第一回大規模ライブの日程が決まった。壁外調査の一週間後だ」

周囲が一斉にどよめいた。

壁外調査の一週間後だって？ あっという間じゃないか。このままでは間に合わない。衣装もまだ仮決定なのに！ そんな悲痛な声

が部屋の中を満たした時、リヴァイが声を張り上げた。

「うるたえるな!! 安心しろ。俺が見た限りだと全員が本気を出しやそれくらいにゃあ何とかなってるはずだ。……ただし、コイツだけは別だな」

リヴァイが指をさした先…… エレンに全員の視線が集まる。

部屋中から不安そうな視線を向けられたエレンは、唇を噛んで周囲を見返した。

「エレン。ここでテメエが駆逐するのは巨人じゃねえ。観客の財布だ。解ってるな？」

「……………」

「よ、よーし。じゃあ皆、少し休憩しよう!! こんな時こそ休まねえと煮詰まっちゃまう。午後は音楽班の練習から入るぞ! 楽譜を忘れるなよ!」

エレンが何も言えずに黙る中、気を利かせたゲルガーが休憩を宣言すると団員たちはそれぞれがニタ五々に散っていく。全員が部屋の隅や外に移動し音楽班がギターやドラム、ベース等の楽器の調整をし始めると、俯いたエレンは走って部屋から出て行ってしまった。

「あ、エレン、待って!」

「二人とも、どこに行くの!」

ミカサがエレンを追いかけて部屋を出て行き、アルミンもそんな二人を追いかけようとした時、誰かがアルミンの腕を握って引き止めた。

振り返ると、そこにはジャンの姿があった。

「おいアルミン。お前は残れ。悪いけどお前は別でソロ曲の練習があるんだよ」

「そんな……だってミカサとエレンが!!」

心配そうに二人が出て行ってしまった扉を見るアルミンに、ジャンは呆れたようなため息をついた。

「いいから。あのバカのことにはミカサに任せとけ。多分、なんとかなるだろ。ムカつくけどな」

部屋を飛び出したエレンは、まっすぐに壁の上に来ていた。

何故壁の上なのかと言うと、すっかり有名になったエレンが街に行ってしまうとすぐにその場に人だかりができてしまうからだ。エレン達アイドルにとってファンの存在はとても有難いけれど、こんな気持ちの今だけはファンの相手をしたくなかった。

また、一般人を相手にする場合、対応の仕方もそれなりに考えなければならぬ決まりだが、壁の上ならば兵士しか居ないので気が楽なのだ。うさミンレベルになると話は別だが、彼らはエレンのことをアイドルというよりも、うさミンと一緒に歌って踊っている兵士くらいにしか見ていない者が多いから。

「エレン、待って」

「ついでくんなよ」

壁の上を当ても無く歩くこと数分、やっとエレンに追いついたミカサだが、エレンはちらりとも振り返らない。

「エレン、皆はエレンの隠れた良さが解らないだけ。大丈夫。もう少し練習すればきっとすぐにエレンの良さが出て皆解ってくれる」

その時、エレンの歩みが止まった。

「なあミカサ。俺達、何のために調査兵団に入ったんだっけ？」

「エレン……」

エレンが海を見ながらぼやいた。

「俺は、母さんを食べた巨人どもを駆逐するために調査兵団を選んだはずだ。なのに、どうしてこうなった？　なんで俺達はアイドルなんてやってるんだ？」

訳が分からないと言いたげなエレンの言葉に、ミカサはほんの少し俯いた。

「それは、壁外が突然海になったから。巨人が魚になったのと、今の調査兵団にお金が無いから。だから、仕方ない。それでも皆、自分の役

目を考えて必死で頑張ってる。私も、エレンも。それから、アルミンも」

「そんなこと解ってるよ!!」

ミカサの正論に、エレンが大声で怒鳴る。が、その声と握られた拳にはどこかやるせなさが感じられた。

「そんなの……本当は俺だって解ってるんだ……」

「エレン……」

「青春っちゃんえ……」

振り返ると、むろみさんがワンカップ片手に紙袋一杯に用意した笹かまを七輪で焼いていた。

「むろみさん。何してるの?」

「うん? トロスト区に新しく笹かま屋が出来たけん。見晴し良い所で食べようと思ったと。お二人さんもいかが?」

棒に刺さった焼き立ての笹かまを手渡されると、ふわりと香ばしい匂いがした。

ぱくり、と一口齧るとふわりと広がる魚のすり身の仄かな甘み。

「あ、おいしい」

「そーやる? ちくわも作ってるけん今度行ってみ。で、何なん?」

何か悩み事? おーっし人生経験豊富なお姉さんに言ってみ?」

「どっせ、むろみさんには解らないからいいよ」

「うん、実はね……」

エレンがふてくされたように笹かまぼこを食むが、隣に居たミカサは素直にむろみさんに打ち明けた。

「ふうん。つまり、その足りない何かが解ればええってことっちゃんね」  
「多分……でも、何が足りないのか解らないの。私は十分エレンは可愛いと思うんだけど」

「ああ、ミカサちゃんがエレン君ラブなのは解っとるけん」

「大体、兵長も団長もきやるんだとかきゅびるんだとか、わけわかん

ねーんだよな」

エレンとミカサが何本目かの笹かまを食べていると、むろみさんが顎に指を添えて唸った。

「うーん。確かにうさミン君は萌え萌えやし、いえちーに似たあざとかわいさがあるけん人気出るんは解るたい。みかりんは……」

そこでむろみさんは腹筋バキバキアイドルみかりんを思い浮かべる。女子プロレスラー顔負けの覇気とは裏腹な澄んだ歌声とキレイのあるダンスはすべてを魅了するに相応しいが、人気の元は何かと言うと……。

「まあ……ギャップ萌え？」

「じゃあ、エレンに足りないのは萌え？」

「萌えってなんだよ」

「そういえば、うさミンは兎の耳をつけている。とても可愛いと思う。あれは萌え？」

「おい、聞けよ」

「うーん、方向性は悪くないと思うたい。んでも、プリチー系な萌えならうさミンには敵わんけん。まずはキャラの方向性を模索せん」と

そこでむろみさんは片手に持ったワンカップの中身を飲み干し、笹かまを一口で食べてから腕を枕にその場に寝そべった。まるでおっさんである。

「……方向性ってなんだよ」

むっしむっしとかまぼこを齧るエレンが何度目かの問いかけをすると、何かを考えているようだったミカサが指を立てた。

「一言で表せる人物特性とか？」

「そう……さっきの例やとね、うさミンなら萌え、みかりんはギャップ。リヴァイなら人類最強のチビとか。ハンジは巨人馬鹿。ジャンは……馬面とか？ そんな感じなんちゃう……」

「そんなモンなのかな。うーん……じゃあ、俺は一言でいうと何だろ？ ……ミカサ？」

本気で悩みだしたエレンを見て、ミカサははっとした表情でエレンとむろみさんを見ている。そういえば、やっとエレンの特性を思い出



した。

「死に急ぎ野郎!! そうだ。訓練兵の時、エレンは死に急ぎ野郎だった!!」

「つまり、熱血と!」

「そう、熱血死に急ぎ野郎!! 食堂で、熱い演説もした!」

「あ、あれはジャンの野郎が突っかかって来たからで、演説したわけじゃねえよ!!」

エレンが慌てて撤回させようとするが、盛り上がる彼女たちはまるで聞いちゃいない。

「やったやん! これで方向性が見えてきたと!」

「うん。もしかしたら、何とかなるかも」

「な、何だよ。死に急ぎ野郎の何が方向性と関係があるんだよ?」

「そしたらね、いい? まずはね……」

「うん。……うん。つまり、熱血ヒートハートを全面に押し出す?」

「そうそう、そんでうさミンとも小道具は合わせてね……」

「つまり、ウサ耳!」

「そう。でも全員ウサ耳は詰まらんけん、ちょっぴり変えながらもケモっぽくとか……」

「お、おい、聞けよ。マジで……」

「あ、エレン、今日は私も付き合う。だから、頑張って練習しましょう」

困惑するエレンとは裏腹に、ミカサとむろみさんは何かの扉が開けたように二人で作戦会議を始めるのであった。

翌日

軽快な音楽と共に簡易ステージに立った三人は課題としていた数

曲の歌をダンスと共に歌い終わると、三人揃ってあの時と同じ決めの挨拶に入った。

「みかりんでーす」

「えれえれだぜ!!」

「うっさミン」

『三人合わせてシガン しなでーす』

「シガン しなだぜ!! よろしくな!!」

ジャンプして一歩前に出たエレンが会場に向かってウィンクを決め、力強くマイクを振り上げた。

頭の上には少し垂れ気味の犬耳を装着し、服装も元気系の子犬をイメージした衣装に変わっている。

「良いですね。うっさミンの兔耳に合わせて、みかりんが猫耳でえれえれには犬耳ですか。クール系、元気系、可愛い系がそろった感じですね」

「ああ。エレンとミカサが自主的に考えてきたそうなんだが、最初に思ってたよりかなり良いな。問題は……」

肯定的な意見を出していた調査兵団の面々がエルヴィン団長とリヴァイ兵長に目を向けると、二人は壇上のアイドルを睨むような顔つきで見ている。

挨拶が終わり、マイクを持ったまま評価が出るのを待っている三人に、リヴァイがつまりならなさそうに天井を仰いだ。

「……まあ、悪くはないんじゃないか?」

「ああ、良いんじゃないかな」

にこやかなエルヴィンの言葉と共に、一瞬にして会場内がどっと湧いた。

「よっしやああ!!」

「これで今夜は寝られるぜ!!」

「じゃあ、私はこの衣装の方向性でもう少し詰めてみるわ!!」

「ダンスも元気少年っぽく少し変えてみましょうー!」

「やっとなれえれのソロ曲も書けそうだな!! 頑張るぞー!!」

「おいエレン、やったな」

方向性の決定に喜ぶ面々を尻目に、奥からジャンが三人に近づいた。とてもそっけない態度だが、それなりに労うようにエレンの肩を叩く。

「これでどうにか本番までに間に合いそうじゃねえか。飛び出してつた最初はどうなるかと思っただけど、お前、よく考えてきたな」

苦笑いをする、エレンはくるとジャンを振り向いた。どんな憎まれ口が飛び出すのかジャンが待ち構えると、予想に反してエレンは白い歯をきらりと光らせる。

「そんなの当たり前なんだぜ!!」(キラッ)

「……………あ?」

「心配してくれてサンキューな! ジャン! マネージャーとしてこれからも頼むんだぜ!!」(キラッ)

「……………」

親指を立てて爽やかに微笑むエレン。あまりの人格の豹変ぶりにジャンが呆然としてみると、横からミカサとアルミンの二人が顔を覗かせた。

「ジャン、エレンじゃない。犬耳を付けている間は、えれえれ」

「どうやら、エレンのままじゃこのキャラ付けは精神的に耐えられなかったみたいなんだ」

「そついうわけだ!! 俺はえれえれ!! よろしくなんだぜ!!」(キラッ)  
身も心もすっかりアイドルになったエレンことえれえれに、ジャンはフツと微笑を浮かべてエレンことえれえれのその両肩をポンと叩いた。

「お前、今日はもう帰れ」

人類は今日も壁の中。

## 壁内中央日報と巨人面魚研究報告書

壁内中央日報 月×日 曜日 記述文は記事より一部抜粋。

所属兵団選び、先延ばし

104期訓練兵団の所属部隊を選ぶ日程が延長された。

壁の外が唐突に海になってしまったため、状況の急激な変化を配慮した結果である。

従来のお誘式で行った『所属決め』と違い、訓練兵は解散式の終わりから猶予期間内に所定の兵団に申請書を届け出ることにより所属兵団を決めることが出来る仕組みだ。

この仕組みを中央に提案したのは調査兵団エルヴィン・スミス団長である。

「状況が以前とはあまりにも変わりすぎた。壁外が海になるとは誰も予想だにしていなかった事態である。そんな中で訓練兵に突然所属兵団を決めると言うのは極めて酷な話だと思ひ案を提出した。中央の判断は賢明であると思う。是非、広い視野で物事を見定め、熟考の後に所属兵団を決めてほしい」

というのがスミス氏の意見である。

それに対して憲兵団ナイル・ドーク師団長は「今回の訓練兵の兵団選択の延長は極めて遺憾である」というコメントを残した。

「そもそも兵士というのはいかなる事態に直面しても逐一正しい行動をしなければならぬ。それが状況が多少変わった程度でこれまでのしきたりを覆して良いものか。スミス氏もそうだが、彼の意見を採用了中央の考えも甚だ疑問だ」

なお、現在も訓練兵の所属兵団選びは続いているが、今年も訓練兵団の流れは駐屯兵団への流入が一番多いとの見通しだ。

調査兵団アイドル部隊、孤児院を訪問。

先日、調査兵団アイドル部隊『シガン しな』が孤児院を訪問した。『シガン しな』とはかつて超大型巨人の襲撃により崩落したウォールマリア南部の街、シガンシナ区をユニット名に冠したグループだ。

メンバーはうさミンさん、みかりんさん、えれえれさんの三人で構成されている。三人は共に幼馴染であり、かつて巨人により陥落したウォールマリア、シガンシナ区で生まれ育った。

「親を失った悲しみは、僕たちにもよく解りますからね」

そう語ったうさミンさんたちは子供たちと遊んだ後、代表曲である『恋の壁外逃避行』や『ミミミン うさみん』等を子供たちと一緒に合唱して訪問を終えた。

今や壁内中に知れ渡る有名アイドルと遊び終えた子供たちは「とても楽しかった」と嬉しそうに語った。

「みかりんが思ってたよりずっと可愛くてびっくりした」

「うさミンが物知りでもっと沢山お話したかった」

「ケンペイダンレッドも好きだけど、えれえれも凄くかっこよかった。シガン しなが今までよりもっと好きになった」

次回の壁外調査の準備で忙しい中、アイドル部隊を設立した調査兵団の団長、エルヴィン・スミス氏はにこやかに語ってくれた。

「アイドル部隊の設立は国民の皆様へ寄り添った兵士でありたいという理念に基づいたものです。調査兵団のシンボルマークである両翼は自由を象徴するものですが、アイドル部隊の場合はこの翼で世界を包み込むという暖かさの象徴だと思ってくださればありがたいですね」

なお、第一回シガン しなの大規模ライブイベントのチケットは既に完売している。

これから三人の活躍に目が離せない。

謎の食糧、壁内に流出。

最近、壁内に流出している出所不明の食糧が問題となっている。

壁外が海になったことにより塩の入手が比較的容易にはなっているのだが、その他の食糧は未だに自給率が低い。まだまだ国民に食糧が行き渡らないそんな中、店先や家の戸棚の中に勝手に食糧が増えていくという事件が近頃後を絶たない。

取材を受けてくれたのはウォールローゼ南部の街にお住いのとあるご婦人だ。

「朝、パンを作ろうと思って戸棚を開けたら既に出来上がった角パンが三つも出てきたの。買ったものじゃないわ。だってパンなんて買うこと滅多にないもの。その他にも買った覚えの無い缶詰や干し果物なんかが出てきてね、気持ち悪いったらありゃしないわ。でもまだまだ食糧は少ないでしょう？ 主人と一緒に一口食べてみたんですけど、別に変な味もしないし体調も崩したりしなかったし、問題無かったわ」

他にも、植物油の瓶詰が納戸から出てきた例や朝起きたら乾燥トウモロコシが軒先に吊るされていた例が報告されているが、目撃者もおらず未だに原因は不明である。

食糧には『妖精社』というロゴがプリントされているものが多数あるが、この『妖精社』に関する情報は目下調査中とのこと。

食糧そのものがまだ十分量足りていないのは重々承知しているが、憲兵団では出所の解らない食糧はなるべく口にしないようにと注意を呼び掛けている。

広告

笹かま処『キルシユタイン』

トロスト区に新名物登場!!

笹かま屋「キルシユタイン」

人魚さんから教わったレシピをそのままに。魚の練り物を一本一本丹念に焼き上げました。

自家製の魚醬をかけて食べるとウマさ倍増!!

『調査兵団に入った息子に食べさせてあげたくて作ったものがこんなに売れるなんて思ってませんでした。ジャン、これ見たら一度家に帰ってきてね』

広告

養蜂農場 フランツ&ハンナ

時代は甘味に突入している!! 取れたて新鮮な蜂蜜を是非ご賞味ください。

フランツ&ハンナの養蜂は一味違う。

ウォールローゼ東の大きな木の上にくつつも置かれた巣箱たち。個人購入した立体機動装置で樹上に登って蜜を取るのはご主人のフランツさん。元は訓練兵だったフランツさんですが、壁外が海になり奥様のハンナさんの妊娠をきっかけに退団。現在では故郷の村で養蜂農園を開いています。

『まだまだ至らないところだらけですが、妻と二人でこれからもがんばります。同期の皆も良かったらウチの蜂蜜買ってね!』

広告

中央商会宝飾部門

世界で一番美しい人魚の涙。

人魚との交易でのみ入手できる大粒の真珠を貴方に。

鋼貨十枚からお客様のご都合に合わせたグレードをご提供いたし

ます。

愛するあの人に、貴方からの気持ちを届けるために。

広告

ローゼ開拓村 シガン しなの里

壁内を圧巻するシガン しなが避難地として住んでいた村が今、観光地として大人気!!

三人が住んでいた家や三人が使用していた物が過去のまま保存されております。

一日に三回、彼らを良く知る老人が、シガン しなの子供の頃をお話する催し物を開いております。

入村料は無料!

ここでしか手に入らないシガン しなグッズも多数ございます。ご来場の際は是非お手に取り下さい。

ハンジの手帳より抜粋

月×日実施 調査兵団 ハンジ・ゾエ

題 巨人面魚の生体に関する実験調査

目的 巨人面魚の弱点、及び生体についての観察。

駐屯兵団に協力を仰ぎ海水の汲み上げ機を巨人面魚の引き揚げ用に使わせてもらう。器具は黒金竹の葉脈を使ったロープに鉄製フツ



ク。釣り餌には傍にいたモブリットのパンツを奪い取って使用。

巨人面魚はヒトの臭いに敏感に反応するので、ヒトの着古しならば何でも良かったが中でも局部の臭いが最もヒトの臭いの中で強く良いとの判断から実行。パンツ代は後日請求とする。

人魚たちの証言から水深はおよそ二百メートル前後。壁より下は断崖絶壁となり、水深は我々が思っていたよりもかなり深いことが判明。

巨人面魚は水深約五十〜百メートルの所に生息している模様。壁上固定砲では届かない可能性大。

さっそくモブリットのパンツを付けたフックを海に投入。すぐに三メートル級の巨人面魚がヒットする。

五人がかりでロープを巻き上げ巨人面魚を壁上まで引き上げる。

水揚げされた巨人面魚は煙を噴き上げながら暫く暴れていたが、十分前後で完全自壊。その際の温度はおよそ七十度前後。

海中での巨人面魚の体温は人魚たちの証言をもとに四十度前後と判断したことから、死ぬときは一時的に高温になるらしい。

巨人面魚消滅の為、調査続行不能。

モブリットのパンツを引き続き使おうとしたが、既にポロポロになっっているパンツには何も食いつかない。一度使用するともう効かないようだ。

仕方なく自分のパンツを使おうとするも、周囲から止められる。代わりにモブリットの右靴下を奪取する。

投入後、すぐに七メートル級がヒット。

今度は自壊前に弱点を探すべく我々の知る巨人の弱点、うなじを削いでみる。なお、巨人面魚の体表は非常に硬いので超硬質スチールを使用。自壊前に殺すことが出来ることが判明。弱点は同じらしい。

次いでモブリットの左靴下を投入。

すぐに四メートル級がヒット。

暴れる巨人面魚をワイヤーで抑え込み、体表の鱗の採取を試みる。非常に硬くて剥がしにくい、透明な鱗を剥がした時、手の平の上で

煙を上げて消失。温度は感じない。鱗の採取に時間がかかった為、その後すぐに巨人面魚も消失。

モブリットからシャツを奪取。投入。  
すぐに十メートル級ヒット。

日光遮断実験を試みようとしたが、布をかけるのに手間取っているうちに被検体消失。

モブリットが泣いたのでその日の実験はやむを得ず中止。

なお、人魚たちの証言によると海中時には『攻撃するとすぐに回復してしまふ』そうだ。

魚たちとの会話が可能な人魚でも巨人面魚との意思の疎通は不可能であり、その辺りは我々の知る巨人とも共通してると言える。

今後何が解り次第、順次報告予定。

## 壁外調査と淡路さんとむろみさん

その日も相変わらず壁内は良い天気であった。

「本日はご協力いただき有難うございます。あなた方が護衛をなさってくれるのは我々にとって大変心強いです」

「何言ってるのや。こりゃビジネスやろ？ ワイらも商売先が増えるんは有難いことやし、まあギブアンドテイクうちゅーやつなんやから気にせんときー」

壁の下で握手をしながら挨拶を交わしているのは調査兵団エルヴィン団長と、ハンターを職業とする人魚の代表、淡路さんだ。周囲にはリヴァイ班を含めた多くの調査兵団のメンバーと、銃や槍を携えたハンターの人魚達が挨拶を交わしていた。まあ、その殆どがトロスト区に開かれた魚市場でお馴染みの顔なので、緊張しているものは殆ど居なかったが。

「おおー淡路さんやる気まんまんとね」

それぞれが挨拶を済ませた後、ひょっこりとむろみさんが顔を覗かせた。

「むろみさん、来てたんか」

「まあ、紹介者として一応見に来た方がええかと思ったとよ。調子どうっ」

「そもそも絶対好調やがな！ 巨人面魚なんぞ商品にもならん魚はワイが槍の錆びにしてくれるわ!!」

「うーん、頼もしかね。流石淡路さん」

「淡路さん!! 最後の作戦会議が始まりませ!!」

「はよ来てくださいー!」

自慢の槍を素振りしながらがっははと豪快に笑う淡路さんを、明石さんと鳴門さんが遠くで呼んだ。「おうよ、今行く!」と返事をしながらも、淡路さんはむろみさんに向き直る。

「とっろでむろみさん。出かける前に聞いときたいんやけど、普通こ

ういう類の荒事はワイらよりもリヴァイアさんの方が向いてると思うねん。何でワイらなんや？」

「こっそりと聞かれたむろみさんは「ああ」と軽く頷いた。

「だってリヴァイアさんってば今、世界の溶岩めぐりしてるけん。折角ええ湯ば楽しんでる所を呼び出すんは悪いっचार？ それに

……」

「それに？」

そこでむろみさんは更に低い声でこそつと耳打ちする。

「簡単に巨人面魚狩り頼んでリヴァイアさんがすっかり壁壊したりしたら、それこそ大惨事っचारけん。壁ん中って海拔マイナスっचार……？」

「ああ……そついえば、あの人ならやりかねんわな。うっかりで国一つが水没ってシャレにならんで……」

遠い目をした二人はおちゃめな巨大海獣がうっかり吐き出したブレスが壁を大粉碎し、ノアもビククリするような大洪水が壁内を襲う様を同時に想像した。かつて神々と共に大陸一つを滅ぼした実績を持つ上に、リヴァイアさんはあのアバウトな性格だ。実際にありえそつな所がまた恐ろしい。

「そんなわけで淡路さんに頼んだけん」

「うーん。まあワイとしても商売相手が増えるんは歓迎やしな。まあ約束やし、ちよっくら行ってくるわ」

トロスト区の壁の上には今回調査に出る団長のエルヴィン、そしてリヴァイ班とハンジ班が防サビ、防腐加工を施した立体機動装置を装備して待機していた。

メンバーは団長のエルヴィンを含め総勢たったの十一名。馬の役割をこなすイルカの頭数が少ないため、少数精鋭班と情報収集班に分けた結果だが、この人数は歴代の壁外調査でも最低人数に達しない。

壁の下にある門は水没していて開くことが出来ないの、壁上から

の出立である。壁から五メートル程下に広がる海面には既にそれぞれのイルカが鞍を付けて待機されており、あとは出発の合図を待つだけだ。

「間に合わないかと思いましたが、どうにか完成したみたいで良かったですね」

グンタが体にまとわりつく新品のラッシュガードの裾を引っ張った。はっ水加工を施され保温効果に優れた新品の服は黒地に黄色のストライプが走る、かなり派手な模様だ。

「ああ。技術班が頑張って今回調査に出る人数分だけは確保してくれたい。高価なんだからダメにするなよ？」

「解ってるさ。だがまあ、ダメになる時は人面魚の胃の中しかねえだろ」

軽口を叩きあうメンバーの額にはハンジが壁外調査で付けるのと似たゴーグルが装備されていた。水中に潜水しても視界が奪われることが無いように、今回の海上活動では全員が着用を義務付けられている。

「ちっ、まったくこの靴はいつ履いても動きづらくて仕方ねえ。もっと何とかならねえのかよ」

リヴァイが苛立ったように防水加工された靴を踏み鳴らした。今回の壁外調査隊に支給されている靴は、つま先の部分がピエロの靴のように反り返っている上、足底が妙に長く作られたかなり不格好な代物だ。

「確かに、ショートスキーは動きにくいですよ。でも立体起動の推進力で水上を走るので何かわくわくしませんか？ 貯水池でも良いけど、本物の海で出来るのがちょっと楽しみです。不謹慎なんですけどね」

「え〜？ 不謹慎でもなんでも無いって。ペトラは真面目だなあ。私は今から魚型巨人と一緒に泳げると思うとすっごいワクワクするよ！！」

「ハンジ。テメエは少し黙ってる」

「へいへーい」

人間たちが壁の上で装備の点検をしている頃、淡路さんら人魚グループはイルカと共に海の中に居た。

陸上と壁一枚隔てた海の中には馬鹿でかいのから普通にでかいのまでさまざまな巨人面魚がのんびりと泳ぎ回っているが、人間じゃないせいなのか淡路さん達人魚には一切の興味を示さない。

悠々と目の前を横切る巨人面魚を、淡路さんは一瞥する。

「どいつもどいつもおもしろいシラしよってからに……」

苛立ったように淡路さんが腕を組んで辺りを見回すと、隣で聞き耳を立てていた明石さんが振り返った。

「淡路さん、そろそろ時間ですせ!!」

壁の上に、銃声が響き渡る。

作戦開始の煙弾が打ち上げられると同時に、出発地点から両側へ五十メートル程離れた地点で幾つもの木偶人形が海上に落とされた。

この木偶人形はヒトの屎尿が塗られた上に着古しの服が被せられている、いわば囷だ。

木偶人形の落下地点にヒトの臭いに鋭敏な巨人面魚がその囷を食おうと飛び上がる幾本もの水柱が確認され始めると、鋭い笛の音が周囲に響く。海面には淡路さんが顔を覗かせ、口に咥えた警笛を全力で吹いていた。

出発地点の真下にいた巨人面魚が囷にかかり、周囲から消えた合図である。

「今だ!! 総員、出立!!」

『はっ!!』

笛の音を聞いたエルヴィンら調査兵団はゴーグルをかけると全員が壁を蹴り、見渡す限りの大海原へと飛び出した。

今回の壁外調査はとてもシンプルなものだ。

調査兵団はハンターの人魚達に丸く囲まれる形で海に出て、一日のうちで行けるところまで行って帰ってくる。その間に目印になるようなものがあるかどうか確認し、いずれは人魚からの輸入に頼らず人間だけで漁が出来るか否かが検討できれば上出来だった。

「よっしゃあー 四メートル級打ち取ったり!!」

体から煙を上げて消滅する巨人面魚のうなじから槍を引き抜きながら淡路さんは勝利宣言をした。

壁から出て、既に一時間が経とうとしていた。振り向いても壁は既にここから見えなくなっている。もしもこの場に置き去りにされたら迷子になるのは確実だろう。

「流石、人魚さんは違うな。今の所敵なしじゃないか?」

飛沫を上げながら海面を走るイルカの背に乗ってエルドがごちた。今の所五メートル級以下の巨人面魚にしか遭遇していないが、その殆どを淡路さん達人魚が狩りとっている。巨人面魚が人魚に反応しない性質も関係しているかもしれないが、それを除いてもハンターたちの戦力は凄まじく、そして頼もしかった。

「当たり前や! ワイらは昔、シロナガスクジラも狩ってんねんで!

「こんなもんまだまだ小物やわ!」

「おうよー 淡路さんは海じゃほぼ最強なんやでー!」

鳴門さんが淡路さん自慢を始めると、正面側から警笛の音が聞こえる。火薬を使う信号弾が湿気る不安のある海上では合図は全て笛の音を用いていた。今の警笛音から察するに、どうやら新たな巨人面魚が接近しているらしい。

「バカデカい奴が正面から来とります! 気をつけて!!」

海面から見ると何も見えないが、リヴァイは指笛を吹いてイルカに潜水の合図を送る。指示通りイルカは潜水し、海中を覗いてみればまだまだ遠いが、なるほど真正面からおよそ十メートル級はあろうかという馬鹿でかい顔の魚が徐々に迫ってきていた。

先頭を走っていたエルヴィンは人魚からの警笛を聞くや否や鋭く

数回指笛を鳴らす。と、全員が巨人面魚を避けるように左へ曲がり始めた。

基本的な戦術は長距離索敵陣形時のものと似ているが、人間だけでは地上と海上の違いは完全な目視に頼れない。人魚達との連携あつてこそこの作戦が生きてくるのであるが、それでもままならない事態は起る。

「真下から来ます!! 六メートルくらい!!」

「なんやて!!」

急いで警笛が鳴らされるが、間に合わない。

陣形のド真ん中から水柱を立てて現れたのは、七メートル級のやたらと威めしい顔つきの巨人面魚であった。海底からの危機に気づいたイルカが指示をされる前に攻撃を避けたのでどうにか全員無事生き残れたが、一步間違えたら今頃は魚の餌になっているところであった。

飛び出した巨人面魚は、このまま海の中に帰ってくればいいものの、値踏みをするように人間たちを睨みつけるとその大口を開けて襲い掛かって来た。こうなるともう狩るしかない。

「援護する。奴を狩るでー!」

「よっしやあー!」

「やっと出番だぜ!!」

淡路さんが怒鳴ると同時にオルオとグンタが巨人面魚の両側頭部に立体起動のアンカーを打ち込んだ。続いて、ラシャド、ハンジ、ケイジそして他のメンバーが巨人面魚へ一斉にアンカーを放つ。双方向から縫いとめられると、そこでようやく獲物の動きが鈍る。

「このっ、大人しくしろー!」

体に刺さったアンカーを振り払おうともがく巨人面魚だが、水面下からは淡路さん達が海へ潜れないように巨人面魚の体を槍で突き上げている。

「全員間合いを取れ!! アンカーが抜けないようにしろ!!」

「もっと引けえ!」

「兵長!! 今ですっ!!」



逃げ場を無くし、大きく海上へ跳ね上がったところで獲物の頭にアンカーを放ったリヴァイがワイヤーに引かれて海面を奔った。まるで黒い海鳥のように体を下げ、ショートスキーで水飛沫を上げながら水上を疾走し、いよいよ巨人人魚の体に迫った瞬間、腰に携えたポンベからガスが噴いてリヴァイの体を浮き上がらせる。

翼の代わりに両手に携えた鈍色の刃は、海上に飛び上がった巨人人魚のうなじをしっかりと捕らえていた。

「やりましたね兵長！」

「凄じやないかりヴァイ！ 人類初の快挙だよ！」

煙を上げて消滅する巨人人魚を背に口々に賞賛の言葉がイルカの上に戻ったリヴァイへ投げかけられるが、本人は些か不満げだ。

この戦い方はたった一頭に裂かれる人員が多すぎて、多数の巨人人魚襲来時にはあまり役立たない。加えて、常に人魚の援護が必要だ。人類が、人類だけで巨人人魚を狩る方法はまだ無いに等しいのだ。

「せめて、海中で奴らを追うことが出来ればな……」

イルカの上で握りしめた拳を見つめ、己の力の足りなさを痛感するリヴァイの横に淡路さんが海面からひょこりと顔を覗かせた。

「やるやん。人間の癖に」

「淡路か……何か用か？ 持ち場はどうした。今は作戦中だぞ」

「持ち場もクソもあるか。そないシケたツラ見りゃ一言いいたくもなるわ」

「俺はいつもこの顔だ」

「ほんま口の減らない男やな。まあアレや。今の動き、人間にしとくにはもったいなかったで」

「……何が言いたい？」

「何がってあんなあ……まあ今のは鳥っぽくてちょっとかつこよかったです。ワイら魚やけん鳥嫌いやけどな!! 狩りが成功したんやから、そないツラしとらんでもうちよい喜べ！ それだけや!!」

言い捨てるようにして、淡路さんはすぐに海の中に潜ってしまった。

リヴァイは数度目を瞬かせたが、すぐに口の端を凶悪に歪める。

「それで気を使っているつもりか」

淡路さんの精一杯の励ましを聞いて、今は悩んでるのがバカバカしくなった。自分たちが生きて壁内へ情報を持ち帰る限り、いずれ戦いは改良されるだろう。人類の歴史は昔からそうだ。ならば、今は生きて帰るのが先決だ。

「いいぞ。鳥は鳥らしく、今は鳥の狩りをするだけだ」

魚を羨むのは後回しだ。今は頼りない海鳥として、この大海原の戦場を生き残ることだけを考えよう。

七メートル級の巨人面魚を人類が初めて打ち倒してから三十分が経とうとしていた。

海面には相変わらず目印になるようなものは何もなく、時折巨人面魚が現れる以外に海の変化はあまり無い。

「この分だとまだまだ行けそうだな」

「ああ。下手すりゃどっかの島にいちまつかもな」

「まさか。この辺りは何も無いはずだぜ？」

イルカに乗った面々が話していると今度は左側方から笛の音が鳴り響く。

「また巨人面魚か？」

周囲に緊張が走った瞬間、一人の人魚が慌ててすっ飛んできた。

「た、大変です!! あっちの方から変なのが来ますぜ!!」

「落ち着け! 持ち場を離れるくらいは用ってなんや!？」

ぜえぜえと息を切らせる人魚に、淡路さんが激を飛ばすと、人魚はしばし口を開閉させてから勢いをつけて叫んだ。

「何というか、ウチにもよく解らへんねん!!」

「なんやねんそれ! 報告になつたらんやろ!」

その時、グンタがはるか遠くの方から何かが近づいてくるのを見

た。

「おい、確かに左の方から何か来るぞ。なんだありゃ？」

何だかよく解らないそれは、海面から飛び出した二本の棒のようなものだった。

Vの字に海面から飛び出した奇妙な物体が徐々に近づいてきている。もう少しでそれが何か解りそうになった瞬間、『そいつ』は音も無く水中に沈んだ。

「なんなんだ。あれは」

不気味に鳴り響く笛の音。瞬間、すぐ目の前で何かが飛び出して来た。

『ブフォッ!!!』

リヴァイとエルヴィンを除いた殆ど全員が嘔き出した。

水面から海上へ大きく飛び上がったのは、十五メートルはあるうかという巨人面魚。しかし、その腹ビレに相当する部分からは人間の足（スネ毛有）がよつきり生えていたのだ。

「何あれ何あれ何あれー!!!」

「知らねえよ！ てか何で魚に足が生えてるんだよ!!」

「ぎゃはははは!! 死ぬ、死ぬ、腹が死ぬ!!」

「うおおおお!! すげえ!! 足付きすげー!!!」

「バカ野郎!! 気を引き締めねえと本気で死ぬぞ!!」

大爆笑するメンバーをリヴァイが怒鳴りつける中で、足付き（スネ毛有）巨人面魚は海中へ潜ると再び大きく海上へ跳ね上がった。目の前の人間を襲う事も無く、まるでその二本の足（スネ毛有）を誇示するかのように跳ね上がるたびに何度もバレリーナのようなポーズを決めているのは何故だろう。

「何かがおかしい。皆、気を付けろー!」

どっかんどっかン爆笑している全体にエルヴィンが声をかけると同時に、複数方向から警笛の音が聞こえた。

笛の音から察するに、その数、無数。

「淡路さん、ヤバいです!! 数が多すぎて応戦が間に合いません!!」

外敵を察知したイルカが逃げ出すと同時に、その場所から二頭の巨人面魚が上下の歯を打ち鳴らしながら飛び上がる。他にもあちこちに無数の巨大な魚影が形を現し始めていて、もはや手におえない数だ。

「あの足付き、まさか仲間を呼んだのか!？」

これだけの数になるともはやこの巨人面魚の群れの突破は不可能だ。ここらが潮時とばかりにエルヴィンが撤退を知らせる合図を鳴らす。

「撤退ー!! 撤退だー!!」

「しんがりは任された!! 人間どもははよ逃げや!!」

淡路さんが槍を振り上げ、全員が方向転換をしようとするが時すでに遅く、あたりは十頭や二十頭ではきかない大量の巨人面魚が埋め尽くしていて、エサに群がる鯉のように大口を開けて迫ってくる。

「うわぁー!!」

近くで仲間の悲鳴が聞こえた。

振り向くと、待ち伏せしていたらしい巨人面魚の頭にイルカが跳ね飛ばされ、誰かが海に落とされた。

「へいちよ、たすけ!! うぶぁ!! 来るな、くるなぁぁ!!」

イルカから振り落とされ、近くで海面に漂っていたエルドの頭が海中に消えた。

「ちっ、明石! 鳴門! シャキッとせいや!! これ以上ヤツらの好き勝手にさせんな!!」

「ダメッす!! 数が多すぎてこっちも手が回りやせん!!」

淡路さんたちハンターも無数の巨人面魚を捌いているがとても間に合わない。一頭倒す間にも新たに二頭が増えているような気がするほどだ。

波が経ち過ぎていて、生きている人間がどれくらい居るかもわからない。海面から飛び出す巨人面魚の頭に、リヴァイは無意識的にアンカーを放っていた。頭の中は不自然なほど冷静だが、思考回路は全て相手を狩ることのみにシフトしている。

しかし、狙った獲物に向かって水面を翔る間に十メートルはあろうかという巨人面魚が、横から大口をあけてリヴァイの眼前まで迫っていた。

アンカーを戻す余裕は無く、ガスを使って間一髪横へ逸れるもそこにも巨人面魚の穏やかな顔が大口を開けてリヴァイを食おうと迫っていた。

逃げ場は、無い。

「ここまでかよ……」

不思議と恐怖心は無かった。ただ、酷く悔しかった。今まで失ったと同時に背負った仲間の命も、約束も、全部がもう守れなくなってしまうことがどうしようもなく悔しい。

巨人面魚の歯並びが見えた。最後の瞬間まで悪あがきをするつもりではあったが、しかし、不思議なことが起こった。

眼前まで迫っていた巨人面魚の体が横へ吹き飛んだのだ。

「あ？」

アンカーを戻し、海に着水すると傍に漂っているのはイルカでも巨人面魚でもなく、無数の黒い背びれだ。

よく見るとそれらはイルカに似ているが、イルカでは無い。イルカよりも大きく、白黒模様の不思議な生き物。そのうちの一個がリヴァイの体を頭で持ち上げた。つるつるした皮膚の感触に、イルカよりも肉厚の唇。口の中はびっしりと白い牙が生えている。

「何だ？ ーじーんは？」

あたりを見回すと三十メートルはあるつかという島のような何かがいくつも浮かんでいて、そのうちの一つから誰かがひょこりと顔を覗かせた。

「やっほー!! 皆もこっちに出てきてたよね!? 近海にシロナガスクジラさんとシャチさんの群れがおったけん!! ひいちゃんのお友達ば皆にも紹介したいなーって言ったら来てくれたと!! あれ? 皆どげんしたと?」

それは、にこやかに手を振るひいちゃんだった。

ひいちゃんが無数のシャチやクジラを引き連れてやってきていた

のだ。

「ひいちゃん!! 助かった!!」

生き残ったメンバーが急いで巨大なクジラの背によじ登る。無数にいた巨人面魚たちは近づこうとしても自分たちの倍ほどの大きさのクジラの尾びれに叩きつけられ、あっという間に蹴散らされてしまった。

周囲からは巨人面魚の群れが消え、静かな波と風の音が聞こえるばかりとなる。

何とか巨人面魚を撃退できたとはいえしかし、損耗が無かったわけではない。

「食われたのはラシャド、ハンジ、エルド、ペトラか……」

シャチの上から見回して、リヴァイは無表情で海に消えたメンバーの名前を呟いた。生き残りがシャチやクジラに運ばれる中、他に生き残りが居ないか人魚が海中を見回ってくれたが、現在生き残っているメンバーの他には誰一人、遺留物さえ見つからなかった。

今回の巨人面魚戦でわずかな間に十一名中、四名もの命が失われたということだった。

「済まん。ワイらがおつたと言つんに……」

「お前らのせいじゃねえ。もともとこついつのが仕事だ。それに、仲間が死ぬのもう慣れてる。気にするな」

吐くように言うリヴァイの表情は硬く、淡路さんはそれ以上何も言うことが出来なかった。

帰りの道中はクジラ、シャチのおかげで楽に帰ることが出来た。特に巨大なシロナガスクジラの攻撃力は凄まじく、巨大な尾びれで巨人面魚の横っ面を殴るとその首が吹っ飛ぶほどだ。シャチの方も大きさはクジラに劣るものの、鋭い牙は巨人面魚の鱗を齧り取る程頑丈だ。その群れとなると戦闘力は凄まじい物だった。

エルヴィンはシャチとクジラへ調査兵団への入団を勧誘をしていたが、両種族からは海を回遊しなければならないという理由で断られてしまった。ただ、近場を泳いでいる時にひいちゃんが居て『一緒に遊ぶ』のは構わないらしいので、次回があるとすればひいちゃんを通

して援護してもらおうことになるだろう。  
そうこうしているうちに、ようやく壁が見えてきた。

海から帰って来た調査兵団の面々を迎えたのは人々の歓声だった。  
昔よりも余裕が出来たせいも、税金の無駄だの巨人にエサをくれて  
いるようなものだだのの暴言こそ少なかったが、それでも人々の好奇  
の眼差しは今も昔も変わらない。

強張る調査兵団の顔を見て、ああ、また人が死んだのかと息をつく  
声がちらほらと聞こえてくる。

壁外調査を終えて、兵舎へ帰る途中に歩む道は壁外が海になる前と  
同じものだ。帰って来た者も、壁の上で待っていた者も、帰路へつく  
調査兵団のメンバーの表情は皆一様に暗かった。

「あのハンジさんまで食われたんですか……」

「……ああ」

「皆、あんなに元気だったのに」

「おい、いつもの事だろ。俺達はいつも仲間の死を見てきた。違つか  
？」

「あいつらの分も、俺達が巨人を殺すんだ。それしか無い」

「エルドさん、ペトラさん……うう」

「あの人たちが死んだなんて、今でも信じられねえよ……」

「俺だって信じられねえよ。昨日だってあんなに笑ってた奴がよ  
……」

「ああ。本当に、自分が死ぬとは思ってなかったぜ」

「兵長済みません!! 私たち死んじゃって!!」

「皆! 本当にすまねえ!! あんなところで食べられると思ってなかつ  
たんだよ!!」

「死んでごめんねー!! 研究報告まだなのに!! これからまとめるか  
ら許してー!!」

全員が振り返ると、確かに死んだはずの四人が涙を流して立ってい

た。

あれ？



## キノコと河童とむろみさん

それは壁外調査の前日の事。

背中にカゴを担いだむろみさんが、珍しく貯水池に訪ねてきたのだった。

「へいへい皆おるー?」

上機嫌に片手を上げて近づいてくるむろみさん。そこに居たのは翌日の壁外調査に備えてイルカの騎乗訓練をしていたリヴァイ班とハンジ班だった。

「あれ、むろみさん珍しいね。ここに来るなんて」

「リヴァイとエルヴィンは居ないけど、どうしたの?」

「うん。明日海に出るって聞いたけん。景気付けにええもん持ってきたと」

そこで「どっこらせ」と呟きながらむろみさんが背中に背負ったカゴを下ろす。その中に入っていたのはカゴ一杯のキノコだった。

「何これ。キノコ?」

「わー。見たことないキノコじゃん。なにこれ食べれるの?」

「どうしたどうした? むろみさんが何か良い物持ってきてくれたのか?」

それまでイルカに乗っていた面々も集まってきた、むろみさんの持ってきたキノコを覗き込む。緑地に白い斑点のついた何とも言えない微妙なキノコだ。

「これ、毒じゃねえの?」

キノコを見て訝しげな顔をした兵士にむろみさんがばたばたと手を振って笑った。

「いや、それがくさ毒っぽい外見とは裏腹にちかっぱ美味かったけん。毒もなさそーやし、食べると景気の良い音がしよるし、これは出発前に皆で景気付けせんと思っと思って持ってきたと」

「マジでか。そりゃ面白いな」

「んじゃ焼いて食うか。誰か魚醬持ってるか? キノコにかけたら美

「味いだろ」

「俺、マイ魚醬持ってるぞ」

「アタシ七輪持ってるけんこれで焼こう！」

「あ、じゃあ私が火を起こしますね!!」

じゅっじゅっじゅっじゅっ。

「おお、これは美味しい!!」

「変な言い回しになるが、何か自分が一人増えそうな味だな」

「今頭の中でぴろりろりろんってなったぞ!? 何だこりゃ面白れえ!!」

「目を瞑ると×1って見えるんですけど、何ですかねこれ？」

「さあな。それにしても美味しいキノコだな。もう一個食べていいか?」

「おいしー!! あ、×2に増えた」

「よかよか! どんどん食いー!」

そうして、むろみさんが持ってきたキノコで束の間の焼きキノコパーティーが始まった。

謎のキノコはあっという間に無くなってしまった。その上、別に取り分けておいたはずのリヴァイとエルヴィンの分まで間違っつてむろみさんが焼いてしまったので、戻ってきた二人には皆で内緒にしておくことにしたのだった。

「そんなわけで、私たちは確かに巨人面魚に食われて死んだ。でも気が付いたら兵舎裏のゴミ箱から出てきたんだよね。すばーんと」

手を広げて飛び出すジェスチャーをするハンジ。ゴミ箱というのは、調査兵团本部の裏に設置された共同ゴミ箱の事だろう。纏めて燃やす為、兵舎内のゴミを一時的に貯めておく物なので結構大きいのだ。

「最初はその世かと思ったんですけど、すぐ兵舎の裏って解って驚きましたよ」

「皆で怪我が無いか確認してから慌てて壁まで戻ったんですけど、したら団長達が帰還して戻ってくる途中だったんですけどね」

「済みません!! 早く声をかけようと思ったんですけど、何か気まずくて声をかけられなかったんです!!」

「……それで黙って後ろからついて来ていたと……」

死んだはずの仲間が何か生きてた。

それはとても喜ばしい事なのだが、何故だか釈然としない雰囲気個室内を満たしていた。

「ちよっと待て。つまり、その謎のキノコを食ったせいで一度死んでも生き返ったとお前らは言いたいんだな? しかも裏のゴミ箱から」  
片手で頭を抑えているリヴァイに生き返ったメンバーが頷いた。眉間に皺を寄せたレアな表情はおそらく、歴戦の兵士長とも言えどもこの状況には心底困惑しているせいだろう。

「まあ共通点から考えて、多分そういうことですね」

「あと巨人面魚に食われた時GAME OVERとか見えたよな」

「あ、私も見たよ。死んだと思ったすぐ後に。あと変わったことと言えば目を瞑ると見える数字が一つ減ったくらいかな?」

生き返ったメンバーが口々にその時の状況を話すと、黙って聞いていたエルヴィンは数度頷いて、椅子に座っているむろみさんに視線を向けた。

「なるほど。むろみさん。その時持ってきたキノコはまだ残っているのかい?」

「うん。ただ、エルヴィンに言われて今朝もう一回森に行ったっちゃけど、もう一本しか生えとらんかったい」

むろみさんが人を復活させるといふ謎の緑色のキノコを机に乗せる。全員の注目を浴びるキノコは、ちよっと毒っぽい外見をしているがどこからどう見ても普通のキノコだった。

「ねえ、むろみさん達は長生きしてるんでしょ? 今までにこういう状況の事例とか無いの?」

ハンジが机から身を乗り出して聞くと、むろみさんは顔の前で手を振った。

「いんや、流石にアタシも初耳やけん。普通、食われたモンが生き返るはずなかと」

「俺もそげん事例は聞いたことがなか。普通はそれが自然の摂理うちゅーもんたい」

むろみさんの隣に座っていた人物も同意するように厳かに頷いた。

「だよなーと全員が同意する中で、困惑した顔のペトラがおずおずと手を上げる。」

「あの一。皆さん、お話合いの最中ですが質問良いですか？」

「何ねペトちゃん」

「そちらの緑色の方はどなたでしょうか？」

全員の視線がむろみさんの隣に座る、緑色の亀とも人とも言えない人物に寄せられると、エルヴィンが真っ先に緑色の彼に手を向けて紹介する。

「彼は河童の川端さんだ。不思議な植物や薬草の権威だそうで、私がむろみさんに頼んで来てもらったんだ」

「人間は好かんがむろみから変なキノコがある言われたけん。興味があつて見に来ただけたい」

「こつは言ってるけど、川端君は博識で良い人やけん。怖がらんでもよかよ」

「はあ……私はペトラ・ラルです。よろしくお願いします」  
「んむ」

「まあ、それぞれ自己紹介は後にして、川端さん。まずはこの復活キノコのことについて調べてもらいたい。出来れば早い方が良いんですが、できますか？」

「そら、調べてみることに何とも言えん。人が生き返るキノコなんぞ俺も初見やからな」

「希望があればこちらでも出来る限り支援しますので、遠慮なく言ってください。あと、このことはくれぐれも「内密」……」

「ああ。解つとるけん、心配すな」

エルヴィンからキノコを手渡される川端くん。まったく動じずに当たり前のように川端くんに話しかける団長は、もはや流石としか言

えない。この団長殿は使えるものは異生物でも使うらしい。

「もしかしたら壁内の謎の食糧流入とかとも関係があるかもしれないね」

ハンジがぽつりと呟くように言うと、隣に居たケイジが反応する。

「ああ、あの妖精社のですか？ まだ工場が見つからないんでしたっけ？」

「でも妖精社のおかげで壁内の食糧不足が解消されてるんだろ？ 誰がやってるんだか解らんが、俺は有難いと思うけどな」

「妖精やと!?!」

彼らの話を聞いていたのか、ぎんっ、と川端君の鋭い眼光がハンジ達に向けられる。普通の人なら思わず体が竦むほどの鋭い声だ。

「何ね川端くん。いきなりおらびよって」

「何か解るんですか!?!」

驚いたようにエルヴィンとむろみさんに尋ねられ、しかし、川端くんはすぐに考え直したようにクチバシに指を当てると緩く首を振った。

「む……んじゃ……何でも無か。まだ断言は出来んけん」

「おい、河童。煮え切らねえこと言っただけでねえではつきりしろ」

常識の範囲外の出来事が続いたせいかりヴァイが苛立ち交じりに言うと、川端くんが睨んだ。河童と人類最強の睨み合いという何だか異様な光景に全員が固唾を飲んで見守っていた。が、先に肩の力を抜いたのは川端くんの方だった。

「ふむ、俺にも妖精の事はよー解らん。ただ、奴らが原因なら妙な事は起きても人死にはせんたい」

「何だそりゃ」

手に持った緑色のキノコを見つめながら、博識な河童は呟いた。

「世界は不思議に満ちてるけん。それしか言えん」

歌の練習を終えたシガン、しなごとエレン、ミカサ、アルミンは壁の中の人類で初めて海に出て、初めて帰って来た調査兵団のメンバーに挨拶をするべく廊下を歩いていった。

アイドル部隊はコンサートを控えた重要な時期であるため、みだりに外出は出来ない。その為、帰還パレードの時に三人は街へ調査兵たちを迎えに出られなかったのだ。

「なあ、海を泳ぐってどんな感じだったのかな？」

「僕にも解らないけど、きつと泳ぐことは気持ち良かったんじゃないかな」

「良いなあー俺もイルカに乗って海に出てみたいけど……そうだ、むろみさんに頼めば乗せてくれるかな？」

「エレン、一人で海に出たらダメだからね」

「んなこと解ってるよ!!」

三人が本部の会議室の前まで来ると、突然ドアが開かれ中から緑色の河童こと川端くんが出てきた。

「あっ」

危うくアルミンがぶつかりそうになると、川端くんは「おっと」と言いながら両手で紳士的に受け止める。

「すまん。怪我は無かか？」

人魚とはまた違う見知らぬ異生物にアルミンが首だけコクコク動かすと川端くんは「そか。次から気をつけな」と言いながら去って行った。

「今のは一体……」

「また人間じゃない生き物かよ……まあ、むろみさんとかでもう慣れたけどさ。……ってミカサ？」

何と、あのミカサがエレンの背後に隠れて震えていたのだ。ありえない。という表情を二人がすると、ふるふる子ウサギのように震えていたミカサがそっと顔を上げる。

「奴はもう行った？」

「ああ。だけど、どうしたんだお前。顔色悪いぞ」

心配そうにエレンが尋ねると、ミカサはガバっと二人の肩を掴ん

だ。

「エレン、アルミン。今度あの生き物を見かけたらすぐに逃げたほうが良い。絶対に」

「何で？ 凄く紳士的な人だったのに」

「ダメ。奴は河童。何でここにいるのか解らないけど、あれは川の妖怪。気を抜いたら尻子玉を抜かれる」

「しりこだま……？」

目を据わらせて言うミカサに二人が首をかしげると、ミカサは更に力説を始めた。

「そう。小さい頃、一人で川で遊んでて叱られた時、お母さんに言われた」

それはエレンに会うよりも前の小さい頃の話。ある夏の日、あまりの暑さに耐えかねて、ミカサはダメだと言われていたにも関わらず一人で川に行って遊んだのだった。

家に帰ってから一人で川遊びをしていたことがバレたミカサは真剣に母親に怒られた。

「いい、ミカサ。川は水の流れが危ないだけじゃないの。川には河童っていう妖怪がいてね、一人で川なんかで遊んだらお尻に手を突っ込まれて尻子玉を抜かれちゃうのよ!!」

「しりこだまって何？」

「魂みたいなものよ。一人で川なんて……お母さん、ミカサが河童に浚われて尻子玉抜かれ無いか凄く心配するんだから!! 今度から絶対一人で川で遊んじゃダメよ!!」

「お母さん、心配させてごめんなさい」

そつという事があったらしい。

「それから私は言いつけを守って一人で川には行かないことにした。河童は妖怪だから武器はきかない。だからエレンとアルミンも絶対河童に近づいちゃダメ。どうしても会うときはお尻を押さえて尻子玉を抜かれないようにして」

「わ、解ったよ」

「じゃあ、皆にも言った方が良いのかな？」

「うん。言った方が良い。出来れば調査兵団の全員に知らせるようにしなくちゃ」

後日

「済まんが、エルヴィンがどこにおるか解るか？」

兵舎に来ていた川端くんが兵士の一人に尋ねると、彼は飛び上からんばかりに驚いて自分の尻を押さえる。

「はい！ 右奥の部屋におりましたー」

「そうか。すまんの」

見れば先ほどからすれ違ったび男女問わず兵士が尻を押さえたり内股になったりしているのは気のせいか。

その時、向かいからリヴァイ兵士長がやってきた。

「よう。相変わらず機嫌悪げな顔だな」

普段は声なんてかけないのだが、気まぐれに話しかけるとリヴァイは驚いた顔をして素早く手近な壁に背中を押し付けた。

「俺の後ろに立つんじゃねえ!!」

気分の悪い奴だなと思いつながらエルヴィンが居るらしい部屋のドアを開ける。

「すまんの、邪魔する」

室内に立っていたエルヴィンと目が合うと、その足がきゅっと内股になった。

その後、すぐに誤解は解けたが、何人かは今でも川端くんと会ったびに尻が竦むそうな。

今日も人類は壁の中。



## アングラーと鳥とむろみさん

キース・シャーデイスは今日も壁の上に来ていた。

調査兵団の団長を務めて幾星霜。後任をエルヴィン・スミスに託したその後も訓練兵団を率いる教官として働き続けて幾年月。

結婚もせず、趣味と呼べる趣味も持たず、ただがむしゃらに仲間を食らい殺した巨人どもをこの世から駆逐する事だけを考え続けて生きてきた。

ところがどっこい。壁外が突然海になり、知らないうちに壁内の食糧事情が大幅に改善され、巨人の代わりに湧いて出てきた魚型巨人は完全海棲で陸地での活動が不可能だ。

諸々の事情が安定したせいか、ずっと巨人殺しの術を叩きこんで鍛え上げてきた教え子たちは今や人気アイドルやら敏腕マネージャーやら歌手やら戦隊ヒーローやら養蜂園の主になっている。どの訓練兵もそれぞれの道を歩み始め、この前はジャン・キルシュタインから身内用だとシガン　しなのライブチケットとメンバーのサイン入り色紙を頂いた。

ウォールシーナで開かれた壁内戦隊ケンペイダンの小劇を見に行けば、憲兵団に進んだアニ・レオンハートとマルコ・ボットがケンペイダンイエローとグリーンに扮していて、小さな子供から歓声と共に多大な拍手と賞賛が送られているのを見た。

駐屯兵団に行ったミーナ・カロライナ他、多くの女子勢は駐屯兵団広報隊で歌手をこなしていると聞き及ぶ。

ついでに言えば出来ちゃった婚で退団し、ウォールローゼの東側で養蜂農園を始めたフランツ、ハンナの両名からは先日高価なハチミツが大瓶で送られてきた。

また、立体起動の訓練は兵団のカリキュラムに組み入れられているにはいるが、外海の人魚達から魚介類の輸入が出来て、妖精社が何故か壁内に食糧をばらまいていて、おまけに外から巨人が入ってこな

い、こんな楽園みたいな状況が続くなら別に無理して訓練したり外に出たりしなくても良いんじゃないかなーなんて雰囲気がちらほら出始めた昨今。

今までずっと仕事一筋。訓練兵からは鬼教官と呼ばれ続けたキース・シャーデイスにもようやく興味が出来ようとしていた。

「今日はこの辺りで釣ってみるか」

そうぼやきながらキースは壁の上で道具を揃え始めた。

竿は黒金竹で作られた丈夫な投げ釣り用ロッド。韌性に富み、尚且つ軽く、既存の物に比べるとそう簡単に折れないのが特徴だ。

釣り糸はこれもまた黒金竹の葉の繊維を特殊加工したもので、麻や綿で作られた糸よりも格段に切れにくい。

そして何より、手元に備え付けられた自慢のリール。これはとある工房がつい最近考案したばかりの新製品で、これさえあれば今まで手が届かなかった沖の魚を狙えるようになる。まだ量産体制は整えられておらず、特注でやっと手に入れた高価な代物だ。今まであまり使わなかった給金の殆どをこいつにつき込んだと言っても過言ではないだろう。

釣針に壁の下で買って来たアミエビを取り付け遠くの沖合を睨みつける。

「ふんっー」

気合い一発、勢いよく竿を振ると糸は弧を描いて飛んで行き、はるか遠くの沖合へ上手い具合に着水した。

そんなキースの隣に座るのは、一羽の鳥幼女。

「ジジ、じょうずー」

「待っておれハーピー。美味しい魚を釣ってやるからな！」

「Wk tk、Wk tk！ハーピー待つ！」

「はっはっは。期待しておれ」

今まで誰とも結婚せず、子供も作らず、訓練兵からは鬼教官と呼ばれ続けた男は今やただの爺馬鹿と化していた。

シーラカンスから深海魚のトラウマを与えられた後、立体起動訓練のための下見にいった森の中で出会ったハーピーとキースはその後何故か物凄く意気投合してしまったのだ。

いや、正確には最初こそキースはハーピーから情報を引き出すなり、訓練をつけて後の兵団の役に立てるべきかと思っていた。のだが、残念ながらハーピーは身体能力はともかく、三步で全てを忘却する鳥脳だった。

(そういえば、魚どもやむろみ嬢を初めとした人魚は皆、猫よりも自由すぎて兵士向きでは無かったなあ……)

あの日の魚の訓練でほとほと人外を相手に訓練をつける事に疲れしてしまったキースは、世の中の平和な論調も災いして(もう人外はどうでも良いかな)とってしまったのであった。

第一次接近遭遇を終えた後もハーピーとキースは何度かの接触を繰り返した。その度にキースは干し魚で餌付けをしたり釣った魚で餌付けをしたり自分の食糧を分け与えて餌付けをしたりした。そのうちにハーピーはキースを忘れなくなり、いつしか二人はすっかり爺と孫の関係になっていたのであった。

海へ垂らした釣り糸が魚に引かれる気配がした。

「今か!!」

「ジジィ… ヲット… ヲット…」

キリキリと糸を巻き上げるリール。波間に跳ねる魚影を見るに、釣針の先には七十センチはあるつかと言つ魚がついていた。

「ぬう、重いな!! だがこれからだ!!」

しなる釣竿。重たい手ごたえ。暴れる魚を抑え込み、近くまで引き寄せた所で思いきり引き上げるとザバンと音を立ててハマチに似た魚が引き上げられる。

「ジジィ…」

「ははは。さあこの場で捌いて食つとするか」

釣った魚を前に、にこやかにナイフを取り出すキース。もしもこの場を訓練兵が見ていたら「お前誰だ!」と言われるほどキャラが崩壊していたのだった。

「しかし、この歳になって子より先に孫を持つとは思わなんだな」

刺身にした魚に魚醤をかけて、フォークで刺しつつキースはぼやく。

「マゴ、何?」

隣からのぼやきが聞こえたのか、隣に座ってばくばくと魚を食べていたハーピーが首をかしげた。

「孫と言うのは、まあ平たく言えば家族みたいなものだ。私は仲間以外の家族はついぞ持たなかったからな……」

「ハーピー、カゾク?」

「そうだな。お前さんの実年齢は知らんが、ハーピーは私の初めての孫みたいなものだ」

「カゾク、家族?」

ポンポンと頭を撫でられたハーピーは暫く考えるように首を傾げていたが、ぱつ、と思いついたように立ち上がり羽をはためかせた。

「ジジ、ハーピーの家族。ならイエティもジジの家族?」

「イエティ? それはハーピーちゃんのお友達かい?」

聞きなれない名前は一体誰のものか。軽い気持ちで聞いたつもりだったが、ハーピーはやる気満々のように両手を上げた。

「イエティ! 俺の嫁!! ジジ、ハーピーの家族! ならばイエティ、

ジジの家族! ジジ、イエティ会つがよろし!」

「む!? 一体何を!? ハーピー!」

言つや否や翼を羽ばたかせたハーピーはキースの両肩を力強い猛禽の足でガツシリと掴むと天空はるか高くに飛び上がった。

「おおおおおおああああ!!!」

突如としてキースの体が上昇していく。

いくら壁の国の兵士が高所に慣れているとは言っても、それは精々立体起動で登れる巨大樹程度の高さである。こんな、地平線のはるか

先まで見渡せるようなような高さは初めての経験だ。

「ハーピー、何をするつもりだ!?!」

「ジジ、ヒマラヤ行くべし!!」

「ヒマラヤ!?!」

そしてキースの両肩を掴んだハーピーは壁上からジェット機をも凌駕する猛烈な飛行スピードで、地平線の先に向かって飛び出した。

おそらく、こんな所まで来た人間は今まで誰もいないに違いない。少なくとも壁内史上ではキースが初めてだろう。

下を見下ろせばそこは一面の大海原。上を見れば、まるで吸い込まれそうなほどの青。当たり前前の事だが、やはり空の上には巨人はいなかった。巨人どころか生きているものはどこにもおらず、手を伸ばせば雲さえ掴めそうなその場所で、両肩をハーピーに捕まれたキースは呆然と周囲を見回していた。

(一体、どこまで行くつもりなのだろうか)

ハーピーはヒマラヤと言っていたが、キースにはヒマラヤが何なのか、どこにあるのか見当もつかない。そもそも人類が壁に囲まれて以来、壁の外の事を知っているものは殆ど居ないのだ。

まるで夢でも見ているかのような気分だが、体に当たる風は紛れもなく本物で、そして何より眼下に広がる遙かな世界は目を奪われるにふさわしい。

(あれは一体……)

眼下に広がっていた大海原はいつの間にか陸上になっていて、そこは真っ白で巨大な砂漠が広がっていた。見る限りでは動く物は何も無い、ただ一面の砂の雪原。ハーピーの飛行速度は凄まじく、それも流れるように過ぎ去ると、今度は大きな山々の中央にグズグズと蟠る真っ赤な溶岩が煮えたぎっているのを見た。瞬間、ゴゴゴと地鳴りのような音を立て、火を噴き上げた山から流れ出るのは正しく炎の水である。それらもあつという間に過ぎ去って、ハーピーは更に高度を上

げていく。

空気が段々と冷えてきて、まるで雪の中に放り込まれたような低温に体が震えたその瞬間、キースは目の前の光景に体の震えが止まるほど驚嘆した。

「な、何だこれは!」

大気圏のギリギリまで上昇したハーピーから見た風景。それは、眼前一杯に広がる地球の形であった。弧を描いた地平線のその向こうにある白い大陸は、おそらくかつての人類が『氷の大地』と呼んだものだろうか。

それにしても恐ろしい。

何十年もの昔、壁外調査をするにあたって閲覧したどこかの文献。その中に異端が唱えた学説が載っているのを読んだことがあるが、誰もが一笑に尽くした学説だった。あれはどこの誰が書いた文献だったか。すでにその文献がどこに行ってしまったのかは忘れてしまったが、世界が丸く閉じられているなど、一体誰が信じようか。

しかし、それが、真実として目の前に突き付けられていることにキースは寒さとはまた違う身震いをした。

今なら人を食う巨人はが居た事はベッドの中でキースの見たただの悪夢だと言われても信じただに違いない。

世界は丸い。

壁の中に居たら絶対に知りえない真実を知ってしまった恐怖が全身を泡立たせた。

「砂の雪原、炎の水、氷の大地……そして丸い世界……この、全てが本当にあるものだったというのか!」

壁外に出るに当たって調べた資料に見かけた単語の数々。そんなもの、有りはしないと笑った現象。全てが夢物語の産物だと思われていた物が、次々とキースの目に飛び込んでくる。

「……エレン・イエーガー辺りに見せたら狂喜乱舞しておったろうな」  
なんとも勿体ない。と顔を引きつらせて笑うキースに、ハーピーが囁いた。

「ジジ、もつすぐー! もつすぐー!」

「ん？ なにが……ぐああああああ!!!」

いきなりハーピーが急降下し始めた。

両肩にかかるGは上昇時の比ではなく、今まで鍛え続けてきたキースの肉体で無ければ骨が粉々に粉碎されていたに違いない。

しかし、肉体的には何とか無事でもスピンをかけた上に猛スピードで落ちるように降下するハーピーに全身を振り回されたキースはいつの間にか失神していた。

「はっ!? 私は一体!?!」

気が付くと、そこは見知らぬ場所だった。何とか痛む体を起こして辺りを見回すと、湿った空気とゴツゴツとした岩の壁。

察するに、どうやら洞窟の中らしい。

「お爺さん大丈夫ですか?」

ふとかけられた声の方を見やると、全身がモコモコした毛で覆われた子供がちょこんと坐っていた。

「お前さんは……」

誰か、と聞こうとしてと周囲に誰かが居ることに気が付いた。

「ジジ、おはよー! おはよー!」

「おー、キーヤン目覚めたと。鳥なんぞに攫われて大変やったっちゃない?」

そこには、むろみさんとハーピーが小洒落たウッドチェアに座ってお茶を飲んでいる姿。

「ごめんなさい。ハーピーが無理やり連れてきちゃったみたいで……」

モコモコの子供がとても申し訳なさそうにしている姿は、何故か守ってやりたい気持ち刺激されるがそれはとりあえず置いて。

「もしかして、お前さんが」

震える声でその名を呼ぼうとすると、ハーピーがぱつと近寄ってくる。そういえば、紹介するのを忘れてた。とでも言いたげにキースの

前に立ち。

「いえ、てい!!」

両手でモコモコの子供ごとイエティを示した。

「とていことは、つまりここは……」

キースは頭の中が次第に真っ白になりつつあるのを自覚した。ここにハーピーとむろみさんが居て、イエティがいて、ついでに洞窟みtainな場所、ということとはつまり……。

「ここは母なる山。ヒマラヤです」

「まあ、キーちゃんから見れば壁の外の遙か遠くって事っちゃね」

イエティとむろみさんがお茶を飲みながら楽しそうに答え、ハーピーが「ヒマラヤ ヒマラヤ」と囁いた。

「まあ、キーちゃんも今日はここに泊まっていくと良かね。イエティもええっちやるっ」

「うん。僕は良いよ」

入口らしき方向を向いてみると、そこは雪山訓練でも見たことが無いような猛烈なブリザードが吹いていて、外に出るのは不可能なようだった。

「粗茶ですが……」

イエティに差し出されたお茶からは暖かな湯気が立ち昇る。

その日、色んなことがありすぎたキースは本気で頭を抱えたのだった。



## チキンハンターとわたしと秘密のお茶会

その日、サシャとコニーは朝早くから森に来ていた。

背中には自作の弓矢、腰には獲物をおびき寄せるための僅かな穀物類を入れた袋を下げている。

何故二人が森に行くのかと言えばそれは昨今、森の中で加工済みのチキンが歩いているという噂を聞きつけからだ。

「おい、やっぱりマジで行くのかよ」

面倒くさそうにしながらもサシャの後を歩くのは、サシャと並んでおバカコンビと名高いコニー・スプリングー。

「もちろんです。狩猟民族として、羽も頭も無いのに歩くチキンを見てみたいじゃないですか。知的好奇心を刺激されるじゃありませんか。そして何より味を確かめてみたいじゃありませんか!!」

たりり、と涎を垂らしながら吠えるサシャの横で、コニーは心底呆れた顔をした。

「それ、単にお前が鶏肉食いただけじゃねえの？ 言っとくけど歩くチキンなんて噂だからな。本当に居るとは限らねえぞ」

「でもでも、火の無い所になんとやらとも言っじゃありませんか？」

手入れのあまり施されていない森の獣道を、二人は狩猟民族らしく慣れた足取りで歩いて行く。

「なあ、今思い出したから言うけどさ、この前行方不明になってたキース教官が帰って来たって聞いた？」

「はい、もちろん知ってますよ。鳥に攫われて壁外に飛んで行ってしまったとか上空から見た大地が丸かったとか言っつて、上から休養命令が下されたと聞きました」

「それってマジなのかな？ 教官が本当に壁外に出たと思うか？」

「さあ？ でも教官、最近疲れてるようでしたから休養は丁度いいんじゃないですか？ 私たちの兵団選り期間だつてもうしばらくありますし、次期訓練兵団の結成もしばらくは様子見なんですよ？」

「らしいな。ところでサシヤ。お前は結局どこの兵団に行くんだ？」

「コニーに聞かれ、サシヤは難しい顔をした。

「どうしましょつかねえ。壁外が陸地の頃は憲兵団にしようかと思っ  
てたんですが、今は調査兵団の方が人魚さんと親しくなれて美味しい  
物が沢山食べられそんな気がするので迷ってます。コニーは決めま  
したか？」

「俺も同じく迷ってるよ。安全性だって外も中もあんまり変わらな  
くなったしなー。……そういえばライナーとベルトルトも兵団選びで  
迷ってるらしいぜ。あいつら真つ先に憲兵団に行くと思ってたんだ  
けど解んねえもんだな」

「やっぱり美味しい物が絡むと皆迷いますよねえ」

「ああ。まあ、お前と一緒にだとは限らねえけどな」

そんなことを話しながら森の中を進む事数十分。邪魔な草を薙ぎ  
払いつつ、神経を研ぎ澄ませて獲物の足音を聞き洩らさぬよう慎重に  
道を選んで歩いて行く。

途中途中で赤や緑をした妙なキノコの群生や16×16ピクセル  
サイズの変な生き物が足元を駆け抜けていくのが見えたが、それらは  
お目当てのプロセスチキンとは程遠い。

偶に獲物かと思えば野兎だったり、イタチだったりのアズレばかり  
で詰まらない。そうこうしているうちに、随分と森の奥深くまで入り  
込んでしまった。

「……なあ、本当にチキンなんて居るのかな？ やっぱりガセじゃ  
ねえの？」

「いえ、諦めたらそこでお仕舞いなのですよ」

そろそろ帰ろうぜ。と言い出したコニーに対し、まだ諦めきれない  
サシヤはあたりの草むらを掻き分けている。もう探す気力がなくな  
ったコニーが暇だなーとぼやきながら足をぶらぶらつかせていると、ど  
こからか何とも言えない謎の音が背後から聞こえてきた。

二人がそろって振り返ると、そこには頭を切られ羽を聳られ、あと  
は香辛料で味付けをしてこんがり焼くだけのチキンが静かに佇んで  
いる。

「チキン!？」

「チキン!! マジでチキンですよこれ!! 本当に居たんだけ!？」

目を見開いた二人が大声を出すと驚いたチキンは鳥肌をふるふる震わせて何とも言えない声を上げ、慌てて草むらの中に逃げ込んでしまっ。

「逃がすな!! 追っぞ!!」

「はい!! 絶対に奴を捕まえてコンガリ焼いて食べましょう!!」

サシャが涎を垂らしながら、矢をつがえて獲物を追いかける。その姿は、さながら獲物を屠る狩人(イエーガー)。限界まで弦を引き絞り、一気に解き放つのも意外と素早いチキンはするりと身を躲して転げるように背の高い草の中に隠れてしまっ。

「くそっ、ここに立体機動装置があれば!!」

「まだ近くに居ます。一手に分かれて追い詰めますよ」

「おっ…」

チキンをおびき寄せるための穀物を手に、サシャとコニーは二手に別かれてチキン搜索を開始した。

「……中々見当たりませんね」

コニーと二手に別かれて数分。すぐに見つかると思っていたプロセスチキンは一向に見当たらない。

普通ならば首無し鳥が歩いている事自体が気持ち悪いと思うのだが、サシャとしてはそんな事はどうでもよかった。滅多に食べられない丸々と太ったチキン。美味そうなチキン。塩を振ったチキン。こんがり焼きあげたキツネ色のジューシーチキン。今はただひたすらに、チキンが食いたい。

「チキーン。出てきてください。美味しく美味しく食べてあげますから」

あふれ出る涎を袖でぬぐいながら囿のエサをばらばらと蒔く。瞳孔が開き切ったサシャの目は草の中に向けられていた。全身からあ

ふれ出る気迫は、絶対にチキンを見逃してたまるかという強い意志。

「チキンチキンチキンチキン……痛ッ！」

しかし、何が起きてもチキンを見逃してたまるかという凄まじい集中が仇になった。草の中ばかり見て歩いていたサシヤは、目の前にそびえ立つ巨木に気が付かずにしたたか頭をぶつけてしまう。

「……なんですかこれ？」

慌てて見上げると、それは何やら見た事の無い不思議な木だ。幅広のシダのような木の葉にゴツゴツとした幹。しかし何よりサシヤの目を引いたのは、その甘く香しい匂いのする細長い黄色い実だ。連なるようになったその実を見ていると、何だか見ているだけで涎があられ出してくる。

チキンの事も気になるが、まずは目の前にある食べ物だ。とりあえず一本もいで食べようとサシヤが手を伸ばしたとき、木の前に一本の立札が立ててあるのに気が付いた。

『たいむばなな（あーかいぶせんよう）』

「もむもむ……たいむばなな？ むぐむぐ……何でしょうかね？ うきゃあ!!」

ねっとり甘い口当たりの香しきバナナを頬張っていたサシヤは立札を読むと、まるで決められていたかのようにその場ですてんと転んでしまった。

そこは未来か過去か、はたまたどこかの異世界か、それとも全く別の平行世界か。

だけど、そこはどこかにあった『優しい空間』。

サシヤが目を覚ますと、そこは森の中に広がる会場だった。大きな竈を中心に取り揃えられた沢山のテーブルと、テーブルの周りに集まっているのは沢山の見知らぬ女性たち。

彼女たちは一体どこから来たのだろう。サシヤの目の前には百人近くの女性が数々の食材を手に取り楽しげにおしゃべりをしながら

料理を作っているのだった。

「じいじは……？」

突然現れた見知らぬ空間に戸惑っていたその時、不意にサシヤの鼻をくすぐったのは甘くも神秘的なバニラの香り。

「あら、貴方どこからいらして？」

何が何だか解らずに、ただ呆然としているサシヤに気が付いた上品そうな一人の女性が声をかけてきた。

「あの、私ウォールローゼの森でチキンを探してたらここに来たのですけれど……一体ここはどこですか？」

周囲を見回しながらサシヤが尋ねると、女性は小首を傾げて「おやまあ」と驚いたように口に手を当てた。

「あらあら。それなら貴方は間違ってここに来てしまったのですね」  
そうして、何を知っているのか上品そうなその女性は穏やかに微笑んだ。

「あの……間違っ て来てしまったというのはどういうことか？」

「そうですね。つまり、偶然にも紛れ込んでしまった……ただのお客様ということでしょう」

サシヤの疑問に答えたのは、上品そうな女性とはまた違う妙齡の女性。  
性。

「そうそう、あの子たちが悪い子を連れてくるはずありませんものね。それならお客様ですわ」

「私たち以外のお客様が立っ て続けに来るなんて久しぶりですわね」

「あの、お客様って……？ というか、ここは本当にどこなんですか？」

段々不安になって来たサシヤの前に、そつと湯気の立ち上るティーカップが差し出された。見れば、そこには上品そうな女性や妙齡な女性とどこか似た雰囲気の初老の女性が穏やかに笑っている。

「まあ、ここ<sup>の</sup>事は考えても頭で解るものではありません。なので、お菓子が出来るまでとりあえずお茶でも飲んで待って行って下さいな」

バニラのように甘やかな声と共にさあさと白いレースのクロスの敷かれたテーブルに通されて、サシヤは砂糖とミルクがたっぷり入っ

た甘いお茶を飲みながら周囲を見回した。

なんだか不思議な場所だった。違和感だらけの居心地なのに、いつまでもいつまでも浸っていたい。まるで柔らかいベッドで見ている夢のような、そんな場所。

その場にいた女性たちは皆お菓子を作っているらしく、泡だて器でクリームを混ぜる音やナッツ類を砕く音、湯銭するためのお湯を沸かす音の他、甘いバニラやシナモンの香りが辺りを包みこんでいる。

「うーん。良い匂い……」

甘い香辛料の香りの他に、前方中央に据え置かれた竈からは、焼き菓子の焼ける甘い香りがふんわりと漂ってきた。

普段のサシヤならばすぐに飛びつくところだが、その日の彼女は珍しく黙って待っていた。ボヤボヤしていたら逃げてしまう獲物や、誰かに食べられてしまう食糧とは全然違う。ここで作られるお菓子は、必ずサシヤにも差し出される物だというのが何故だか解るのだ。

「ああ、美味しそう……」

チキンのことはどこへやら。ひたすら甘い匂いに惑わされ待ちわびるサシヤだが、ふとあることに気が付いた。

お菓子を作る百人近くの女性たち。

何故だか、サシヤには彼女たちの全員が同じ一人の人間に見えたのだ。

「不思議ですねえ。まさか全員親戚なんでしょうかねえ……」

涎をたりたりと垂れ流しながら暢気に周囲を見回すと、女性たちの陰に交じって見知った少女が目に入る。

テーブルで女性たちと仲睦まじくお菓子を作っていたのは、小柄な体躯に優しそうな青い瞳と金の髪。そんな彼女はサシヤと同じ訓練兵団104期生の……。

「女神!?!」

「ぜんたいい、とまれー!」

手のひらに乗せられるくらいのお人形みたいに小さな生き物、別名、妖精さん。

五人ほどの隊列を作った妖精さんがテーブルを歩き、クリスタの席の前で止まった。

「おかしかったですか?」「いいにおいがするです」「おなかすきすぎ?」

「じつとるおうかおりですー」「ぷりーずぷりーず」

「はい。順番に渡しますね」

初めて作ったホワイトマカロンを一つずつ妖精さんに手渡したクリスタは、最後に「はい」とサシャに差し出した。

「ありがとうございます女神」

恭しく受けとったサシャは、すぐにマカロンを頬張ると、ホロホロとお口の中で崩れる楽園のような甘みに幸せそうな顔を浮かべる。

「それにしても、クリスタはどうしてこんなところでお菓子作りを?」

テーブルに乗った他のお菓子をもむもむと頬張りながら聞けば、クリスタはミルクの入った紅茶を一口飲んで答えた。

「うん。私にもよく解らないんだけど、この子たちにもっと沢山お菓子を作ってほしいってお願いされちゃって……でも、私クッキーくらいしか作れないから」

クリスタが視線を向けた先には、マカロンを食べ終えた妖精さんたちが満足そうに転がる姿。

「そう。それで、クリスタさんは妖精さん達にここへ連れてこられちゃったってワケですよね」

「妖精さん達はお菓子が大好きですからね」

「ふーん。でもお菓子が食べたいならクリスタに頼まずここに来れば良いんじゃないですか?」

何気なくサシャが言った言葉に、テーブルに居た妖精さん達が一斉に反応した。

「じつ、あーかいぶですの?」「すでにほつわしてますし」「ここだけでもじやたりませぬ」「もとじんいをふやさねば」「べつじげんではにんずつにげんかいがありまくり?」

サシャには妖精さんたちが何を言いたいのかさっぱり解らなかつ

だが、目の前の女性には解ったのか楽しげにくすくす笑っていた。

「でもね、「こ」に連れて来てもらったおかげで知らないお菓子の作り方を沢山教わったんだよ。えっと、教えてくれた皆様、本当にありがとうございます」

クリスタが深々と頭を下げると、女性達は照れたようにわたわたと目の前で手を振った。

「いえいえこれが役目ですから、気になさらないでくださいね」

「だって私たちアーカイブですものね。人様に伝えてなんぼなんですよ」

「そうだね。今のうちにメモにレシピを書いておきましょう」

「あら、良いですわね。ペンはどこに置いたかしら？」

「あ、助かりますー！」

口々に言い合って笑う女性たちとクリスタを尻目に、サシャはテーブルに置かれたお菓子ももぐもぐ頬張っている。ほろ苦い甘さのガトーショコラにふわふわのマフィン。クッキーよりもしっとりとしたサブレにさつくさくのメレンゲ、ビスコッティ、アップルパイ。ぷにぷに触感が楽しいグミキャンディーにはわほわのマシュマロ。舌の上で甘く崩れるラングドシャと喉越し爽やかなミルクプディング。極めつけは、サシャにはどうやって作ったのか見当もつかない、お口でとろける冷たい甘いバニラアイスクリーム。

食べたことのあるお菓子もあれば、見たことも聞いたことも無いお菓子もあったけれど、どれも共通して言えることはただ一つ。

美味しい、物凄く美味しい。

それは、テーブルでお菓子を頬張る妖精さんも同じ気持ちのようだ。一目見れば転がっているどの個体も満足げな表情をしているのがすぐに解る。

「もむもむ……ところで女神、むむむ……これは一体なんですか？」

口一杯にお菓子を詰め込みながらテーブルでクッキーを抱いて転がる妖精さんを今更ながらに指差すと、クリスタはちょっぴり困った顔をした。

「うーんと……多分、妖精さん？ って言ってみたい」



「妖精？」

「はい。妖精さんです。ですよね？」

一人の女性がテーブルの上の妖精さんに声をかけると、妖精と呼ばれた当の本人たちは首を傾げた。

「さー」「そうよばれていたよつなきもしますが？」「おすきによんでくだされば」「にんげんさん、おかしつくれます？」

「残念ながら、私はお菓子は食べる専門ですので」

「あー……」

あつさりとサシャに答えられた妖精さん達は、一斉に肩を落としたのだった。

楽しいことが大好きで甘いお菓子はもっと好き、でもお菓子作りは苦手だから、それを提供してくれる人間さんが何よりもだーい好き。旧人類が衰退した後に繁栄した小さな小さな新人類は、人間さんの

お願いならば少々の事は叶えることが出来てしまう。

例えば、欲しいお菓子の材料を用意するとか。

例えば、何も無い所に物資を補給するとか。

「知能を小麦粉に変えられた」ともありましたわね」

「まあ、使い処に難しい物も多々ございましたわ」

「ここのお菓子の材料も全部妖精さんが用意してくださいましたのよ」

「マジですか？」

楽しいことがあればたちまちのうちに集まって、一晩で高度な文明を築き上げるも飽きたらすぐに散ってしまっ。

繁殖法は誰にも解らず、何時から発生し始めたのかすら解らない。

基本的には人類の良き隣人。でも偶に暴走して周囲を巻き込んだ大事件が起きてしまう。

女性たちとの話によると、それが妖精さんという生き物らしい。

「何か、巨人とはまるで正反対ですね」

「うん。不思議だね。発生源不明とか、巨人の情報と基本は一緒なのに大きいか小さいかでこんなに絶望感が違うなんて……」

「にんげんさん、これおさしあげー」

帰り際、妖精さんの一人が豆本を両手に掲げてクリスタに差し出した。

「ありがとうございます。可愛らしい本ですね」

「あらまあ、妖精さんのマニユアル本ですわ。お懐かしい」

「はい、こちらはお菓子のレシピ。メモ帳にまとめておきましたわ」

「ありがとうございます。本当に助かります」

「お二人とも、もう帰ってしまうの？」

「残念だわ。もっと楽しんで行けばいいのに」

「それはとても名残惜しいのですが、連れを待たせているので私もそろそろ帰らなくては……」

楽しいお茶会も終わり、二人が帰る支度をしていると口々に女性たちから挨拶をされる。

サシヤは本気で泣きそうな顔をしているが、お茶会を初めてもう何時間も経っているはずだ。そろそろ「ニー」と落ち合わなければ本気でまずいだらう。

「でも、「ニー」からどうやって帰ればいいんでしょうか？」

「実は、私もよく解らないんだよね」

サシヤとクリスタが二人でしばし顔を見合わせていると、いつの間にかテーブルの上に置かれたバナナが二本。

隣に置かれたメモには「丁寧にも『おかえりはこちら』の文字と共にバナナに向けられた矢印が一つ。

それはとても解りやすい物だった。

行きに使った物とまったく同じ、黄色い果実を手にとって、二人そろって皮をむく。

「もぐもぐ」

「むぐむぐ」

しるっ。

そこは森の中だった。

「イテテ……」

転んだまま、空を仰いだ姿勢のまま、サシャは目を覚ました。

「戻った……？」

見回してみても周囲にあの黄色い果実の木は既に無く、普段通りの木々が大人しく生えそろっていた。

お茶会のテーブルは何処かに消え失せていて、一緒にお菓子を食べていたあの女性たちも妖精さんもクリスタも、サシャの傍には誰も居なかった。

「夢……ですかね？」

まるで現実味が無い、夢のような不思議な空間だったけど、食べたお菓子の味はきつと嘘ではないはずだ。なのに、こんなに自分の思考が頼りないのは何故だろう。

軽い眩暈に襲われながらふらふらとその場に立つと、ガサガサと目の前の草が揺れた。草むらを掻き分けてやってきたのは、ちよっと怒った顔のコニーだった。

「お前、こんなところで何やってんだよ!! もう三十分も探したんだぞ!!」

「たったの三十分ですか!?!」

「たったって……一手に別れてから三十分は長いだろ!?! もう、そんなことばっか言っつならコイツ別けてやらねーからな」

文句を言いながら、コニーは脇に抱えられていた物を見せつける。

「コニー……それは!?!」

「ふふーん! お前がどっかで油売ってる間に捕まえてやったぜ! チキンだ!!」

「コニーの掲げた物。それは、肌色で鳥肌でプルプルのあの時追いかけていたチキンだ。おいしそうなプロセスチキンがサシャの目の前にずいっと差し出されると、既に大人しくなったチキンの腹を見たサシャは、思わず笑ってしまった。」

「おい、何笑ってんだよ。腹が減りすぎてとうとうおかしくなったのか？ ははーん。どうしても言うなら別けてやらねーでもないけどな。」

「はい、是非別けて欲しいですけど、くくっ、何か色々解ってしまったんですよ。」

「は？ 何が解ったんだよ。」

「いえ、何にも解んないですよ？ ただ、あんなに食糧難に喘いでいた壁内に突然食糧が溢れ出した理由が何となく解っただけですよ。」

「え？ どうやってそんなこと解ったんだ？」

「だから、私にもさっぱり解らないんですけど。」

「意味がわかんねえ。」

首を傾げるコニーが手に持った美味しそうなチキン。

その腹には、妖精社のロゴマーク。

カタツムリに乗った、妖精さんの焼印が押されてあったのだ。

## 運命の出会いと隅田さん

「ふんふんふん」

壁の国とは離れたとある岩礁。そこにコンパクトを片手に髪の手入れをしている人魚が一人。何かよほど大事な用でもあるのか、髪だけでなくお肌の隅々まで丹念に鏡に映して身繕いをしている真っ最中。

「鼻歌まで歌って、何か機嫌が良さそうっちゃね隅田さん」

そこにむろみさんがざぶんと岩礁に身を乗り上げると、呼ばれた隅田さんは嬉しそうにお手入れしたての髪の毛を掻き上げる。舞い散る水の飛沫が太陽の光に反射して、まるで隅田さんが輝いているように見えた。

「あら、むろみじゃない。ふふーんやっぱり解るー？」

「その輝き方……、まさか新しい恋!？」

「あつたりー 実はこのまえ運命の出会いを果たしちゃったのよ!!」

頬に手を当てて興奮気味に語る隅田さんに、むろみさんは不思議そうに首を傾げた。

「えー、でも最近海にも陸にも人間さんあんまおらんことなってるやん。どこでそげな出会いあったと？」

「ふっふっふー。実は最近また壁の国まで遊びに行っただけどー、交流が増えても私たちって人間にとってはまだまだ珍しい存在じゃない? そんで街角で人魚狙いの暴漢に襲われちゃってー、危うく攫われるー!! って時に兵士のお兄さんに助けられちゃったのよー!!

『大丈夫ですかお嬢さん!』って!! その時みた彼がチョーかっこよくて!! これってマジ運命!? みたいな!？」

きゃーと顔を赤くして頬に手を当てて身悶える隅田さんに、むろみさんは呆れた顔をした。

「それって兵士として当たり前な気もするっちゃけど……まあでも、

そんなに身綺麗にしてるってことは会う約束でもしたん？」  
「そういつわけじゃないけどー。やっぱり恋は押すモンでしょ？ お礼も兼ねて最近毎日兵舎にも通ってるし、今日こそ彼をデートに誘っちゃおうと思ってバッチリ気合い入れてんのよ!!」  
「ほほー。確かに兵士なら今までの漁師とは違うタイプっちゃね。まあ、アタシも応援してるけん。ところで相手って誰？」  
「むろみー！ ありがとうー！ えっとねー彼は調査兵団でー凜々しいお顔と自由の翼のマントが似合っ……」

「グンタ、最近隅田さんと付き合ってるってホントですか？」

みかりん猫耳カチューシャを付けたペトラが尋ねると、グンタは飲んでいたお茶を床に嘔き出した。

「ああ、確かこの前暴漢に襲われてたのを助けた子だったな。そういえば最近ってか、毎日来るよな」

げっほげっほと咳こんでいるグンタに、犬耳を付けたえれえれのデフォルメイラストがプリントされた団扇で顔を仰ぎつつエルドが言った。

「グンタ、テメエも隅におけねえガフツ」

お決まりのように舌を噛むオルオの手には、うさミン手掘りキーホルダーが握られている。

現在、調査兵団はライブで販売するシガン しなグッズの作成を総員で行っており、リヴァイ班（リヴァイ除く）は現在分担された商品の検品と梱包作業の真っ最中だったりする。

「いやいや、確かに隅田さんは最近会いに来てくれるけど、それは絶対無いだろ」

ようやく酷い咳込みから復活したグンタが顔の前で手を振ると、木箱に山盛りに積まれた黒い猫耳を紙袋に押し込むペトラが不思議そうな顔をした。

「え？ 何ですか？」

「異種族だろ。普通に考えて」

「えー。愛さえあれば種族なんて関係ねえじゃん」

「会ってからまだ一週間も経ってねえつつうの。大体人魚だぞ？ 足が無いんだぞ」

「良いじゃねえか。可愛いんだし。足なんて無くても時間がありや愛は育めると思うぞ？」

「いや、エルド。足があるか無いかはかなり関係あると俺は思うぞ」

「もしかしてオルオもグンタも足フェチですか？」

「断じて違う」

「ふっ、俺は女の生足は好きだぜペトラ」

「おいオルオ。かっこよく言ってもそのセリフはかなりかっこ悪いぞ」

そんな掛け合いをしながらも、四人は暫く黙々と作業を続けていた。

作業の工程は至極簡単で、木箱に大量に積まれたシガン しなグツズを一個一個、商品名の書かれた紙袋に入れて口を折り、別の木箱に丁寧に並べていくという作業だ。普段は外で厳しい訓練をしている身としては、何故このような内職作業に身を置かねばならぬのかというやるせなさに心が折れそうになる所だが、全ては上からの命令だ。上官の命令ならば悲しいかな、兵士としてどのような内容でもきっちりこなさねばならぬのだ。

まるで家計の為に細々と内職する主婦のように黙々と作業をしていると、ふとペトラが思い出したように呟いた。

「ねえ、ちょっと気になったんだけど良いですか？」

「何だ？」

「おう、言ってみろ」

「ちょっと考えたんですけど、もしも人魚と人間の間に子供が出来たとして、その子はどんな姿になるんですかね？」

そこで、全員の手が一瞬止まった。ふと想像してしまったのだ。

「……………下半身が鱗の人間？」

エルドが難しい顔をした。

「尾ひれが二股に別れた人間っぽい人魚とか？」

困惑気味にオルオ。

「ってか、どうやって生まれるんだよ」

グンタが突っ込むと、ペトラは猫耳をプラプラと振りながら答える。

「人魚は年に一回卵を産むと聞きました。体外受精だそうなんですけど実際どうなんでしょうかね？ 人魚ってメスしか居ない上に、今まで繁殖した例が無いってむろみさんは言っていましたけど」

「繁殖しないで今までどうやって種族を保ってきたんだ？」

「だから、ずーーーーーっとして生きてたそうです。それこそ何億年も」

「すげえな人魚」

「人間も見習いてえ所だな」

まるで信じていないように軽く受け流す面々に、ペトラは猫耳力チューシヤを手首にぶら下げて人差し指を立てた。

「だから、私思ったんですよ。もしも人魚と人間のハーフが生まれたとしたら、その子孫は人類の血を受け継ぎながらも巨人や巨人面魚に狙われなくなる存在になるんじゃないかと……」

ペトラの意見に、その場にいた全員に衝撃が走る。

「そうか……俺らがダメな場合、そういう手があったな」

「そういう手ってどんな手だよ!？」

顎に手を当てて真剣な顔で考え込むエルドにグンタが突っ込みを入れる。

「つまり、グンタには未来の新人類の礎となってもらうというわけだな。ハハ、流石ペトラ。考えることが違うぜ」

「おいオルオ、テメエちよっと黙ってるよ」

「でも実際、隅田さん可愛いだろ？ いっつもお土産にウマイ魚持ってきてくれるし、すげえ健気じゃねえか。ちょっと付き合うくらいバチは当たたんねえんじゃないの？」

「無理だ。というか人魚だったって魚だろ!? 魚は無理。絶対無理」



「ええ、グンタそれちょっと酷くない!? そついうこと絶対に言ったらダメですからね!」

そつして手を動かしながら他愛の無い話をしていると、ドアをノックする音が聞こえた。「失礼します」と体でドアをこじ開けるように入ってきたのは、調査兵団に入ったばかりの新兵の一人だ。

新兵はリボンが結わえられた、両手にやっと抱える程大きなミナミマグロを抱えている。鮮度は大変抜群で、今にもピチピチと跳ねだしそつに瞳の綺麗なマグロであった。きつと今日の夕食にはマグロの刺身と焼き物が出るに違いない。

マグロを抱えた新兵は、グンタに目を向けると全員が予想していた通りの一言を発した。

「あの、グンタさん。今日も隅田さんが来ました」

兵舎の入口には目一杯におめかしをした隅田さんが、器用に尾びれで立っている。

いつもと違う新品の胸当てに、普段はしないウォーターブルフのお化粧は薄く自然な感じに仕上げていた。髪の毛もしっかり手入れを入れてゆるふわ系に決めている。あまりにもキメまくった様子の隅田さんを前に、グンタはちょっと困った顔をして佇んでいる。

「ごめんなさい。急に押しかけちゃって……」

「いや、良いですよ。こつちこそいつもいつも魚貰ってて……ありがとう」

グンタがお礼を言った瞬間、隅田さんがキヤッと照れたように笑う。

「良いんですよーこれくらい!! 魚なんて海に一杯いますから!!」  
「そ、そつなんだ。で、何か用なのかな……?」

冷や汗たらたらで要件を聞くと、隅田さんは恋する乙女丸出しの瞳をグンタに向けてにじり、と詰め寄った。

いかん。隅田さんは、こつで決める気だ。

「実は、あの時暴漢から助けられて以来、グンタさんの事が忘れられないんです。是非、私とおつき」

「ごめんなさい!!」

隅田さんが言い切る寸前に物凄い勢いでグンタが体を九十度の直角に曲げて頭を下げた。

「自分、親から代々人外とは付き合っではいけないと言いつたに聞いてるんです!! 隅田さんはとても魅力的ですが、ほんとーにほんとーに申し訳ないけど、付き合えません! ごめんなさい!!」

そうして、また隅田さんの恋の花が一つ散ったのであった。

「ひつどーい!! そういつのって普通にフられるよりよっぽどタチ悪いですよ!!」

「見損なっただぞグンタ!! お前そついつ言い方って無いだらうっ!!」

「なんて野郎だ。あんまりだな」

「げっ!! お前ら何でここに居るんだよ!!」

ふと振り返ると、兵舎の陰からずっと見ていたらしき三人がぞろぞろ出てきてそれぞれがグンタを詰っているのであった。

「早く隅田さんに謝ってくださいよ!!」

「何でだよ!!」

「そつだそつだ!! 早く謝れ!」

「いや、その。でもやっぱり下半身魚はちよつとだなあ……はっ」

つい口から滑らせると、先ほどからずっと黙り込んでいる隅田さんの肩が僅かに震えた。

「……そつよね……やっぱり足のある女の方がずっと良いのよね。フフ……人間の男なんて……男なんて……」

「隅田さん?」

ふるふると震えていた隅田さんは、あふれ出しそうな涙をこらえるようにキッと顔を上げると大きく息を吸って叫んだ。

「そんなの解ってたわよバカー……!!!!!!」

隅田さんの大声は大気を震わせ、壁の向こうの海にまで響き渡る。雲は消し飛び波は荒ぶり無数の巨人面魚が海面を跳ね壁内の木々がざわめいた。そしてその大音響が消えた瞬間を、その場にいた全員が

見た。

「おい、何かが空から降って来るぞ!？」

オルオが天に向かって指を差す。

「何だあれは!？」

「魚だ。大量の魚が降って来たぞ!!」

それは、大量のカジキマグロの群れであった。

鋭く鼻先の尖ったスズキ目マジキ科マジキの群れが、空からグンタめがけて降り注いできたのだ。

「マジキキヤノン!!」

「うぎゃあああああ!!!」

隅田さんの技名発動と共に大量のカジキマグロに空から雨霰のごとくピンポイントに襲われて、グンタは転げるように兵舎の中へ走って避難すると、つい先ほどまで経っていた場所にドスドスドスと鋭いマジキの鼻先が次々と突き刺さる。

「ペトラさああああん、どっか飲みに関連してえええ」

地面に墓標のように突き刺さる大量のカジキマグロの墓場から、地獄より這い上がって来たかのような呻き声を出す隅田さん。ペトラは泣きながら抱きついてくる隅田さんの頭をヨシヨシと撫でて頷いた。

「よし、じゃあもう少ししたらウチの女性陣つれてどっかに飲みに行きましょうか。そんで嫌な事全部忘れちゃいましょう」

ゲエフ、と酒臭い息を吐きながら隅田さんはふらふらと酒場の壁にもたれて座る。

「けっ、バーロー何が下半身魚はちよつとーだ!!」

むろみさんも呼んで、調査兵団の女性兵士たちと男の悪口をこれでもかと吐き散らし、ああでもないこうでもないと言って飲んで食っての大暴れを繰り広げた拳句、最後は度数の強い酒の飲み比べ。

むろみさんを始め、ペトラやナナバ、リーネ、その他数名は隅田さ

んのヤケ酒に付き合うも、現在はテーブルで酔いつぶれている。そんな中で、隅田さんは夜風に当たろうと一人外に出たのだった。

「ほんっと、男って奴はそんなに足のある女がえんかい！ ひっく、しゃっくりをしながら夜空に向かって悪態について目を瞑る、と、隣に人が現れた気配に隅田さんは気が付いた。

暴漢か!? と酔っぱらった頭でなんとか身構えるが、よく見ればそれはどこかで見た顔だ。

「隅田さん、こんなところで寝たら風邪ひくぞ?」

髭の生えた顔に頭の後ろで結わえた茶色い髪。

「エルドじゃん……何。振られたばかりの傷心女を笑いに来たの?」

「けっ、とアルコール臭い息で吐き捨てる。

「いや、そういう訳じゃないけどさ。近くでオルオとグンタと飲んでたから。女どもは何してんのかなーって帰り際に覗いてみたら隅田さんがこんなトコで寝てたからわ……」

「だったら何だっていうのよ!! ほっとしてよ!! どーせアンタだって人間の女の方が良いんでしょ!? ひっく……うえっぶ、おえええ」「飲みすぎだ。どんだけ飲んだんだよ」

口を抑えて気持ち悪そうにする隅田さんの背中をさすってやる。

「どーでも良いでしょー! っていつかね、慰め? 慰めなの!? 慰めるならアンタ、ちゃんと責任取りなさいよ!!」

「責任って何だよ」

エルドが酔っぱらいを相手に心底面倒くさそうな顔を見ると、完全に目が据わった状態の隅田さんがニヤリと笑う。

「私を慰めるなら私と付き合いなさいよー! じゃないとっつかり好きになるわよ!! それでもいいの!?!」

どっせダメって言うんでしょー。男ってのはすぐそれだーこの、この白子無しどもめー! と勝ち誇ったように虚しい泣き笑いをする隅田さんに、隣で聞いていたエルドは受け流すように真顔で答えた。

「え、いいよ」

「ほーら見なさい……ほっ」

「だって今好きな人居ないし。俺は足にこだわり無いし、人魚は嫌い

じゃないし、海近いってか職場みたいなモンだし、お互い解らないのはまあ追々つてことで良いんなら。別にいいよ」

目をぱちくりさせた隅田さんは右を見て左を見てついでに星空を見上げてから最後にエルドを見た。

特に感慨も無い男の顔が自分を見ていた。

「え？」

## 正義の味方とむろみさん

本日も晴天、壁上。

ラジカセのスピーカーから軽快な音楽が鳴り響く。

ジャジャン、ジャジャン、ジャジャン

悪の巨人「き、貴様らは何者だ!？」

悪逆の限りを尽くしていた極悪巨人が振り向くと、そこに立っていたのは五色の戦士だった。

両手に超硬質ブレードを持ち、腰には立体起動を装着した正義の味方は極悪巨人の前に立ちはだかる。

レッド「壁内の平和を守るため」

イエロー「人々の生活を守るため」

グリーン「幾多の困難を希望に変える」

ピンク「愛と正義と自由の使者」

ブルー「その名も、」

全員「壁内戦隊！ ケン、ペイ、ダン!!」

ドブーン

「で、この辺りで色つきの煙玉を背後で爆発させればかなり良いんじゃないかな?」

「なるほど。参考にやるよ」

ケンペイダングリーンのフルヘルメットを小脇に抱えてメモを取るマルコに、壁内戦隊ケンペイダンの台本を広げたジャンはマルコのセリフの横にペンで『感情を込めて、勢いよく』と書き加えた。

「やっぱりジャンに聞いて正解だったよ。ねえむろみさん」

「うんうん。やっぱりジャンってー」いつのが向いてるとね。流石シガン。しなの敏腕マネージャー」

「おいおい一人とも、褒めても何も出ねえぜ」

髪を掻き上げえれえれのようにキラリとカッコよく歯を光らせるジャン。

マルコとジャンとむろみさんの三人は、いつもの壁の上で壁内戦隊ケンペイダンの劇の練習をしているのであった。

「でもごめんね。今はアイドル部隊も忙しい時期なのに、僕の手伝いなんかさせちゃって」

「良いんだよ。どうせあいつらはもうほぼ完ぺきに舞台をこなせるし、俺の出る幕はねえんだよ」

「でも、本当にありがとう。一人じゃどうしようも無かったんだよ。むろみさんも付き合ってくれて本当に助かったよ。他の皆は用事があるって言って集まってくれなかったからさ……。セリフ覚えも僕だけ悪いし、困ってたんだ」

申し訳なさそうに頬を掻くマルコに、むろみさんは元気よくその背中を叩いた。

「気にせんとー！ どうせアタシは暇だったけんー」

「俺もむろみさんと同じくだ。気にすんな。販売用のグッズも殆ど完成してるから裏方は皆で暇してたよ。それにケンペイダンは客層が違つから少しくらい手伝っても文句は言われねえよ」

「そついえば、シガン。しなライブまであと三日やねー。この間調査兵团は尋ねたら三人ともすっかりアイドルが板についててすごかと」  
むろみさんがサインも貰ったとウィンクすると、ジャンは珍しくも腕組みをして感慨深げに頷いた。

「ああ。本当すげーよな。あんなに嫌がってたエレンの奴も今やきつ

ちりアイドル業こなしてやがるし。えれえれファンも増えてきてグッズ、プロマイドの売り上げも上々よ。まあそれでもうさミン人氣が断トツなんだけどや」

「それは仕方ないよ。だってアルミン、何か知らないけど訓練兵時代よりも色気？　みたいなのが凄いもん」

「うさミンはあざとい萌えがあるっちゃからねー」

「あー。うさミンはなあー。本当に俺も時々男ってことを忘れるくらいだぜ」

今やシガン　しなの人氣は壁内中を圧巻していた。

彼らが変装も無しに街に出れば数分もせぬうちに人垣ができ上がり、彼らの行った店はすぐに口コミで広がり誰しもが一度は行きたがる。幼少時にウォールマリアから避難場所として暮らした開拓村は『元祖シガン　しなの村』として観光地化され、彼らの幼い頃を知る年寄り連中が入場料と引き換えに三人の昔話を語る催し物が開かれるようになった。

ちよつと前に大規模ライブの予行演習代わりに開催した上流階級限定の地下街秘密ライブでは中央貴族や豪商や政治家がそろってサイリウムを両手に軍隊のように揃った動きでシガン　しなを応援する姿はある種の宗教じみた気迫があったことをジガンは思い出す。

「まあ、しかし本当にすげえよな……兵士とは程遠いけどさ、ほんとすげえと思う」

しかし、その人氣の裏には数々の血の滲むような努力や練習があったことをジガンは知っていた。確かに、三人がアイドルになったのは偶然の産物に過ぎないのだが、ここまで至った過程には訓練兵時代と同じ苦難や苦境が沢山あったのだ。

そして、そのことはもちろんマルコも察している。

「うん。だから、あの三人に負けないよう今度は僕も頑張らないと」  
そしてマルコはケンペイダングリーンのヘルメットを両手で抱え、にこりと笑った。

「にしても、意外っちゃね。まさかマルコとアニちゃんが戦隊モノをやるなんて思いもよらんかったけん。でも、なんでアニちゃんがイエ



「ローなん？」

むろみさんに聞かれ、マルコはああと思い出したように言う。

「あれはね、憲兵団の上官からアイドル部隊に負けない何かをやれって無茶振りをされた時、最初はプリティーウィッチ、ヒッチ&アニーっていつのやろって話になったんだ」

「ほづほづ」

「でも、魔女っ娘モノで『可愛い』を売った場合、シガン　しなのアイドル路線とぶつかって確実に負けちゃって話からそれじゃあ戦隊モノにしよっかって事になったんだよね」

「そりゃまあ、妥当だわな」

シガンが現在のシガン　しな人気を鑑みて相槌を打った。

「そこで問題が発生したんだ。レッドがマルコ、グリーンが僕、ブルーがジャックって所までは決まったんだけど、ヒッチがどうしてもピンクじゃなきゃ嫌だって物凄くゴネて……」

「それでアニちゃんがいエローに……」

「まあ、イエローもレモンっぽくすれば女の子色にもなるし、清楚系を狙えば有りだろうな」

ホロリとするむろみさんにシガンが冷静に分析すると、マルコが大きく頷いた。

「本当はアニもピンクをやりたかったみたいだけど、可愛い系レモンイエローにすることで同意を得たってわけ。で、壁内戦隊ケンペイダンを誕生したって所かな」

「ははあー。駐屯兵団の広報部隊もあるし、今や壁内はアイドル戦国時代ってところやね。皆、色々考えるのも大変じゃなかと？」

むろみさんに尋ねられ、シガンとマルコは楽しさ半分苦労半分といった苦笑いを浮かべる。

「大変だけど、それなりに楽しいぜ」

「僕もだよ。でも、こんな事を考えられるのも今が平和な証拠だよ。昔は皆がそんなこと考える余裕さえなかったから」

「だよなあ。偶に平和すぎて欠伸が出ちまうけど、壁外が陸だった時とは大違いだもんな」

「最初は壁外が海になって物凄くビックリしたけど、外が海にならなかつたら僕たち巨人に食われて死んでいた可能性もあるもんね」

遠くを見つめて呟いたマルコに、ジャンが「ああ」と頷いた。

「ただ、そう簡単に死ぬ気も無かつたけどな」

「ニヤリと笑うジャンと優しげに笑うマルコを、むろみさんは何処か微笑ましげに見ていた。

「もちろん、壁内がこんなに充実したのはむろみさんのおかげでもあるけどね」

「え!? アタシ!?!」

突然マルコに振られてむろみさんが驚いたような表情を浮かべるが、ジャンとマルコは二人で笑いながら頷いた。

「そうだ。あの時むろみさんが釣れてなかつたら人類は海のド真ん中で右往左往するしかなかったんだぜ」

「いやー、釣られたのはアタシも災難だったっちゃけど、そう言われると照れるとね」

三人がふと前を向けば、そこは一面の世界を覆う大海原。

太陽の光が反射する波の遙か遠くの方で、その時ぴちりと足の生えた巨人面魚が海面に飛び跳ねた。

「そつえばあの足付き巨人面魚、最近よく見るけど何なんだろうかね?」

「さあ? 壁外調査で最初に発見した後から急激に増えてきたらしいが……でも陸地に上げると死ぬのは変わらないらしいぞ。現状、様子見だつてね」

「もしかしたら進化の最中だったりして」

むろみさんが笑いながら言うと、二人は同時に『まさかー』と笑った。

「そつえばさ、ジャン」

「なんだ?」

しばらく三人は次回のケンペイダンの劇を練習をしていた。適役と仲間役をジャンとむろみさんが代役し、マルコがうまくセリフを言えるようになった頃、座って休憩をしていたマルコが思い出したようにジャンに尋ねた。

「いや、僕らの使う小型拡声器とかもそうだけとさ、こういう機械ってどうやって手に入れたんだろうかと思ってさ」

マルコが指を差したのは今まで散々使っていたラジカセだ。

「考えてみればお店で売ってる写真も僕らが陸地に居た時の技術じゃ不可能なくらい鮮明だと思っただけど……」

思い出す様に聞くマルコに、ジャンは遠い目をして宙を見る。

「ああ、何かしらねーけどある日突然ウチの団長が持ってきたんだよ。あと他にも調査兵団の隊舎にはキーボードとかエレキギターとかベースとか何かよく解らん原理で動く楽器が沢山あるぞ。ライブで売るサイリウムも何か団長が持ってきたしな。写真は……なんつーんだろうな。撮影部屋みたいな場所があっただな、限られた人間しか入れねーんだよな……」

「そっか。実はウチもなんだよね。ある日突然ナイル団長が拡声器とか、こういうベルトとか、細部が動く変身セットとか持ってきてさ……ねえ、団長達って何者だろう?」

「そついや、他にもシガン　しなが流行り始めたくらいから壁内中の酒場にジュークボックスが置かれ始めたよな。各兵団にマイクやら拡声器が広まったのもあの辺だ。少し考えれば武器に転用できそうなモノも大量にありそうなのに使われている武器や防具はいつものままだ。妙なところで偏った技術革新が起きてるのは何でだ?」

マルコが首を傾げ、ジャンが真剣に考え始めると、むろみさんはあー……とちよっと困った顔をした。

「アタシ、そのカラクリ知ってるかも」

「ホント!」

「え、マジ?」

同時に聞かれ、むろみさんは言い難そうに頷く。

「うん。それ、ワイズマンの仕業っちゃないかな……多分……。あん

まり人間さんに干渉すると怒られるけん。やけん、武器防具への転用はしない代わりに沢山の盛り上げグッズを提供するって各団長さんと密約してるっちゃんいかと……」

あの日あの時、うさみんを壁内一のアイドルに言っていたワイズマン。

「冗談だと思ってたけん。まさかガチだったとは……。そして奴が目論むのは、おそらく本当の壁内アイドルマスター争奪戦……」

「なんだそりゃ？」

「多分、うさみんはナンバーワンアイドルにするだけじゃ詰まらんかったんやない？ んで、資金集めだのシガンしな打倒だのと各兵団のお偉方を焚きつけて色々面白か事ばやらせとると……」

「一体、何のために？」

「趣味っちゃんね。おーむね」

ワイズマンの事はジャンとマルコも噂に聞き及んでいたが、まさかそんなことを企んでいたとは……。

一瞬、シリアスになる三人だが同時に「まあ良いか」という結論に及んだ。

「お祭り騒ぎみたいで面白いしな」

「平和だし」

「まあ、何かあっても怒られるのは奴とね」

「それじゃあ、練習を再開するか」

「うん。次はどこからだっけ？」

「ほれ、悪の巨人に圧されたレッドばグリーンが救出する場面たい」

ぱらぱらと台本を捲ったジャンが「ぐああ!! おのれ凶悪巨人め!!」と迫真の演技で悶絶すると、グリーンのマルコが走る。

「レッド!! 今助けるぞ!!」

「ぐはは!! やれるもんならやってみろ!!」

ぴょんと悪役面のむろみさんが飛び跳ねた。

赤い夕陽が水平線の彼方に沈みゆく。

家々には明かりが灯り、酒場では駐屯兵団広報隊の歌が響き、人々は笑顔で魚や妖精印の食糧をお腹一杯食べていた。

恋人は語らい、家族は集まり、そして仲間は手を取り合って、人魚は跳ねる。

それぞれの希望を手に、未来を胸に。

壁内は、今日も平和。

## 進化とむろみさん

ウォールローゼ、シガン　しなライブ前日。

とうとう翌日に大規模ライブを控えた調査兵団は兵舎全てがお祭りムード一色に染まっていた。

翌日の為に用意した大量の販売用グッズ。例えば応援用のサイリウムにキャラクター団扇、付け耳、手彫りキーホルダー、銘入りペン、パンフレット等々は既に倉庫から溢れだすほどに用意してある。

ライブ会場の大広場にも大きな櫓を立て終えて音響設備もどうにか整えた。当日の混雑を予想して簡易トイレやゴミ箱、案内板の設置ともしもの時のための警備班と救護班の準備と割り当て。物販ブースの確保。その他の雑事諸々を整え、あとは明日の本番を迎えるだけとなっている。

「じつじつ、明日なんだな」

兵舎のとある一室にて、マイクを手に持ったエレンが目の前の二人を見ると、ミカサとアルミンが頷いた。

「まだ本番は明日なのに、今からちよっと緊張するね」

アルミンが緊張した面持ちではにかむと、いつもよりもほんの少し穏やかな表情のミカサがアルミンの肩をぼんと叩く。

「アルミン、大丈夫。今の私たちなら、どんなに観客が多くてもきつと……いいえ、絶対に上手くやれる」

「ああ。その為に練習してきたんだもん。俺達なら、きっと大丈夫だ」

エレンの力強い眼差しを向けられ、二人はもう一度頷いた。

壁内が海に閉じ込められてからこれまで、長いようでとても短かったように思う。

最初は、訓練兵として兵士を目指していたはずだった。

訓練兵として修練を積み、その後は兵士として巨人と戦う事になる

と思っていた。ところが、何の因果か突然アイドルとして資金集めをする事になってしまった。

最初は凄く嫌だった。

ダンスの練習もキツイし、歌なんて今まであまり歌ったことが無かった。

知らない人の前でパフォーマンスなんて見世物みたいな真似を、なんで俺達兵士がやらなくちゃならないんだと思ったりもした。

今でも壁外への憧れは強く持っているし、巨人への憎しみは決して消えていない。けれど、自分たちを応援してくれる色々な人から「元気をもらった」「明日の希望が見つかった」「また歌を聞かせてほしい！」という言葉と、沢山の笑顔を貰ううちに、こういう仕事も悪くは無いように思えてきたのもまた事実だった。

「何かもう俺達、兵士でも何でもねえけどさ、壁の外に出られる手段が見つからねえうちは、こつこつ仕事も悪くねえ……なんだよな？ 多分……」

戸惑うようにエレンが二人に聞くと、ミカサはしっかりと頷いた。「ええ。きつと、これも大事な仕事」

部屋の中央に置かれた机の上には、乗りきらないほどのファンレター。お年寄りの達筆な字で書かれた物もあれば、拙い字で下手くそな絵と共に送られてきたものもある。

部屋の角に積まれているのはファンが送ってくれた沢山の贈り物。シガン　しなの銘が掘られた金貨からシガン　しなのラベルついた蜂蜜瓶。似顔絵の刺繍が入ったハンカチ、手作りの人形まで様々だ。

どれもこれもが、シガン　しなというチームにとって大切な宝物。もしも三人が普通の兵士だったなら、こんなに沢山の『心』が送られる事は未来永劫無かつただろう。

「何かさ、今、本当に変な感じだよな」

「ああ、本当に変だ」

「うん。変。でも、とても面白い」

そう言い合って三人は笑った。

壁内で知らない者は誰も居ない、人気ナンバーワンアイドルユニット

ト』シガン しな』。しかし、その正体はただの十五歳の少女なのだ。

「おい、テメエら。準備は良いか？」

三人が今までの事に思いを馳せていると、ドアからジャンがひょこりと顔を覗かせた。

「あ、ジャン。そっちの準備は良いの？」

「おう。ばっちりよ。最後のリハーサルだ！ 明日の本番と同じように通しでしっかりやれよー！」

『シガン しな』敏腕マネージャーのジャン・キルシュタインが親指で示した先は、調査兵団の訓練場だ。

今までの練習とはちょっと違う。運び出された簡易舞台の周りには調査兵団の団員全員が本番さながらに取り巻いてシガン しなの登場を待ちわびているのだから。

「よし、行くか!!」

「ああ、行くこう！」

「私たちのステージに！」

そして、三人はそれぞれのマイクを手に立ち上がる。

とある広場。

翌日のシガン しなライブに向けてとあるファンクラブは最後の練習に励んでいる最中であった。

「よっしゃテメーら明日に向けて最後の特訓だ!! 『恋の壁外逃避行』最初から行くぞ!!」

『はいッ!! ブラウン隊長!!』

ライナー・ブラウンを中心とした総勢三十名程の訓練兵団104期生。

彼らこそ、泣く子も黙るシガン しな同期親衛隊。

シガン しなのファンクラブ自体は壁内中に数多く存在するが、三



人と同じ104期生のみで構成されたこのファンクラブは他と比べて新しいながらも一味違う。

背中にシガン　しな親衛隊と書かれた法被を羽織り、額にはシガン　しな親衛隊特製八チマキを巻き、両手に携えたサイリウムと全身を使って訓練兵仕込みの激しくも整った動きで客席を鼓舞する。それを最初に始めたのがシガン　しな同期親衛隊だ。

親衛隊長はライナー・ブラウン。

そのカリスマ性とシガン　しなに対する情熱でもって高い信頼を得て隊長を務めているのだが、何故かアニ及びベルトルトからはとても冷やかな視線を受けていた。

ちなみに蛇足だがライナーは『壁内戦隊ケンペイダンファンクラブ　第一号』保有者でもある。

「テメーら気合いが足りねえ!!　それでも我らがシガン　しなを愛してるのか!!　もっと腰に力を入れる!!」

『はい!!　ブラウン隊長!!』

広場で応援の練習を熱心に行うライナー達を、ベルトルトとアニは少し離れた場所で眺めていた。

「一体、何してるんだか……」

「ちあ……当てられたんじゃない?　この熱気と平和さに」

激しく応援の練習をするライナーをしばらく呆れ顔で見ている人だが、ふと思いついたようにアニがベルトルトを見上げた。

「で、そう言うアンタは兵団選びもせず何してるんだい?」

じろつと碧眼の少女に睨まれて、ベルトルトは狼に睨まれた子羊のようにたじろいだ。

「え、うーんと。だって外が海で故郷もどこだか解んないし、今の所入るべき兵団も解らないし……どうせこのまま平和ならギリギリまで様子見してようかなって」

優柔不断なベルトルトの意見にアニはふんっ、と息をつく。

「まあ、それでもいいけど……ところでアンタ、次の休日は暇?」

「えっ、今の所、毎日暇だけぞ」

突拍子も無くアニに尋ねられ、戸惑うベルトルトの前に紙切れが一

枚差し出される。

「えっと……これは？」

「ケンペイダンの観覧チケット。次の話はイエローが主役なんだよ。どうせ子供だましの演劇だけど、暇なら見に来な。それじゃ、アタシも練習があるから」

驚いた。

壁内戦隊ケンペイダンは毎回見に行ってるが、アニから直接チケットを貰ったことは今まで一度も無かったのだ。

「まあ、来なくなったらそれでも良いけどな」

ベルトルトが戸惑っていると、ひらひらと宙に揺らしていたチケットを無理やり胸に押し付けたアニはくるりと身を翻す。

「あ、ありがとアニ!! 行くよ!! 僕、絶対行くから!! アニの舞台、楽しみにしてるよー!」

アニの背中にベルトルトが呼びかけると、少女は振り返りもせず右手を上げて軽く振った。

その頃、むろみさんはトロスト区の壁の上で釣りをしていた駐屯兵団の兵士によって釣り上げられていた。

「ゴカイうまかつちゃん!!」

ぎざびあつと海から引き揚げられたむろみさんを見て、駐屯兵団ミタビ・ヤルナツ八班長はげんなりした表情を浮かべた。

「なんだよ。またむろみさんかよー」

「いやー、目の前につまそーなモンがぶら下がってたら食いつかないワケにやいかんっちゃろ」

むろみさんに刺さった釣針をミタビが外してやっていると、隣で釣りをしていたイアン・ディートリッヒが笑った。

「あれ、ミタビさんまた魚じゃなくてむろみさん釣り上げたんですか？」

「うるせーイアン。ボウズのテメエに言われたくねえ!! ちっくしょー前のチケットといい、ホント最近ついてねえよ……」

がっかりしながらエサを付け直すミタビに、むろみさんがニヤリと笑いながらイアンの傍にそそそそと近寄る。

「何なに? ミタビちゃんってばまだシガン しなのチケット取れなかったこと悔しがって?」

「そうなんですよ。自分の部下に倍額払うからチケット売ってくれて頼みこんだりして……」

「うっわ大人げな」

「でも結局自分の部下も買えてなかったり……」

「ミタビちゃん恥ずかしか」

「うっせえイアン!! てめえに愛しのつさミンを間近で見れないこの悔しさが解るか!? わかんねえよな!!」

「へっへーん。アタシは是非にって本人達からチケット貰ってるもんね」

「ちくしょー羨ましいな! むろみさんそれ売ってくれ!!」

「残念ながらアタシ名義の特別チケットやけん。アタシ以外使えんよ」

「っていつかミタビさん、駐屯兵団ならウチの広報隊応援しましょうよ。この前なんて、リコがドレス姿で歌ってたんですよ? シガン

しななんて目じゃねーくらい美人でしたよ」

「ああ、リコちゃんたちもがんばるとるげな。アタシもよく酒場に聴きに行つとーよ。国民的アイドルとはまた違ってしつとりした大人の歌声が酒に合って良かったつちゃねえ」

「お、むろみさんもそう思う? そうそう。お子ちゃまにゃ良さが解らない歌なんだよな」

「ねー。と楽しそうに頷き合つむろみさんとイアンに、ミタビはぐぬぬと唸る。

「しなこた解ってる。俺も広報隊は好きだ。歌も上手いし美人もそれなりに多いしな。だがしかし、それとつさミンとはまた別なんだよつ!!」

語尾に気合いを入れてひゅっ、と釣針を海に投げたミタビが下を見ると、数頭の巨人面魚が壁の真下の海面からにゆるっと顔を覗かせていた。

「ちっ、イヤなもん見ちまったぜ」

「どっしたんですか？」

舌打ちしたミタビがイアンを振り返る。

「いや、何か海から巨人面魚どもがこっち見てるんだよ。気色悪いったらねえぜ」

「マジですか？」

「ん？ ほんなこっ？ さっきまではおらんかったよ」

イアンとむろみさんもそっと壁の真下を覗いてみると、そこに居たのは既に数頭処では無い。数十頭もの巨人面魚どもががわらわらと集まり出してきた。

「なんですかね？ 妙な感じだ」

「……まるでエサに集る鯉の群れたい」

「一応本部に報告しとくか？ 多分陸には上がって来れねえと思うが……」

「ちよっと待って下さい。何か様子がおかしいですよ……？」

ビチビチビチとお互いの体に乗り上げるように水面で跳ねる数十頭の巨人面魚の群れには、全てに足がついていた。

二本の足をもがかせて、懸命に海面から上がるうとしている巨人面魚の姿を三人が息を飲んで見ていると、一頭の巨人面魚が水面から大きく跳ねて壁に飛びついてきた瞬間、全員に戦慄が走った。

「マジでついてないぞこりゃ。イアン……至急本部に伝えるぞ。緊急事態だ」

しかし、イアンとミタビとむろみさんが逃げ出す寸前に、そいつは待ち構えていた。

三人が振り返ると、そこには人の手足を持った、まるで中途半端に変態したオタマジャクシのような姿の十メートル級の巨人面魚が三人を壁の上から満面の笑顔で睨みつけていた。

調査兵団訓練場。

リハーサルをしていたシガン　しなが数曲目の歌唱とダンスを終えた時、最高潮に盛り上がった調査兵団の只中へ一人の駐屯兵が全速力で馬を駆って駆け込んできた。

「伝令!!　伝令!!　緊急事態だ!!」

何事かと振り向く調査兵団に向かって、駐屯兵は馬から降りるのもどかしいのかその場で叫ぶ。

「何だ!?　何が起きた!?!」

団長のエルヴィンが飛び込んできた駐屯兵の前に出ると、青い顔をした駐屯兵はヤケクソのように声を張り上げる。

「トロスト区、及びウォールローゼ南部から巨人面魚が侵入!!　壁は壊されてませんが、海から次々と壁を登ってきます!!　我々駐屯兵団ではもう手に負えない数です!!　調査兵団に至急応援を要請します  
」!!」

## 大混乱とむろみさん

壁内中が大混乱であった。

人間のような手足が生えた巨人面魚が、次々と壁を乗り越えて壁内に侵入してくる。その様子はまさにあの日、シガンシナ区で超大型巨人が壁から顔を覗かせた瞬間にも匹敵する恐怖だが、その時と今回は少し具合が違っている。

シガンシナ区で起こったあの事件と決定的に違う事はただ一つ。巨人面魚どもはトロスト区はおるか、ウォールローゼの壁まで乗り越えて侵入してきているということだ。

「護衛班急げ!! 逃げ遅れた民間人がまだ多数居るんだ!!」

「絶対にウォールシーナに近づかせるな!! 何としてでもローゼの壁際で足止めしろ!!」

「ダメです数が多すぎてとても間に合いません!!」

「調査兵団の応援はまだか!？」

「現在早馬で要請を行っております!!」

混乱を極めるトロスト区の駐屯兵団基地で、真っ青な顔をしたキッツ・ヴェールマン隊長は片手で額を抑えた。

「くそっ。何故こんな時に限って巨人面魚どもが押し寄せて来る!？」

これまでは陸上活動すら出来なかっただろうが!？ まさか、あのワケの解らん人魚どもの差し金なのか!？」

彼にとっては怯えと苛立ち紛れに放っただけの言葉だったのかも知れない。が、傍で聞いていた制服姿のリコ・プレツェンスカ、イアン・ディートリッヒの両名は振り向き、その暴言に自分たちよりも身分が上であろうキッツを強く睨みつけて反論した。

「恐れながら隊長。そのような事は二度と仰らないようお願いします。人魚たちは人類の良き隣人です。敵ならば何故我々に食糧を分け与え、孤独だった人類に手を差し伸べてくれたのでしょうか?」

解っておられましようが、彼女たちが居なければ私たちは今も海の只

中で途方に暮れるしか無かったのですよ？ そのことに関してはご理解頂けておりますか？」

「隊長。俺とミタビ班長は先ほど壁の上から帰還する際、一人の人魚に救われました。そして我々を救ってくれた人魚は今も何とか巨人面魚を食い止めようと海で戦ってくれているんですよ!? 自分たちは全然関係ないのにも関わらずです。そんな彼女たちが、何故我々の敵だと言えるのですか!？」

一人には冷静に、一人には熱く諭されたキッツはぐっ、と言葉を詰まらせると、すぐに青かった顔を赤く変化させて怒鳴りつけるように命令する。

「そ、それぐらい私にも解っておるわ!! 貴様らこんなところで何をボサボサしている!! さっさと巨人面魚を食い止めに行くぞ!!」  
『了解!!』

巨人面魚が海から這い上がって来た時間。

キース・シャーデイスはハーピーとイエティを連れてトロスト区でのんびりと爺と孫ごっこを楽しんでいた。

魚市場の屋台を巡り、子供釣り堀で小魚を釣り、笹かまを食べながらゆったりと観光をしていた時、突如として人々の悲鳴が響き渡り継いで海側の壁から人波が押し寄せてきた。

何事かと思つて様子を窺っていると逃げ惑つ人々の背後からのつそりと現れたのは、気色悪い巨大人面魚の姿だった。おそらく七メートルはあるであろう巨体を揺らし、全体的に魚なのに何故かそこだけが人間の四肢を持った魚。時々、大きな尾びれを振って魚市場のテナトをなぎ倒す様は正しく化け物と呼ぶにふさわしい。

「何故ここに巨人面魚が……!？」

身を戦慄させるキースだが、隣に居たイエティは無表情に見上げるに留まりハーピーはノーテンキに囁いた。

「でっけーお魚さん!! マズソー! マズソー!」

「ほんとだ。大きい。人魚さんとは違うんだね」

「ハーピー、イエティ。逃げるぞ!!」

暢気に巨人面魚を眺めている二人を両腕に抱えて駆けだしたキースは、もちろん立体起動や超硬質ブレードなんて物は装備していなかった。

幼子とはいえ、二人を抱えて逃げるのは老体には少々厳しいものがある。息を切らせてウォールローゼの扉まで引き返そうとしたが、道の真ん中には既に巨人面魚がのっそりと現れ、体を揺らして道を塞ぐ。見れば、あちらこちらから巨人面魚が大挙して押し寄せて来ていてもう道を選んでいる余裕はなさそうだった。

「クソッ、こっちにもか」

とにかく巨人面魚と鉢合わせにならないように老体に鞭を打って走り回り、一か八かで小路に入り込んでみたが、それが運の尽きだった。

「三メートル級……!!」

袋小路に突き当たり、戻ろうとすると三メートル級の巨人面魚が寝そべるワニのように道を塞いでいた。目線が低い分普通の巨人より威圧感は少ないが、それでも十分に恐ろしい。

(万事休すか……)

「ジジ！ どした!?!」

「おじいさん、どつしたの?」

冷や汗を垂らしたキースは、腕の中で心配そうに自分を見上げるハーピーとイエティを最後にぎゅっと抱きしめる。

「ハーピー、イエティを連れて空に逃げなさい。トマラヤに帰って、しばらくここに來たらいいかんぞ」

「ジジはっ」

「護身用のナイフは持っている。倒す事は出来んかもしれないが、私はここで何とか頑張ろう。だから、イエティを頼んだぞ?」

言い聞かせるように最後に二人の頭を撫で、そしてハーピーを空に放つ。が、幼女の姿をした鳥は空中に留まったまま、一向にイエティを連れて行くつもりがない。



「どうしたハーピー!？」

しばしキースと巨人面魚を見比べたハーピーは、しかし自信満々に囀った。

「ジジ、でっけーお魚ジャマ!! ハーピー、まずそーなお魚イヤ!! オツケオツケ!! ハーピーさんおまかせ!!」

「何がお任せなんだ!？」

そして一人でするーりと空へ飛び上がるハーピーはパツと両手と羽を大きく広げた。

「ハーピー! ジモツティ、呼ぶ! 兄弟イツパイ呼ぶ! イコール、グローバリゼーション!!」

「何が何だか解らんぞハーピー!!」

キースの呼びかけにも振り返らず、猛スピードで空へ飛んで行くハーピー。あつという間に豆粒のようになった鳥幼女を見送って、ふと「そういえば巨人面魚はどうなった!？」と振り返ると、三メートル級の巨人面魚はイエティが鋭い爪で跡形も無く挽肉にした後だった。

急所のうなじも粉微塵にされ、煙を上げて消滅する巨人面魚を尻目にイエティはあどけない表情をキースに向ける。

「おじいさん、どこかに刀とか無いかな? 大きいのを捌くのはちょっと疲れるから」

「「うらー!! きさんら魚類の癖に何陸に行こうとしとるんか!! 魚類なら魚類らしく海におれっちゅーに!! むむむ……スパイラルスピョンカッター!!!」

次々と海から壁に向かって何千、何百と行列を作る巨人面魚を一匹一匹海に連れ戻すのがめんどくさくなつたむろみさんは、巨人面魚のうなじを腕のヒレで次々とぶつた切って行く。

「あっちいあっちい!!」

しかし、巨人面魚が死ぬ際に上げる熱は、むろみさんたち魚類の肌

には熱すぎた。

「やめときむろみ。こんだけおっいたらもうワイらだけの手に追えんわ」

「せやせやー！ わいら十分足止めしとるで！！ もう無理やー！」

「ううー。クジラさんを持ち上げて行っちゃいかんとー！！ この人間さん良い人たちやけん、巨人面魚さんも仲良くせんとー！！」

海の中では、むろみさんだけでは無く、むろみさんに呼ばれて駆けつけた淡路さん達ハンターやひいちゃん、ひいちゃんに呼ばれたシャチやクジラも何とか巨人面魚を壁に登らせまいと苦戦していたが、いかんせん巨人面魚の数が多すぎる。

「こつなったらもつ、リヴァイアさんと呼ばしか無いんやないか!？」

巨人面魚を屠る淡路さんが投げやりに提案するが、むろみさんはあまり良い顔はしない。

最終兵器リヴァイアさん。かつて神々と共にムー大陸を滅ぼした際に、切り込み隊長を務めた程の実力を持つ地球最強の伝説の海竜。

その実力たるや軽い気持ちで世界を灰に出来るほどなのだが、いかんせんうっかりした部分が多いのだ。例えば、花火で大興奮して地獄の業火（ヘルファイア）を空に打ち上げようとしたり、酔っぱらって『ウチは土竜になるっちゃー』と言いながらマントルまで穴を掘り進めようとする等々……。

もしこの近辺でやらかした場合、うっかり放った熱線プレスが壁を壊す可能性は極大なのだが、それでもこの巨人面魚の量を捌けるのはきつともうリヴァイアさんしかないだろう。

「むむむ……あんまおススメ出来んけど……もつしょうがなかね」

覚悟を決めたむろみさんはケータイを取り出すと、リヴァイアさんに電話をかけた。すぐに繋がった。

「あ、もしもし？ リヴァイアさん？ 今どこにおるん？」

「もっしーむろみ？ 久しぶりっちゃねー 今？ 今は岩島におるっちゃ」

電話口からゆるーい小倉弁が聞こえてくる。その声は間違いなくリヴァイアさんだ。

「悪いけど、ちょっとこっち来てもらえると？　今、大変な事になってるけん」

『んー。実を言つとこっちもちょーっと色々あるちゃ。悪いけどむろみ、先にこっち来てもらえん？』

「えー!?　こっちも手が離せんっちゃけど!?」

『大丈夫大丈夫。壁の国から近いけん、ちょっと飛ばせばすぐ来れる場所っちゃ』

「え、リヴァイアさん壁のこと知ってるん!?」

『そげな大きな壁あつたら誰でもすぐ解るっちゃー。ともかく重大なことっちゃけん。一端こっち来て欲しいちゃ。それじゃ、待ってるっちゃ』

「えっ!?　ちょっとリヴァイアさん!?」

プツッ、と通信が切れた直後、むろみさんの頭の中に直接地図が送り込まれてくる。間違はなくリヴァイアさんの思念波だ。

「場所は……あー……確かにここから近いとね。仕方ない……。皆!!　ここは任せた!!　ちょっとリヴァイアさんに呼ばれたけん行つてくるよー」

「え、おいマジかよむろみ!?」

言つが早いか、むろみさんは他の人魚にその場を任せると巨人面魚の間をかくぐり猛スピードのバタフライで壁を後にするのだった。

### 調査兵団本部

「急げー!!　今度の巨人は壁を登るぞ!!　絶対に深入りはさせるな!!」

「早く馬を連れてくるんだ!!　何!?　宣伝用の装飾?　そんなもんさっさと外せ!!」

「時間が足りない!!　一秒でも早く壁に向かうんだ!!」

「急げ急げ!!　絶対シーナに近づけさせなよ!!」

駐屯兵団基地と同じく、文字通り混迷を極める調査兵団本部は怒号と焦燥で溢れていた。その中で、廊下を急ぎ足に歩くリヴァイ兵士長の後にくっつく一人の少年の姿。

「リヴァイ兵長!! 俺も行きます。行かせてください!!」

「ダメだ」

「どうしてですか!?!」

「どうしてもだ」

「納得がいきません!!」

そこで、リヴァイはため息をついて振り向いた。

「それは、テメエが死んだらそれだけで兵団の大損害だからだ。エレン・イエーガー」

リヴァイの後をくっついて歩いてきた少年、それは調査兵団アイドル部隊シガン。しなの大人気アイドル、エレン・イエーガー本人だ。

巨人面魚の侵攻を聞いた途端、エレンはすぐにリハーサルの舞台を駆け降りてウォールローゼ攻防戦の応援へ向かおうとする調査兵団の列についたのだった。

「確かにアイドルしてましたけど、それでも俺だって調査兵団の端くれです!!」

「それでもだ。大体、テメエは何のために行く? 知ってるぞ。母親が巨人に食われたんだってな。巨人をぶっ殺してえ気持ちは解る。だが、巨人への憎しみを晴らすためだけに行くってんなら、テメエはただのお荷物だ」

普通の兵士なら一発でチビるような目でギロリと睨む兵士長。だが、意外にもエレンはリヴァイの目をまっすぐに、力強い目で見返していた。

「確かに、俺達は訓練兵団を出てからずっと調査兵団では歌ったり踊ったりばかりでした。それが仕事でしかたら、今更戦闘なんてっと思うかもしれません。もちろん巨人も憎いです。全て駆逐したい気持ちも変わりません。でもリヴァイ兵長、俺が行きたい理由はそれだけじゃないんです!!」

「……何だ? 言ってみる」

必死なエレンの言葉に、さしものリヴァイも仕方なく息をつく。エレンは大きく息を吸う。

「目の前で自分たちのファンが食われかけてるってのに、それを助けないで何が壁内一のアイドルですか!? 何が歌って踊れる『兵士』ですか!? だから俺も行きたいんです! お願ひします!! 手伝わせてください!! 俺も行かせてください!!」

そうして頭を下げるエレン。リヴァイは自分へ本気で頭を下げる少年の後頭部を見ながら少し考え、「おい、頭を上げろ」と声をかける。「はいっ!」

ぱ、と頭を上げたエレンに投げつけられたのは、緑色のキノコだった。エレンが見たことも無い、謎のキノコ。それはいつかの日にむろみさんが持ってきた、あの人が復活するキノコだ。

実は、森に何本か生えていた物を川端君が見つけてきたのだ。キノコを渡されたエルヴィンは『戦闘で死なれたらどうしても困る人物』にのみ極秘でそれを渡していたのだった。

人類最強のリヴァイ兵士長は、もちろん『絶対に死なれたら困る人物』だったが、リヴァイ本人としては巨人相手に死ぬ気も死ぬ予定も死ぬ自信も全く無かった。だから、それを今にも死にそうな部下に渡したところでどうというとは無い。

「それを食べ。今すぐにだ。それが俺達についてくる最低条件だ。それからテメエは前線に出るな。民間人の誘導を優先しろ。エルヴィンには俺から言うておく」

「はいっ!」

しばし呆然とキノコを持っていたエレンは、返事と共に手の中のキノコにかぶりついた。

「ミカサ、本当に行っちゃったの?」

「ええ。エレンが行くというのなら、私も行かなくちゃ」

心配そうなアルミンに、ミカサは静かに頷いた。

「大丈夫。私は強い。訓練兵团も、首席で卒業した。巨人にも負けない。だから、心配しなくても大丈夫」

ぐっ、と親指を上げるミカサは、人の行きかう混迷極める外へと飛び出した。

「ま、待ってよミカサ!!」

突如として発生した大事件にエルヴィン団長からアイドル部隊に対する指示は『とりあえず待機命令』だったはずなのだが、何故かエレンが出陣する事になった話はすぐに二人にも聞こえてきた。

もちろん一も二も無くこうしてミカサはエレンを追いかけて飛び出し、アルミンだけが部屋に残されたのだった。

「畜生……また、僕だけ残されるのか?」

二人の後を追いかけては……と立ち上がり、怒号の飛び交う外へとそりそりと近づくも、あの日のシガンシナの混乱と恐怖を思い出すとどうしても足が竦んでしまつ。

「嫌だ……一人のお荷物だけは、絶対に……絶対に嫌なのに!!」

舞台上、大勢の人間の前に立つのは平気なのに、どうしてもこんな時にばかり足が震えるんだ。叱咤するように己の足をパチンと叩く。が、アルミンを見ているものは誰も居ない。

何度も深呼吸を繰り返し、ヨシ、と意気込んで自分も部屋を飛び出そうとしたその時、どこからか聞いたことのある声が部屋の向こうから聞こえてきた。

「おいお前ら!! 今は緊急事態だぞ!? 何しに来た!!」

アルミンが思わずドアを開くと、そこには見たことのある三人の少女が、怒鳴られつつも人波を掻き分けて調査兵团の本部へ入ってきている姿であった。

「済みません! 済みません通してください!!」

「悪いね! ちょっと用があるんだ!! 通してくんな!」

「済みません済みません本当に重要なんです!!」

「サシャ、ユミル、それとクリスタ!? 何でここに居るの!? 兵团決めてない訓練兵は皆召集かったはずだろ!?!」

はあはあと息を切らせる三人娘はアルミンの顔を認めると掴みか

からんばかりの勢いで迫る。

「そんなのどうでも良いの!! お願いアルミン。調査兵団の厨房を貸して!!」

「ちよ、クリスタ。何で厨房なの!？」

「そ、それが……ぜえ。とにかく女神のお菓子が人類の存亡にかかわるんですよ!!」

「アタシには解んねえけど、とにかくクリスタが言うからそういう訳なんだよ! 訓練兵団じゃ材料が足りねえんだ!! ここなら砂糖ぐらいあるだろ!？」

肩で息をするユミルとサシャがよく解らない事を言っている。

「何!? 全然解んないよ! とにかく落ち着いてよ三人とも!! 何？」

クリスタは何をするつもりなの!？」

捲し立てる三人の少女にこれでもかと気圧されるアルミンが、迫るクリスタの両肩を掴み、その青い瞳を見据えて尋ねると、クリスタは懇願するように絶叫した。

「人類を救うため、これから妖精さんを大爆増させます!!」

## それぞれの動きと妖精さん

「ワイズマン!! ワイズマンは居ないのか!？」

兵団内の喧騒より少し離れた部屋。

人払いを済ませ、一人になったエルヴィンがワイズマンを呼ぶ。するとすぐに頭上からカサコソと昆虫のような八つの足を持つ機械が顔を覗かせた。

「ハイボーイ。私に何か用かね? 武器・防具のご提供以外で萌え萌えな事ならばお手伝いしますか?」

「まさしく、その武器や防具の提供をして欲しいのだが? このままでは人類も、君の大好きなアイドル合戦も全てが終わってしまうだろう?」

下手に歪曲した嘆願はこの奇妙な機械生物に意味をなさない事は解っていた。包み隠さずエルヴィンが尋ねると、ワイズマンは「フム」と残念そうな音をそのメタリックな体から出す。

「残念ながら、私は今でも非常に危険な橋を渡っているのね。武器や防具を人間に提供したと知れたら、それこそ私ごと壁内が神々に滅ぼされますが? まあ、外敵による滅びもまた一つの正解ということさ。もっとも、楽しいお祭りが終わってしまうのは私としても非常に残念だがね。さて、他に何か聞く事はあるかね?」

あっさりと人類を捨てることを決定づけたワイズマン。だが、その返答を予想していたのかエルヴィンは感情を露わにする事は無く、無表情に一つ頷いただけだった。

「そうか……この状況で少しは君の気が変わったと思ったのだが……とても残念だ。それでは今度は純粋な質問をしよう。我々は本当にここで滅亡すると思うかね?」

まるで明日の天気を探ねるかのよつに聞くエルヴィンに、ワイズマンはしばし考えた後で「ああ」と頷いた。

「私の見た限り、どこへ逃げたとしても壁内人の一年生存確率は限り



なく低いでんなあ。それこそ、未知の技術を持ったデタラメがまたデタラメをやらかさない限りは……」

ワイズマンの言う、未知の技術を持ったデタラメ。

その存在こそ、ウォールローゼ全域を海へ飛ばすというトンデモない技術を開発・実行した張本人。

しかし、同じくエルヴィン達には未知の機械を作り出すワイズマンの、最高峰の超科学をもってしてもその存在を感知することは不可能だという。

「そのデタラメを引き起こした張本人との接触……それこそが人類が生き残る最後の手段、か……」

フツ、と息をつくエルヴィン。

壁という人類の最重要防護壁が通用しない今、人類は壁内のどこへ逃げても無駄なのだ。それこそ、最後の一人が巨人面魚の胃袋に収まるまで人類は奴らに追い詰められるのだらう。

ワイズマンの言うデタラメとの接触が絶望的な今、人類は滅びを受け入れるしかないのか……。

エルヴィンが一人、思いつめた表情をしていると、ドアを叩く音がする。

「おっと。誰か来たようだ。それでは私はこの辺で……」

ワイズマンがするりと天井の奥へ消え去ると、そこへ入れ替わりに入ってきたのは少々興奮気味の河童の川端くんだった。

「おいエルヴィン。物凄い物を見つけたぞ!!」

興奮冷めやらない様子の川端くんをエルヴィンは一瞥する。

「川端さん……どうしました？ 申し訳ないが今は緊急事態なんです。それとも、復活キノコの群生地でも見つかりました？」

ワイズマンの手が借りられない今、人間が死んでも生き返るあのキノコこそが人類にとって最も重要なアイテムだ。先日、森の中で数十個を採取出来たが、それ以降中々見つからない。しかし今、必要量のキノコさえ用意することが出来れば人類滅亡はもう少し先延ばしできるはずなのだ。

しかし、川端君は「緊急事態は知っとるが、キノコじゃなか」と首

を振り、代わりに手のひらに乗せたカラフルな球をエルヴィンに見せる。

「これは……?」

「妖精じゃ」

「ふざけてるんですか?」

「違いわ! 妖精ちゅーんは言わば生きてデタラメやけん。この壁内で起きとった訳わからん現象の大部分はこいつらが原因で間違いかとー!」

デタラメ、という言葉に反応したエルヴィンが川端君の手のひらの球を凝視するが、それはどう見てもただのカラフルな球だった。

「デタラメ? この小さなボールが? これがワイズマンの言う未知の技術の持ち主だと言っのか?」

川端くんから受け取った球体を摘みあげてあちこちの方向から見回しても球は何の変哲も無い球のままだ。

「団長!! エルヴィン団長は居られますか!」

呆気なく手のひらで転がされる未知の技術の正体に、にわかには信じられずにいると、ばたばたと五人の少年少女がエルヴィンの部屋に駆け込んでくる。

「慌ててどっつしたんだ? その三人は訓練兵だな? 招集命令がかかっているはずだ。何故ここに居る?」

息を切らせて心臓を捧げる敬礼をした五人のうち、一人の少年は調査兵団アイドル部隊、アルミン・アルレルト本人と、シガン しなのマナージャー、ジャン・キルシュタインだ。そしてその横に並ぶのは、三人の訓練兵団の少女たち。

「団長! それどころではありまへん!! 今の危機的状況を脱する唯一の方法が見つかりました!!」

「何だと!」

アルミンの進言にエルヴィンの視線に鋭さが増す。

「突然押しかけて申し訳ありません!! ですが、まずはこの本を読んでください」

すると、一番小さな金髪の少女が手のひらを広げて目の前に見せ

た。そこには、川端くんが持ってきたものと同じカラフルな球と一緒に『妖精さんマニュアル』と書かれた豆本が乗っていた。

その頃、調査兵団はウォールローゼ南部、及びトロスト区へ向かって馬に乗って駆けていた。

行く途中の道には多くの兵士と共にウォールシーナへ向かって逃げ行く人々の長い列がのろのろと進んでいる。

「逃げ逃げ!! 早くしないと巨人面魚が来ちまうぞ!!」

いくら民間人たちに呼びかけても、既に必死で逃げている人々は息を切らせるだけで一向にスピードは上がらない。その時、遠くの方で悲鳴が聞こえた。

「うわああああ!! 巨人面魚がそこまで来てるぞ!! 奇行種だ!!」

人々が一斉に散り始めると、ローゼの壁側から猛スピードで突っ込んでくる巨大な影。

手足の生えた十メートル級の巨人面魚が囿として立ちはだかった目の前の兵士には目もくれず、一直線に民間人に向かって魚雷のようになすすべで行く姿。次々と悲鳴が上がり、後ろからは立体起動を装着した駐屯兵団が追いつがるのだが、巨人面魚の走るスピードが速すぎて馬の脚では間に合わない。

「ダメか!!」

あと少しであるの巨体が人の群れに到達するというその時、空中を一陣の黒い風が駆け抜けた。

瞬間、煙を噴き上げながら崩れ落ちる巨人面魚。

「リヴァイ兵長!!」

「テメェら、無事か? 壁の方はどうなってる!?!」

巨人面魚の血を払い、ブレードを仕舞うリヴァイがなんとか追いついてきた駐屯兵に尋ねると、まだ年の若い二人の兵士は今にも泣きだしそくに敬礼する。

「はっ!! 現在、我々と共に人魚達が海で応戦しています!! が、壁の

向こうから登ってくる巨人面魚の数があまりにも多すぎます!! 前線が崩壊するのは、もはや時間の問題です!!」

「それから、最初はノロマだった巨人面魚が、徐々に速くなってきてます!! 普通の巨人にも見られるような奇行種が増えている他、舌が伸びる個体や大きく飛び跳ねる個体、壁や家屋等の側面にくっついて走る個体が数体見受けられます!! それら奇行種の場合、この場に押し留めるのはもはや不可能です!!」

「巨人面魚が少しずつカエル化していつてるってか? とんでもねえな」

舌打ちするリヴァイに、後ろに追いついた調査兵団の面々どよめいた。が、一人だけハンジ・ゾエが興奮したようにリヴァイの服を引っ張った。

「すごい、凄いよ巨人面魚!! リヴァイ、速く行こう!! カエル型巨人を見てみたい! トロスト区はもう少しだ!」

「テメエは少し黙ってるクソメガネ!!」

大部分の調査兵団がトロスト区に向かう中、エレンは数名の調査兵団、駐屯兵団と共にウォールローゼ南部付近の村で避難誘導を行っていた。

そこはまだ巨人面魚に襲来されていないが、それでもローゼが突破された今、全ての人間を一度シーナへ避難させねばならないのだが。

「わあ!! えれえれだー!!」

「写真と同じなのね!! 素敵!! かつこいいわ」

「皆さん急いでウォールシーナに向かってください!! ここはもうすぐ巨人面魚が襲来する恐れがあります!!」

「えれえれ、握手してください!!」

「後でいくらでも握手しますから!! お願いですから早く移動してください!!」

「……はい!!」

エレンは己の人気っぷりを侮っていた。

つい先ほどまでは百年の安寧時代よりも更に一層平和だった壁内。そこに知らない者は誰もいない大人気アイドルユニット『シガン』の一人エレン・イエーガーが間近に居るとあっては、そちらの方に意識が集中してしまっただけでも避難がはかどらないのだ。

特に危機意識の鈍りまくった若い娘さん方やミーハーな奥様はエレンを取り囲んだまま、巖のように動かない。

「やっぱり、すげえ人気だな。エレンの奴」

「そりゃまあ、大人気アイドルの一人だしな。しょうがないだろ」

「だが、このままじゃ避難がすすまねえよ」

「んじゃ助け舟でも出さか……。おいエレン!! そっちは良いからちょっと上から周囲を見て来てくれ!! 巨人面魚が来てないかどうか!!」

「解りました!!」

遠巻きに見ていた調査兵団の一人がエレンに声をかける。と、大ブーイングが起きる人垣の中を掻き分けて、エレンが村の外の森へ走った。

ついて来ようとするファンは他の調査兵団や駐屯兵団に抑えられたので、エレンさえ見えなくなれば無事に避難してくれるだろう。

上から周囲を見回すため、立体機動を展開して木々が乱立する場所へ一人アンカーを飛ばす。

プシューとガスが吹く音がして地上数十メートルへ駆けあがった瞬間、前方から口だけがやたらと大きな巨人面魚が樹上に立ったエレンを足場の枝ごと飲み込んだ。

あつという間の出来事だった。

「ゲ」

森の向こう側から物凄い跳躍力で飛んで来てエレンを飲んだ巨人面魚は一声低く鳴くと、再び物凄い跳躍力でどこかへ飛び去った。

「ライナー。本当にやるのか？」

「ああ。これだけ壁内が混乱している、今がチャンスだろう？ ベルトルト」

混迷を極めるトロスト区。

無数の巨人面魚がうごめき、大混乱が起きているその場所で召集をかけられた訓練兵は逃げ遅れた民間人を逃すために戦っていた。

大半の訓練兵は巨人面魚の胃袋に消え、残った者もガスの補給が間に合わず立ち往生する中で、敵である巨人面魚は海から次々と壁を乗り越えその勢力を増していた。おまけにそれぞれの個体も少しずつ変化しているのである。あるものは体長の半分もある舌を伸ばし、あるものは塔一つを軽々飛び越える跳躍力を持ち、あるものはヒトのような手足に吸盤を備えて縦横無尽に壁を這いまわる。

まるで巨大なカエルのような巨人面魚を相手に、訓練兵ならずともベテランの兵士でさえも明らかに数を減らしていた。

兵士だけでなく、民間人にも犠牲が出始めたそんな中、ライナー・ブラウン及びベルトルト・フーバーは半壊した家の陰に隠れて何事かを話し合っていた。ちなみに、アニはその場に居ない。彼女は憲兵団へ行ったので、内地の方で任務をこなしているであろう。

「……でも、ライナー。本当に良いのかい？ 外は海なんだよ？ ここでやった場合、最悪、僕らは故郷に帰れなくなる可能性もあるんだよ？」

不安そうなベルトルトの言葉に、しかし固い表情のライナーは静かに頷いた。

「それでもだ。だが、帰れなくなるのではない。故郷へ帰るために俺達がやるしかないんだ！」

覚悟を決めた男の表情に、ベルトルトは唇を噛んで頷いた。

調査兵団本部。

ループを翳し、ミニマムサイズの妖精さんマニュアルを読んだエルヴィンは頭を抱えたい気持ちで一杯だった。

長年兵士をやってきた。調査兵団団長となり、人類の知識の及ばない巨人を相手に命がけで戦い続け、多少なりとも不可思議には耐性がついていたはずだが、ここまでワケが解らないのは初めてである。

「つまり、妖精がその場に居れば居るほどトラブルは増えるが死者は居なくなる……という訳だな？」

絞り出す様に尋ねると、真っ先に頷いたのは一番小さな少女ことクリスタだ。

「はい。そしてワケの解らない事態も爆発的に増えます。とんでもない事件やトラブルもわんさか増えます。けど、死者は確実に減りません。これだけは、確かです」

「わ、私も証人になります!! あの壁内にはらまかれた食糧……妖精社の食糧は、全部妖精さんがやったことだと思っんです!!」

「この壁内には人魚も河童も巨人も人面魚もわんさか居るんだからよ、妖精くらい居たっておかしくないだろ? 大体、壁外が海になったこと自体がそもそもデタラメなんだ。頼むからクリスタを信じてやってくれよ!」

クリスタに続いてサシャ・ブラウスが証言し、普段はクールなユミルも必死で言明している。

「エルヴィン、こいつらの話は、あのキノコと種類が似とらんか? デタラメだが人が死なんっちゅーのは俺も本当やと思うたい。どの道ここで足踏みしとっても人類は破滅やけん。信じてみたらどげんか?」

エルヴィンの隣に立った川端くんがボソリと言うと、しばし考えていたエルヴィンは肩の力を抜いて、それはそれは長い溜息を吐いた。

「解った。君たちの言う事を信用しよう」  
ほっと安心したような表情をする五人組。しかし、信用を得た程度で安心している暇はない。

「で、クリスタ、どうやって妖精を増やすんだ?」  
ジャンが尋ねると、クリスタはにこやかに言う。

「甘い物と、楽しい事です。この二つさえあれば、妖精さんは爆発的な増殖を起こします!」

瞬間、場の空気が凍った。

「……甘味はともかく、クリスタ。壁内は今、絶望の一色で染まってるぞ?」

「あー……でも、えっと楽しくなくても甘味だけでも何とか……多分……?」

ジャンの一言で、周囲の全員が意気消沈するが、何かを思い出したようにアルミンが顔を上げる。

「まってジャン。この絶望感って本当に壁内中に広がってるの!」

「はあ? 何言ってるんだよアルミン。そんなの当たり前だろ?」

「本当に? 今日の今日起こった事件のことが、中央の貴族街にも広がってると思う? あの巨人を見たことが無い人たちまで本気で絶望していると思う?」

「なっ……そりゃまあ、……そうだな。平和ボケした今の貴族街なら、噂は流れててもまだ緊迫感はねえ……かもしれん。けどなあ」

困り顔のジャンに、アルミンは手を叩いて提案する。

「シガン しな、ゲリラライブをやるっ!! それで会場は大盛り上がりのはずだ!」

「はあ!? 何言ってるんだ!? やるにしたってどこだよ? シーナの地下街か!? あそこに人を集めるには時間がかかるぞ!」

アルミンの意見に驚くジャンだが、アルミンは噛みつくようにマネージャーのジャンに訴える。

「だってもう、これしか無いだろ!? この絶望の中で楽しい事なんて、僕にはこれしか思いつかないんだよ!」

「ちよっと待て。私に良い考えがある」

アルミンの意見を吟味するようにはしはし考えていたエルヴィンはすぐさま地図を引っ張り出して机の上に広げ、壁内の中央、貴族街の公園と思しき場所を指差した。

「ここに、憲兵団が立てた壁内戦隊ケンペイダン専用の舞台があったはずだ。音響設備も整っていたと思う。私の引き出しの中に



はいくつか音楽班が残した音源のCDもあるから持って行くと良い。そして、「この舞台の傍には憲兵団の本部があるはずだ。そこに厨房も、おそろしく砂糖もある程度はあるだろう。使用許可は……私のサインと書簡を持って行けばどうにかなるはずだ」

そこまで言ったエルヴィンは、ゆっくりとアルミンに視線を移す。

「だが、シガン　しなメンバーは今、うさミン。君しか居ない。本当に出来るか？」

「アルミン、本当に出来るのか!?　お前一人で本気で成功すると思うのか!？」

「アルミン……」

「どうでしょうか?　アルミン!!」

エルヴィン、ジャン、クリスタ、サシャやユミル、川端くんからもじっと確かめるように、懇願するような視線を送られたアルミンは額から大粒の汗を一筋垂らし、息を吸うと大きく頷いた。

「僕を誰だと思ってるんですか?　壁内で知らない者は誰も居ない。

トップアイドルユニット、シガン　しなの一番人気アイドルのうさミンですよ!?!　どんな状況でも必ずや、マイク一本で会場をどっかんどっかん盛り上げられるに決まっています!!」

## 人類と烏合の衆

「……は……確か俺は食われて!?!」

巨人面魚に食われたエレンは見知らぬ場所で目を覚ました。

真っ先に手足の状態を確認してみるが切断していたり折れたりしている気配はない。腕に軽い擦り傷はあるけれど、それ以外にはぶつけた場所も無いように体はすこぶる好調であった。

次に周囲を見回してみる。その場所は暗く湿っていて、巨人面魚の体内のせいかとても生暖かい。生きた巨人面魚の体温は普通の巨人の持つ灼熱の体温と違い四十度前後と聞き及んでいるが、それにしても随分と過ごしやすいような気がした。

「ちくしょう。何なんだこの場所は。本当に巨人面魚の腹の中か?」

愚痴りながらじっと闇に目を凝らすと、段々と目が慣れてくる。巨人面魚の胃袋はとても広く、屈みながらも何とか立ち上がることが出来た。誰かが既に食われているのかと思っただが、自分以外に人間は居ないようだった。手に当たる肉壁はぶよぶよと柔らかい。しかし非常に肉厚で、いかに超硬質ブレードでも内側から切り刻んで外へ出ることは難しそうだ。

「内側から出られそうにねえな……くそっ」

舌打ちをして巨人面魚の内臓を殴りつけるが、エレンの力では肉がぶるんと揺れる程度だ。どうにもならず、その場でずるずると座り込んで闇の中を見つめていると、どうした事だろう。巨人面魚の胃袋のトンネルのほんの少し先の方。カーブがかかったあたりで何か光っているのが見えた。

「光……? こんなどこで? 誰かいるのか?」

一縷の望みをかけて柔らかな内臓を腰を屈ませながら進んだその先には、なんと煌々と光輝く遊園地が広がっていた。

明るくアップテンポな音楽が流れる中、金や銀の装飾に彩られたコーヒーカップやメリーゴーランドがくるくると回っている。

空中でうねるレールの上を弾丸のように高速で走り回るジェットコースター。

燭台のような形をした巨大なブランコに、空中を回る象を模した娯楽機械。中央に設えられた広場には何故か噴水までが備え付けてある。

そして極めつけは遊園地の一番奥に存在する、赤や青や緑や色とりどりに光り輝く大きな観覧車。

ただし、全てミニチュアサイズだが。

実は一番大きな観覧車でさえ、高さはエレンの首程までだ。

しかし、驚くべきはここだけではない。なんと、遊園地では沢山の小さな人間がアトラクションに乗って楽しそうに遊んでいるのだ。

「これは、一体……？」

ここが巨人面魚の腹の中というのも忘れて、見たことも無いような光景に呆然と見入っていると観覧車の中に居た小人の一人がエレンに向かって手を振った。

「あ、にんげんさんだー」「やつぽー」

極めてノーテンキな声に毒を抜かれ、思わずエレンが「お、おう」と手を振りかえしてしまつと、途端に足元へわちゃわちゃと十数人の小人たちが集まつて来た。

「にんげんさんだー」「めずらしー」「こんなところにもいたのね」「ぼくらよりあちこちいけます」「にんげんさんおかしもってますか？」「おかし？」「そっだにんげんさんはおかしだ」「おかしあります？」

「お菓子？」

突然取り囲まれ、口々に問いかけられたエレンは、ふと思いついた。「そついえば、ファンから貰った飴玉がまだあったよう……」

ズボンのポケットをゴソゴソやると、紙に包まれたキャンディーが一粒だけ外に零れ落ちる。足元に落ちたキャンディーを、一人の小人が頭上高く持ち上げれば周囲から「おおー!!」と感嘆の声が上がった。「それしか無いけど、良かったらやるよ」

エレンが言つと、小人たちはぶるぶると打ち震え、ついでわあああ!! と歓声を上げた。

「ありがとうございます!!」「ありがとうございます!!」「にんげんさんはかみさま?」「やったやった!!」「みなでわかるです!!」「ちゅうぼつにもっていきます」「ひゃっほいです」

バケツリレーのようにミニチュアの建物に吸い込まれていく飴玉を見送って、何だか気の抜けたエレンはとりあえずその場に腰を下ろす事にした。

切り分けた飴玉を別けてもらおうと、大半の小人は建物へ行ってしまったが、まだ半分の小人はエレンの周りを取り囲んでいる。

「にんげんさんは、どうしてここにいます?」

好奇心が強いらしき小人の一人がエレンの膝に登り、首を傾げた。

「そりゃ、巨人面魚に食われたからだろうな。そういうお前らこそ、どうしてこんな場所に居るんだ?」

素直に答え、お返しとばかりに同じことを尋ねると、小人たちは皆一様にくいと首を傾げるのだった。

「さあー」「忘れましたな」「なしてここにいたっけ?」「たしか、食べられたのでは?」「あー、そういえば」「食べられましたなー」

一人が思い出したように言つと、そのほかの小人も思い出したようだった。食われたにも関わらずあまりにも暢気な小人の様子に、エレンはつい笑ってしまう。

「でも、食われた割には何かメチャクチャ快適に過ごしてるんだな……お前ら」

ネオンの光る遊園地に目を向けると、全てのアトラクションの根元からは黒いコードが伸びていて巨人面魚の肉壁に刺さっていた。エレンには知る由も無いのだが、彼らは巨人面魚の熱エネルギーを電気に変換してこのアトラクションを動かしているらしい。そして過ごしやすい気温と酸素濃度から察するに、おそらく空調設備もどこにあるのだろう。

「せっかくですのびくってみました」「たべられきねん?」「きねんにゆうえんちつくってみました」「ぴのきおみたい」「たべられるってしんせん」「ひてもしげきてきてました」「ぼくらにだいらゆっしんひです」「にんげんさんもたべられ?」「にんげんさんにもはやってます?」「

不穏な言葉にエレンは全力で首を振る。

「いやいやいや、食われるのは別に流行ってねえよ？俺がここに居るのはマジで不本意なんだよ。ていつかそつ言えば早く出ないと、本当に人間が全員が食われちまうんだつた!!」

小人たちのメルヘンな容姿と不思議空間のデタラメ具合に飲まれかけていたが、思えばここは巨人面魚の腹の中なのだ。

ウォールローゼではまだまだ大量の巨人面魚がわんさか海から這いあがってきて、仲間たちを食らっているに違いない。自分は何故かワケの解らん空間に到達したが、全ての巨人面魚の腹の中がこうなっているとは限らないのだ。

こんなところで遊んでいるわけにはいかない。とエレンが慌てて立ち上がりかけた時、膝からぴよこんと飛び降りた小人が今度は逆方向に首を傾げる。

「にんげんさん、そとにでたいですか？」

「そりゃ、もちろんだ。外ではまだ仲間が戦ってるんだ。それに、俺は奴らを駆逐するって誓ったんだ。こんな所でボヤボヤしてらんないよ」

すると、小人たちは円陣を組んでひそひそ話をし始めた。

ひそひそ話は徐々に加速を増していき、最後にはきゅるきゅると早回しのような音になり、それが最高潮に達すると円陣がぱつとほどかれる。そして、小人の一人がエレンの手のひらに乗るくらいの小さなスイッチを差し出した。赤い土台に、白い押しボタンがついたおもちゃのようなシンプルなスイッチだ。

「きゃんていのおれいです」「こじ、ばしょがわるいのでー」「これしかできませんが」「にんげんさんならたぶんおーけーかと？」

「これは……？これを押すと外に出られるのか？」

エレンがスイッチを受け取ると、小人たちはそれぞれに頷いた。

「でられますが」「いろいろ、かいしゅつされます」「かいしゅつするよね」「ひろわれます」「かいしゅつできないぶんとか」「そゆのはなかったことになりますか」「あんけーと、わるかったときみたい？」「つづきがでないかんじ」「つづきりです」「むりしてかんけつ」「ばっど

もありかも?」「おれたちのたたかいはこれからだ」「できるところだけ  
かいしゅつされー」「よくかんがえてー」

「何だか解んねえけど、これで出られるんだな? ありがとう!」

小人たちの忠告を聞くのもそこそこに、エレンは勢いよく赤い土台  
から飛び出た白い突起を押した。

ぴこ。とスイッチがオンになり、エレンが小人の方を向く。

「ところで、何が回収されるんだ?」

それまでバラバラに喋っていた小人たちが同時に答えた。

「「ぶくせん」」

エレンを飲んだ口だけがやたらと大きな巨人面魚がその場で立ち  
止まり、ビクリと痙攣する。

次いで魚の鱗に覆われたその体が内側から風船のように膨らむと、  
その口から巨大な腕が飛び出した。

恐慌状態のトロスト区、及びウォールローゼ南部では、今も兵士た  
ちが己の命を削りながら戦っていた。

人類最強と呼ばれるリヴァイ兵士長を含めた調査兵団も数刻前に  
到着し、人類側の戦力は増したかに見えた。が、巨人面魚の侵攻の勢  
いは衰えることが無く、次々に壁を登り壁内へ入り込んでくる。中  
でも特に人の臭いが強いらしきトロスト区への侵攻は目に余るもの  
があった。

「畜生! 倒しても倒してもキリがねえぜ!!」

民間人のほとんどは避難を済ませたかあるいは食われ、動いている  
人間は大体が背中に薔薇か翼の紋章を背負った兵士だけとなってい  
た。しかし、それでもなお巨人面魚が壁を登る能力を持つ限り兵士た

ちはこの場に背を向けることは出来ない。

家と家の隙間を立体起動を駆使して駆け抜け、七メートル級を屠つたばかりのとある兵士は舌打ちする。

「畜生、もうガスが切れかかってやがる」

崩れかけた家の屋根の上で立体機動を確認した若い兵士はどこかにガスの補給部隊が来ていないかと振り向くと、すぐ後ろに十五メートルはあるうかという最大級の巨人面魚が目の前でのっそりと悲しげな顔を覗かせていた。

「あっ」

あまりの恐怖に、兵士の動きが一瞬止まる。もしもこれがカエル種だったならば、すぐにねばつく舌で絡め取られてこの兵士は終わっていただろう。しかし、この巨人面魚は普通種だったらしい。のそりと身を乗り出し、今にも兵士の頭を食らいつつ口を開けたその瞬間、巨人面魚が横に吹っ飛んだ。

「えっ？」

兵士が目を瞬かせると、目の前には人類の天敵たるあの『鎧の巨人』が佇んでいたのだ。

「きよ、巨人だど!!」

懐かしい人型の巨人を見て、反射的にブレードを構え迎撃態勢に入る兵士。だが、鎧の巨人はフシユウと息を吐くと、目の前の兵士には目もくれず、倒れこんだ巨人面魚のうなじを踏み潰して殺す。そして巨人面魚が消えるのを待たず、再び次の巨人面魚へ向かって行ったのだ。

「一体、何なんだ？」

兵士が目の前の状況を理解できずにいると、再び誰かが叫んだ。

「きよ、巨人だー!! 超大型巨人が出たー!!」

どこからともなく兵士たちの声がして、壁を見上げると、そこにはなんとあの五十メートル級の超大型巨人が何故か『壁の内側』に佇んでいるのだ。

「畜生、今日はなんて日なんだよ!!」

駐屯兵も調査兵も関係無い。その場にいた全ての兵士が泣きたい

気持ちでいっぱいだった。

海からは何百匹もの巨人面魚が這い上がり、ただでさえ一杯一杯なのに今度は超大型巨人に鎧の巨人が立て続けに出現したのだ。超大型巨人に戦力を向けた場合、巨人面魚がシーナへ向けて出て行ってしまつし、巨人面魚に戦力を向ければ超大型巨人が壁を壊してしまつかもしれない。どちらでも構わない。どの場合でも人類は終わる。

「もはや、諦めるしかないのか」

絶望感が周囲を支配し始めた。しかし、その日の超大型巨人は様子が違う事が、人類にはすぐ解った。

のっそりした動きではあるが壁を壊す気配は無く、信じられないことに海から這いあがり地を這う巨人面魚をその場で踏み潰したのだ。腹に響くような凄まじい轟音がトロスト区中を駆け抜け、倒壊しかかっていた家屋がいくつか潰れた。

凍りついたように、人類は山のように高い超大型巨人を呆然と見上げている。

巨人面魚を踏み潰した超大型巨人は「うおおおお!!」と低い声を上げると、体から超高温の蒸気を発して壁を這い上がるうとしてた巨人面魚の一群を吹き飛ばし、そしていつかと同じく、まるで霞のように消えてしまった。

「な……何故なんだ?」

巨人が あの人類の天敵たる巨人が、人類の味方をしている。

「何故、巨人が巨人面魚を殺しているのだ!」

目の前の事実が、信じられなかった。

「デメェら!! 何をばやばやしてやがる! もう何が起きても気にするな!! このチャンスを絶対に無駄にするんじゃないやねえ!!」

鳥のように奔り、一度に三頭の巨人面魚を次々屠った人類最強、リヴァイ兵士長の怒声に、それまで呆然としていた兵士ははっと己を取り戻すと喊声を上げながら次々に巨人面魚へと向かって行った。



巨人化を解いたベルトルトは人の居ない小路を一人、足早に進んでいた。

危惧していた巨人面魚との遭遇は超大型巨人が吹き飛ばしたおかげで鉢合わずに済んだが、とにかく人目が気になった。

息急きながらも立体機動は使わず、とにかく人の居ない道を選んで遠くへ向かって走って走って走り続ける。

「ライナー、君は、本当にこれでよかったのかい？」

走りながらもベルトルトは、今もきつと巨人の姿で暴れているだろうライナーへ泣き出しそうな声で尋ねた。

こんな事をしたことに、何の意味があったのかは解らない。

こんな事をしたって一時しのぎでしかないのだ。壁から吹き飛ばしただけの巨人面魚は必ず再び海から上がって来るだろう。

走り続けたベルトルトは人気の無い崩れた家屋の陰でようやく立ち止まった。早鐘を打つ鼓動を沈めるように、大きな体を縮こませて己のしでかした矛盾を後悔するように頭を抱える。

「僕たちは、人類の敵なのに」

五年前のあの日、壁を壊した人類のもつとも憎むべき仇敵が今更人類を守るなんてこと、絶対あってはならないはずなのに……。

「それなの」……」

ライナーは言った。

これは、故郷に帰るためなんだ。と。

本当にライナーがそう思っているのかは解らない。

ベルトルトにはライナーの真意を知る術は無いのだから。

けれど、確かに今ここで人類が減んでしまったら、彼らはこの海のと真ん中に取り残されることになってしまっだろう。

このままどこへ帰る事も出来ずに、ただ海の藻屑になるのだけは死んでもごめんだった。

だから、ベルトルトはぐっと袖で目を擦って壁を睨む。

その為にいつかは滅ぼすべき人類を、今日は生かすことになるうとも。

「絶対に帰るんだ。僕らの故郷へ……!!」

その頃、ウォールローゼ南部ではミカサが一人、林の中を猛スピードで駆け抜けていた。

「エレン、エレン、エレン、エレン……」

瞳孔は開き切り、ガスの残量さえも確認せずに立体機動で駆け抜けるミカサの頭の中はエレンの事でいっぱいだった。

『エレンが、巨人面魚に飲まれました!!』

その報告を受けたのはいつだったか。そう前の事ではない。

エレンと同じく民間人の避難誘導を行っていたミカサはウォールシーナへ向かう最後の馬車を見送った後、すぐにエレンが飲まれたという村へ急いだ。

後方から聞こえる「戻って来いアッカーマン!!」という仲間の声は、既に彼女の耳には届かない。

エレンは『食われた』のではなく『飲まれた』らしい。それならば、体温の低い巨人面魚の事。すぐにそいつを殺せば、もしかしたらまだ助かるかもしれないという可能性に賭けてミカサは村へ向かってひたすら走る。

エレンが復活キノコを食べていた事実を知らないミカサは「エレン、待ってて、必ず助けるから」とその三つの言葉ばかりを唱えながらひたすら狭い木々の間を縫うように駆け抜けていく、が、林の中腹まで来た所でとうとうガスが切れてしまった。

「キャア!!」

墜落する直前に何とか木にアンカーを放って体勢を立て直すも地べたへ強かに体を打ち付けてしまう。痛む体に顔をしかめながらどうにかこうにか立ち上がると、目の前に巨大な人間の顔が立ちふさがっていた。

巨人面魚の姿に戦慄が奔るその時、更にがさり、と木の陰から数匹の巨人面魚が現れ、ミカサを見下ろしていた。

「……もっ……ん……な……つ……る……に……ま……で……」

予定では、巨人面魚はまだここまで到達していないはずだったのだが、思ったよりも侵攻が早いようだ。

人間の手足の生えた、巨大な人面魚。巨大な目玉を持つ奴や、ニタニタと笑っている奴、悲しそうな顔をしている者や怒った形相を張り付けた者。持っている顔は様々で、大きさも三メートルから十五メートルまで色々いるが、どいつもこいつもバケモノであることには変わりない。

普通の人間ならば、きっとここで生きることが諦めていたであろう。しかしミカサは諦めるどころかギツ、と巨人面魚どもを睨みつけ、超硬質ブレードを両手に構え、叫んだ。

「どけ!! 私、エレンの所に行くんだから!!」

しかしミカサとてバカではない。立体機動が使えない今、超硬質ブレードだけでこのバケモノどもに敵うはずが無いという事は痛い程解っている。

今も頭は割れそうなくらいズキズキ痛み、心のどこかで『もう諦めるしかない』ともう一人の自分が言っていたのだとしても、ミカサはそんな弱い自分を力尽くでねじ伏せて決して死ぬことを認めないし、生きることを諦めない。

何故なら、ミカサは絶対にエレンのもとへ行かなくてはならないのだから。

十メートル級がじり、と歩を進めると、ミカサは空を裂くようなありったけの声で怒鳴った。

「そこを、どけえええええ!!」

天を貫くような怒声に反応し、巨人面魚が一斉に獲物に向かって飛びかかる。哀れな人間の腕を裂き腹を割り頭を食らおうとしたその瞬間、「カー!」とカラスの鳴き声が出た。

鋭い稲光と共に落ちる雷、轟音と同時に落ちる巨大な炎の塊が巨人面魚を打ち、灰さえも残さぬほど燃やし尽くしていく。

「な、何? 何なの?」

固い鱗も人のような頭や手足、尾の先まで炎に舐められた巨人面魚が炭となり目の前で崩れ落ちた。

ミカサが突然の出来事に戸惑っていると、音に反応したのか崩れ落ちた巨人面魚の他にもぞろぞろと無数の巨人面魚が集まり出す。その数は先ほどの比ではなく、とてもミカサー一人で手におえるような数じゃない。例え調査兵団全員が居たとしても直接の相対は避ける数だろう。しかし。

「バージリィィィイスク!!」

上から落ちてきた少女がミカサの前に立ちはだかる。と、ミカサへ向かって集まって来た巨人面魚は何故かつぎつぎと白く変色して動きを止めていく。

何が起きたのかは解らない。しかし、よく目を凝らして見てみると集まった巨人面魚は全てが石になっていた。

「助かった……の?」

困惑しながら周囲を見渡すと、天から六人の少女がパサパサと羽をはためかせながら降りて来た。

「貴方たちは一体……?」

戸惑いながらミカサが尋ねると、中央に居た鳥幼女ことハーピーとその仲間たちはパツと手足を翼を広げて一斉に囀った。

「ミニグローバリゼーション!!」

「クリスタ、まずは何を用意すれば良いですか!」

「まずはバターを潰して、それから小麦を振っておいて。あ、グラム数はメモに書いてあるから、ちゃんと量ってからやってね? 私は早く作れるものからどんどん作っていくから!」

ウォールシーナにて憲兵団の厨房を借りたクリスタは、サシャと共に白いエプロンをつけてお菓子作りの準備をしていた。レシピが書かれたメモを捲りながら棚から次々と食材を引っ張り出していく中で、厨房のドアを開ける音がする。

「ねえ、本当にこんな物でいいのかなの?」

食糧庫から大量の小麦を運びながら同期というだけで手伝っているマルコが尋ねると、小麦を秤にかけていたサシャが物凄い勢いで振り向いた。

「マルコ。信じられないかもしれないけど、今は本当にこれしか無いんですよー!」

「それは解ってるよ。サシャとクリスタが嘘を言うはずなのは知ってるけど、どうしてお菓子作りとライブが人類の救済になるんだ？何が僕らを救うんだい？」

「それは解りません!!」

「解らないって……」

「でも、もうこれしかありません!! 全ては妖精さんのご機嫌次第です!!」

「そんな無茶苦茶な……」

「ねえマルコ。砂糖は本当にこれしかないの!? 在庫は他に無い!」

食糧棚を漁っていたクリスタが一握りの砂糖を前に悲鳴に似た声を上げると、隣から覗き込んだマルコが申し訳なさそうに首を振った。

「そこである分が全部だよ。砂糖なんて高級品、憲兵団でもそう大量に置いてないんだ。あるとしても上官の食糧庫くらいで、こればかりは僕ら一般兵が勝手に使う権限は無いんだよ」

「そんな……これじゃクッキーも焼けないじゃない。何か、何か代用品は無いかしら……」

他に代用が利く甘い物が無いかと棚の中を漁っていると背後から「あるよ」と少女の低い声がした。振り返るとそこには。

「アニ」

憲兵団に行った104期生の少女、アニ・レオンハートが黄金色の液体が入った、一抱えもある大きな瓶を片手に携えて立っていた。

「ハチミツならあるよ。フランスとハンナから壁内戦隊ケンペイダンにしてくれたんだ。これで間に合うかい？ マルコもいいだろ？」

「マルコ、本当に使って良いの？」

クリスタとアニに視線で尋ねられ、マルコはすぐに大きく頷いた。

「もちろんだよ！　これで人類が本当に助かるなら、全部使ってよー！  
「女神！　これで何とかなりますね！！」

クリスタはサシャとマルコ、そしてアニに視線を向けると、満面の  
笑顔を作って肯いた。

「うん！！　皆、本当にありがとう！！」

それはたったの一言だった。

『シガン　しな』のゲリラライブをやるぞ。

たった、その一言だけで人々はウォールシーナの舞台に駆け付けて  
くれた。

大人も居れば子供も居る。男の人も居れば、女の人も居る。老人、  
壮年、中年、青年、ありとあらゆる年齢層の人間が、彼を一目だけで  
も見ようと、それだけの為に大勢の人間が詰めかけていた。

最初、エルヴィン団長からの書簡を読んだ憲兵団師団長ナイル・  
ドークは決していい顔をしなかった。しかし、それでも憲兵団は今ま  
でに無い人数の観客に目を剥きながらもゲリラライブの警護をする  
ことに賛同してくれた。

「アルミン……いや、うさミン、準備は良いか？」

舞台裏でバニーの衣装に着替えたアルミンが、ここまで下準備をし  
てくれたマネージャーのジャンから放られたマイクを受け取る。

「もちろんさ」

「よし、じゃあ、行ってっいー」

ジャンに送り出され、緊張した面持ちでゆっくりと舞台へ上がった  
瞬間、アルミンを迎えたのはまるで大波のような歓声と拍手だった。

いつもとは少し違う、誰にも頼ることが出来ない、一人ぼっちの大  
舞台。

（大丈夫。いつもと同じだ）

緊張に顔が引きつりそうになるのを何とか抑えたアルミンは心の  
中で大丈夫、大丈夫、と繰り返し唱えながらゆっくりと舞台の真ん中

に立つ。

この壁内にいるすべての人間の命が、このライブにかかっているのだ。ここでヘマをするわけには絶対にいかない。

一つ深呼吸をしたアルミンは次いですっ、と息を大きく吸い、期待に満ちた眼差しを向ける観客に向かって大声で言い放った。

「みんなー！！！！ 今日突然の告知にも関わらず、集まってくれてありがとうー！！！！」

うおおおおお おおおおおおおお!!!

ステージ脇に設置された音響設備から独特のリズムと共に明るい音楽が溢れ出す。同時に、客席からよく訓練されたような掛け声はどこからともなくあふれ出し、やがて会場中に壁内全土に聞こえそうな程大きなうさミンコールが響きわたるのだ。

う・さ・ミン!! う・さ・ミン!! う・さ・ミン!!

沢山の声援を受けたアルミンが客席に向かって大きく手を振れば、途端にうさミンコールの音量が倍以上に跳ね上がる。それに負けじと、アルミンも大声でファンに叫び返した。

「今日は僕、うさミンしか居ないけど、みかりん、えれえれの分も歌うから皆楽しんで行ってね!! それじゃあ、一曲目ー」  
『ミミミン うさミン』いきまーす!!」

うおおおおお!! と獣のような喜びの雄叫びが空に響き渡った。

## 世界の終わりとむろみさん

風を切って飛ぶ六羽の鳥達。

五羽の鳥幼女に交じって、一羽の巨大な三本脚のカラスに跨っているのはミカサ・アツカーマンだ。

「すごい……私、本当に空を飛んでいるんだ……」

森の中で鳥達に助けられたミカサは今、巨大化したヤタガラスの背に跨って空を飛んでいた。見渡す限りに広がる壁内の風景とその向こうにある広大な海。そして壁に向かって行列を作る大量の巨人面魚の群れだ。

「ハーピーはん方、本当に大丈夫なん？」

ちよっぴり心配そうに聞くヤタガラスに、ハーピー、バジリスク、鳳凰、サンダーバード、そしてキンナラの鳥仲間たちは口々に囁いた。

「おっけおっけ！」

「ダイジョブだ！」

「無問題！」

「DON・T WORRY!!」

「」

キースを救うため鳥仲間を呼んできたハーピー。しかし、ハーピー一行がトロスト区へ戻る途中で助けたミカサという少女はどうやら人を探しているらしい。このまま放っておいても巨人面魚に食われてしまうのは目に見えていたので、ヤタガラスがミカサの人探しを手伝う話になったのだ。

「ねえ、手伝ってくれるのはとても嬉しいけど、本当に良いの？」

ヤタガラスの背からミカサが申し訳なさそうに尋ねると、三本脚のカラスは笑った。

「あんさん放っておいても化け魚に食われてしまはりますもの。それに日本人を見るのは久しぶりやさかい。ハーピーはん方が宜しければお手伝いもしたくなりますわ」

穏やかな言葉遣いのヤタガラスに、鳥達はもう一度口々に問題無い



と囀った。暖かな鳥たちの言葉を聞いて、ミカサは周囲を飛ぶ少女の姿をした鳥達を見回してぐっ、と頭を下げた。

「皆、本当にありがとう!!」

「ほんなら、いきましょか。ミカサはんしっかり捕まっときゃー!」

ぎゅん、と翼を翻して方向転換をしたヤタガラスにハーピーが「ヤタガラス! アトで!!」と手を振ると、五羽の鳥達は一斉にキースとイエティが待つトロスト区へと急降下していった。

壁内が大混乱に陥っていたその時、むろみさんはリヴァイアさんに呼び出されてとある岩島に来ていた。

「ここが場所にこげん島があったとは……」

岩島と言っても木が生えていないだけでゴツゴツした岩肌には付着したコケのように短い草がまばらに生えていた。生き物は昆虫を初めとした小動物と海鳥が多少生息しているようだが、他に変わった生き物はどこにも見当たらない。

むろみさんとしては海の事なら大抵の事は知っていると知っているのだが、壁付近にこんな島があったとは気づかなかった。

「リヴァイアさん? どー?」

どっこいせーと島に上陸したむろみさんがリヴァイアさんを探して周囲を見回していると、頭の中にリヴァイアさんから直接通信が入った。

『もっしーむろみ、聞こえる?』

「あ、リヴァイアさん? 今言われた島に来たっちゃけど、どこにおるん?」

『その辺の海の中に海底洞窟があるっちゃきー。ウチは奥におるから来てほしいっちゃ。待ってるちゃー』

リヴァイアさんは言いたいことだけ言つと、すぐに通信を切ってしまった。

「はあー？ あ、切れた。もーリヴァイアさんってばほんとフリーダムやけん……よいしょ！」

ちゃぼんと海の中に潜って島の裏手に回ってみると、なるほど海の中の岩の間に洞窟のような大きな横穴がぽっかりと開いていた。

「あー、洞窟ってこれか」

迷わず洞窟の中に飛び込むむろみさん。

明かりがどこにもない、海水で満たされた真っ暗な洞窟の中を全速力で進んでいく。と、突然洞窟が途切れてどこかの広い空間に出た。

「お、上に出られそっつー」

どうやら岩島の中が一部分空洞になっているらしく、むろみさんが水面から顔を覗かせると目の前に小さな公園程度の大きさの陸地が広がっていた。

周囲は岩の壁で塞がれていたが、天井には明り取りのように小さな穴が開いている。そこから漏れた光がスポットライトのように細く点々と降り注ぎ、周囲に小さな草地を作っている部分がいくつか散見された。

その草地の一つに、リヴァイアさんが居た。

「あーむろみ!! こっちこっち!!」

「リヴァイアさん!? なんでこげな場所におるん!？」

缶ビールを片手にゆるーい笑顔をしたリヴァイアさんに手招きされ、むろみさんが陸に上がって近寄ろうとすると、足元で不思議な生き物がびよこんと飛び跳ねる。よく見てみると、その小さな生き物は周囲に何匹も動いているのに気が付いた。体長十センチ程度。ミニチュアサイズの三角帽子とボタンが一つついた洋服を着ていて、ノーテンキそうな顔の人間に似ているけれど、それでも無いような……。

「なにこれ?」

「妖精っっちゃ」

「妖精!？」

よく見れば、勢い良くビールを飲むリヴァイアさんの周囲には沢山の非常食糧の空き缶やレーションの空パッケージと共に小さな妖精が何人も居て、一心不乱にビスケットやクッキーやその他菓子類をネ

ズミのように齧っているのであった。

「Jの子らすっごく面白いわちやよー。ちいっと思ってるな?」

手近に居た一人をリヴァイアさんはひょいと摘みあげる。

妖精はリヴァイアさんの手の中でした。ばたともかくが、指先でちよいちよいちよいとくすぐられると子供のよつにきゅきゅと笑い、すぐにくてんと全身の力を抜いた。もうどうにでもしてください状態である。ちよっと可愛い。

「ね? ね? ハムスターみたいでかわいいーちやろ?」

目を輝かせて妖精をむろみさんに向けるリヴァイアさんに、むろみさんはジトつとした目を向ける。

「確かに可愛いけん。でも、リヴァイアさんがこっちに来れなかった理由ってもしかしてコイツらを見つけたせいなん? ここで遊んでたから来てくれなかったん?」

すると、「違う違う」と言ってるリヴァイアさんはパタパタと横に手を振った。

「まあ半分は正解っちゃけど、半分はハズレっちゃ。妖精と遊んでたのも事実っちゃけど、むろみの要件も解つとったよ。用はあの壁の国が大変な事になつとるきー助けてって話だったんちやろ?」

「リヴァイアさん解つとったの!? なら、何ですぐ来てくれなかったん?」

ちよっぴり非難がましくリヴァイアさんに食って掛かるむろみさん。しかしリヴァイアさんは気にした風も無く手の平で弄んでいた妖精をそつと地面に下ろすと、顎に指を当てて眉間に皺を寄せる。

「むーむむむ。実はちよっと難しい事があるてねー。ウチ達にとってあの壁は邪魔っちゃきー助けたほうが面倒なことになるっちゃよ?」「なして?」リヴァイアさん何か知つとるん?」

困つたふりをしながらもさらつと言いつつリヴァイアさん。むろみさんに問い詰められて、彼女は手に持った缶ビールの残りをぐいっとなげると、わちゃわちゃと動き回る妖精達をのんびりと指差した。

「解つとるゆーか、ウチも全部解つとるワケやなかよ? うーんと、そつちやねー。詳しく説明するとね、もともとあの壁の国がこっちの世

界に来た原因はこの妖精が次元と次元に穴を開けたせいだっっちゃ。まあ次元の穴を広げて壁をまるっとあっちの世界から飛ばして事態をややこしくしたのはワイズマンっっちゃけどね」

「ええええっ!?」じゃあ、ワイズマンが言ってた未知の技術の持ち主って、もしかしてこの妖精なん!?

むろみさんが思わず大声を出してしまうと、それに驚いた妖精は「ぴーーーーー」っと一斉に丸い球に変形する。

「むろみー。あんまり大きい声ださんときー。妖精は臆病な生き物っっちゃき。スマイルが大事っっちゃ」

「あ、ゴメン。でも何で妖精が原因なん?」

「んーと、あんたらどげんしてこっち来たんやっけ?」

リヴァイアさんが足元で丸まりを解いた妖精達に尋ねると、あどけない顔をした彼らは揃って首を傾げた。

「さー」「わすれちゃった」「どうしてだっけ?」「たしかおかしがたべたくて?」「そうだっけ?」「そうだそうだ」「おかしなくなたです」「でもたべたかたです?」「だからまきもどそうとしたっけ?」「そういえば」「でもおこられましたので?」「あなをほりました」「がんばてほりました?」「よくおぼえてるね」「ふっつわすれる」

妖精達のわちゃわちゃした会話で思い出したリヴァイアさんはポーンと拳で手を叩く。

「そうそう思い出した!! 事の発端はこの妖精達の居た世界で人間がとうとう滅びたんだっっちゃ。で、妖精は自分でお菓子が作れんっっちゃき、人間が作るお菓子を求めて世界の時間を何千回も巻き戻していたらノルンだか外宇宙の神だかに怒られて、仕方なく時空に穴を開けて異世界の人類を探す方式に変えたんちゃ」

果てしなく壮大な話を行きつけのコンビニを変えましたみたいなノリで軽く言われ、むろみさんは片手で眉間を押さえて唸る。

「何だか、あまりにも話がデカ過ぎて頭が追いつけない。えーっと、つまり、こいつらが壁の国に現れた理由はお菓子が目的ってこと!」

「大当たりー 皆さんも」一緒にー

パチパチパチとリヴァイアさんが拍手を送ると、真似をした妖精た

ちもパチパチパチと拍手をする。

「まあ、正しく言うのなら最初にウチらの世界を経由して壁の国に行つたみたいっちゃけどね。世界線的な距離の問題で人類が衰退した世界の方が行きやすいみたいっちゃき。まずは戦争で人類が滅んだこの地球を経由して、それからもう一つの人類が衰退期に差し掛かった世界に掘り進めたつてのがウチの読みだっちゃ」

「ちょ、ちょい待ち!! リヴァイアさん今何て言ったん? 人類は天敵の巨人さんに食われたんと違っん?」

何やら聞き逃しては行けないような言葉にむろみさんがワンモアプリーズすると、リヴァイアさんは指を立てて事もなげにさらっと答えた。

「何言つとるんむろみ。それは壁の国の人たちの世界の話っちゃ。コッチの地球人類は己の起こした戦争のせいで現在絶賛衰退中だっちゃ」

リヴァイアさんによると、現在の地球の人類は地下シエルターにごく少数しか存在しないらしい。

「きっかけは環境に優しい局所指向性兵器が開発された事だっちゃ」  
リヴァイアさんは語る。

今からおよそ百年前、人類はヒトタンパク及び細胞のみを分解、攻撃する環境に優しい局所指向性兵器を開発した。

これは周囲の自然環境に配慮し、人類のみを標的に痛みも無く一瞬にして泥のように分解してしまうという新しい考え方を元にした兵器だった。

一度その土地で使われると空気感染と接触感染を繰り返し、町一つくらいならものの数分間に人類を全滅させてしまうという恐ろしい物だった。しかし、もちろん環境に優しいので他の動物や植物には全く影響がないという。

「まあ、開発してしもーたんは仕方ないっちゃ。そのまま資料に留ま

るか誰にも知られずに、あるいは使われずに済めば良かったのかもしれんね。でも、そんな素晴らしい兵器があれば人間は使いたくなるものだったちゃ。まあ、早い話、一部の人類による暴走とその兵器の暴発が戦争の引き金となったっちゃ」

開発した某国が嚴重管理していたはずの局所指向性兵器。

それを盗んだ輩　組織だったのかもしれない　が他の国の街中でその兵器を発動させてしまったのが発端だった。そのせいで街の人が消滅し国民が大激怒。町一つを崩壊させた報復として開発中だった同じタイプの局所指向性兵器を強引に実用化。開発国に兵器を投下し首都を壊滅させた。ところが首都を壊滅させられたその国が報復の報復で再び指向性兵器を再投下。更に別の国でもまた似たような局所指向性兵器が開発されたのだが、今度は金銭目当てに技術が全世界中にバラまかれて事態を加速させた。

最初に戦争を始めた両国の同盟国が絡んでスパイがニセ情報を流しそれに翻弄され全然違う場所に兵器が投下。便乗して全く関わりの無い国までしゃしゃり出てきて状況が複雑化し、世界中に新型兵器で溢れかえってえらいこっちゃんの大騒ぎとなってしまうのだ。

「そんなわけでいろんな場所で色々な報復・破壊活動が繰り返され、人類は一週間とちよつとであつちよつ間に激滅してしまつたんちゃー」

「ええええええええ!!?」

「まあ、基本人類が死滅するだけで第二次世界大戦時みたいに海までドンパチ音がせんかつたきー、人間さん達も『黒いそよ風のような戦争』って言うてたみたいちゃけん、ウチもこの場所を発見して教えてもらつまで、突然人間さんが消えた理由は知らんかつたっちゃ」

そしてリヴァイアさんは暗い石壁の隅っこを指差した。小さく縮こまつて落ちていたのは数体の白骨化した人間の遺体であった。

「兵器のせいで故郷が住めんくなつて逃げてきたヒトだつちゃ。元々ここは要人用のシェルターとして作られた人工島だつたき、どうにかここまで逃げてきてこつそり隠れ住むうちに風邪をこじらせて死んでもーたつて彼らの幽霊が教えてくれたちゃ。まあその話を聞いてあげたら成仏してしまつたき。もつこにおらんげな」

そうしてリヴァイアさんは笑った。話を聞いてもらって嬉しそうに成仏していった彼らを思い出したのかもしれない。

「うーむむむ、まあ色々納得できん部分があるけど、それはちょっとこっちに置いていて……それと壁の国を助けられんのは何の関係があるん？」

むろみさんが難しい顔をしてリヴァイアさんに尋ねると、彼女はぴんと人差し指を立てた。

「それはね、戦争前の人類は月の一区画だけっっちゃけど、テラフォーミングに成功してたんちゃ。あちこちの大地が兵器の汚染まみれで地球に棲めんくなった人類は、シェルターに残った一部人類を地球に残して月に逃げたっっちゃ」

「もう何を聞いても驚かんばい。それで？」

「今から五年前、逃げ出した人類は兵器の汚染を無効化する薬、及び人体が泥状化しないワクチンを月面都市で開発、三年前に地球に打ち込んでプロジェクトは大成功!! 兵器の効果は無効化され人類は間もなく地球へ帰ってくるという通信が入ったっっちゃ」

「おお！ やるやん人類!! じゃあもうすぐ人間さん方は地球に戻って来るとね？」

「そうなのよー!! でも現在、問題が一つ出たわけちゃ」

「それが壁なん？」

むろみさんが不安げに聞くと、リヴァイアさんは静かに頷いた。

「あの壁の周囲にいる巨人面魚はね、壁の内側の世界……いわゆる異世界からセットで引っ付いて来た、言わば世界の要素って奴ちゃね」「要素?」

「そう。まあ、解りやすく言えばシリアス漫画とギャグ漫画の間に穴が開いて繋がったら、ギャグ漫画にシリアス要素が流れ込んできたと思えばええっっちゃ」

「え? それって何か危ないん？」

あっけらかんと言っリヴァイアさんに、むろみさんは首を傾げる。

「奴ら巨人面魚の要素はまあ察するに『人を食らう事』だっっちゃ。つまり、放っておいたらどんどん壁から周囲に浸食してそのうち陸地にも

繁栄しまくって月から帰って来たばかりの人類も食らおうとするっちゃね。ウチが巨人面魚を焼いても世界について回る要素やきー壁がある限りすぐに復活するち。そしたら我が同朋の子孫たるこちらの人類はさらなる大打撃にあうちや」

「それってまじいやん!? どうすればええの!？」

慌てるむろみさん。すると、リヴァイアさんは満面の笑みを浮かべて「慌てなくても一番簡単な方法があるっちゃ」と言う。

そして世界最強の海竜は無邪気な天使がラッパを吹くように宣告した。

「壁ん中の人間さんを滅ぼして壁をブチ壊せば万事解決だっちゃー

」



## 進撃のリヴァイアさん

壁から登る個体を吹き飛ばしても、未だ無数の巨人面魚が闊歩するトロスト区。

人類は現在、『巨人との共闘』という前代未聞の戦闘を経験しているのだった。

「なんてこった……人類共通の敵だった巨人と一緒に戦う事になるなんてな」

壁から湧き上がってきた巨人面魚を吹き飛ばして消えてしまった超大型巨人と違い、もう一人の『鎧の巨人』は今も巨人面魚を相手に街中で大暴れを繰り広げている。

己よりも大きな巨人面魚の頭を引っ掴んでもぎ取り、急所たるうなじを噛み裂き、あるいは力任せに踏みつける。補給部隊の居る塔に殺到し始めた巨人面魚の群れを体当たりで蹴散らし周囲の建物を崩壊するのも構わず力のままに千切っては投げ千切っては投げ千切っては投げ。

「まるで何かの鬱憤を晴らすような戦い方だな」

エルドがとある家の屋根から見ていると、遠くでメチャクチャに暴れている鎧の巨人は三メートル級の巨人面魚の尾を掴んでぎゅるぎゅると振り回していた。

「うわわわ危ねえ!!」

しばらく回っていた巨人面魚が砲丸投げのように飛ばされ、こちらに向かって飛んで来た。勢いで落ちてくる巨人面魚から間一髪逃れエルドは屋根から飛び降りる。しかし、飛び降りた先には五メートルはありそうな巨人面魚が大口を開けて待ち構えていた。

「マジム!!」

食われる。覚悟した瞬間、隣から「出世魚アアアアアアック!!!」という物凄い雄叫びと共に、何者かが巨人面魚の開かれた大口に巨大なブリを頭から突きこんでいた。

訳の分からない物を食わされてシドロモドロする巨人面魚。その隙にエルドはワイヤーを向かい側の壁に放ち、隙をついて巨人面魚の背後からうなじを削いで倒した。着地後に周囲を見ると、そこには小柄な人魚の姿。見慣れた青い髪にはアッキガイの髪飾りがついている。金の首飾りにピンクの胸当てのその人魚の女性は正しく。

「隅田さん!」

海の方に居たと思っていた女性が現れ驚くのも束の間、怒ったような隅田さんが跳ねるように詰め寄って来た。

「ちよつとエルド、アンタ大丈夫なの!」

「え、まだ大丈夫だけど何で隅田さんがここに居んの!」

困惑するエルドに、隅田さんは再び巨大ブリを担ぐと、照れたように顔を赤くして怒鳴った。

「そんなの、アンタが心配だからに決まってるんでしょ!! まだお互い解ってないのに、たかが人面魚なんかに取りられてたまるもんですか!!」

「隅田さん……」

「ホントにもう。あの日の責任はちゃんと取ってもらってからね!!」

腕を組んだ隅田さんがツン、とした態度を取るにも関わらず、二人の間には何となく良い雰囲気の流れている。しかし、周囲から「ケツ」という舌打ちが聞こえてエルドがはっとした。

「ちよつとお二人とも。いい雰囲気な所悪いけどここは戦場なのよ!!」

「そつだぞテメェら! まだ巨人面魚がウヨウヨいるんだぜ羨ましいなコン畜生!!」

「とにかく、悪いけどイチャイチャすんのは後に回してくれや!」

超硬質ブレードを構えたペトラとオルオ、それからグンタに言われて、そついえば「ここはまだ戦場だったことを思い出す。

「隅田さん、悪いけどまた後で……」

「絶対嫌よ!!」

思った通りの気の強い言葉で即答され、エルドは苦笑した。

「ですよねー……そんなら、踏み潰されないように気を付けてな!!」

「お生憎様！ アンタも勝手に食われないでよね！」  
のっそりと家の陰から現れたるはムスツとした顔の六メートル級  
巨人面魚。獲物を見つけて襲い掛かってくる敵に、四人の人間と一人  
の人魚はそれぞれの武器を手に駆けだした。

「Thor hammer!!」

サンダーバードが両手から雷をほとばしらせ巨人面魚へ振り落とせば、近場にたむろしていた巨人面魚の群れは一斉に感電して動きを止める。その隙をついて立体機動を装備して待機していた兵士たちがごごぞとばかりに一斉にうなじを削ぎ落して行く。

「燃焼球!!」

すぐ傍では鳳凰が灼熱の業火球を振り落とし、多数の巨人面魚を燃やし尽くす。うなじが燃え残った物は人力を使って一掃し、そしてハーピーはと言つと。

「ハーピー、いくよー。」

「ぴゅーい。」

兵士達から提供してもらった二本の超硬質ブレードを携えたイエティは鳥達と共に帰って来たハーピーに跨り巨人面魚と戦っていた。立体機動の移動速度にも勝るとも劣らないハーピーの超高速移動とイエティの神業的武器捌きが合わさって、その白い疾風が吹き抜けた先に居る巨人面魚どもはなすすべも無く屠られていく。その強さたるや正しく戦神と呼ぶにふさわしく、彼らの活躍により兵士達も士気を取り戻しかけていた。

「俺達もイエティさんの後にくぞ!!」

「「おっ!!」」

ハーピーとイエティが通ったその後ろからは薔薇と翼の紋章を背負った沢山の兵士たちが続き、ウォールシーナへ向かおうとする巨人面魚を必死で食い止めているのだった。

「ハーピー、イエティ……。」

そして駐屯兵団から立体機動装置を借りて装備したキースは兵士と共に戦う孫のような二つの存在を複雑な心境で見つめていた。

出来れば、彼らを戦わせたくは無かった。元来この巨大な魚は人間しか襲わない。人間なんて放っておけば、巨人面魚はイエティやハーピーに危害を加えないはずなのだ。しかし、彼らは己の持つ膨大な戦闘力を沢山の兵士の命を救うために命がけで使ってくれている。

「私は……こんな所で何をしているのだ」

元来ならば、巨人と戦わねばならないのは人類のはずだ。壁の外が海になるずっと前。百年も前から人類はずっと巨人に脅かされていた。百年もの昔から人類は巨人と戦い続けている。だから、人類が巨人面魚と戦うのは仕方がない。だが何故、自分達とは全く関係の無い人外の子供までもを戦わせているのだろうか。

そんな風に落ち込みかけたキース。すると、隣で何者かが美しい音色で囁った。

唯一戦闘行為に参加していないキンナラが、キースを励ます様に美しい声で歌っていた。

キースのズボンの裾を引っ張ったり、パタパタとその場を飛び回ったりする姿は何だかとても必死に見える。

「もしか、私を慰めてくれているのか？」

「~~~~!!」

コクコクと頷いてぴょんぴょんと飛び跳ねるキンナラ。まるで「今は落ち込んでいる場合じゃないでしょう」と言われているような気がしたキースは口の端で笑って、ハーピー達にもやるようにキンナラの頭を優しく撫でた。

「そうだな……ハーピーもイエティも、皆、人類の為に頑張ってくれているのだ。私も、今は出来ることをやるさ」

覚悟を決め、久方ぶりに立体機動装置のスイッチを握りしめたキースは駆け出し、街の壁に向かってアンカーを射出した。

外海に浮かぶとある岩島。その洞窟内部にてされたりヴァイアさんの無慈悲な宣告に、むろみさんは硬直していた。

「え……？ まじ？」

「マジっっちゃー。これが一番簡単且つ面倒くさくない方法だっ  
ちや」

壁内人類殲滅宣言をしたリヴァイアさんはとても明るく言っているが、目はマジだ。彼女ならば、間違いなくたった一人で壁の中の全ての家を欠片も残さず燃やし尽くし焔を焦し生きとし生ける物全てを焼き払い、全ての土地を塵すら残らない焦土へと変えるだろう。そして海と陸を隔てる広大な壁を吐息一つで薙ぎ払い、そのついでに現在発生しているすべての巨人面魚をも容易く滅ぼす事が出来るのだ。

神々と共に超科学を持ったムー大陸を滅ぼし、旧約聖書にも言及される伝説の海獣、リヴァイアさんの実力はダテではない。

「本当に壁の国を滅ぼすん!？」

むろみさんが問い詰めると、しかしリヴァイアさんは暢気にふあーっと欠伸をしてその場にゴロンと寝転んだ。

「でもまあウチがやらんでも壁内を滅ぼすのは現在巨人面魚がやっとなるけん。ウチはもう少しして人類が居なくなった後にのんびり壁を壊しに行くっっちゃ。それが一番面倒の無い、楽な方法っっちゃき」

そう言っって目を瞑り、本格的に眠ろうとするリヴァイアさん。しかし、どうしても諦められないむろみさんはリヴァイアさんを揺り起す。

「そげなこと言わんと!! あそこの人間さんは良い人たちばかりやけん助けてほしいとー」

「あの壁の人たちは異世界の住人だっっちゃ。我が同朋の子孫じゃない以上、見守る義務もウチ達が助ける義理もなかよ。それに巨人に食われるのはあちらの世界の自然の摂理みたいなモンだっっちゃ」

「そんない」

「そんなも何も、むろみがいつもひいちやんに言っとなのと同じだったちゃ。仲良し」よしの精神は自然を壊すち。あきらめり」

そしてリヴァイアさんは寝息を立てはじめた。

「リヴァイアさん！ まだ寝んと！ お願い！」

リヴァイアさんの体を揺さぶるむろみさん。近場では妖精が細いスポットライトの下で、新しい非常食糧の缶詰からクッキーを取りだし、カンパンに入った金平糖を食べていた。山積みになされたレーシヨンの中のチョコレートバーを美味しそうに齧り、粉ジュースを小さなカップに入れて水に溶かして飲みながら、場にそぐわぬ楽しげな声をキャッキヤと出している。

リヴァイアさんは、起きる気は無いらしい。

本気で眠り出したリヴァイアさんを見て、むろみさんは揺さぶるのを止めた。

(お?)

諦めたのかな？ と薄目を開けて盗み見るリヴァイアさん。しかし、むろみさんは目に涙を一杯に貯めながらもその場から動こうとしなかった。

「そりゃ、人間やけん、全員がいい人ばかりでも無かったとよ。でも、良い人も一杯居たのは本当たい。エレン君は生意気だけど優しい子たい。ミカサちゃんやんはエレン君のことしか考えとらんように見えるけど、実はいろんな人の事も考え取る。アルミン君は二人に振り回されて貧弱そうやけど一番頭が良かよ。そんで、イエティみたいに可愛か。三人とも、アタシの友達たい」

むろみさんは静かに、壁の中で知り合った人たちの事を寝たふりをするリヴァイアさんに語る。

「ジャンは思ったことをすぐ言うアホでエレン君と喧嘩ばっかしやけど、やる時はやる男たい。マルコは穏やかで太陽みたいで、いつつもエレンとジャンの喧嘩の仲裁しとる。サシャちゃんはいいしんぼだけどアタシのあげた食べ物すっごく良い笑顔でおいしいおいしいって食べてくれると。アニちゃんはクールで美人で恐そうに見えるけど実は一番乙女心を持つとる。ライナーとベルトルトはいつつもア

二ちゃんにすっ転ばされとるけど実はア二ちゃんが大好きなんよ。アホのコニーも優しいクリスタも番犬みたいなユミルも、ミーナもダズもトーマスも、キーヤンも104期生の子たちは皆アタシの友達たい

「むろみさんの言葉はまだまだ続く。」

「ハネスさんは飲んだくれやけど、実は部下にとても慕われとるのも知ってる。小鹿のキッツも臆病やけど実力もちゃんと持つとるし、イアンは誰より勇気があるくせに恋にはチキンでリコちゃんのこと好きやのにまだ言えてなか」

そして、とうとうリヴァイアさんの肩にぼたりと一滴、水が落ちた。

「リヴァイはクッソ無愛想で暴言ばっかしてムカつく。やけん、きちんと周りをみとる。ハンちゃんは巨人馬鹿で酒が入るとお喋りが止まらなくなる。ペトラちゃんとオルオとエルドとグンタは四人ともリヴァイが大好きで、他にもナナバとミケとリーネとヘニングも居て、遊びに行けばいっつもアタシと遊んでくれて、エルヴィンは腹黒やけど誰よりも沢山考えとって……」

「むろみ……」

むろみさんは、溢れる涙も抑えずにリヴァイアさんに訴える。

「アタシは、壁の皆が好きなんよ！ 皆友達やけん!! 死んだら嫌たい!! だから、リヴァイアさん！ お願いやけん、皆を助けてあげて!!」

むろみさんの必死の言葉を聞いて、リヴァイアさんは仕方がなさそうにむっくりと体を起こした。

「リヴァイアさん!？」

「ん、むろみがそこまで言うなら仕方がないちゃ」

「助けてくれるの!？」

縋るようにリヴァイアさんを見ると、彼女は八重歯を見せてニコリとほほ笑む。

「壁内の人類は運が良いちゃ。ウチの大好きなむろみがそこまで言うてるのに助けられないのも後味悪いちゃき。安心しい、ちよい面倒っちゃけど何とかしてみるちゃー」

鎧の巨人、及び鳥達の援軍により快進撃を見せていた人類。しかし。

「おいおいおいおい、大変だぞ、また巨人面魚が登ってきやがった!?」  
「嘘でしょ!?!」

熱風により吹き飛ばされたはずの巨人面魚が、再び外海からの侵入を開始し始めたのだ。

「バージリイイイイスク!!」

バジリスクが壁の傍まで飛び、侵入し始める巨人面魚を次々と石に変えていく。だが、大小様々な巨人面魚の群れは後から後からまるで無限に溢れる海水のように石になった仲間を乗り越えて壁内へ入ってくるのだ。

その数、既に百や二百では利かないだろう。

「ううう、ツカレた! もうムリ!」

「我疲労了! (私もつかれた)」

「I am very tired!!」

力を使い果たした鳥達が退き、大暴れしていた鎧の巨人もだいたい動きが鈍くなってきている。

「イエティ! どないしょ!?!」

焦るハーピーだが、イエティは悲しそうな顔でゆっくりと首を振った。

「こつなっっちゃうとダメ。奴らには感情が無いから、壁からの侵入を抑えないと焼け石に水だよ」

「俺達はもう、何も出来ないのか……?」



「終わりだ……このまま、魚のエサになるしかねえ……」

「嫌だ!! 絶対に死にたくねえ!!」

絶望の悲鳴を上げる兵士達に背を向けて、一人塔の上に立ったりヴァイはじつと巨人面魚が登ってくる壁を眉間に皺を寄せて見つめていた。両手に持った刃はボロボロ。ガスも何度補給したのか解らない。屠った巨人面魚の数は……それこそ数えられるような数ではない。どれだけ抗っても抗っても、どこかから吹き出す様に巨人面魚が出てくるのだ。

これでは、兵士たちの心が折れるのも無理はない。

「本当に終わりなのか……俺達はもう……」

余りに絶望的な状況にぼつりと呟いたその時、ハンジが立体機動を使ってリヴァイの隣に着地した。そして普段では見せた事も無い焦ったような表情でリヴァイに聞く。

「ねえリヴァイ、今何か頭の中で声が聞こえなかったかい!!」

「は？ 戦い過ぎでとうとう頭がイカレたか？」

「そうじゃないよ！ 何かこう、さっきから頭の中で聞こえるんだ!!」

こうすると、リヴァイも聞こえないかい!？」

耳を澄ませて目を瞑るハンジにならってリヴァイも同じようにしてみると、確かに聞こえてきた。

血と硝煙と絶叫と悲鳴、バカデカい人面魚が溢れかえる戦場にそぐわない、ゆるーい小倉弁。

『この中でリヴァイっちゃんー人類最強が居たら、ウチの呼びかけに答えてほしいっちゃんー』

その時、周囲で絶望の淵に戦う気力をなくし始めた兵士たちから口々に悲鳴が上がった。

「な、何だあれは!?!」

「知らねえよ!! だがありゃあ巨人でも巨人面魚でもねえ!!」

慌ててハンジとリヴァイが目を開くと、巨人面魚が大挙して押し寄せてくる壁の向こうから青く輝く巨大なドラゴンが顔を覗かせていたのだった。

「ねえリヴァイアさん。リヴァイは呼ぶのに何か意味があるん？」

「ちよっとした布石っちゃー」

超巨大海獣へ変化したリヴァイアさんの頭の上でむろみさんが尋ねると、リヴァイアさんは楽しそうに言う。

周囲からは巨人面魚がリヴァイアさんを避けるように壁に群がっているのが見えるが、リヴァイアさんはそれらに手をかける事無く全て無視している。こんな所で力を使ったら、壁まで砕けてしまうからだ。

「あ、来たー」

その時、遠くからリヴァイの肩を両足で掴んだキンナラがパタパタと飛んでくるのが見えた。

「おー、あれがリヴァイ？ むろみの言うとおりの目つきの悪か男ちゃんね」

「でしょでしょ？ でも人類最強なんよ」

「〜。〜」

キンナラはリヴァイアさんの頭上まで飛んでくると、その頭の上にポテツとリヴァイを落として再び戻って行ってしまふ。

「………テメエか？ 俺を呼んだ奴は………何の用だ？」

銀色の鬣に捕まり、隣に居るむろみさんと見比べるリヴァイが問えば、リヴァイアさんは緩く頷いた。

「そうちゃ。用ってのは他でも無く、この巨人面魚の事だっちゃ。ウチならこの海にいる巨人面魚をすぐに滅ぼすことが出来るっちゃ」

「何だと!? それは本当なのか!？」

「まあ聞き。でも、ウチじゃ力が強すぎて壁の中の巨人面魚は手が出せんき。その辺どう？ 壁内の戦力だけでなんとかなるちゃ？」

青い海竜から問われ、リヴァイはしばし考える。が、答えは最初から一つしかない。

「ああ。外から入って来る巨人面魚が消えるのなら、その時は俺達で何が何でもやるしかねえだろ」

腹をくくったリヴァイのその言葉が気に入ったのか、リヴァイアさんはクスクスと笑った。

「よっしゃ。なら壁内の事はアンタ達に任せるちゃ」

「だが、これだけの量をどう殺す？ 本当にお前だけで出来るのか？」

リヴァイが見下ろせば、そこは巨人面魚の巣窟としか言いようが無かった。広い大海原に、地平線の遙か先まで巨人面魚の頭が海に並び壁に向かって群がっていて、その膨大な数たるや今までコイツ達の相手をしていたのかと思うとつい気が遠くなりそうなくらいだ。

「大丈夫大丈夫。リヴァイアさんなら何とかなると！」

力強く親指を上げるむろみさんの言葉に、半信半疑ながらリヴァイが海を見ていると、リヴァイアさんは茶目っ気たっぷり言う。

「人類よ、括目するが良いちゃ」

そして、人類は思い知ることになる。

「出力最大!!」

この世には、例え己が滅ぼされると解っても、決して抗ってはいけない存在があるという事に。

「オメガブレス!!!!!!」

リヴァイアさんの口から渦を巻く凶悪な炎の塊が吐き出された。

それは、巨人面魚の肉を焼き骨を焦し海を干上がらせ押し寄せるそれらを一瞬のうちに蒸発させる。岩礁は消し飛び海藻は死に絶え深海生物は気絶した。周辺を回遊していた魚や海獣、海鳥たちが一斉にその場から逃げだせば空が泣き、大地が鳴動し、海底火山は次々と炎を噴き上げ始める。あまりにも凄まじい破壊力に地球そのものが悲鳴を上げ、地軸が変わりかけて浮かぶ雲が吹き飛んだ。

そして周辺海域から全ての生きとし生ける物（巨人面魚含）はこの世から消滅した。

## 最後の戦いとむろみさん

ヤタガラスに乗ったミカサはエレンを探すべく、見つけた巨人面魚を片っ端から屠っていた。

やり方はハーピーに乗ったイエティとほぼ同じで、ヤタガラスの機動力を両手に構えた二本の刃に乗せて、すれ違いざまに敵のうなじを削ぎ落す戦法だ。

「ミカサはん！ 前方にまた化け魚が！」

「誰か追われてる？ ヤタガラス、少し急いで」

それは、ウォールシーナへ向かう逃げ遅れた民間人の一団であった。

馬車に乗る事も出来なかったのが、己の足を動かし必死で走って逃げる人々。しかし、そのすぐ後ろには数匹の巨人面魚が迫っていた。口々に悲鳴を上げて逃げる人々のうち、まだ幼い子供が足をもつれさせて転んでしまう。

「ディック!!」

「ママあ!!」

子供の母親であろう女性が振り向き、逃げる人々から離れて転んだ子供を抱き起す。が、そのころにはもう巨人面魚の大口が親子の真上まで迫っていた。

食われる、と目を瞑った母親。

しかしその時、巨人面魚の上を一陣の黒い風が駆け抜けた。

「ママ、大きな鳥さん……」

子供が指さすと同時に崩れ落ちる巨人面魚。

そして、後ろから追いついてくる他の巨人面魚も同じく三本脚の力ラスが至近距離を通り抜ける度にすぐさま歩みを止めてその場に崩れ落ちていく。

「あれは……カラス……？」

朝露で摺った墨を流したような漆黒の翼をもつヤタガラスはミカ

サと共に他に巨人面魚が居ないことを確認すると翼を翻し再び天へと昇って行く。

自分達を救い、太陽を背景に翼を広げて飛ぶ三本脚の神鳥と、それに乗った何者かを見た人々は皆、呆然と空を見上げ無意識のうちに両手を合わせていた。

「アレは一体何だったんだ？」

そのうち、正気を取り戻した一人が聞くと隣に居た男は未だ呆然としたままゆっくりと首を振る。

「知らねえ。だが、もしかしたら……」

「もしかしたら……何だ？」

言いよどむ男になおも聞くと、彼は頭を掻きむしり、信じられないとでも言うように呟いた。

「いや、もしかしたら、神様かもしれんな……と」

「恋のへ・き・がい、逃避行、 イエイ!!」

シガン　しな人気歌曲、『恋の壁外逃避行』をノリの良いダンスと共に歌い終えたアルミンに、会場から盛大な拍手が送られる。

集まる視線は皆熱く、中には体を軽く揺らして踊っている人間も居た。

会場の熱気は今にも火が付きそうで、その場の盛り上がり方も上々だ。クリスタの言う、場所の『楽しさ指数』もかなり高いに違いない。しかし。

(ダメだ……喉が痛い。それに声が枯れてきている……)

長い間ダンスを踊り続け、全力で歌い続けてきたアルミンの体力と喉はそろそろ限界に達しようとしていた。

会場に詰めかける観客に手を振りながら、アルミンはフル回転で思考する。今よりももっと場を盛り上げるにはどうすれば良いのか。

(ミミミン　ファンタスティック、持ってけ調査兵服、ラッキーラブリータイタンガール、ぴこぴこハーフウィング……まだ歌っていないく

て場が盛り上がる曲と言えばこのくらいだけど……)

どの曲も全て喉を酷使する歌ばかりだった。特にファンタスティックは全力で叫ばなければいけない為、この場の選曲としては完全な間違いになる。現在の体力的にダンスが激しい持ってけ調査兵服もダメだとすると……。

(ちょっとキツいけど、ぴゅぴゅハーフウィングかラッキーラブリー  
タイタンガールが妥当か……)

ちらりと会場から舞台袖を盗み見るとジャンがりモコンを持って次にかける曲に備えているのが見えた。

(よし)

「それじゃー皆ー!! 次はラッキーラブリータイタンガールいくよー!! 知ってる通りノリノリの曲だから、皆も合いの手ヨロシクね」  
周囲で大きなイエーイ!! の歓声が湧きあがり、音楽が始まった。  
途端、アルミンの顔からサッと血の気が引いていく。

きゅるりんきゅるりんという独特のリズムとポップ調の音楽は、アルミンの知っているラッキーラブリータイタンガールの音楽とは違う。

(違う!! 違うよジャンー! これはミミミン ファンタスティックだよ!!)

これを歌ったら、間違いなく喉が潰れる。

宣言した曲と違う曲が流れ、会場で観客の皆が困惑しているが、ここで歌を中断したら間違いなく更に場が削がれてしまう。折角ここまで温まった会場をむやみに冷やすのだけはどうしても避けたかった。

(仕方がない、やるしかない……)

軽く深呼吸をしてから、会場に向かって『次の曲名間違っちゃったテヘ 今度はミミミン ファンタスティックだったよ!!』と言おうとした瞬間、舞台袖の階段からツカツカと上ってきた何者かにマイクを奪われた。

突然現れた人物に困惑し、どよめく会場の人々。

アルミンが振り返るとそこには。





入る限界ギリギリまでの量を何度も焼き上げ、とにかく量だけは多く作った……のだが。

「ちよっとサシャー！ここに置いておいたクッキー知らない!」

「知りませんよ!! ちなみに私は食べてませんよ!! こっちもカップケーキの生地を作ってましたから!!」

テーブルに置いておいた作り立てのクッキーが、違うお菓子を焼いている間に三つの籐のバスケットの中から消えていた。

「じゃあ、一体誰が……はっ!」

空になったバスケットの陰に、転がる丸っこい影が五つ。

「妖精さん、食べちゃったんですか!」

「ついがまんできず」「おいしかたです」「ゆうわくにあらがえぬでした」「あまいみちびきがー」「そぼくなおあじで」

そこには、我慢できずについついクッキーを食べ尽くし、お腹を真ん丸に膨らませて満腹げに転がる妖精さん達の姿があった。妖精は妖精でも、たった五人では数が足りなさすぎる。

「えええええ? どうしましょう。もう材料がありませんよ!?!」

「最初からまた作る時間だって無いよ!?! どうしよう……」

焦るクリスタとサシャ。

だがその時、何者かがズカズカと音を立てて台所に入って来た。

マルコヤアニではない。そこに立っていたのはユニコーンのシンボルを背にした、彼らよりももっともっと立場が上の人間だ。クリスタとサシャはその場でエプロン姿のまま、ほぼ反射的に心臓を捧げる敬礼をする。

「敬礼は良い! 人類は今未曾有の危機に晒されているが、貴様達がやっていることは本当に人類を救うのか!」

いかつい顔で声を荒げながら入って来たのは、憲兵団師団長、ナイル・ドーク本人だった。周囲には誰も居ない。憲兵団の部下も連れずにどうやら一人でこの台所にやって来たらしい。

「恐れながら、救われるかは解りません!! ただ、無益に人が死ぬことは絶対に無くなります!!」

妖精さんが増えると、その分だけトラブルは爆増するが絶望的な人死には無くなる。クリスタが確信していることをそのまま口にする  
と、ナイルは眉間に皺を刻んで深く頷いた。

「ならば、貴様達が予定している菓子は全て作ることが出来たのか!?」  
「それが、少々トラブルがありまして現在ある材料、時間では圧倒的に  
足りなくなりました!! このままでは作戦を完遂することが出来ま  
せん!!」

泣きそうになりながらサシャが答えると、ナイルはまた頷いて台所  
の外へ「貴様達、入れ!」と声をかける。と、どこかかと台所へ速足  
に入って来た憲兵団の姿を見て、サシャとクリスタは驚き、バスケッ  
トの裏からこっそりと覗き見していた五人の妖精さん達は目を輝か  
せた。

台所の外から現れた憲兵団が持ってきた物。それは、両手にギリギ  
リ抱えるほど大きな木箱に入った、大量の焼き菓子の山であった。  
クッキー、マドレーヌ、ラングドシャにメレンゲ、ビスコッティその  
他もろもろ。埃避けの薄布の下から、焼けた砂糖の甘い香りが溢れ出  
して台所に充滿する。

「あ、あの、これは一体?」

まさか憲兵団がこんなに沢山のお菓子を持ってくるとは思わな  
かった。

この憲兵団本部の厨房を借りる時だって、本当に嫌そうだったの  
だ。

困惑した表情でクリスタが尋ねると、腐った組織として悪名高い憲  
兵団の長は詰まらなさそうに舌打ちする。

「上官食糧庫の砂糖はもう空っぽだしバカ貴族どもからシェフを借り  
たせいで俺の金も無くなっちゃったよ。だが、馬鹿にするんじゃない  
ぞ。憲兵団として人類が破滅するのは何としても阻止したいんだから  
な!」

ユミルはウォールシーナ、エルミ八区の壁上からウォールローゼに向かう道を眺めていた。

エルミ八区の城門にはこのウォールシーナへ逃げてきた沢山の難民がごった返し、未だにすべての住民が門の中に納まっていないありさまだ。

「まあ、私に出来る事ついたらこれしかねえからな」

ユミルは台所で戦うクリスタとサシャの手伝いはしなかった。台所に立つなんて柄じゃないし、そもそも料理は苦手だ。そんな人間が下手に手を出して邪魔するより、己が出来ることを探したほうが手っ取り早い。

「私もヤキが回ったよな。本当に！」

壁の外が海になる前の自分なら、こんな事絶対にしなかった。今だって本当は人類なんか滅ぼうが繁栄しようが知ったこっちゃない。だがしかし、状況が変わったのだから致し方ないのだ。

外が海では逃げ場はどこにもないし、ここでの人類の破滅はイコールして自分とクリスタの破滅でもある。

人類なんか心底どうでも良かったが自分たちの破滅だけは何とかしなくてはならない。

「そんなら、ここでもやるより仕方がねえよなあ」

ため息をついて見回すと、ウォールシーナを守る駐屯兵団の連中が壁上固定砲の周囲で警戒している姿が見えるが、それぞれ自分の任務に一杯一杯なのかユミルを見ている者は誰も居ない。

ぼつと空を見上げたその時、周囲から悲鳴にも似た叫び声が次々と上がるのが聞こえた。「来たぞー！！」の怒声と共に壁の上の駐屯兵団が信煙弾を打ち上げる。そして口々に恐れの上の言葉から人々が指を差す先から、奴らはついにやって来た。

駐屯兵団や調査兵団の防御を掻い潜ってやってきた、三メートルから一五メートルまでの大きささまざまな巨人面魚の群れがウォールローゼの方角から大挙して押し寄せてきたのだ。

「砲撃用意!!」

緊張感が走り、次々と大砲を向ける駐屯兵団。まだ、砲弾が届く距離では無い。

じりじりと迫る巨人面魚に狙いを定めてじっと待ち続ける兵士だが、次の瞬間現れた物体に人々は目を疑い、そして再度大きな悲鳴を上げた。

「な、何だあれはー!?!」

ゆったりと散歩をするように、突如としてどこからか現れたのは一五メートルはあろうかという二体の巨人であった。一体は黒髪で目つきの悪い男の巨人。もう一体は金髪で、誰も見たことも無い女性のような姿をした巨人であった。

二体の男女の巨人は人間を襲う事も無く、巨人同士でぶつかり合う事も無く、ただ隣り合わせに、まるでウォールシーナを守る門番のようにその場に立つと、同時に迫り来る巨人面魚に向かって一目散に駆けだした。

ウオオオオオ!!! という雄叫びと共にぶつかり合う二体の巨人と巨人面魚の大群を見て慌てふためく群衆とは裏腹に、壁上から眺めていたユミルはニイと凶悪な笑みを浮かべた。

「へえ、私と同じ奴らが他にも居たってね」

そして、自分と同じことを考えたのである。その二人を見たユミルは準備運動をするように首を回して「キキキと慣らし、一度だけ深呼吸をする。」

「そんじゃまあ、私もいつちよ行きますかね」

ぼやくように言うと、そのまま高くそびえる壁から飛び降りた。

風を切り、地面に衝突して無残に潰される直前、ユミルは己の手を血が出る程思いきり強く噛んだ。

「これは一体、何がどうなっているんだ!」

エルミ八区で避難民の受け入れ、民間人の警護、壁上から周辺の警備をしていた兵士の殆ど全員が己が目を疑った。

兵士として、いかなる不測の事態にも備えて日ごろから鍛錬をしている人間でも、目の前で起こった出来事はそれまでの予想の範疇を大きくすぎるほどに超えていたからだ。

一〇〇年前より突如として現れ、長らく人類の仇敵であったはずの巨人が三体も、人類を守るために巨人面魚どもと戦っているのだ。これを驚かずして一体何に驚くと言っのたろうか。

巨人たちは襲い来る何十頭もの巨人面魚を次々と押さえつけ、地べたに叩きつけ、うなじを噛みちぎり、ぺしゃんこになるほど踏みつけた。

カエル種の舌を持って振り回し、体を引きちぎり、あるいは殴り、頭をもぎ取り、血しぶきを浴びながら大地を揺らして腹に響くような巨大な咆哮を空へ向かって上げる。

「ウオオオオオオオ」

残虐。だが、胸が躍るような光景に人類は魅入ってしまった。

あれ程恐ろしい巨人面魚をいとも容易く屠る巨人達。

人類の仇敵が人類の守護者になった瞬間。

それはまるで、魚類などに食われてたまるかという人類の怒りを体現した姿のようであった。

うさミンとリコ、二人の大人気アイドルが歌って踊り、大歓声が広がる舞台裏。裏方のスタッフが走り回る、そこから少し離れた草むらにサシャとクリスタは二人きりで沢山のお菓子を荷台に乗せてやってきた。たった二人で持ちきれないほど大量のお菓子を持ってきた理由は、ひとえに妖精さん達がとてもシャイで人が多いと出てこられないという気質のせいだ。

お菓子を山のように積んだ荷台を引いていると、観客たちの楽しげ

な合いの手とノリの良い歌声がここまで聞こえてきて思わずクリスタたちも浮足立った気持ちになってしまう。

おそらく場の楽しい指数は限界を振り切っているに違いない。

「この分なら、妖精さんたち沢山居ますかね?」

「多分……。でも、居ないと困るわ!」

妖精たちの潜んでいそうな草むらに重たい荷台を止めて、クリスタは周囲に呼びかける。

「妖精さん! お菓子を沢山持ってきたの! これをあげるから、お願いだから出てきて!」

しかしその呼びかけに反応は無く、舞台から流れる楽しげな音を乗せたそよ風がふわりと吹いたきり、妖精達は姿を現さなかった。

「妖精さん! どうしたんですか!? お菓子があるんですよ!」

サシャも一緒になって草むらの中に呼びかけてみるが、妖精さんはただの一人も出てこない。

「妖精さん……。どこに行っちゃったの?」

このまま妖精さんが出てこなかったらどうしようかと二人が途方に暮れかけた時、「およびですか?」とあの待ちに待った舌っ足らずな声が聞こえた。

周囲を探してみると、切り株の上に妖精さんがたった一人だけちょこんと坐っていた。

「どうしましたか?」

「妖精さん!! あの、お一人ですか?」

切株に向かって差し出した手のひらに妖精さんを乗せたクリスタが尋ねてみると、妖精さんはいつもの笑顔を浮かべたまま首を傾げる。

「ぼくはおひとりさまですが?」

「お仲間さんはいませんか?」

サシャがおずおずと尋ねると妖精さんはくい、と首を右へ向けた。

「ならば あっちとかいかがでしょう?」

妖精さんが指を差したその先。クリスタがそつと周囲に生えている草を掻き分けてみると、兎が掘ったような小穴が一つぽっかりと地

面に口を開けていた。

二人が穴に向かってそつと耳を澄ませてみると、聞こえてくる。楽しそうに、ライブの真似をする妖精さん達の音楽と歌声が。

「居た!!」

「居ましたねー!」

小声で喜んだ二人は、心の中で「邪魔してごめんね」と謝ると荷台からクツキーを一枚掴み、小穴の中に放り込んだ。

途端、音楽が止んで戸惑うような声が聞こえてくる。

「おや?」「このあまいにおい」「くつきーだ!!」

妖精さん達がクツキーに気づいたのを見計らい、間髪を入れずに今度はカップケーキを一つ放り込む。

「わあ、けーきだあー!」「おいしそうです!」「だれだろう?」「かみさまかもー」

反応は上々だ。気を良くしながら、今度は少し小洒落た感じにラングドシャを三枚、立て続けに投入。

「めずらしいー」「かみのおめぐみ?」「とにかくおいし」「ひさしぶりのかんみです」「さつくさくー」「さいこうのしょっかんです」

ビスコッティ、メレンゲ、ハニーラスク、マドレーヌ。二人が小穴の中にお菓子を放り込むたびに、妖精さん達の声は次々と増えてくる。楽しさと甘味により、少しずつ増えているのだろう。しかし、妖精さんの数は多分まだまだ足りていない。

「サシャ、これ全部いくよー」

「マジですか女神?!」

クリスタは荷台に積んでいた、大量のお菓子が入った大きな木箱を両手で抱えてヨロヨロ持ってくると、小穴に向かって一気に傾けた。途端に大量の焼き菓子が小穴の中にざらざらざらと吸い込まれていく。

甘い香りが周囲に広がり、クリスタの肩に座っていた妖精さんも美味しそうにクツキーを齧っている。

「なんだなんだ」「おかしのだいじつずいです」「じつぶくのあめあられ」「すいどうからじゅーす」「なにそれたのしー」「じどものゆめで

す」「ねがいのかなうまほつとか」「えいえんのなつやすみ!」「おかし  
のいえみたいな!」「たべきれない、おかしのやま!」

「じゃあ、「」うちもやりますよ!」

驚きながらもとても楽しそうな様子の妖精さん達に、今度はサシャ  
がお菓子の入った木箱を穴へ傾けた。普通ならばこんな小さな穴の  
中に大量の菓子が全て吸い込まれるはずが無い。なのに、黒い穴は巨  
大な胃袋のように次々とお菓子を吸い込んでいくではないか。

「次いくよ!」

「はい、次もいきます!」

二人は次々とお菓子を穴の中に注ぎ込む。荷台の中の菓子類が空  
になるに従って、最初はまばらだった小穴の中の声が少しずつ大きく  
なってきた、やがて降り注ぐお菓子の歓喜の悲鳴を上げるようになっ  
た頃、それは起こった。

周囲の大地が、ゴゴゴゴゴ、と音を立てて揺れ始めたのだ。

「な、何ですかこれは!」

「解らない!! でも何か、物凄い事が起こりそう!!」

お菓子の在庫を持ちながら慌てるサシャとは対照的に、子供みたい  
に目を輝かせたクリスタが楽しそうに空を見上げる。

大地の鳴動は長らく続き、そしてそれが徐々に大きな地響きとなっ  
た

瞬間、

「!!!!」おいしーーーーー  
い!!」

小穴の中に納まりきらなくなった妖精たちが、まるで巨大な間欠泉  
のようにサシャとクリスタの目の前で大噴出したのだ。

その妖精さんの数は何百、何千どころでは無いだろう。



もしかしたら何万、何億という数だったのかもしれない。とにかく大量の妖精たちが遙か空高くに向かって、まるで振った後に栓を取り払った炭酸水のようにドドドドと音を立てて噴出し、巨大でカラフルな柱を作っているのだ。

超大型巨人よりも高く伸びあがるあまりにも巨大なパステルカラーの間欠泉は、壁内に居たのなら誰でも、どこに居ても見ることが出来た。

ウォールシーナ周辺で民間人の警護をしていた兵士が、空へ向かって指を差す。

「な、なんだありゃ!？」

「知らねえよ!? だかもつ何が起きても俺は驚かねえぞ!」

ウォールローゼ南部にて、巨人面魚と戦っていたヤタガラスとその背に乗ったミカサがウォールシーナの中央で伸びあがるパステルカラーに気が付いた。

「あれ、何?」

「わかりまへん。ただ……」

そこで言葉を切ったヤタガラスはそれを見て楽しそうに笑った。

「凄く楽しい気配がしますなあ……」

リヴァイさんの殲滅により外海から巨人面魚の流入が止んだトロスト区では、壁内に残った大量の巨人面魚の掃討が行われていた。

その時、誰か一人が大声を上げて指を差すと、人々は揃って天を見上げる。

リヴァイが、ハンジが、エルヴィンが……各部隊の兵士たちが、班長が、隊長が、指令が、調査兵団が、駐屯兵団が、運よく生き残った訓練兵達が トロスト区の壁の向こうでは海竜化したままのリヴァイさんとむろみさんも、その天へと上る巨大なパステルカラーの大間欠泉を見上げていた。

「……何だありゃあ……」

「何だろう……? ガスか何かが噴出してるのかな?」

「リヴァイさん、あれ妖精やないの?」

「ふうん、人間もなかなか考えるっちゃね」

そしてエルミ八区の城門付近で巨人面魚と戦っていた巨人達も、中央から伸びあがるソレに気が付いていた。一瞬、戦うのも忘れて見上げていると、巨人たちの頭上からぼろぼろと雨のようにカラフルな丸い球が降ってくる。

妖精さん達の楽しさが文字通り、一気に爆発したフェアリー間欠泉から丸まり妖精さんが大量に降り注いでいるのだ。

「すっごー……………いい!!」

「やったー……………!!」

再びウォールシーナの舞台裏。

目の前で巻き起こるフェアリー大間欠泉にサシャとクリスタが喜びの声を上げながらお互いにハイタッチをして喜んでいると、妖精たちが吹き出した頭上から木で作られた手の平サイズの小箱が一つ、草むらの中にポトツと落ちてきた。

「あれ？ 何か落ちてきましたね？」

「何だろっ？ 小物入れ？」

小さな木箱を手に取ると、後からヒラヒラと紙切れが一枚ついて来た。

クリスタが拾い上げてその紙を広げると、それは木造りの小箱の説明書のようだった。

「えーと、取扱説明書 …？」

パステルカラーのフェアリー大間欠泉。

戦っているのも忘れて人々が見入っているその間、人間や巨人と攻防を繰り返していた巨人面魚達もまた、その伸び上がる妖精の柱を見上げていたのだった。

間欠泉が消えた時、巨人面魚の行動に最初に気が付いたのは、誰だったのだろう。

「おい、何かおかしいぞ!？」

巨人面魚達は、それまで食らおうと攻撃していた人間たちに突然そっぽを向くと、一目散にウォールシーナめがけて今までにない程の猛スピードで走り出したのだ。

「おい、待て行かせるな!! お前らギリギリまで近づいてでも奴らを足止めしろ!!」

「何をやっている!! シーナの方に行かせるな!!」

「やっています!! でもあいつら何故か我々にはまったく見向きもしないんです!!」

囿の兵士が巨人面魚の目の前に躍り出ても見向きもしない。

普通種も奇行種も跳躍力のあるカエル種も、全てが一斉に、まるであの間欠泉に吸い寄せられるようにウォールシーナへ向かって全速力で駆けだしている。

「もしかして今の噴出物のせいか!？」

「まさか巨人面魚を呼び寄せる物だったのか!？」

「そんなこと知らねえよ!! とにかくなるべく行かせるんじゃないねえ!!」

本日何度目かの怒号が飛び交い、限界まで体力を消耗した体を酷使して、兵士たちは己を囿になんとかして巨人面魚の足止めを試みるが、上手くいかない。

トロスト区の中に居た多くの巨人面魚は足止めの甲斐も無くカエル種を中心に次々と壁を登り、ローゼに侵入していた巨人面魚も一斉にウォールシーナへ向かっている。

少数の群れが闊歩するのみだった巨人面魚は壁内の各地から次々と合流し、あっといつ間に巨大な大群となる。そして統率されたような動きでエルミ八区へ向かって雪崩のように押し寄せ、足止めをしようとしたらだかる三人の巨人さえも押し倒してあっという間にシーナへ到達しようとしたその時。

紙を拾い上げたクリスタが、中の説明書きを声に出して読んでいた。

「取扱説明書。ダメな物ボックス。これは使用者が嫌いな物を仕舞う箱です。使用方法はとっても簡単。箱の口を開いて中に入れてたいダメな物を念じましょう。これだけであら不思議。どんなものでも仕舞ってしまいます。だって」

「妖精さん、これホントですか？」

「ちゅあー？」

周囲に散らばっている丸まりが解けた妖精さんに聞いてみるも、彼らは揃って首を傾げただけだった。どうやら噴出の衝撃で全てを忘却してしまったらしい。

「まあ、とりあえずやってみましょうよ」

「そうね。ええっと、まずは 巨人面魚は、ダメ!!」

雪崩のようにウォールシーナへ押し寄せていた全ての巨人面魚が空へ浮いた。

「ウウウウウウウ」「ウオオオオオオ」と唸りを上げ、足をばたつかせてもがく巨人面魚の大群。だが、彼らが大地に足をつける事は二度と無く、ウォールシーナの中央めがけて一斉に飛んで行った。

「あと、絶望はダメ! 怖い事もダメ!!」

クリスタとサシャは壁内に存在するダメな物を思いついた順番に次々と言い上げる。

「大事な人が死ぬ事も、傷つく事も、巨人も、飢餓も病気も、辛いことや苦しいことは全部ぜんぶダメー!!!」

二人のダメー!!! が周囲に木霊したその瞬間、空の上から手足をばたつかせる巨人面魚の大群が降り注いできた。百や二百は下らない巨人面魚の大群は排水溝に吸い込まれる水のように渦を巻き、サシャとクリスタが見ている目の前でズルルルルルルルルルルと手のひらサイズの小箱の中に物凄い勢いで吸い込まれていく。

「な、な、何ですかこれはー!？」

驚いたサシャの叫びと同時に今度は黒い霧のような、いかにも悪そうに見える物が壁内中の全ての場所から飛んできて巨人面魚と共にどンドン吸い込まれていく。

箱の質量以上の巨人面魚やその他いろんな物を吸って吸って吸いまくった小箱は、一番最後に巨人面魚の大きな尻尾をズルンと飲み込むと、カタンと音を立てて開いていたその蓋を閉じた。

「まんたんですなー」「いっぱいになりました」「もうはいりませんな」「かぎをかけますか?」

その場でしりもちをついていたサシャとクリスタに、大きな鍵を持った妖精さんが箱の上に座って首を傾げていた。

しばらく呆然としていた二人は一瞬だけお互いに顔を見合わせると、同時にぎこちなく頷いた。

「是非お願いします」

巨人面魚の消失したトロスト区では、巨人化していたはずのライナーが倒壊した家の上で大の字に倒れていた。

そこへ、やってきたベルトルトがひょこっとライナーの顔を覗き込んだ。

「ライナー、大丈夫?」

「……………ああ。何が起きたんだ?」

ベルトルトから声をかけられて目を開くライナー。

頭を振って起き上がった時、ふと隣に座るベルトルトを見てぎよつとした。

ベルトルトが、声も出さずにほろほろと涙を零して泣いているのだ。

「ど、どっしたんだお前!? なんか怪我でもしたのか!?

慌てるライナーに、ベルトルトは首を振る。

「違うよ。……ライナー、君は解らない?」

「何だ? 解らねえよ。何かあったのか?」

ベルトルトは静かにため息をつくくと、泣き笑いのような表情を浮かべてライナーを見た。

「僕たち、巨人化出来なくなっちゃったみたいだ」

ウォールローゼからエルミハ区へ続く道の真ん中で、エレンとアニとユミルは三人揃って転がっていた。

そこは巨人面魚と三人の巨人が戦っていた場所で、ウォールシーナから見ていた者はきつとその場で戦っていた巨人は巨人面魚と共に消失したように見えたであろう。

その場に転がる三人は、だるい体を起き上がらせるでもなく、ただぼんやりと青い空を見上げていた。

「俺達は、今まで何をやってたんだ……?」

「エレン、覚えてないならそれが幸せってモンだよ」

ぼかんとしたエレンのぼやきにアニが気だるげに答えると、ユミルが清々しい声で笑った。

「ははっ、あれはお前らだったのかよ!! まあ、もっどっでも良い事か!!」

巨人面魚が居なくなつたその時、リヴァイは壁の上に立体機動で瞬

時に駆けあがりリヴァイアさんを問い詰めていた。

「テメエ、何が起きたか知ってるな？」

「んふふ。ウチは何も知らないっちゃん」

「うそつけ」

「本当だっちゃん」

目つきの悪いリヴァイに詰め寄られても、青い海竜はのらりくらりとしらばっくれている。そして何度目かのやり取りの後、清々しい程青い空を見上げて、喉の奥で楽しそうに笑うのだ。

「むろみー。平和って良いっちゃん」

「ちよっと、リヴァイアさんがそれ言っ？」

楽しそうに笑う二人に、リヴァイはまんざらでもない顔で舌打ちをした。

今回の巨人面魚流入事件で、多くの家が壊されて多くの民間人が奴らに食われた。

調査兵団、及び駐屯兵団はその数を大きく減らし、投入された訓練兵の半数以上が死亡した。

多くの人間が家を失い、そして多くの人間が命を落とした。

しかし、それでも今日、人類は歴史上初めての勝利をその手に掴みとったのだ。

## 皆の笑顔とむろみさん

ウォールローゼ攻防戦。

後にそう呼ばれる巨人面魚との戦いの後、生き残った兵士たちはおびただしい数の仲間の死体を回収しようとして医療班と合同でトロスト区やウォールローゼ南部の村を回っていた。

死体の回収に乗り出した兵士たちは皆、口に布を巻いて戦いの中で無残に散った者たちを一刻も早く弔ってやろうと死体を探した。だが、不思議な事がここにも起きていた。

「おい、こりゃあ一体どうなってんだ？ アランの奴はどこに消えた？」

トロスト区にて、巨人面魚に踏み殺された友人の死体を回収しに来た男がその場を見下ろして愕然とする。

彼はその日、十メートル級の巨人面魚を相手に友人アランと共に戦っていたのだ。ところが、立体機動のアンカーを刺し損なったアランは無残に地に落ちて巨人面魚に踏み殺された。もちろん、彼は現場を見ていたのだ。

ところが、十メートル級の巨体に押しつぶされて死んだ友人が居たその場所に来てみれば、広がる血だまりの痕跡はあれども肝心な死体はどこにも残っていないかった。

「おい、死体がねえぞ！」

「こつちもだ！ 死んだ奴が軒並み消えてる!!」

人間が下敷きになったのが目撃された倒壊物件や、確実に仲間が貪られたのを目撃した地点にも、血痕はあれどもその亡骸だけは指の一本たりとも落ちていないのだ。

それはトロスト区だけでなく、巨人面魚に襲われた村も、付近の森でも起きていた。

探せども探せども、どこにも人の遺骸が見当たらない。

カラスや野犬に食い尽くされた可能性もあるにはあるが、この短時間間に全ての人の死体が消え去るものだろうか。もし仮に獣に食



い荒らされたのだとしても、衣服の一つも落ちていないのが気になった。

「もしくは誰かが死体を持ち去った……？ でも何故？ 建物の下敷きになった人間の回収は一人じゃ不可能だ。まさか複数犯か？ それにして誰かが足を踏み入れた形跡がまるでない。一体どうやったんだ……？」

ところどころに広がる血だまりを一つずつ検証しながらハンジが街中を歩いていると、馬に乗ったモブリットが血相を変えてハンジを呼びに来た。

「分隊長！ 大変ですすぐに来てください!!」

「どうした？ そんなに慌てて」

部下はまるで恐ろしい物から追われているような顔をして、声を潜めてハンジに耳打ちする。

「そ、それが…… 調査兵団のゴミ箱からエラい物が出てきました……」

「これは一体……」

「すぐ引つ張り出したかったんですが一応、分隊長に証人になって貰おうと思ひまして……」

「ああ。こんな事、普通じゃ誰にも信じてもらえねえからな」

ハンジが連れてこられたのは、調査兵団の兵舎裏に設置されたあのゴミ箱だ。

壁外調査にて巨人面魚に食われたハンジを含む面々が復活キノコの作用によって生き返ったあの曰くつきのゴミ箱。

ゴミ箱の周りにはハンジの部下を中心に数名の兵士が集まってどうしたものと困ったように顔を突き合わせているが、それもそのはず。

ゴミ箱からは、ブーツを履いた人間の足があの日の足付き巨人面魚のよつに、Vの字にによつきりと飛び出していたのだ。

普通ならばこんな恰好の人間が入るはずのないゴミ箱の中は不思議

議な光に満ちていて、覗き込んでも飛び出している一人分の腰から下しか見えない。

「おい、生きてるか!？」

ハンジがゴミ箱の中に呼びかけると、飛び出た足がじたばたと動く。どうやらちゃんと生きているらしい。

「と、とにかく引っ張ってみよう!!」

ハンジを含めて三人ほどがその足を掴み、思いっきりその下半身を引っ張るとスポンツと良い音を立てて調査兵団の服を着た男が出てきた。すると、その男の姿を見た瞬間ハンジの部下が腰を抜かした。青い顔のままわなわなと震える指でゴミ箱から出た男を差す。

「あれっ!! お前巨人面魚に食われて死んだんじゃねえの!？」

「いや、俺も死んだと思っただけぞわ……」

ゴミ箱から奇跡の復活を遂げた困り顔の男が頭を搔くと、ゴミ箱の中からすぼんすぼんすぼぼんと次々と十数人の人間が飛び出して来た。どうやら、一番最初に引っ張り出された男が出口に詰まって後が出てこられなかったようだ。

「うわー!」「きゃあ!!」「あれ!? 俺生きてる!?!」「ここはあの世なのか!?!」「俺は食われたんじゃ……?」「ここはどこだ……? 俺は一体?」

ゴミ箱から飛び出してくる人々は、調査兵団も居れば駐屯兵団も居て訓練兵も民間人も居た。そのすべてに共通する事はただ一つ。

「!」「お前ら昨日死んでなかったっけ!?!」「!」

薔薇や翼の紋章が描かれた服を身に纏った兵士の面々を指差して顔を蒼白にした生き残りの仲間たちが叫ぶと、しばし呆然としていたハンジは数回肩を震わせ、そして次の瞬間腹を抱えて大笑いを始めた。

「ぶ、分隊長!?!」

「はーはっはっははははははは!! っ、これは凄いや!! 仲間が全員生き返りやがった!!」

「分隊長、笑いごとじゃ無いでしょう!? 死んだはずの人間がバンバン生き返ってるんですよ!」

彼らが喋っている間にも、ゴミ箱からはスポンスポンと人間が吐き出されていた。仲間の兵士も民間人も死んだはずの人間が後から後から蘇り、笑い過ぎで涙を浮かべたハンジは生き返った彼らを見回して解ったような顔で一ツ頷く。

「いや、私も一回死んで生き返った身だから何もおかしくないよ。もちろん殆どの人はキノコなんか食べてないだろうし、理由は解らないけどこういう不思議なら大歓迎だ。うん。よし! 多分これから何百人も飛び出してくるに違いない。ゴミ箱から出てきた者を一端広場に移動させるんだ! あ、それからモブリット、今すぐ団長の所に行ってこう報告してくれ!」

「はいはい何ですか?」

民間人から誘導を開始したモブリットが振り返ると、ハンジは清々しい程の良い笑顔で親指を立てる。

「今回の戦闘で発生した死者数は兵士も民間人も合わせてゼロ! っ  
てね!!」

広い会議室の中は重たい空気が垂れこめていた。

ここはウォールシーナにある会議室の一つで、現在そこには国の舵取りの一端を担う王直属の役人から大貴族、そして各兵団の団長等、身分の比較的高い物が呼び集められていた。

二十名前後の人間がぐるりと机を囲み、どいつもこいつもが顔を青くしている中で唯一平然とした顔をしている浅黒い肌の人魚が一人。もちろんリヴァイアさんである。

彼らが話し合う議題はもちろん、この世界に関する事情と壁内外の諸問題についてだ。

リヴァイアさんとしては退屈な人間の会議になんて出たくなかったのだが、リヴァイとエルヴィンだけではこんな重要な事は決められないと、憲兵团等の軍を通してこの重役だらけの大会議が開かれたワケである。

居並ぶ人間たちの前でリヴァイアさんは語った。

巨人面魚と壁の問題。そして月から帰ってくるこの世界の人類。

壁があることで巨人面魚はどんなに滅ぼしても『世界の要素』として復活し、このままでは、これから月より舞い戻ってくるこちらの世界の人類にまで影響を及ぼしてしまうこと。

それはつまり、壁内の人類に再び恐ろしい巨人の蔓延る元の世界に帰ってほしいと言う事であり、それを聞いた壁内人類はこの重たい空気を醸し出すに至ったワケである。

「貴様!! 本当に我々にあの恐ろしい世界に帰れと言っのか!？」

「そっだったちゃ。じゃないと困るちゃ」

業を煮やした大貴族の一人が思いきり机を叩いて怒鳴ると、その場に居たエルヴィンは内心冷や汗をかいた。あの日、エルヴィンも壁から顔を覗かせた蒼い竜を見ていたのだ。それに加えてリヴァイからリヴァイアさんの強さとその正体を聞いていれば尚更である。

地平線の彼方まで密集した巨人面魚達。それらを吐息の一つで殲滅した地上最強の海竜。今は可愛らしい人魚の姿をしているが、その正体はこの世界の海を司る海神の石柱。それがリヴァイアさん。

おそらく、エルヴィンの隣に居るリヴァイも同じ気持ちに違いない。

今ここで彼女が本当に怒りだしたりしたら、壁内は確実に滅ぶ。巨人面魚の襲来など比では無く絶対に滅ぶ。抗う間など人類に与えられる暇も無く滅ぶ。ここに居る人間も報告書でそれは知っているはずなのだが、それを本当に理解しているのはこの室内に何人いるのやら……。

「だが、どっしやって戻ると言っのさ?」こちらにやって来た時もよく

解らぬうちに来ていたのだ。そもそも、我々にそのような技術は元から無いが？」

政府の要人風の男が尋ねると、リヴァイアさんは軽く頷いた。

「それは知ってるっちゃ。だからそれが出来る技術者をこちらから紹介するちゃ」

「なあ、本当に我々人類はこの世界に居られんのか？」

豪商のよつな男が聞く。

「だっちゃ。悪いけど諦めてほしいちゃ」

「人類が月に行ったとは……にわかには信じられん。証拠はないのか？」

「無いちゃ。そこは信じてもらうしか無いっちゃー」

「こうなったら、いっそ別の世界に飛ばしてもらう事は出来んのか？」

「それは無理だっちゃ。妖精の開けた次元の穴がある場所しか移動できんちゃき」

終わりの見えない議論に、リヴァイアさんは顔ではのほほんと笑ったまま、心の中で愚痴った。

(ウチはこれが面倒だったんちゃー……)

ぶっちゃけ、壁ごと壁内を滅ぼしてしまえばこんな面倒くさいことしなくて済んだのだが、むろみさんのお願ひならば仕方がない。やりたくはないが込み入った事情も多いため、リヴァイアさんしかこの人類への説得は出来ないのだ。

あまりの詰まらなさに全てを破壊してしまいたい衝動に駆られるもぐつと我慢するリヴァイアさん。今は何とか抑えているがいつまでもこんな下らない会議が続くのなら人類の無事を保障出来る自信はリヴァイアさん本人にも無かった。

(もー。人間さんの会議ってばいつでもどこの世界でもツマランし面倒だっちゃ)

その場に居る各人の心の声を暇つぶしに聞いていると、出るわ出るわ人間どもの『元の世界に帰りたくない』本音の数々。既得権益その他モロモロの黒い事情が殆どを占めているがそれはさて置いておくとして、その中で面白い意見があったのでリヴァイアさんは明るく手

を上げた。

「はいはい!! 良い案が出たちゃー! えーっと、そのトドっばいのがウチとリヴァイ兵士長を戦わせて勝った方の意見を採用したらどうだ? って言ってるっちゃ!! リヴァイ、もう会議とか面倒やきーウチと決闘せん? 勝った方の意見即採用ちゃー」

トドっばいのは大貴族の一人であり、心の声を読まれた彼は心底驚いたような表情をした。

しかし、もつと驚いたのは話を振られたリヴァイの方だ。珍しく飲んでいた茶をブフォオオ!! と吹き出し、げっほごっほと咳をして隣に居たエルヴィンに背を叩かれている。

「て……テメエら、よくそんな事言えるな……」

何とか咳を収めたリヴァイがその場の全員を睨みつけた。

人類最強から本気の殺意をまき散らされ、他人の殺気に慣れない貴族や要人が身を震わせたのを見て、リヴァイは詰まらなさげに息をついた。

「俺は、巨人ならどんな奴が相手だろうとぶっ殺せる自信がある。十五メートル級だろうと超大型だろうとそれは確実だ。だがな、俺も人類だという事だけは絶対に忘れるな」

本物の神に喧嘩を売る気はねえ。と目の前の海神に向かって人類最強が降参宣言をすると、リヴァイアさんはぶーたれる。

「む〜。詰まらんっちゃー」

机に上半身を寝かせるリヴァイアさん。その時、調査兵団団長、エルヴィン・スミスがすつと手を上げた。

「私からも少し質問してよろしいかな?」

「何だっちゃ?」

「訓練兵団104期生クリスタ・レンズおよびサシャ・ブラウス訓練兵の両名の報告書を読みました。今回のウォールローゼ攻防戦にて、壁内に侵入した巨人面魚を掃討したのは『妖精の道具』だそうですね。巨人面魚との戦闘時、壁内に居た大多数の人間が目撃したあの色鮮やかな噴出物が妖精で、その妖精を呼び出した訓練兵の二人が彼らに道具を授かった。ここまでは宜しいですか?」

室内から集まる注目と無言を肯定と捕らえたエルヴィンはそのまま言葉を紡ぐ。

「訓練兵の二人が妖精から授かった道具。小さな木箱のようなものと聞きましたが、彼女たちはこの中に巨人面魚、絶望、飢餓、巨人、死、悲しみや苦しみなどを入れたそうです。本当かどうかは解りませんが、全ての巨人面魚が消えたことを考えると事実なのでしょう」

「……で、何が言いたいちゃ？」

穏やかに、しかし鋭い視線で射抜くように尋ねるリヴァイアさんにエルヴィンは机の上に小さな鍵付きの木箱を「トーン」と置いた。途端、室内中がざわめく。

「これが彼女たちから預かったその小箱です。名を『ダメな物ボックス』。巨人面魚はこの箱の中に人類の絶望と共に入れられました。こうなってしまうは如何に『世界の要素』と言えども巨人面魚は二度と復活しないではありませんか？」

言い終えて、一筋の汗を流すエルヴィンにリヴァイアさんは目を細めて微笑んだ。

「その箱の説明書はちゃんと読んだっちゃ？」

「えっ!？」

「なら、後で読むっちゃ。説明書には但し書きがついていて『仕舞える物は現在あるものに限ります』ってどっかに書いてあるはずだっちゃ。じゃなければ人類はドえらいことになるし、現在進行形で皆こんなに悩んでおらんちゃき。つまり、その箱が吸った物は使用時の時点にあったものだけで、未来や過去に存在する物は吸えないはずちゃー」

「そんな……という事はつまり？」

どよめく周囲とは裏腹に、リヴァイアさんは静かに笑う。

「苦しみも悲しみも、心から湧き出る感情はきちんと存在するちゃ。寿命が来れば人は死ぬし、ずっと食べ物が無ければ皆飢える。箱は一時的にその場に有った物や事象を吸っただけに過ぎないちゃ。同じように『世界の要素』たる巨人面魚もまた、時間が経てば復活するのは当然だっちゃ」

他にも質問は？ とリヴァイアさんが周囲を見回した。巨人面魚の復活を断言されたにも関わらず、それでもまだ何かを言いたそうな面々に、ただ一人だけリヴァイが音を立てて立ち上がる。

周囲の注目が一斉に集まる中、リヴァイは「もう良いだろ」と言った。

「巨人面魚は甦る。それでも俺達がここに居座るとすれば、今度はこの海竜を敵に回すことになるだろう。そうになったら、俺達は間違いなく破滅だ。この竜には俺達がどんなにあがいた所で絶対に勝てねえんだよ。巨人と違ってな。それなら大人しく元の世界に帰ってまだ勝ち目のある巨人と戦っての方がマシなんじゃねえのか？」

人類最強のその言葉に、とうとう絶望的な落胆に満たされた室内。誰かから「もし、彼女が敵に回ったら壁内はどうなるんだ？」という質問が飛ぶとリヴァイアさんは笑顔で答えた。

「この国が海に沈むだけだったちゃ 冗談でなく、本気で」

海神の迫力を滲ませたこの一言で、人類の今後の方針はあっけなく決まった。

これから元の世界にもどったらどうなってしまっただろうか。おそらく壁内の税収は悪くなるだろうし、食糧事情もきつと再び悪くなるだろう。再び巨人との戦いが始まれば人材も国費も間違いなく削られる。大切な海産物や塩が二度と取れなくなるのは大きな痛手だ。今や庶民にまで浸透しているこの塩が再び高級食材に振り返き、皆の手に届かなくなることがあれば民衆のクーデターが起こる可能性だってあるのだ。

がつくりと肩を落とす人類たちを見回してリヴァイアさんはニヤリと笑う。

「人間さん方、そげん心配せんでも大丈夫だったちゃ。元の世界に帰っても壁内は妖精で溢れとるきー。妖精に好かれる限り人類の普通生存は確実っちゃ。元氣出し」

誰のせいでこんなに元氣が無いと思ってるんだ。と人類はリヴァイアさんをジト目で見るが、そんな事を気にするリヴァイアさんでは無い。まるで最初からこうなることを考えていたかのようにわざと



らしく考えているフリをする。

「ん〜。まあ確かにのんびりしていた現状からいきなり人食い巨人が一杯いる世界に戻るのも怖かとな。よっしゃ、そんならカモン ワイズマン!!」

「へいお呼びでっか?」

リヴァイアさんが手を叩くと、同時にワイズマンが天井から机の上にトスツと落ちてきた。憎いあん畜生の突然の登場に室内がざわめきだす。

「わ、ワイズマン!? 何で貴様がこんな所で出てくるんだ!？」

「おいおいおい貴様、人類を見限っておいて何を今更ノコノコ出て来ておる!？」

「この詐欺師め!! 何が人類のお役に立ちますだ! 肝心な時に姿をくらましおってー!」

「何をおっしゃいますか。私はいつでも全体の事を考えて生きておりますよ」

かつて盛り上げグッズを提供しまくった人類から罵詈雑言を浴びせかけられてもワイズマンは全く気にせず飄々といつもの調子で力二のような手をシャキーンシャキーンと鳴らしている。

「このワイズマンのコピーを一人連れて行けば良いつちゃ! それなら壁内も安泰つちやる?」

リヴァイアさんの提案に、人類も、そしてワイズマン自身も驚いた。「マジですか! 私か人類に関わってはいかんとこの話は?」

「この人たちは異世界人ちゃきー。こっちの世界の神とも人類とも全然関係無かよ? 壁内をSF映画ばりに文明の底上げをすれば巨人なんか恐くないちゃー 人間さん達どう? 悪い話じゃなかとよ?」

確かに超科学技術を有するワイズマンの全力バックアップがあれば巨人など恐れるに値しないだろう。

困惑するようにざわめく人類たちだが、話を振られたワイズマンはやる気満々で両手を振り上げた。それはもう、人類を相手に好き勝手やりたい放題出来る喜びで新しいオモチャを与えられた子供のよう

に超光学レンズの瞳がキラリンと輝きだす。

「へいへいへい私はこの時を待っていたんだぜ！ それでは人類の皆様方、お手元に資料をご用意しましたので私が常々考えていた人類文明底上げ計画のプレゼンを開始しませう」

ヘイカモン!! のワイズマンの言葉と共に同型のワイズマンコピーが天井からワラワラと現れて散らばると、ある者は紙束の資料を人々に配り、ある者は会議室のど真ん中に立体映像を映し出す。いつの間にか改造したのか会議室の壁と床と天井の全てが瞬時に透過し、壁内の人類が見たことも無い大宇宙が室内一杯に投影された。

「な、なんだこれは!?!」

「我々に何をした!?!」

「えー、」心配なく。「これらはただの映像ですので。それではまずこの文明底上げ計画の概要をご説明いたします。まずはお手元の資料一ページ目をご覧くださいませ。あ、中央の立体映像は説明のつど赤いポイントが出ますので是非資料と共にご参照ください」

まるで宇宙空間に放り出されたような人類が戸惑いながらも資料を捲ると、ワイズマンお手製のホログラフィーが紙の上に浮かぶ。

机の中央には背の高いアリ塚のような家々や槍のような城、空中を走るリニアモーターカー等々未来都市と化した仮想の壁内世界の立体映像が映し出されている。

空を飛ぶ機械に鉄の馬、即座に相手の状況が解る通信機、火薬を使った旧式の大砲に代わる荷電粒子砲の設置など、ワイズマンの巨人対抗策と文明の底上げ計画の概要を聞いた人類は、そのあまりにも壮大で、そのくせ実現可能だという計画に徐々に活力を取り戻し、プレゼンが終わる頃には全員が元の世界に帰る気満々になっていた。

人類が再び元の世界に帰ることになったという話はすぐに壁内中

を駆け巡る。

再びあの絶望的な世界に戻らなくてはならないという話を、民衆はすぐに信じなかった。しかし、王政の正式発表をもってとうとう元の世界への帰還が確実になり、泣き出す者や絶望の余り気絶する者や面と向かって抗議する者が多数現れ始めた中、キース・シャーデイスは悩んでいた。

「ジジ、帰っちゃおう?」

「お爺さん……帰ってしまうの?」

「むっ……」

キース・シャーデイスにとって、ハーピーとイエティは既に家族も同然となっていた。そしてそれは、ハーピーとイエティも同じ気持ちだった。

「帰ったら、二度と会えなくなっちゃおう?」

「おそろくは……」

寂しそうなイエティの問いに、キースは難しい顔をしながらも頷くしかなかった。

「ジジ、帰るのダメ!!」

「お爺ちゃん……」

「私も、出来れば離れたくはない……しかし……!」

泣きべそのハーピーとイエティに抱きつかれ、キースは泣けてきそつだった。この壁内で、教官たる自分には巨人を倒せる力を持った兵を育てる大事な役目がある。がしかし、大事な孫を二人も置いて行かなくてはならない。仲間を失った時とはまた違う、別れの苦しみに胸が引き裂かれそうになった時、ノーテンキな声が二人にかけられる。

「そんなら、こっちに残ればええっちゃやない?」

三人が振り向くと、缶ビール片手に笹かまを齧るリヴァイアさんが立っていた。

リヴァイアさんは缶ビールをぐびぐび煽るとプハーと息を吐く。

「要はこの壁が一番大きな特異点ちゃきー。壁さえ無くなってくれれば大方の問題は解決するっちゃ。そりゃ壁内の人類さん二十五万人全員に残られるのも針孔みたいな特異点が出来過ぎていかんっちゃ

けど、千人二千人くらいならこっちに残っても問題なかよ」

「ホントに？」

リヴァイアさんの話にハーピーとイエティがぱっと顔を輝かせる。が、キースはまだ思い悩んでいるようだ。

「しかし……」

「巨人のこと考えてるちゃ？ それなら心配ないっちゃよ。妖精が壁内に溢れてて、ワイズマンがくっついて行けば巨人被害なんて無いも同然ちゃ。証拠見せよか？」

そしてリヴァイアさんはおりゃ！ と気合い一発、キースの脳内にワイズマンのもたらしたその超科学により栄華を極めたムー大陸の映像を無理やり流し込んだ。

「ふおお！ ふおおおおお!!!？」

凄まじい情報量を一気に流し込まれたのか、三人の目の前で頭を抱えたキースの顔色が白黒と目まぐるしく変わり、そして最後にガクリとその場に崩れ落ちた。

「う、これほどまでとは……確かにこれならば巨人など一溜りも無いだろうが……壁内は本当にこのような世界になるのか!? ……だとしたら、我々はこれから何千年の技術を飛躍する事となるのだ!？」

「ジジ!? 何を見た!？」

「り、リヴァイアさん、やりすぎだよー」

だらだらと脂汗をかき、地に両手をついたまま息を切らすキースに、リヴァイアさんは楽しそうに笑う。

「そんなわけやきー。アンタがおらんでも壁内は平穩無事ちゃ。まあ、こっちの世界の人間さんとは言葉も文化も違うけん。大変だろうけど、それでも良ければ残ればよかよ」

リヴァイアさんの暖かな言葉と自分を心配そうに見つめる孫達の潤んだ瞳を見て、しばしキースは考えた。

そして、最後に決心を決めたキース・シャーデイスは二人の孫の頭を撫でて静かに笑った。

それは鬼教官でも国に心臓を捧げた兵士でも無く、穏やかな孫馬鹿ジジイの顔であった。

元の世界へ戻っても巨人の脅威に脅かされることは絶対に無い。

壁内の帰還を公表した後にすぐ発表されたこの話を民衆が信じたのかどうかは定かでは無い。しかし、妖精が居る限り大丈夫という話は何故だかすぐに信用されたようだ。

それはあの日、巨人面魚襲来時の壁内が神秘に満ち溢れていたせいかもしれない。

三本脚の神鳥。人類を守護する巨人。パステルカラーの間欠泉。突然空を飛んでどこかに消えた巨人面魚。そして死んでから再び蘇った人々。これだけ甚大な被害を出しつつも死者数はゼロという驚異の数字。

これまでありえなかった、信じられない事実のすべてが妖精の仕業だったのなら人々にも納得がいく。

一応、こちらの世界に残りたい者は、自力で残れるならば残っても構わないという触れ書きも発表されたが、多くの人々は壁と共に元の世界に帰ることを選んだようだった。

妖精が壁内にくつついて来るのなら大丈夫……なのかもしれない。という結論に至った民衆は暴動に走るのではなく、もっと建設的な事

これから取れなくなるであろう塩と海産物の確保 に走ることとなり、中央への暴動を覚悟していた憲兵団はほっと息をついていた。

「まあ、巨人に脅かされない世界になるなら、やっぱり元の世界に帰りたいわよね」

調査兵団兵舎の一室でペトラが笑う。

「ああ、ほんとだよ。元の地へ帰れるとも思ってたが、いきなり巨人に怯えなくなる日が来るなんて誰も思わなかったさ」

椅子に座っていたグンタが目を細める。

「元の世界に戻ったら、皆でその日を祝いたいと思ってたんだぜ？俺はよ」

珍しく兵長の真似をしていないオルオが愚痴るように言うと、三人を前にしたエルドは困ったように笑った。

「皆、ホントごめん。でもやっぱり俺はこっちに残るよ」

エルドは巨人の脅威が壁内から消える事を知ったその時から、この世界に残るつもりであった。

「それって、やっぱり隅田さんの事？」

ペトラに聞かれ、エルドは頷く。

「ああ。隅田さんからは『皆と帰ればいいでしょ』って言われてるけどさ、やっぱり心配だし、あれでも寂しがり屋なんだよな。そりゃ巨人がまた人類を脅かす状態になるなら兵として帰るつもりだったさ。でもそうじゃない。人類の勝利宣言が下されたんだ。それなら女を置いて一人で帰るなんて男が廢るだろ？」

照れたように笑うエルドに、三人はハアっとため息をついた。

「で、残るにしてもどうやって残るつもりなの？ アンタ、一人じゃ泳げないでしょ」

ペトラにもっともな事をつっ込まれ、エルドは真面目そうな顔つきで案を語る。

「巨人面魚は居ないし隅田さんかむろみさんに頼めば陸地まではどうにかなる。あとはちょこちょこ地下から出て来てるらしいこっちの人類と交流を図ってみるよ。まあ、海の近くに漁村でもあればしば

らくそこで暮らそうかとも思ってる。それがダメなら後は適当に掘って建て小屋でも作って魚でも釣って気ままに野となれ山となれ」

真剣な表情とは裏腹なあまりにも無鉄砲な物言いに、エルド以外の三人は暫し目を見合わせる。

「お前解ってるのか？」「こっちに残ったら二度と壁内に戻れないんだぞ？」

「そうだぞ!? それにこっちの人類とは言葉も文化も違うらしいんだぞ!!」

「何よりね、人間の知り合いが一人もないのに本当に大丈夫だと思ってるの!?!」

全員で最後の説得を試みるも、エルドは笑って、それでも残るよ」と言い切った。

「まあ、おフクロには悪いけどな。最後の日には書置きでも残しておくれ」

ハハッと笑うエルドの覚悟は固く、三人はもう肩を竦めるしかなかった。

「なら、もう良いわ。エルヴィン団長達には言ったの?」「呆れたように聞くペトラに、エルドは頷く。

「言った。リヴァイ兵長にも。いつもの顔で『そうか。二気なでな』だってね」

リヴァイ兵長の仏頂面がすぐ三人の頭に浮かんだ。それはもう、この世の全てが詰まらなそうな顔で言ったに違いない。

「何か、兵長らしいな」

「うん、そうね」

「あれでも寂しいとは思ってくれてるはずだぞ?」

「そりゃまあ、何も知らない間柄じゃないしな。仲間だし」

「仲間か……そうだよな」

「ああ。会えなくなっても仲間だと思う」

「リヴァイ班は永遠だぜ!」

「オロオ何それ、今度はエレンの真似!?!」

「似てるか? えれえれなんだぜ!!」

「似てねえー!!」

オルオが似ていないエレンの真似をして、そして四人はお互いの肩を叩き合い、今までにない程大きな声で笑った。

「なあミカサはん。日本に来いへん？」

ミカサの膝に座った和風の鳥幼女ことヤタガラスが顔を上げて尋ねた。

「何故？」

「ミカサはんはほんまは日本人やる？ 人類はんが帰ってきはったら日本人もきつとよーさん帰ってくるさかい。ちいっと世界は違てんけど、故郷に帰りたいと思わへん？」

ウォールローゼ攻防戦の後、ミカサは無事にエレンを見つける事が出来た。

何故かアニとユミルも一緒にいたが、それよりも何よりも、エレンが生きていたという事が一番嬉しかった。

最終的に人類全員が生き返ったとはいえ、ハーピーを始め、鳥達が居なければミカサはこんなに早くエレンに会う事が出来なかつたし、エレンを探すのをずっと手伝ってくれたヤタガラスにはとても感謝している。

「日本はええ所やで。水は綺麗やし、食べ物美味しいし。ウチ、ミカサはんなら大歓迎なんやで？ ミカサはんさえ良ければ川端はんやウチらと一緒に棲んでもええぐらいやで？」

先ほどからヤタガラスは一緒に日本という島国へ行かないかとミカサを誘っていた。

ヤタガラスとしては、壁内で唯一の東洋人であるミカサには何か特別な気持ちがあるようだった。それは一人ぼっちの東洋人に対する憐憫なのか、単なる気遣いなのかは解らない。けれど、ヤタガラスにとってのミカサは他の人間以上の何かを感じるようだった。



ミカサの膝の上でどこか懸命に遠くの島国へ誘うヤタガラス。その黒い髪を、ミカサはそっと撫でた。

気持ちよさそうに目を瞑るヤタガラス。もしも自分に妹が居たならば、こんな感じだったのかもしれないとミカサは少しだけ思った。

「私、ヤタガラスの事は大好きよ。命の恩人。貴方が居て、とても助かった」

ミカサはヤタガラスの優しく撫でる。さらさらした黒髪の手触りが気持ちいい。

「ミカサはん……」

ミカサを見守る少女の背中についた、鳥の証である一対の黒い翼が僅かに揺れる。

「でも、一緒には行けない」

「何でや？」

首を傾げるヤタガラスにミカサは答えず、自分達より少し離れた壁の上でアルミン、ジャンと共に釣りをするエレンに視線を向けた。

「やっぱりエレンはなんなん？」

エレンは壁内に留まり、元の世界に帰ると言っていた。この世界の事も知りたいが、やはりまずは自分の世界を探検することを選んだのだ。

エレンがそうするなら、ミカサの選択は最初から決まっている。

「ごめんねヤタガラス。やっぱり私は、エレンと一緒に居たいから……」

そしてはにかむように、年相応の少女のように笑ったミカサを見て、二本脚の神鳥は口元を隠してくすくすと笑う。

「そんなら、仕方がありませんなあ」

「おっかしいなあ」

「うん。いつもならすぐ食いついてくるのにね」

「どっかであた酔いつぶれてんのか？」

エレンとアルミン、そしてジャンの三人はトロスト区の壁上面にて釣り糸を海に垂らしていた。エサはもちろんゴカイ。狙う獲物は最初から決まっていた。

「むろみさん、どこに行っちゃったんだろっ?」

ウォールローゼ攻防戦が終わってから、むろみさんの姿を見た者は誰も居なかった。

壁の上で釣りをしていた駐屯兵や、トロスト区で瓦礫撤去の手伝いをしていた淡路さんらハンターの人魚や、隅田さんに聞いてもむろみさんの行方は知らないそう。

「一言、お礼を言いたかったんだけどな……」  
人類の帰還はもうすぐだ。

こちらの世界へ残る人々の為にも巨人人魚が再び復活する前に帰らなければいけないのだから、作業は急ピッチで進められている。

人類帰還の装置は、ウォールシーナの山奥で見つけた一見スコップ状の物体。正体はもちろん妖精の道具だ。

スコップ状の物体は時空に穴を開ける道具らしく、これをワイズマンがあれこれ操作して帰還となるのだが、その際には壁内の妖精が多い方が最終的な成功率そのものは高くなるらしい。

エレン達シガン　しなは、その妖精を集めるために、改めてあの日に出来なかった壁内大規模ライブを行うのだ。

「時間はもう今日しか取れないからな……」

「あとはずっと練習だもんね。一言お礼が言いたいのに……」

「ああもう!!　いつもは勝手に引っかかるクセに何で今日に限って来ないんだよ!!」

もうじき元の世界に戻る。そうになったら使われなくなるであろう釣竿をエレンが海に向かって放り投げた。

ゴン。と何かにぶつかる音。

「あ痛っ……」

壁の真下から、声が聞こえた。

四人がそつと覗き込んでみると。

「むろみさん……」

むろみさんが、壁の真下でこっそりと三人の会話に聞き耳を立てていたのだ。

「な、なんですぐ来てくれないんだよ!! お別れが言えないだろ!?!」

「せからしか!! アタシは湿っぽいのが嫌いやけんアンタらは勝手に帰ればよかよ!!」

何故か拳を振り上げて怒っているむろみさんに、二人は困惑する。

「何で怒ってんだよ!?!」

「そつだよ。聞き耳立ててるくらいなんだから、気になってるんでしょ?」

「っていうか、そんな所居ないでコツチ来いよ!」

「嫌や! 今そつち行ったら、絶対泣かされると!!」

顔を隠し、テコでも動かない意思を見せるむろみさん。何だか普段と違うしおらしいその姿に、三人は虚を突かれたようにポカンと口を開け、顔を見合わせた。

「そんなお別れなんて突然ちゃけん、もっと居られる思ったのに、突然過ぎたい」

壁に額を当てて、海の中で一人もそもそと呟くむろみさん。すると突然背後にとぼんとぼんと三つの水柱が立つ。ふとむろみさんが振り返ると、海にはジャンとエレン、それからアルミンが溺れていた。

「うげげげげげげげ!!」

「ぐぼぼぼぼ!! 助け、助け!!」

「うごおお!! 足が!! 思ったより泳ぐの難しい!!」

「な、なんばしよつとねあんたらー!!!」

無謀な男子二人を海面に引き上げると、三人は肩で息をしながらも笑う。

「はあ、はあ、ありがとつむろみさん」

「ほんと、助かったぜ」

「おおお!! 海って思ったより恐いなだな!」

「何を当たり前のこと言つとるげな! 沈んだらどつすと!?!」

力いっぱいむろみさんに叱られる二人だが、そんな事を気にしてい

たら鬼教官の指導の下で訓練兵などやっつけていられない。

「だって、むろみさんがこつち来ないからだろ！」

「なら、俺らの方から行くしかねえじゃん」

「そうだよ。僕たち、ずっとむろみさんにお礼が言いたかったんだ」

アルミンが、今まで本当にありがとつと言おうとした瞬間、額に  
チヨップがかまされた。

「ヒレチヨップ!!」

「あいたー!!」

「だからアタシは湿っぱいのは好かん言つとるにー!」

涙目で額を抑えるアルミンに、腕組みをして怒った顔をするむろみ  
さん。

「じゃあ、何て言えばいいんだよ?」

。 エレンに聞かれたむろみさんはしばし考え、ニヤリと笑う。そして

釣りをしていたエレン達が突然壁から飛び降りた。

「皆、どうしたの!?!」

気づいたミカサが慌てて壁の縁から海を覗き込むと、そこには波間に  
浮かび、声を上げて楽しそうに笑う二人の少年とむろみさんが居  
た。

そして人類帰還の日。

壁の中は、間もなく巨人が支配する大地へ帰還する。

しかし、恐れることは何もない。

超科学を持ち合わせる異星人と、奇跡とデタラメの根源たる無数の妖精達が人類と共に居るのだから。

妖精達の不思議な力にあやかろうと、甘い物と楽しいことが大好きな彼らの為に、帰還のその日は大きなお祭りが開かれた。

昼のうちに何度も花火が打ち上げられ、人々はこの日を盛大に祝っている。

道々に立ち並ぶ沢山の屋台。楽しそうに酒を飲む大人たちの笑い声。無料で配られる甘いクッキーを美味しくそうに頬張る子供たちの笑顔。多分、もつ当分の間は食べられないであろう魚介類が炭焼きにされる香ばしい匂い。旨味の強い魚醤と練り物に舌鼓を打つ人々の姿。

むろん、まだ巨人面魚が侵攻した傷跡は残っている。トロスト区の復興はまだ終わっていないし、家を無くした人々の生活が落ち着くのはまだまだ先の話だろう。

それでも、人類はその日を笑うのだ。

「皆ー!! ノってるかーい!!」

何千人もの人間が密集した会場からイエーイ!! と大きな返事に呼応するように、シガン しなは拳を振り上げた。

「それじゃー次の曲、いっくよー!!」

大勢の歓声が会場中から湧き上がり、スピーカーから流れだす軽快な音楽と共に三人は再び歌い出す。

ここはウォールローゼに設えられた、シガン しな用の特別舞台会場。

折角設えた大規模ライブ用の華やかな舞台は巨人面魚に壊されてしまい、今現在彼らが立っているその場所は音響設備を積んだ簡素な櫓でしかないが、そんな事は関係無かったようだ。

一度は流れてしまったウォールローゼの大規模ライブ。

巨人面魚襲来の傷跡が残るこの壁内で大した宣伝も出来ず、一体ど

れだけの人間が集まってくれるだろうかと心配だったのが、この櫓の舞台に立った瞬間、三人は息を飲んだ。

今日、ここに集まった人数はあの日のゲリラライブの比ではない。何せ、壁内中のシガン　しなファンが一堂に集まっていたのだから。

「ポカ...」

見渡す限りの人、人、人。今まで見たことも無い、人の海とも呼べる光景に、これだけの人が自分たちを応援してくれていたのだという実感が湧きあがり、エレンも、ミカサも、アルミンも胸が一杯になっってしまった。

しかし、マイクを持ったままポカンとしていても何も面白いことは始まらない。挨拶を終え、背後に控えた音楽班の演奏が始まると共に、三人は今までずっと練習し続けてきた歌を歌い出す。但し、今までで一番激しくも楽しく、そして熱く、華やかに。

いくつもの歌を踊りと共に終え、人々の声援が激しく湧き上がるウォールローゼの大舞台。

そろそろ妖精達もお祭りの賑わいに誘われて増えつつあるに違いない。そして時刻は間もなく、人類が元の地へと帰還する時を迎えようとしていた。

宴もたけなわとなりつつあるこの一世一代の舞台で、シガン　しなは会場へ向かって大声で呼びかける。

「それじゃあ、皆、次の曲は新曲なんだぜ!!」

「人類がこの日を迎えられたのは、僕らの手を取ってくれた人魚達が居たおかげだ!　そのお礼も込めたのがこの曲だよ!!」

「壁の向こうに居る皆にも聞こえるように、全員で一緒に歌いましょう!!」

大歓声が会場を包み込み、そしてスピーカーからは音楽班が奏でるアップテンポで特徴的でとても楽しげな音楽が流れ出す。

それは大きな箱舟であった。

波間に漂うその箱舟には、二百数名の壁内人が乗っていた。

壁内の人類が帰還するその日、残留を希望した人類は箱舟に乗り、こうして新天地を目指しているのだ。

「まさか、こんなに多くの人間さんが残るとは思わなかったとね」

舟の上でくつろぐむろみさんの言つとおり、当初の予定ではここまで人が残るとは思っていなかった。何故なら王政府の出したこの地に残留条件は『自力での残留』だったのだから。

「まあ、それもこれもワイの人望って奴やな!!」

隣に座る淡路さんが腕組みをして清々しく笑う。残留を選んだ人間の多くは家を無くしたトロスト区の住民で、姐御肌の淡路さんを慕ってこの地に留まることを決意したのだ。しかし当初それぞれが作成したイカダではあまりに頼りなく、見かねたワイズマンがそれぞれのイカダを合成して箱舟に作り替えたのだった。

「んな事言ってー。淡路さん責任取れるん？」

「あつたりまえやで!! 皆ウチの子分や。どっかの陸地についたらテキトーに漁のしかたでも教えたるわ!!」

「あ、淡路さん!! ウチらの事は!？」

「お前らにもきつちり訓練つけたるから覚悟しとけや!!」

怒鳴る淡路さんに、舟の近くを泳いでいた明石さんと鳴門さんは嬉しそうな顔をする。

「おねいたーん! そろそろ時間やないかな?」

舟の横で泳ぐクジラに乗ったひいちゃんがむろみさんと呼ぶ。

「え、もっ!!」

慌てて舟の上からもう一度、間もなくこの地から消えるであろう壁の方を見た。舟からは大分遠くなってきているが、それでもまだ海から突き出たあの壁は見えている。

海に突然やって来た、不思議な壁の国。

「考えてみれば、あつちゅーまやっとなあ……」

遠い目をして、淡路さんがぼやいた。

人類が人魚を慕っていたように、人魚もまた人類が消えたこの地に再び現れた人間を好ましく思っていたのだ。

「ねえ、むろみ。何か聞こえてこない？ 歌みたいなのが」

箱舟の中から、隅田さんが顔を覗かせる。

「マジでっ。」

むろみさん達が揃って壁の方へ耳を澄ませてみると、軽快な音楽が聞こえてきた。そして、楽しい音楽に交じって人間たちの大きな歌声が聞こえてくるのではないか。

むろみさんや淡路さん、ひいちゃん、隅田さん、富士さん、他の人魚の皆の名前を呼びながら、俺はここだと何度も呼ぶ歌声が潮風に乗って聞こえてくる。

「変な歌やなあ」

「でも、ええ歌やん！ アタシは気に入った！」

そして、笑うむろみさんは貝の小物入れから猫耳型の気象抑制装置を取り出すと装着し、次いで淡路さんとひいちゃん、隅田さんに投げ渡す。

「そんじゃ、アタシ達もお返しに歌うとよ!!」

「マジでか!？」

「おねいたん、何歌うん？」

「そりゃもちろんエレン君ぴったりのあの力強い歌たい！」

「もしかしてあの歌!？」

「ちよ、ちよっと待ちいや!! まだ心の準備が!!」

慌てる二人を差し置いて、笑顔のむろみさんは拳を振り上げて思いきり息を吸う。

「皆、行くとー!! いっせーのー!!」



## 蛇の足とむろみさん（完結）

ウォールマリア内のある小道。ハンジとリヴァイはそれぞれの馬に乗ってのんびりと歩いてた。

二人の腰には一対の立体機動装置がぶら下がっているが、周囲に危険性が無い事は彼らの表情が物語っている。

「暇だねえ……」

「シャツキリしやがね。そんなんで何かが起きてすぐ対応出来るのか？」

「うーん。そりゃそうだけど、その起きる可能性のある何かは想像もつかないからねえ」

だらけた表情のハンジがそうぼやいた途端、胸元のポケットからロック調の音楽が流れ出す。ハンジが慌てて通信機の端末を取り出し、指で画面を操作するとウンと虫の羽音のような音を立てて板状の画面の上に立体映像が映し出される。

『そちらの状態はどうだ？』

『団長。今の所異常はありません。強いて言えば、暇すぎるくらいでしょつかね』

『それは何よりだ。では引き続き見回りを頼む』

持っていた板状の端末からエルヴィンのミニホログラムが消え去ると、端末を再びポケットへしまったハンジはふうっと息をついた。

「いやー。いつまで経っても慣れないね。コイツを使うのは」

「そうか？ 俺には十分慣れてるように見えるが」

「いや。そりゃ通信機嫌いのリヴァイから見ればそうかもしれないけどさー。っていつか、リヴァイも少しは使い方覚えたら？ 持てばそれなりに便利だよ」

「チマチマチマチマしてんのが面倒くせえんだよ。近くの誰かが持つてりゃそれで十分だ」

詰まらなさをそうに言ったりヴァイに、ハンジはにやにや笑いながら指を指す。

「そんな事言って。リヴァイの場合、単に操作が覚えられないだけでしょ」

「削ぐぞ」

人類が、あの人魚の住む海の世界から戻って早三年が経とうとしていた。

巨人面魚に破壊されたウォールローゼやトロスト区はすっかり復興し、かつてのような魚市場こそ無いがそれなりに活気のある町へと成長している。

ウォールマリアの奪還も早いうちに成功し、人類の壁外への進出も少しずつではあるが進んでいて、こちらの世界の海も近いうちに発見されると予想されている。壁内の塩も備蓄がまだ残っており、このまま順調に海の発見にまでこぎ着ければ極端な値上がりはどうか避けられそうだ。

妖精社の食糧は相変わらず出回っているが、マリアの土地の奪還と共に人類側での食糧供給も徐々に増えてきて、現在は味の良い人類産の食糧に人気傾きつつある状況だ。なるべくなら出所が解らない謎の食糧より、人類が作った解りやすい食べ物の方が良いという気持ちの表れらしい。

そうして人類は今、着実に壁外への一步を踏み出していた。

「まあ、それにしてもこんなのにのんびりした気持ちでウォールマリアを歩ける日が来るとは思わなかったね」

ふああ、と欠伸をするハンジを見て、リヴァイは舌打ちする。

「おいクソメガネ。一応仕事中心だぞ」

へいへーいと言うハンジだが、やる気は殆どゼロである。

「でも、仕事って言ったってねえ……」

ウォールマリアの奪還。

人類は確かにウォールマリアの領土を奪還した。それは良いのだが、そのウォールマリアの奪還は当初の予定とはかなり違う奪還方法

であり、正直言って今も世界に何が起こったのかよく解っていない人類は未だに多いのだ。

そもそも、巨人に対抗する人類の当初の目論みは共に壁内へついできたワイズマンに武器を提供してもらい、マリア内を闊歩する巨人を順次駆逐していくという予定であった。のだが、ワイズマンが対巨人用の武器を作る前にちよつとばかり予想外の事が起きたのだ。

「こんげんさん」

「あ、妖精さん。こんごちは」

花の上にちよこんと座った妖精さんがハンジに向かって手を振った。馬を止めたハンジは地面へ降りると、その小さな妖精さんの目線に合わせて屈みこむ。

「にんげんさん、ごきげんいかがですか？」

「いやぁボチボチだね。妖精さん、良かったらキャラメルでも食べるかい？」

ハンジが腰の立体機動と一緒にぶら下げた巾着袋から常備しているミルクキャラメルを差し出すと、両手で受け取った妖精さんは嬉しそうにキヤーと笑う。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。巨人に食べられないように気を付けてね」

「はい」

笑顔で手を振って妖精さんと別れるハンジ。それを眺めていたりヴァイは馬に跨ったまま無然とした態度を崩さなかった。

「何が食べられないでねだと。本当は食われてくれた方が人類にとっては都合が良いだろうが」

「まあそう言わずに。これも社交辞令という奴だよ。それに私たちと違って妖精さんは巨人に食われたところで死なないじゃん。言葉の重みが全然違うよ」

「……………まあな。本当にデタラメ過ぎて気色悪い」

この世界で起きた予想外の出来事。それは、巨人は人類よりも新人類たる妖精さんを好んで食すという事だった。最初にそれを発見したのは、確か調査兵団の誰かだったはず。

共に居る人間の生存確率をほぼ絶対生存まで跳ねあげさせる脅威のデタラメ。妖精さん。

彼らの力を確かめるべく、妖精さんと仲良くなった数人の有志が彼らを連れて壁外調査を行ったのだ。

壁から出た途端、巨人はすぐにやって来た。人数の少なかつた調査兵は足の速い巨人どもに食われそうになったのだが、遭遇した巨人は人間よりもまず先に、びっくりして丸まった妖精さんを拾って食ったのだ。

巨人としても旧人類より新人類の方が美味しそうに見えたのかどうかは定かでは無いが、とにかく妖精を食べた巨人には劇的な変化が起こったのだった。

それは。

しばらく小道を歩いていたハンジとリヴァイの目の前に、リュックサックを背負った七メートル級の巨人がのっそりと現れた。

ずんぐりとした体に笑顔を張り付けたようなその巨人は二人の前に立つと、襲い掛かることも無く一枚の地図を差し出した。そして、地図の目的地を指で示し、首を傾げるジェスチャーをする。

どうやら、道に迷っているらしい。

「あー、漫画祭りの会場ですね？　この道をまっすぐ行った所で合ってますよ」

地図を見たハンジが道の先を指差すと、青いリュックサックを背負った七メートル級の巨人は丁寧にお辞儀をしてそのまま通り過ぎて行った。

ハンジが巨人の相手をしている間、リヴァイは遠い目をしてぼんやりと呟いた。

「……まさか、一度妖精を食った巨人は人を襲わなくなるとは思わなかったな……」

しかも人を襲わなくなった巨人は随分と理性的で、尚且つそこらの人間より遙かに丁寧だったりするからリヴァイにとってはタチが悪い。

ちなみに食われた妖精さんは後日ひょっこりと姿を現したりする

ので心配はご無用だ。

妖精類は人類の壁外進出と共にその数を増やし、現在では巨人の数のおよそ七倍から八倍に増えているのではないかと言われている。

妖精さんが増えるに従いそれを食べて人を襲う巨人が減り、そしてウォールマリア内に居る巨人の殆どは現在、温厚な巨人ばかりとなっていた。

向こうから襲い掛かってこないならば、わざわざこちらから圧倒的に強い巨人に喧嘩を売る必要も無い。

巨人に植え付けられた人類のトラウマは計り知れず、人類の中には未だに巨人を殲滅すべきと主張する者も多いのだが、色々と議論を交わした末、結局人類は温厚化した巨人と共存する道を選んだのだった。

しかし、三つの種族が入り混じる世界には常にトラブルが山積みで、それを解決する為に白羽の矢が立てられたのが調査兵団。

巨人同士の喧嘩を仲裁出来る程の実力を持つリヴァイ兵士長が元々居た事に加え、妖精さんと仲の良いクリスタ・レンズが調査兵団に入団したのが大きな要因だ。

色々と紆余曲折はあったのだが、現在の調査兵団は妖精類、巨人類、そして人類の間を取り持つ『調停兵団』と名を変えてウォールマリアや壁外の小村等、あちこちで活躍しているのだった。

赤や黄色や白の花の咲き乱れる小道を馬でのんびりと歩きながら、このリヴァイは怖いくらい唐突に平和になった壁内を見回した。

今日も雲一つない良い天気だ。

必要の殆ど無くなった立体機動を片手で撫で、リヴァイは隣に歩くハンジにこの三年間、ずっと聞けなかった疑問を口に出してみた。

「なあハンジ。俺達はこれで良かったと思うか？」

ハンジが振り向いた。

「どうしたんだい？ 突然」

「ここに来るまで、沢山の仲間が死んでいった。俺達はそいつらの意思を継ぎ、巨人どもを殲滅することを誓って生きてきた。なのに、巨人の謎も世界の秘密も解き明かせぬまま唐突に平穏が訪れただろう。」

時々俺は思うんだよ。俺達はこれで本当に良かったのか？ と。今のこの状態は、死んだあいつらに胸を張れる状況なのか？」

久しぶりのリヴァイの長いセリフを聞いたハンジは、一瞬目を見開き、そしてすぐに笑顔を浮かべた。

「なんだ。リヴァイは幸福恐怖症なのかい？」

「は？」

「良いんだよこれで。世界の謎なんてゆっくり解いていけば良いんだ。あとさー、死んだ奴らが私たちに最も望んだ事は何だと思う？」

きよとんとしたリヴァイに、ハンジは大きな声で高らかに笑う。

「確かに巨人の殲滅は出来なかったよ。でも、こーんなに人類がのんびり生きられる世界が来たのなら、誰も文句は言わねーさ!!」

「そうか？」

「そうだよ」

あまりにも当たり前のように言われ、リヴァイは暫し考えてからやがて静かに笑った。

「そうか……そうだな」

見慣れた人で無いと解らないようなその笑みだが、ハンジにはすぐ解る。あのいつも険しい顔をしていた兵士長がこんな風に穏やかに笑う時が来るとは思わなかった。

「ところでリヴァイ、今度映画でも見に行かないかい？」

唐突にハンジが提案すると、リヴァイはぽかんと口を開いた。

「あ？」

「映画だよ。ローゼのシアターに新作が来てるんだ。どう？ 休日にも」

ハンジの誘いにリヴァイはすぐに尋ねる。

「主演は誰だ？」

「もちろん、アルミン・アルレルトー」

途端、聞いたリヴァイの口の端が釣り上がる。

「悪くない」

元調査兵団兵舎の裏で、エレン・イエーガーは本日集まる仲間たちを待っていた。

元の世界に帰ってきてから三年。壁内外が平和になりつつある今でも、104期生は連絡を取り合っている。兵士を続けている者もいれば、兵士を辞めてしまった者もいるが、それでも友達は友達なのだ。「皆、おっせーなあ……」

「でもエレン、集合時間にはもう少しあるからさ」

苛立つエレンに、アルミンは腕時計を確認する。

「今、クリスタからメールが来た。もうすぐ着くって」

壁に寄り掛かったミカサが通信端末の画面を指でスライドさせてメールを確認していた。クリスタからメールが来たという事は、ユミルも一緒に来るという事だろう。

「そういえばエレン。お父さんは元気？」

暇を持て余したアルミンに聞かれ、紙パックのお茶をストローで吸っていたエレンは顔を上げた。

「おう。まだ記憶は戻ってねえけど、元気だよ。なあミカサ？」

「うん。この前も皆で映画を見に行ったの。おじさん、笑ってた」

「そうか……早く記憶が戻ると良いね」

ずっと行方不明だったエレンの父、グリシャ・イエーガーは壁が元の世界に戻った直後に帰って来た。

上空がやたらと光り輝く夜の事。エレンが慌てて外へ見に行くと空に沢山の円盤が浮かんでいて、その真下にエレンの父親ことグリシャ・イエーガーは呆然とした表情で佇んでいたのだ。

もちろん、エレンは今まで何をしたのか問い質したのだが、グリシャは何も覚えていなかった。エレンの母が巨人に食われた事までは覚えていたのだが、その後どこで何をしていたのか、今まで何の研究をしていたか、そしてあの日エレンに何かを注射した事等は全く覚えていないらしい。

「まあ、良いけどな。別に思い出さなくても」

飲み終えた紙パックを潰しながらエレンはぼやくように言う。

確かに、父親が一体何者なのか、今まで何をしていたのかは気になるが、本当に覚えていないのならばしょうがない。父親が嘘についている可能性もあるにはあるが、その可能性が限りなく低いことはエレンにも解る。

何故かと言うと、この間エレン達はシガンシナの生家に戻って見たのだ。父親から渡された鍵が何だったのか、地下に何が隠されているのか、これで解ると思った。ところが、家に戻ってみると地下室は跡形も無く消えていた。何者かに潰されたのではなく、最初から何も無かったかのように消えていたのだ。

帰って来た父と共にシガンシナの生家の前に立ち尽くしていた時、エレンはふと妖精から貰ったスイッチの事を思い出した。

巨人面魚の腹の中で出会った妖精さん。彼らから貰った赤いスイッチ。『よく考えて』の忠告も半分聞き流してエレンはスイッチを押してしまった。おそらく、あれが全てのターニングポイントだったのだろう。

「回収できるところだけ回収され、出来ない所は無かったことに……って所なのか？」

無かった事にされた父の記憶が戻ることは二度と無く、今まで疑問に思い続けてきた世界の秘密も二度と知ることが出来ないのかもしれない。しかし、その代償が壁外への進出と人類の平穏ならばそれはそれで良いのかもしれない。

「やっほー!! 三人とも待ちましたー!？」

「おーい。来てやったぞー」

「サシャ、コニー!! 久しぶり!!」

まず先にやってきたのはサシャとコニーだった。

「いやあ、注文品をお店に届けていたら時間が掛かってしまいました



よ!! もしかして私たちが最後ですか?」

「ううん。皆まだ来てないよ」

「マジかよ。そんならもつとゆっくり来りゃ良かったな」

「コニー。お前それでいつつも遅れるだろ? この前リヴァイ兵長に怒られた事思い出せよ!」

「ンだよ。どうせ妖精絡みなんだから焦んなくても問題ねえだろうが」

悪びれも無く笑うコニーは、現在調停兵团にて妖精さんの起こしたトラブルを担当しているのだった。バカ呼ばわりされることが多いコニーだが、それでもその明るい性格は妖精さんと仲良くなるのに適しているのだ。

コニー達が喋っている間、サシヤは肩から下げた大きなアルミ製の鞆をよっこいしょと地面に置く。と、ミカサがその鞆を見て尋ねた。

「サシヤ、何を持ってきたの?」

「これ? これですか?」

サシヤはよくぞ聞いてくれました! とばかりににんまり笑うと、皆の前でじゃーんと言いながら鞆の口を開く。途端に溢れ出すひんやりとしたドライアイスの白い煙。

「アイスクリームです!! 皆と一緒に食べようと思ってお店のを持ってきました!!」

「バターポテト味だ!! 俺このフレーバー好きなんだよな」

「こら! ダメですよエレン。あっちに行って、皆が揃ってから食べるんです」

振り返ったエレンが手を伸ばすと、すかさずサシヤが蓋を閉める。エレンはちえーと口を尖らせたが、そんなものは無視だ。

「サシヤ、溶けちゃわないの?」

「そのためのクーラーボックスですから!」

胸を張るサシヤは、こちらの世界に戻ってきてからしばらくの間は兵士を務め、ついこの前辞任した。そして、ウォールローゼの片隅で壁内初のアイスクリームショップを開いたのだった。

「でも何でアイスだったの? 兵士を辞めなくても、クリスタみたい

にお菓子作りの講師をやれば良かったのに」

アルミンの意見にサシャは考え込むようにむー……と唸り、そしてにいつと笑った。

「おいしい物を食べると、皆笑顔になるじゃないですか。今時の壁内には料理屋は沢山ありますが、アイス屋さんはありませんでした。そして私もクリスタも妖精さんもアイスが好きでした。だからアイスを極めたくまりました。理由はそれだけです！」

次に来たのはクリスタとユミル、そして山奥組ことライナー、ベルトルト、そしてアニだ。

「おお!! お前から来てくれたのか!! 久しぶりだな。ってか故郷の方はもう良いのか?」

ライナーとベルトルト、アニの三人は壁が元の場所に戻ってきてからしばらく故郷の村に戻っていた。何か色々面倒な事情があったよくなのだが、つい先日ローゼへ戻ってきたとメールを貰ったのだ。

「まだごうたごうたしてるんでしょ? 来てくれたのは嬉しいけど……もしかして無理させちゃった?」

エレンとアルミンが心配そうに話しかけると、ライナーは難しい顔で腕を組み、ベルトルトは困った顔で頬を掻いた。

「うん、何か色々あったんだけど……」

「まあ、何だ。確かにまだ色々あるっちゃあるんだが、大体の問題は知らないうちに解決していたんだ」

何だそりゃ。と思ったエレン達だったが、苛立ったようなアニの言葉で全てに納得がいった。

「妖精達のせいだよ。絶望的にこんがらがった状況だったのが、妙にご都合主義的な事が連鎖的に起こっていつの間にか問題そのものが無かったことになってたんだよ。まったくなんてこったい……おか

げで今までしてきた私たちの苦勞も苦惱も全部揃って水の泡さ」

「ホントだよ……こんなデタラメが起こるなら、もっと早く起こってくれれば良かったのに……」

両手を上げて首を振るアニに、苦しそうな表情を浮かべたベルトルト。何だか泣き出しそうなその背中を、エレンが音を立ててバシッと叩いた。

「何か知らないけど、大変だったんだな。まあ、元気出せよ！ 過ぎたことはもう仕方がねえんだからさ!!」

慰めるように何度もベルトルトの背を叩くエレンの横ではアルミンも頷いている。

「そつだよ。過ぎたことはもう覆せないでしょ。なら、どうあがいても前を向いて行くしかないんだよ」

「でも……」

「でももだつてもねえんだよ!! 俺だつて母さんの仇の巨人を駆逐してやるって思ってたのが、まさかの共存だぜ!! ありえねえだろ!!」

……でも、調停兵団に入ったからにはそんな事は言つてられないんだよなあ……」

「しかも妖精化した巨人つてそこらの人間より親切なんだもんね……本当に今までが今までだった分、余計に夕チが悪いよ……」

がつくりと肩を落としながらも慰めるように言う二人に、俯いていたベルトルトがようやく顔を上げた。

「二人とも、巨人の事を受け入れられるのかい？」

「まさか。あいつらなんか大嫌いだぜ。今までどれだけの人間が食われたと思ってるんだ」

「今でも憎いには憎いよ。けど、向こうからこちらに襲い掛かってこない以上、こちらから戦闘を仕掛けるのも得策じゃないでしょ」

巨人は憎い、けれど時代が変わったのならそれを飲み込む努力も必要なかもしれないと言う二人に、ライナーは腕組みをしたまま何かを考えていた。

「なあ、エレン」

「何だライナー？」

「いつか……いつかさ、俺達の故郷の問題を言える日が来たら、その時は話を聞いてくれないか？」

「何だそりゃ。今言えば良いだろ？」

「今は言えん。だが、いつか必ず言う。お前には絶対に言わなきゃならんと思っつからな。その時は何発だつて構わんから俺を殴れ。その代り、俺だけを殴れよ」

「？ おう、解った」

ライナーの意味不明の言葉にエレンが戸惑っていた時、隅っこの方でミカサやユミル、サシャ、コニーときゃっきゃしていたクリスタが皆を呼ぶ声が聞こえた。

「ねえねえ皆見て!! ハンナとフランツの二人目の赤ちゃんの写真が送られてきたんだよ!!」

「手紙もあるぜ。今は三人目がお腹に居ますだつてよ」

「あの二人、何人作る気なんだろうなあ。まったくいつまでたつてもバカ夫婦のままだよな」

「うん。でも、とても幸せそう」

「ウチのアイスに使う蜂蜜もフランツの所のなんですよ。今度行ったら何かお祝いあげないといけませんね」

「あ、俺達にも見せてくれよ」

楽しそうにはしゃいでいる皆の声にエレン達は振り返ると写真を見に走ったのだった。

「おーい。皆揃ってるか？」

「「めん」「めん」！ シーナの電車が遅れちゃって!!」

最後に駆け付けたのは、ジャンとマルコだ。マルコは走っているが、ジャンは余裕そうにのんびりと歩いているの登場。その態度に、エレンがさっそく噛みついた。

「おつせえぞジャン、テメー!!」

「あああ!? 折角来たつてのに何だよその言い草は!? マルコだって遅れただろつがよ!」

「マルコは良いんだよ! 普段は時間守るから!! だがジャン、テメエはダメだ!」

「何でだよ!? 俺だつて時間は守る方だろ!」

さっそく昔と変わらぬ喧嘩を始めるジャンとエレンに、周囲はまた始まったかーと横目で見守っている。しかし、誰一人として仲裁に入ろうとしない。なぜならこういう時、誰が二人の喧嘩を止めるのかよく知っているからだ。

「エレン、喧嘩いくない」

ひよい、とミカサがエレンを抱え、それを見て「やーい女に抱えられてんの」と馬鹿にしたジャンを蹴り転がした。

「どうやら、僕らが最後だったみたいだね」

喧嘩が終息し、マルコが皆を見回すとそこには三年前と変わらぬメンバーが揃っている。

「そついや、ミーナとかはどうしたんだ?」

「ミーナは締切の修羅場を終えて死んでる最中。トーマスは実家の手伝い。ダズは誘ったけど恐いから来ないつてさ。他の人も誘つてみたけど、今日来れる人数はこれで全員だね」

ジャンの問いかけにアルミンが答える。と、エレンが全員に向かつて「よーっし! 人数は全員揃つたな!!」と気合いを入れた。

「皆、水着は持つてきたかー!」

「「「イエーイ!!」」」

エレンの掛け声と共に、それぞれが持つてきていた水着を抱え上げる。ビキニもあればワンピースタイプもあり海パンオンリーも居れば海パーカーまで様々だ。

全員が水着を持つてきたことを確認したエレンは、この調査兵団の兵舎裏に設置されているあのゴミ箱の蓋を勢いよく開けた。

ゴミ箱はあの時と同じく不思議な光が満たされており、再び活躍するのを待ち構えていた。

「それじゃあ、着替えて海水浴へ出発だー!!」

とある海原にて、人魚達は波間にぶかぶかと浮いてその時を待ちわびていた。

今日も今日とて良い天気。絶好の海水浴日和だ。

「エレン君たちまだ来んのー?」

「時間的にもうちよいつて所じゃないかな?」

仰向けで波間に浮かぶむろみさんに、隅田さんが携帯電話で時間を確認しながら教えてくれた。

「それにしても、あつちとこつちが妙な所で繋がるとは……こんな適当でええんかいな。リヴァエアさん」

淡路さんにジト目で見られながらもリヴァエアさんは缶ビール片手に笑って「ええつちやないのー?」とアバウトだ。

「まさかウチもここが特異点が出来ると思わなかったっちゃけど、まあ小さいから多分大丈夫だっちゃ」

「ほんまにアバウトやなあ……」

元の世界へ帰ってしまった壁の国。だが、流石妖精さんの起こしたデタラメと言うべきか、面白いことが起こってしまったのだ。

壁の国にある調査兵団兵舎裏にあるゴミ箱。

死者が次々と復活したあのゴミ箱が特異点と化し、何故かこの世界と向こうの世界を繋ぐワープ装置になってしまったのだ。

それを発見したのはワイズマン。

無論、混乱を避けるために一般人には知られていない。だがそのワープ装置の発見以来、度々その小さな特異点を通ってお客様が遊びに来るようになっていた。

「んでも、エレン君達は本当に久しぶりとねー。前はペトちゃんたちやったっけ？」

「そうそうー！ イルカさんたちと遊んでくれたっちゃんねー！」

ひいちゃんが楽しげに言うつと、傍を泳いでいたイルカたちがキュー

！ と元気よく鳴いた。彼らは、元調査兵団に雇われていたイルカたちだ。

「ところで、隅田さんはエルドとどうなん？」

「んふふ〜。気になる？」

イルカたちを華麗に無視したむろみさんが聞くと、にやあつと笑った隅田さんはおもむろにケータイの画像をむろみさんへ向けた。

そこには、無事卵割の始まった卵が一粒だけ入った小さな水槽と、その前で両手でブイサインをするエルドの姿が映っていた。

「受精大成功！」

「うっそおおお!!？」

「一粒だけだけどねー！ 苦節二年!! 長かったわー！」

目が飛び出るほどびっくりしているむろみさんと、ほろりと涙を流す隅田さん。卵からは何が生まれるのかは生まれてみないと解らないが、とにかくエルドとは上手くいっているらしい。

ええなーええなー！ と羨ましがるむろみさんだが、その時、淡路さんがむろみさんの肩を叩いて空の上を指差した。

「おいむろみ。あれなんやと思っ〜」

「何？」

全員が上を向くと、天空遙か高みから落ちてくる何かが見えた。

「エレエエエエエェン!!! テメエ解ってたのか!？」

「知らねえに決まっつてんだらおおおお!!！」

「ジャン！ エレンは悪くない！」

「バツカやろう！！ 騒いでる暇があったらこの状況なんとかすること考える！！」

「おおおおおお！！」

「ゴミ箱の特異点を通ってみれば、そこは天空遙か高い地上五百メートル地点だった。」

白い雲を突き抜けて、エレン達は現在ノーパラシュートスカイダイビングの真っ最中である。

真下は一面に広がる大海原。

落ちていく水着姿の104期生は赤いビキニを着たミカサ以外が全員涙目になって絶叫を上げている。

「ぎゃああああああ！！ 死ぬううううう！！」

「ひゃああああああああ！！」

「アイスうううう！！」

「サシャ！！ アイスなんか構ってる場合じゃねえだろうが！！」

「クリスタ！！ 私に捕まれええええ！！」

「ゆみるうううう！！」

ひゅーおおお！！ と空を切る音に徐々に目の前へ迫り来る海。立体機動装置は着けておらず、持っていたとしても周りには引つ掻ける場所も何もない。

天を仰いで見れば、落ちてくるエレン達の姿を見つけてむろみさん達は本気で驚いた。

「あれ、エレン君たちっちゃないの!？」

「おお、マジだ!? 今回はあんなところから来やがったぜ！」

「おねいたん！ このままじゃ海にぶつかっちゃうとよー！」

「よっしや、ウチに任せるっちゃー！」

真下で慌てる人魚達に、見ていたリヴァイアさんが海竜へ姿を変化させた。伸び上がりその巨体の頭でもってエレン達を受け止めようとしたのだが、あと少しという所でっつき取りこぼしてしまった。

「あーっ！」



「ノオオオオオオ!!!」

104期生の目の前に迫り来る海の世界。

しかし、上空から人魚の姿を見つけたエレンは落下しながら両腕を広げ、大声でむろみさん達に呼びかけた。

「ただいま――――！！！」

人類は今、壁の外。

人類は壁の向こうに衰退しましたが、人魚はよく釣れます。 完

結

## 簡易設定

### 壁の国

一人のワイズマン・コピーと複数の妖精が壁と共にやって来たことにより、物凄い勢いで文明が進みつつある。

こちらに来たワイズマン・コピーは手始めにウォールシーナにある工場都市の工房と己を融合させ、マザーコンピュータへと進化した。

その後、己のコピーを大量に量産し、ありとあらゆる場所に手が届くようにコピーをばら撒き教育から物作り、学校の設立から機械工学の基礎知識などを壁内人に教授している。

ただ、妖精さんが電磁波や人混み等が苦手な為、活動はもっぱらウォールシーナばかりとなった。

食糧問題は妖精社の食糧ばら撒きが続き、食糧不足に陥ることは無かった。が、土地が人類へ戻った今、味の悪い妖精社産は人気が低迷し、徐々に人類産の食糧への移行が開始されている。

人類と妖精、そして巨人との共存となっているのはウォールマリアから。

壁の上の砲台は撤去され、現在は水竜の頭を模した荷電粒子砲が設置されて言える。

### ウォールシーナ

ワイズマンの画策により壁内においてウォールシーナだけがやたらと近未来化し、未来都市シーナと呼ばれるようになる。様々な管理業務がパーソナルコンピュータで行われるようになり、コンピュータの扱いに年輩の憲兵団員がいつて行けずに辞職するケースが後を絶たない。

ワイズマンの趣味、およびアイデアの促進やらご機嫌取りの為に漫画やアニメ、ゲーム等の娯楽の発展が凄まじい。貴族街にメイドカ

フエが立ち並び、漫画文化やコスプレ文化が花開く等、半ばどこかの国の電気街のような萌えの街と化している。

## ウォールローゼ

電磁波や人混みが苦手な妖精さんの為にあえて発展を遅らせている為、クスノキの里とどこか似ている牧歌的な町や村が多い。しかし、住人の多くにワイズマン特製の電波を発しない超科学携帯電話や電車が普及している。

時々妖精さんが物凄いトラブル（住人がドット絵にされる、森が一瞬にしてサバナナになっている等）を起こして、その度に調停兵団が駆り出され対応に追われている。

## ウォールマリア

巨人が妖精を食う事により、理性化した巨人と妖精、人間が入り乱れる新世界。

巨人に対するトラウマが抜け切れない人類だが、土地を欲して移民した。何故か物凄く親切かつ紳士的になった巨人に超戸惑いながらも調停兵団を介して今日も人々は生活している。

## 宗教

ウォール教は壁が不要となった後に徐々に分化し、現在は妖精教が主流だがリヴァイアさんを神格化した水竜信仰、三本脚のカラスを崇拜する神の鳥信仰等が誕生した。

## 憲兵団

元は腐っていた憲兵団だが、近未来化されつつある壁内でパソコン

作業が必須となり、ついでに行けない物が次々と辞職している。立体機動の技能よりもサイバー技術が欲しい今日この頃。

いっそワイズマンにサイボーグ化してもらおうという意見も出たりでなかったり。

色んな意味での業務の過酷さからワイズマンに萌えの提供をする作画兵団へ移る者も多い。

壁内戦隊ケンペイダンは年に四回のペースで活動中。最近特撮番組としてテレビ放映が開始された。

#### 駐屯兵団

海から帰還した直後ウォールローゼ外側にこびりついたフジツボなどの着生生物の除去に奮闘していたが、最近ようやくひと段落した。

まだまだ人類の残る壁を守る業務の他に、ワイズマンに萌えを提供する作画兵団が駐屯兵団内に設立され、そこでアニメや漫画等の制作が行われている。が、調査兵団と同等に過酷な業務の為に締め切りや納期直後の作画兵団の本部の床はいつも死屍累々となっている。

最近ではミーナ・カロライナが巨人や人類に人気の漫画家として名を馳せている。

駐屯兵団広報隊としての活動は最近あまりしていないが、酒場やお祭りなどでオフアールがあれば時々赴いて歌ったりする。

#### 調査兵団

旧調査兵団。現在は調停兵団と名を変えて人類と妖精類、巨人類の間を取り持つ架け橋のような存在となっている。

筆頭はエルヴィン団長。元は巨人殺しのプロとして名を馳せていた集団だが、妖精を食って温和な気質となった巨人やデタラメな事件を引き起こす妖精さんを相手に日々てんやわんやしながらも平和な

毎日を送っている。お菓子作りのスキルは必須だが、どうしても作れない者は購入でも可。

昔は人材不足が主な悩みだったが、現在は連日に渡る妖精さんのおもてなしで兵士が徐々にメタボ化しつつあるのが悩みの種。

糖尿、痛風、肝硬変等を未然に防ぐため健康診断は毎年必須。

アイドル業務は現在、民間の芸能プロダクションに委託している。

人物

ワイズマン

皆の憎いあんちくしょう。

工場都市の工房を大改造し、そこに己を融合させることにより巨大なマザーコンピューターとなった。

数々のコピーワイズマンを生み出し、政治経済教育娯楽等ありとあらゆる場面に赴いて知識を人々に授けるも、その知識は妙に偏っている場合が多い。

己の創作意欲の糧とすべく、壁内の人たちにサブカルチャーを流行させた。思い通りに娯楽文化が開き、今後は巨人達にも漫画文化を流布しようと画策中。

好き勝手なことを色々とやらかしてはいるが、王政府のアドバイザーとなり色々な情報を吟味できる立場にありながらも人類が再び神々に滅ぼされぬよう、その辺は静かに見守る体勢を整えている。

妖精さん

お菓子を求めてやってきた妖精さん。

巨人に食べられたり世知辛い世の中だけど、調停兵団の皆にお菓子を貰って楽しくやっている。

相変わらず好き勝手に生きていて、楽しい事があれば集まっては飽

きたら離散する。

どこに居ても、どこに行っても変わらない新人類。

## 妖精化巨人

別名フェアリータイタン。

妖精を食って人を襲わなくなった巨人。寡黙で温厚。そして親切。しかし、殺されそうになったり人間に襲われたりすると前と変わらぬ強さで反撃する。

その際は甘噛みしたり舐めしゃぶったり、激怒すると相手の服を破いて全裸に剥いた揚句高い木の上に置いたり様々。人を食っていた時代の事はあんまり覚えていないらしい。

最近漫画に興味を持ち始めた。

ウォールマリアは現在、進撃！ 巨人中学校状態。

## キース・シャーデイス

皆が愛する鬼教官にしてハーピーとイエティのお爺ちゃん。

ヒマラヤは環境が過酷すぎるので、普段は山の麓の人里に棲んでいるが、週に二日ぐらいの割合でハーピーに連れられてイエティの所に泊まりに行く。

性格が丸くなり、ワープ装置を通して時々遊びに来た104期生が泊まりに来る事があるが、大体『お前誰だ』みたいな目で見られる。

## 104期生

### エレン・イエーガー

元えれえれ。

アイドルを辞めて、現在は調停兵団の兵士。

巨人は嫌いだが、仕事中に色々親切にされまくって物凄く戸惑っている。

念願だった壁外へ徐々に出て行く事が出来るようになり、今はとても楽しそうである。

時々駆逐モードの目になり、十五メートル級によく甘噛みされる。

お菓子作りのスキルはかき氷が作れる程度。

俳優はやらないが、オフアールがあればモデルは時々やる。

ミカサ・アッカーマン

元みかりん。

相変わらずのエレンラブ。調停兵団としてエレンにくっついて仕事している。

現在は昔より壁内に余裕が出来たため、楽しい日々が続いてあまり世界の残酷さを感じなくなってきた。相変わらず超人だが、最近は笑うようになってきた。アニとクリスタはメル友。

アルミンの出る映画は全部見ている。

エレンを甘噛みした巨人を蹴り倒し、いつの間にか妖精化巨人の間で番長になっていた。

お菓子作りのスキルはクッキー程度なら何とか。

エレンと同じく俳優はやらないが、モデルは偶にやる。

アルミン・アルレルト

我らがうさミン。

アイドルは辞めたが調停兵団には入らず、傘下のアイドルプロダクションにて現在は映画俳優として活動中。

少し背が高くなったのと、イケメン度が増したので女の子に人気が高い。

壁が海になる前の出来事書いて本を出したりと作家業の真似事もしている。

ライナー・ブラウン

相変わらずの兄貴。

巨人化が出来なくなり、一端故郷に戻ってみたが全てが解決していた。

いつか本当の事がエレンに言える日が来たら、その時は殺されても文句は言えないと思っている。

それでも皆が好きだから、例え殺されてしまってもそれで良い。

お菓子作りのスキルは粉ゼラチンのゼリーが作れる程度。

調停兵団所属。

ベルトルト・フーバー

安定のヘタレ。

自分のやらかしたことで故郷の問題が解決したことで壁内が唐突に平和になったことの三重の板挟みに苦しむ毎日。

罪悪感で会うのが辛いのに、それでもエレン達との関係を断ち切る事が出来ず大好きな皆に誘われたらノコノコと遊びに行っちゃう優柔不断なヘタレ。

色んな罪悪感を満載したままこれからも情性で生きていくという、一番辛い選択をなし崩し的にしてしまった。

お菓子作りのスキルはカップケーキが作れる程度。

調停兵団所属。

アニ・レオンハート

鷲鼻がコンプレックス。

今までずっと色々な覚悟をしていたのにいきなり問題が解決して内心ビビっている。

壁内と故郷の問題を、それはそれ、これはこれとして割り切ってこ



れからも生きて行こうと決心した。

現在は憲兵団にてオペレーターの仕事をこなしている。

偶にミーナの漫画原稿のアシスタントに駆り出されては締め切り前の修羅場を味わっている。

その度に余裕を持って締切守れと言いたい。

クリスタ・レンズ

皆に大人気なお菓子の女神。

妖精さんと大の仲良しで、現在は調停兵団や訓練兵団でお菓子作りの講師をしている。

あの日、妖精たちのお茶会で貰ったお菓子のレシピは今でも宝物。

最近のお菓子作りスキルはもはやパティシエ。

実家との問題はまだ解決していないし死にたがりの性分も残っているが、妖精さん達の明日を考えず昨日も振り返らない性格に感化されて最近はだいぶ明るい。童話災害的トラブルに巻き込まれてもあまり動じなくなった。

ユミルとは今も仲良しで、よく行動を共にしている。が、ユミルには動いている妖精が見えないらしい。ちょっと残念。

ユミル

巨人化出来なくなったが、あまり重要には考えていない。

今も昔も変わらず、クリスタと一緒に行動している。ただ、動いている妖精さんがみえないのだけがちょっと残念。

お菓子作りは苦手な方だが、妖精化巨人と渡り合える実力を持っている。

調停兵団所属。

サシャ・ブラウス

あの日、妖精たちのお茶会で食べたバニラアイスの味が忘れられず調停兵団を退団後、アイスクリームショップを開く。

人類にも妖精にも巨人にも大人気のアイス屋さんに成長。  
現在の人気フレーバーはバターポテト味。

コニー・スプリンガー

調停兵団にて妖精さんや妖精化巨人の起こすトラブルに日夜翻弄されながらも、持ち前の明るさと陽気さですぐに仲良しになれる。

お菓子作りは下手だが、存在が面白いので妖精さんに大人気。

コニーと一緒に妖精さんに会うと、おもてなし率が上がる。

マルコ・ボット

憲兵団のプログラマー。

もちろん優等生。まるっと新しくなってしまった世界のシステムと急速に進化するシーナの情報化社会に対応しながら、機械音痴な先輩方にパソコンの使い方を教える毎日。

残業の多い職場で時々死んでいるが、偶の休日にはジャンとはよく遊ぶ仲。

ジャン・キルシュタイン

調停兵団所属。妖精さんと妖精化巨人の起こすトラブルに日々頭を悩ませながらどうにかこうにか生きている。

平和すぎるほど平和なので仕事は楽と言えば楽だが、時々とんでもない事体になって振り回されている。過去数回、妖精化巨人を怒らせて全裸で高所に放置プレイという鬼畜の如き仕打ちを受けた。その度にエレンに爆笑されて喧嘩する。

## 調停兵団

エルヴィン・スミス

我らが調停兵団団長。

何故か世界がめっちゃ平和になってしまい、なし崩し的に調査兵団が調停兵団になってしまった。けれど、活動内容は変わっても彼本人の人格は変わっていない。

近いうちにミケやリヴァイと組んで『ナイスミドル』というバンドユニットを結成する予定。

どうやってリヴァイを仲間に引き入れるか画策中。

お菓子作りの総合スキルは低いけど、生クリームの攪拌は調停兵団随一。

リヴァイ

巨人に脅かされて危険だった世界から突然平和になった世界に変わり「これでいいのだろうか？」と困惑しながらも、最近は穏やかな表情を作ることが多くなった。

妖精さんは見えるけど苦手。偶に巨人より怖いと感じる事もある。ワイズマンをも凌ぐデタラメ具合に時々ついて行けない。

巨人は今でも嫌いだが、リヴァイアさんが敵に回るよりはマシだったと思えば調停兵の仕事をこなす。

お菓子作りスキルは高く、ママの味がするマフィンが絶品。

ハンジ・ゾエ

突然平和になった世界だが、それはそれで良いことだと割り切った『今』という時間を大切にしている。

世界の秘密や巨人の謎には興味を持ったままだが、それを壊してま

で探究をする必要性は感じていない。が、いつか謎が解明される日が来ることを信じてひっそりと研究は続けている。

妖精化巨人とは超仲良し。妖精さんより仲良し。たまに馬の代わりに乗せてもらっていたりする。

お菓子作りスキルは皆無。毎回購入。

ペトラ・ラル

太った。

しかし、兵長から『お前誰だ』と言われ執念でもう一度痩せた。妖精さんのおもてなしが美味しすぎて超恐い。

お菓子作りのスキルはショートケーキが作れる程度。

グンタ・シユルツ

太った。

しかし、立体機動をするのが辛くなり、同時期にペトラが痩せたのを見て鬼の決意で再び痩せた。

妖精さんのおもてなし超美味いけど恐い。

この前巨人に告白されてしまい断ったが為に甘噛みされた。異生物にはよくモテる。何故だ。

お菓子作りのスキルはシュークリームが作れる程度。

オルオ・ボザド

いくら食べても体形が変わらないので皆に羨ましがられている。

だが、今回の健康診断で尿酸値がヤバい事が判明。

痛風になる前に早急な生活態度の改善が必要。

妖精さんのおもてなしが好物ばかりで超恐い。

お菓子作りのスキルは蒸しプリンが作れる程度。

エルド・ジン

むろみさん時空におけるとある漁村でのんびり魚を採って暮らしている。隅田さんとはまだ仲良し。

人魚の卵が受精率低すぎで、この二年間は魚の養殖を勉強した。そのおかげかようやく一個だけ受精。タツノオトシゴのオスばりに過保護にしているが、何が生まれるかはまだ解らない。

最近船舶免許を取った。

人魚

むろみさん

今も変わらぬ姿で、のんびりまったりと日々を楽しんでいる。

最近月から戻ってきた人間さんに絡んでは仲良くなる日々を繰り返している。

長命の為、二千年後の大事件に関わってしまう。

ひいちゃん

今日も海をのんびりと泳いでイルカさんやクジラさんと遊んでいる。

二千年後の大事件にむろみさんと共に関わってしまう。

隅田さん

今も変わらぬ姿でのんびり過ごしているが、エルドとまだラブラブ中なので人生楽しい。

最近念願だった卵が受精したので大忙し……になると思いきや卵なので生活スタイルはあんまり変わらない。

二千年後の大事件に関わってしまった。

淡路さん。

今日も今日とて瀬戸内三連星として暴れ回っている。

きっと彼女たちは人類が滅亡するまで変わらない。

二千年後の大事件にすっかり関わってしまった。

リヴァイアさん

世界最強の水竜。

今日も楽しくビールを飲んでいる。

二千年後の大事件にトドメを差す。

その他

巨人面魚

進撃の巨人世界における、巨人の代理として現れた世界の要素。

周囲が海なので魚だが、巨人の要素もくつついたので人面魚。手足が生えると陸上活動可能。

肺呼吸と鰓呼吸の両方が出来るある意味両生類。

クリスタとサシャの手によって『ダメな物ボックス』に封印されている。

妖精さんの道具

## 次元シャベル

次元に穴を開けるシャベル。

壁内が海に移動する原因。

人類が滅んだ世界の時間を何度も何度も戻しすぎて神様に怒られたため、仕方なく別次元に移動することを選んだ妖精さんたちの道具。

元来は次元と次元の間に小さな穴を開けるきりだが、ワイズマンの手によって暴走。壁内の世界を丸ごと時空移動させる暴挙となった。

## タイムバナナ（アーカイブ版）

現実に存在する時間から切り離された場所に存在する場所。

アーカイブ版なのでそれ以上の記録は許されず、読み取りだけが可能な場所。

お菓子が食べ放題なので妖精さん達が沢山居るが、飽和しすぎてそれ以上に存在できない。

クリスタにお菓子作りを覚えさせるために妖精さんが用意した。

## 復活キノコ

人間が復活する不思議なキノコ。別名1UPキノコ。

セーブポイントである調査兵団裏にあるゴミ箱が復活地点。

毒キノコっぽい外見だが、意外とおいしい。

## 調査兵団裏のゴミ箱

元は妖精さんの道具でも何でもない普通のゴミ箱だったが、復活キノコのセーブポイントになった瞬間デタラメが爆発した。

死んだはずの人間が甦る謎のゴミ箱にして、現在は異世界と異世界を繋ぐワープ装置として大活躍。

お帰りの際はキースかエルドの家のゴミ箱かトイレにワーブゾーンが現れる。

### 伏線回収スイッチ

押した人間の人生の伏線を一気に回収するアプナイススイッチ。

とにかくそれまでの人生における伏線が一気に回収されてしまうので、急激にワケの解らないことが目白押しで起こる。伏線的に回収できない部分は無かったことにされる。

回収のされ方は押した本人の素行次第。ただし、世界的に活躍する勇者や魔王的な存在が覚醒する前に押した場合、世界そのものの伏線さえも回収してしまう場合がある。

世界が何も解らないまま突然平和になった理由は、『進撃の巨人』という作品世界の中心たるエレンがスイッチを押したのでこれから小さな伏線が必要だった秘密等は明かされないまま全て無かったことにされた。

ちなみに『今までの人生』における伏線が回収された事によって新しく創造された『平和な世界でのエレンの人生』の伏線は残っている。

### ダメな物ボックス

使用者の嫌いな物はどんなものでも仕舞い込む選別式四次元ボックス。

感情や概念等も吸い込み可能。ただし吸い込めるものは現在ある物だけで、過去や未来に存在する物は吸い込めません。

一度吸い込んでしまった物は、もう一度蓋を開けることで出てきません。

クリスタとサシャによって巨人面魚や死や恐怖やその他色んなヤバイものが中に仕舞われております。

鍵のついた小物入れのような形状で、箱は壁の国の王家が宝物庫へ保存し、鍵はむろみさん世界のマリアナ海溝に沈められた。



しかし二千年後、とある人魚の子供の手によりマリアナ海溝から鍵が拾われ、王家の子孫が宝物庫から箱をこっそりと持ち出した。

二人の邂逅によって箱の鍵は開かれて、再び人類の恐怖が幕を開けようとしたが、最終的にリヴァイアさんのオメガプレスで滅される。